

上信越自動車道佐久ジャンクション建設に伴う埋蔵文化財発掘調査報告書

—小諸市内—

なかはら のびつけ のびつけじょうせき
中原遺跡群・野火附遺跡・野火附城跡

2009.3

東日本高速道路株式会社
長野県埋蔵文化財センター

上信越自動車道佐久ジャンクション建設に伴う埋蔵文化財発掘調査報告書

—小諸市内—

なかはら
中原遺跡群・野火附遺跡・野火附城跡
のびつけ
のびつけしょうせき

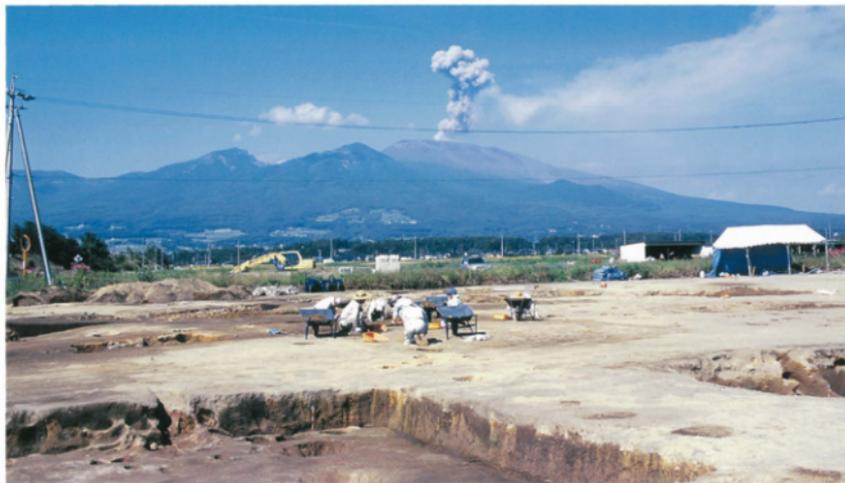
2009.3

東日本高速道路株式会社

長野県埋蔵文化財センター

正誤表

頁・行	誤	正
ii 頁上から 19 行目	小諸市教育委員会	長野県立歴史館
v 頁上から 15 行目	化学分析	科学分析
v 頁上から 17 行目	放射能	放射性
3 頁下から 10 行目	挿図	挿表
28 頁上から 2 行目	15 号土坑	未命名の土坑
PL-1 上から 2 行目	3 区	6 区
PL-12 上から 6 行目 ~PL-13 上から 18 行目	●掘立柱建物跡	●号掘立柱建物跡



上：野火附遺跡調査風景、下：中原遺跡群、野火附遺跡、野火附城跡調査区全景（合成）



上：56号住居跡出土土器、中：56号住居跡出土石剣、下：24号住居跡出土土器

はじめに

長野県東部に位置する小諸市は、北に浅間山が聳え、中心部を千曲川が流れる高原都市です。現在では、浅間山登山の玄関口として、また、千曲川を望む小諸城址公園・攘夷園などの観光地として、印象深い方も多いと思われます。

一方、小諸市を含む北佐久地域は、古くから交通の要衝として栄えてきた地域でもあります。奈良・平安時代には、律令国家の動脈であった駅路としての東山道と、伝路として使用され続けたと考えられている古東山道がこの付近で合流しています。江戸時代には追分宿で中仙道と北国街道が分岐し、明治時代以降は小諸駅が信越本線（現しの鉄道）と小海線の乗換駅となりました。そして、今また、上信越自動車道と中部横断道路の分岐点となろうとしています。

本書は、まさにこの交通の要となる上信越自動車道佐久ジャンクションの建設に伴い、2002（平成14）年から2004（平成16）年に発掘調査を行った中原遺跡群、野火附遺跡、野火附城跡の報告書です。

今回の調査では、浅間山麓の標高750m前後という立地条件から、縄文時代、古墳時代～奈良・平安時代、中・近世と、時代毎に特色ある成果を得ることができました。

縄文時代についてみると、浅間山南麓には、縄文時代中期から後期にかけて、郷戸遺跡などの大規模な集落が営まれます。野火附城跡でも、この時期の生活痕跡を確認することができました。一方、本格的な農耕がはじまる弥生時代においては、冷涼な気候のためか、集落が密集するのは標高700m以下の佐久平が中心となります。

その後、徐々に標高の高い地域にも集落が進出・拡大し、古墳時代後～終末期には、中原遺跡群や野火附遺跡をはじめ、いくつもの集落が営まれるようになりました。

奈良時代に東山道が整備されると、近隣に清水駅家が置かれたとみられ、この地域も急速に発展をとげたようです。整然と建物群の並ぶ宮の反A遺跡群をはじめ、鋳物師屋遺跡の円面硯、竹花遺跡の漆紙文書や帯金具、中原遺跡群の帯金具や皇朝十二銭など、律令政府との関わりが窺えるようになります。また、広大な高原地域は馬を飼育する牧として利用されていた可能性も指摘されています。

このように、交通の要となることが地域の発展につながった歴史と、佐久ジャンクションが建設されることは、何らかの結びつきがあるようにも思われます。本書が、本域のみならず、長野県全体の歴史解明の一助となることを願って止みません。

最後に、発掘調査開始から本報告書刊行までの間に、深いご理解とご協力を賜りました東日本高速道路株式会社、国土交通省関東地方整備局、小諸市、小諸市教育委員会ほかの関係機関、地権者や地元関係者の皆様に厚く御礼申し上げます。

例 言

- 1 本書は、上信越自動車道佐久ジャンクション建設に伴う小諸市中原遺跡群・野火附遺跡・野火附城跡の発掘調査報告書である。
- 2 発掘調査は、日本道路公団とそれを継承した東日本高速道路株式会社からの委託を受けた財団法人長野県文化振興事業団 長野県埋蔵文化財センターが実施した。
- 3 遺跡の概要は長野県埋蔵文化財センター発行の『長野県埋蔵文化財センター年報』19～21で紹介しているが、本書の記述をもって本報告とする。
- 4 本書で使用した地図は、国土交通省国土地理院発行の地形図（1：25,000）、小諸市都市計画基本図（1：2,500）をもとに作成した。なお、隣接する上信越自動車道関連調査区との整合性を持たせるため、今回は旧測地系を用いた。
- 5 発掘調査にあたっては以下の機関、諸氏に業務委託もしくは協力を得た（敬称略）。
㈱新日本航業：測量基準点および地形測量、単点測量等の測量、航空撮影
㈱日本空間情報技術（旧ジャステック）：同上
㈱加速器分析研究所：AMS分析による年代測定
㈱JFE テクノリサーチ：塊形鍛冶滓状遺物の化学分析
写真のミヤガワ：遺物写真の撮影
田中写真館：調査区全景のモザイク写真作成
京都大学名誉教授 茂原信生：馬骨鑑定
- 6 本書で報告した遺跡の記録および出土遺物は、報告書の刊行後に小諸市教育委員会に移管する予定である。
- 7 発掘調査及び報告書の刊行にあたり、下記の方々・機関にご指導、ご協力をいただいた。お名前を記して感謝の意を表します。（敬称略）
出澤 力、小林祐司、杉山和徳、土屋了介、堤 隆、富沢一明、花岡 弘、北条芳隆、堀田雄二、三石宗一、宮本長二郎、長野県遺跡調査指導委員会（戸沢充則、工楽善通、桐原 健、樋口昇一、丸山敏一郎）
- 8 発掘調査の担当は以下の通りである。
平成14（2002）年度 宇賀神誠司、河西克造、上田 真
平成15（2003）年度 宇賀神誠司、小林秀行、寺内隆夫、上田 真
平成16（2004）年度 桜井秀雄、白沢勝彦、上田 真
- 9 平成14～17、20年度の発掘調査補助員、整理補助員は本文第1章に記載した。
- 10 本書の執筆・編集・校正は上田 真が行い、調査第2課長 寺内隆夫、調査部長 平林 彰が全体を校閲した。

凡 例

1 本書に掲載した実測図の縮尺は、原則として以下の通りである。

a) 遺構実測図

竪穴住居跡 1 : 60 掘立柱建物跡 1 : 60 土坑 1 : 60

溝跡 1 : 60 (1 : 100、1 : 160)

b) 遺物実測図

土器実測図 1 : 4 土器拓影図 1 : 4 石器実測図 1 : 4 (1 : 3)、4 : 5 (石鏃)

石製品 1 : 2、1 : 8 (石仏) 鉄製品 1 : 2 (1 : 3、1 : 4) 銭貨 2 : 3

骨 1 : 4

2 遺物写真の縮尺は統一していない。

3 遺構図・遺物図の網掛けは以下の通りである。

遺構図 網：被熱面

遺物図 土器断面 ■：須恵器

土器内外面 網：黒色処理 網：赤彩

4 基本土層および遺構覆土の色調は『新版 標準土色帖』による。

目 次

巻頭図版

はじめに

例言

凡例

目次

第1章 調査の経過と方法	1
第1節 調査に至る経過	1
1 発掘調査委託契約	1
2 調査・整理体制	2
(1) 調査組織	2
(2) 発掘調査参加者	2
(3) 整理作業参加者	2
第2節 調査の方法	3
1 発掘調査の方法	3
(1) 遺跡名と遺跡記号	3
(2) 遺構名称と遺構記号	3
(3) 調査区の設定	3
(4) 各遺跡における調査方法	4
(5) 記録	5
2 整理の方法と報告書の作成	5
(1) 基礎整理作業	5
(2) 本格整理作業	5
第3節 調査および報告書刊行に至る経過	5
(1) 調査の経過	5
(2) 整理作業および報告書刊行の経過	6
第2章 遺跡の位置と環境	7
第1節 地理的環境	7
第2節 歴史的環境	7
第3章 中原遺跡群	13
第1節 遺跡の概要	13
第2節 調査の概要	13
第3節 遺構と遺物	16
1 概要	16
2 竪穴住居跡	16
3 土坑	27

4	遺構外出土遺物	30
第4節	小結	31
第4章	野火附遺跡	32
第1節	遺跡の概要	32
第2節	調査の概要	32
第3節	遺構と遺物	37
1	概要	37
2	堅穴住居跡	37
3	掘立柱建物跡	100
4	溝跡	112
5	土坑	117
6	性格不明遺構	120
7	遺構外出土遺物	120
第4節	科学分析	124
1	化学分析の目的	124
2	分析方法及び手法	124
(1)	放射能炭素年代測定 (AMS 測定)	124
(2)	塊形鍛冶滓状遺物の科学分析	125
3	小結	126
第5節	小結	127
第5章	野火附城跡	128
第1節	遺跡の概要	128
第2節	調査の概要	128
第3節	遺構と遺物	132
1	概要	132
2	住居跡・堅穴状遺構	132
3	掘立柱建物跡	135
4	土塁跡	136
5	溝跡・堀跡・欄列	136
6	土坑	142
7	その他の遺構	145
第4節	小結	146
第6章	総括	148
参考文献		
写真図版		
報告書抄録		
奥付		

挿図目次

第1図	中原遺跡群・野火附遺跡・野火附城跡 調査範囲、グリッド設定図…………… 4	第41図	40号住居跡…………… 68
第2図	周辺遺跡図…………… 11	第42図	40号住居跡出土遺物…………… 69
第3図	6・7区遺構全体図…………… 14	第43図	41号住居跡・出土遺物…………… 70
第4図	9区遺構全体図…………… 15	第44図	42号住居跡・出土遺物…………… 71
第5図	401号住居跡・出土遺物…………… 17	第45図	43号住居跡…………… 73
第6図	402号住居跡…………… 19	第46図	43号住居跡出土遺物…………… 74
第7図	403A・B号住居跡…………… 21	第47図	44号住居跡…………… 75
第8図	403号住居跡出土遺物…………… 22	第48図	44号住居跡出土遺物…………… 76
第9図	404・405・406号住居跡・出土遺物…………… 24	第49図	45号住居跡…………… 77
第10図	407・408・409・410号住居跡出土遺物…………… 26	第50図	45号住居跡出土遺物…………… 78
第11図	6・7・15・27・30・32・33・34・39号土坑・ 出土遺物・遺構外出土遺物…………… 29	第51図	46号竪穴状遺構・出土遺物…………… 79
第12図	野火附遺跡遺構全体図…………… 33	第52図	47号住居跡…………… 81
第13図	15年度西・南調査区遺構全体図…………… 34	第53図	47号住居跡出土遺物…………… 82
第14図	15年度東調査区遺構全体図…………… 35	第54図	48号竪穴状遺構…………… 83
第15図	16年度調査区遺構全体図…………… 36	第55図	49号住居跡・出土遺物…………… 84
第16図	21号住居跡…………… 38	第56図	50号住居跡…………… 85
第17図	22号住居跡・出土遺物(1)…………… 39	第57図	50号住居跡出土遺物…………… 86
第18図	22号住居跡出土遺物(2)…………… 40	第58図	51号住居跡・出土遺物…………… 88
第19図	23号住居跡・出土遺物…………… 42	第59図	52号住居跡・出土遺物…………… 89
第20図	24号住居跡・出土遺物(1)…………… 44	第60図	53号住居跡・出土遺物…………… 91
第21図	24号住居跡出土遺物(2)…………… 45	第61図	54号住居跡・出土遺物…………… 92
第22図	25号住居跡・出土遺物…………… 47	第62図	55号住居跡・出土遺物…………… 93
第23図	26号住居跡…………… 48	第63図	56号住居跡…………… 95
第24図	27号住居跡…………… 49	第64図	56号住居跡出土遺物(1)…………… 96
第25図	27号住居跡出土遺物…………… 50	第65図	56号住居跡出土遺物(2)…………… 97
第26図	28号住居跡・出土遺物…………… 51	第66図	57号住居跡・出土遺物…………… 99
第27図	29号住居跡・出土遺物…………… 52	第67図	3・7号掘立柱建物跡…………… 100
第28図	31号住居跡・出土遺物…………… 53	第68図	9号掘立柱建物跡・出土遺物…………… 102
第29図	32号住居跡…………… 54	第69図	10号掘立柱建物跡・出土遺物…………… 103
第30図	33号住居跡…………… 55	第70図	11・12・13号掘立柱建物跡…………… 105
第31図	33号住居跡出土遺物…………… 56	第71図	14号掘立柱建物跡…………… 106
第32図	34号住居跡・出土遺物…………… 58	第72図	15号掘立柱建物跡・出土遺物…………… 107
第33図	35A号住居跡…………… 59	第73図	16号掘立柱建物跡…………… 108
第34図	35B号住居跡・35号住居跡出土 遺物(1)…………… 60	第74図	17号掘立柱建物跡…………… 109
第35図	35号住居跡出土遺物(2)…………… 61	第75図	18号掘立柱建物跡・出土遺物…………… 110
第36図	36号住居跡・出土遺物…………… 62	第76図	19・20号掘立柱建物跡・出土遺物…………… 112
第37図	37号住居跡…………… 63	第77図	1号溝跡(15年度東調査区)・出土 遺物…………… 113
第38図	37号住居跡出土遺物…………… 64	第78図	1号溝跡(16年度調査区)・出土 遺物…………… 114
第39図	38号住居跡・出土遺物…………… 66	第79図	2・3・4号溝跡・出土遺物…………… 116
第40図	39号住居跡・出土遺物…………… 67	第80図	4・5・109・178・279号土坑・出土 遺物…………… 119

第81圖	2号性格不明遺構・出土遺物、遺構外出土遺物	121
第82圖	X線回折結果	126
第83圖	野火附城跡遺構全体圖	129・130
第84圖	1号住居跡・出土遺物	132
第85圖	2号竪穴狀遺構・出土遺物	134
第86圖	1号掘立柱建物跡・出土遺物	135
第87圖	1号土壘跡、6号溝跡・出土遺物	137
第88圖	7号堀跡・35・80号土坑	138

第89圖	1号柵列、8・10・11号溝跡・出土遺物	139
第90圖	13号溝跡、遺構外出土遺物	141
第91圖	4・12・13・14・43・45・76・82号土坑・出土遺物	143
第92圖	平坦面	145
第93圖	石仏	146
第94圖	野火附遺跡集落変遷図	149
第95圖	野馬除跡大原地点堀及び土壘	152

挿表目次

第1表	年度別契約面積	1
第2表	401号住居跡出土土器觀察表	18
第3表	402号住居跡出土土器觀察表	18
第4表	403号住居跡出土土器觀察表	20
第5表	404号住居跡出土土器觀察表	23
第6表	405号住居跡出土土器觀察表	23
第7表	406号住居跡出土土器觀察表	25
第8表	407号住居跡出土土器觀察表	25
第9表	408号住居跡出土土器觀察表	25
第10表	409号住居跡出土土器觀察表	27
第11表	6・7号土坑出土土器觀察表	27
第12表	15号土坑出土土器觀察表	28
第13表	27号土坑出土土器觀察表	28
第14表	遺構外出土土器觀察表	30
第15表	中原遺跡群出土土器重量表	30・31
第16表	22号住居跡出土土器觀察表	41
第17表	23号住居跡出土土器觀察表	41
第18表	24号住居跡出土土器觀察表	43
第19表	25号住居跡出土土器觀察表	46
第20表	27号住居跡出土土器觀察表	48
第21表	28号住居跡出土土器觀察表	50
第22表	29号住居跡出土土器觀察表	52
第23表	31号住居跡出土土器觀察表	54
第24表	33号住居跡出土土器觀察表	57
第25表	34号住居跡出土土器觀察表	57
第26表	35号住居跡出土土器觀察表	58・61・62
第27表	36号住居跡出土土器觀察表	63
第28表	37号住居跡出土土器觀察表	65
第29表	37号住居跡出土土器調査表	65
第30表	38号住居跡出土土器觀察表	65

第31表	39号住居跡出土土器觀察表	66
第32表	40号住居跡出土土器觀察表	67
第33表	41号住居跡出土土器觀察表	69
第34表	42号住居跡出土土器觀察表	72
第35表	43号住居跡出土土器觀察表	72
第36表	44号住居跡出土土器觀察表	74
第37表	45号住居跡出土土器觀察表	79
第38表	46号住居跡出土土器觀察表	79
第39表	47号住居跡出土土器觀察表	80
第40表	49号住居跡出土土器觀察表	83
第41表	50号住居跡出土土器觀察表	87
第42表	51号住居跡出土土器觀察表	87
第43表	52号住居跡出土土器觀察表	90
第44表	53号住居跡出土土器觀察表	90
第45表	54号住居跡出土土器觀察表	92
第46表	55号住居跡出土土器觀察表	94
第47表	56号住居跡出土土器觀察表	98
第48表	57号住居跡出土土器觀察表	98
第49表	9号掘立柱建物跡出土土器觀察表	101
第50表	10号掘立柱建物跡出土土器觀察表	104
第51表	15号掘立柱建物跡出土土器觀察表	107
第52表	19号掘立柱建物跡出土土器觀察表	111
第53表	1号溝出土土器觀察表	115
第54表	4号土坑出土土器觀察表	117
第55表	5号土坑出土土器觀察表	118
第56表	178号土坑出土土器觀察表	118
第57表	2号性格不明遺構出土土器觀察表	120
第58表	遺構外出土土器觀察表	120
第59表	野火附遺跡出土土器重量表	120・122・123

第60表	2号溝出土馬骨の放射性炭素年代測定結果	125	第64表	14号土坑出土土器観察表	142
第61表	化学成分分析結果	126	第65表	82号土坑出土土器観察表	144
第62表	2号竪穴状遺構出土土器観察表	133	第66表	野火附城跡出土土器重量表	147
第63表	1号土壘盛土内出土土器観察表	136	第67表	野火附遺跡周辺集落遺跡の 存続期間	148

写真図版目次

中原遺跡群

PL1	3区全景、調査前風景、401・402・403・405号住居跡
PL2	406・407・408・409・410号住居跡、9区土坑群、作業風景
PL3	401・402号住居跡出土遺物
PL4	403号住居跡出土遺物
PL5	403・407・408・409号住居跡・15号土坑出土遺物

野火附遺跡

PL6	調査区全景
PL7	22・23・24・25・26・27・28・29・31号住居跡
PL8	32・33・34・35・36・37号住居跡
PL9	37・38・39・40・41・42・43号住居跡
PL10	44・45・46・47・48・49号住居跡
PL11	50・51・52・53・54・55・56号住居跡
PL12	56・57号住居跡、9・10・11・12・14号掘立柱建物跡
PL13	16・17・18・19号掘立柱建物跡、1号溝
PL14	1・2・3・4・5号溝、2号性格不明遺構、調査風景、体験発掘
PL15	22・23号住居跡出土遺物
PL16	24号住居跡出土遺物
PL17	24・25・27号住居跡出土遺物

PL18	27・28・29号住居跡出土遺物
PL19	31・33号住居跡出土遺物
PL20	33号住居跡出土遺物
PL21	35号住居跡出土遺物
PL22	35・37号住居跡出土遺物
PL23	37・38・40・41・42号住居跡出土遺物
PL24	42・43・44号住居跡出土遺物
PL25	44・45号住居跡出土遺物
PL26	45・47・49号住居跡出土遺物
PL27	50号住居跡出土遺物
PL28	50・51・52号住居跡出土遺物
PL29	52・53・55号住居跡出土遺物
PL30	56号住居跡出土遺物
PL31	56号住居跡出土遺物
PL32	56号住居跡・1号溝出土遺物
PL33	1・2号溝・4・109・178号土坑・遺構 外出土遺物

野火附城跡

PL34	1区全景、1号住居跡、2号竪穴状遺構、1号土壘、6号溝
PL35	7号堀、1・13号溝、43・76・80号土坑、石仏
PL36	石仏、作業風景、指導委員会、見学風景、4号土坑・遺構外出土遺物

第1章 調査の経過と方法

第1節 調査に至る経過

1 発掘調査委託契約

中部横断自動車道は、静岡県静岡市の吉原ジャンクション（以下「JC」）で第2東名高速道路（予定）・第2東名清水連絡路（予定）と分岐し、山梨県甲斐市の双葉JC～同北社市の長坂JC間を中央自動車道と並行して、長野県小諸市の佐久JCで上信越自動車道に接続する全長約132kmの国土開発幹線自動車道である。このうち、長野県佐久市の佐久南IC～佐久JC間については平成10年に施工命令が下され、同年その区間を含む長野県佐久穂町の八千穂IC～佐久JC間の整備計画が決定された。

これを受けて、平成11年には同区間に所在する埋蔵文化財について、日本道路公団（以下「JH」）と文化庁、JHと長野県教育委員会（以下「県教委」）の間で協議が行われ、平成13年には道路公団の委託を受けた県教委から館長野県文化振興事業団・長野県埋蔵文化財センター（以下「県埋文」）が再委託され、佐久JC～佐久南IC間の遺跡の発掘調査を開始した。

平成15年には、国土交通省関東地方整備局（以下「国交省」）、JH東京建設局、県教委の3者でJHが発掘調査における行政上の手続きの責を負うこと、発掘調査の実施にあたっては「協定書」を交わすこと等を「確認書」により合意した。これに基づき同年、JH、県教委、県埋文の3者で、同区間の発掘調査、報告書刊行を平成23年3月までに完了させること等を定めた「中部横断自動車道（佐久～佐久南）建設事業に伴う埋蔵文化財発掘調査に関する協定」を締結した。

平成16年には、その前年の第1回国土開発幹線自動車建設会議の議決を受けて、新直轄方式（国と地方自治体が資金協力して建設する方式で通行料金無料区間となる）に整備計画が変更されるが、佐久JC～料金所（有料区間と無料区間の境目）間は、平成17年にJHの権利義務を引き継いだ東日本高速道路株式会社（以下「Nexco 東日本」）の事業区間（上信越自動車道分）として残された。これにより、平成15年締結の「協定」のうち、この区間についてはNexco 東日本が承継するとの通知が県教委宛に送付された。

本書は、佐久JCとこの料金所までの間に所在する小諸市中原遺跡群、野火附遺跡、野火附城跡の3遺跡の発掘調査報告書である。このうち、野火附城跡の一部はこの区間から外れるが、同時に報告することがNexco 東日本、国交省の双方から了承されている。これら3遺跡は平成14～16年度に発掘調査され、平成17・20年度に整理作業を実施した。

遺跡名	平成14年度	平成15年度	平成16年度	平成17年度	平成20年度	合計
中原遺跡群			2,400㎡	埋蔵作業	埋蔵作業	2,400㎡
野火附遺跡	3,200㎡	10,000㎡	4,800㎡			18,000㎡
野火附城跡	14,000㎡		2,000㎡			16,000㎡
事業費（千円）	96,869 (緑川原遺跡分を含む)	112,000 (北原遺跡分を含む)	143,329 (西一甲原遺跡 15ヶ分を含む)	97,376 (西一甲原遺跡は 発掘調査費を含む)		

第1表 年度別契約面積

2 調査・整理体制

(1) 調査組織

平成14年度

所長	深瀬弘夫	副所長	原 聖
調査部長	小林秀夫	調査課長	廣瀬昭弘
調査研究員	宇賀神誠司、河西克造、上田 真		

平成15年度

所長	深瀬弘夫	副所長	原 聖
調査部長	市澤英利	調査第1課長	廣瀬昭弘
調査研究員	宇賀神誠司、小林秀行、寺内隆夫、上田 真		

平成16年度

所長	小沢将夫	副所長	藤岡俊文
調査部長	市澤英利	調査第1課長	廣瀬昭弘
調査研究員	桜井秀雄、白沢勝彦、上田 真		

平成17年度

所長	仁科松男	副所長	根岸誠司
調査部長	市澤英利	調査第1課長	廣瀬昭弘
調査研究員	上田 真		

平成20年度

所長	仁科松男	副所長	亘山修一
調査部長	平林 彰	調査第2課長	寺内隆夫
調査研究員	上田 真		

(2) 発掘調査参加者

青木弘子、浅川智則、上原理恵、大池小市、大池永春、太田史夫、大原はるゑ、金井伸夫、掛川雪子、川上淳子、木内隆男、木内美代子、古越信成、小林育雄、小林健人、小林敏隆、小林 稔、小林ひろみ、五味陽一、小山澄江、佐藤昭子、佐藤明美、佐藤君代、佐藤 務、佐藤ひさよ、佐野忠治、清水せつ、白鳥澄江、鷹野 晃、高橋梅子、高橋徹雄、高橋 仁、高橋隆一、手塚 勲、伝田名正、土屋詔子、土屋裕之、遠山静子、徳富信義、中込登志子、中澤啓子、中野二郎、中村輝夫、花岡一雄、花岡眞二、廣岡祐一、弘中三志郎、細谷明美、松尾毅装夫、松本征太郎、三浦綾子、水谷治夫、宮崎 等、宮原啓助、向井修一、森山幸男、諸星さやか、森泉国吉、柳沢千良、山浦直美、吉野安子、依田純子、渡辺今朝登

(3) 整理作業参加者

浅井とし子、阿部高子、石田多美子、稲玉美紀、井原真弓、白田知子、日向富美子、宮澤理恵子、山下千幸、山本和美

第2節 調査の方法

1 発掘調査の方法

調査に当たっては、県理文センター作成の「遺跡調査の方針と手順」に従い、遺跡ごとに具体的な実施方法を策定し、調査を行った。

(1) 遺跡名と遺跡記号

遺跡名は、長野県教育委員会作成の遺跡台帳に記載されている名称とした。また、記録の便宜を図るために、大文字3文字で表記される遺跡記号を用いた。3文字の1字目は、県内を9地区に分けた遺跡記号であり、2・3字目は遺跡名の頭文字である。例えば、野火附城跡は、佐久地区の地区記号「D」と遺跡名の「NOBITSUKE」JOUSEKIの「N」と「J」を組み合わせ「DNJ」とした。同様に中原遺跡群は遺跡名の「NAKAHARA」から「DNH」、野火附遺跡は「NOBITUKÉ」から「DNE」という遺跡記号が、平成4～5年度の上信越自動車道発掘調査時に決められている。

(2) 遺構名称と遺構記号

調査にあたっては記録の便宜を図るため、遺構記号を用いた。遺構は主に検出時の平面形と規模などで区分した。遺構名称は検出時に決定するため、調査の結果、遺構の種類・性格に適合しない場合がある。

SA SBより小さな落ち込み、及び礎石が列として配置されたもの。(柱穴列、柵跡)

SB 2mを目安とし、それ以上の大きさの方形、円形などの掘り込み。(竪穴住居跡、竪穴建物跡、竪穴状遺構)

SD 1辺が長くなる溝状の掘り込み。(溝跡、堀跡)

SK 単独、もしくは他の掘り込みとの関係が認められないSBより小さな掘り込み。(ごみ穴、貯蔵穴、墓穴など)

ST SBより小さな落ち込み、及び礎石が一定間隔で方形、円形に配置されたもの。他の落ち込みが付属する場合がある。(掘立柱建物跡)

SX その他、性格不明遺構

本書では遺構の性格が確定したものについては、例えば「SB01」を「1号住居跡」と表記している。ただし、図版や挿図中では「SB01」のように遺構記号で表記した。

(3) 調査区の設定

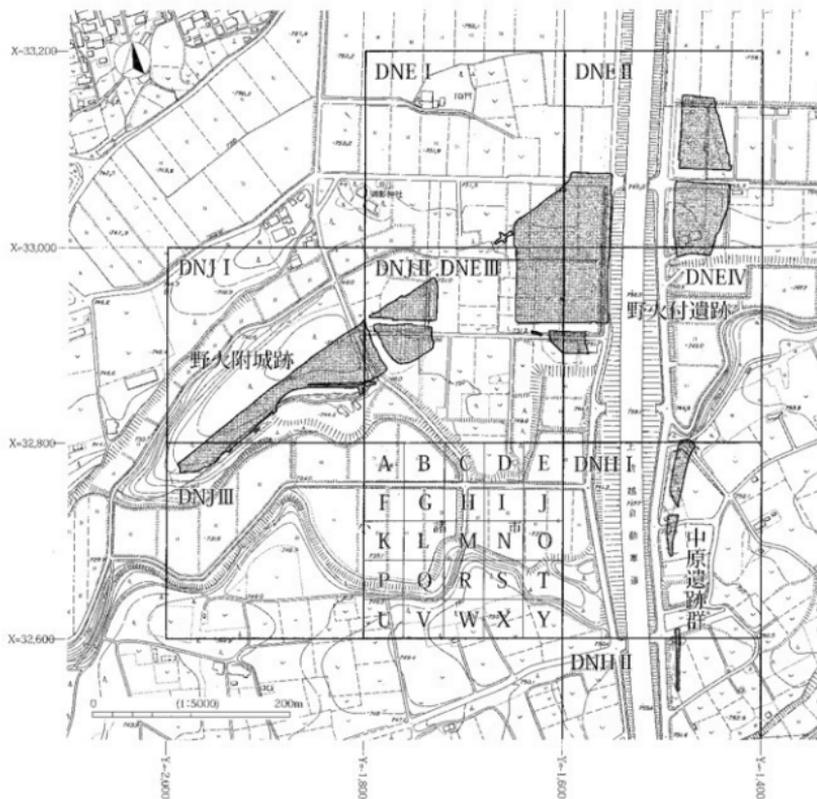
ア 調査区は、遺跡ごとに国土地理院の平面直角座標系旧測地形の第Ⅷ系 ($X=0.0000$, $Y=0.0000$) を起点に200mの倍数値で200×200mの区画を設定し、大々地区とする。大々地区は調査区をカバーする最小限に抑え、Ⅰ・Ⅱ・Ⅲ・・・のローマ数字を与えた。

イ 大々地区を40×40mの25区画に分割し、大地区とする。大地区は、北西から南東へA～Yのアルファベットを与えた。

ウ 大地区を8×8mの25区画に分割し、中地区とする。中地区は、北西から南東へ1～25の番号を与え、遺構測量の基準線とした。

エ 大地区を2×2mの400区画に分割し、小地区とする。小地区は、大地区の北西隅を起点としX軸上

に西から東へA～Tのアルファベットを、Y軸上に北から南へ01～20の数字を与え、各20区分し、両者を合わせて小地区名とする。遺構外遺物取り上げの基準とした。



第1図 中原遺跡群・野火附遺跡・野火附城跡調査範囲、グリッド設定図

(4) 各遺跡における調査方法

3遺跡とも表土が比較的薄く、浅間軽石層まで耕作が及んでいる状態であった。そのため、耕作土直下の浅間軽石層を遺構検出面とした。表土の掘削は重機によって行い、その後の遺構の検出と掘り下げを人力で行った。野火附城跡の斜面部は、重機による掘削が困難なため、人力でトレンチを入れて遺構の有無を確認した。

遺構は、土層観察のためのベルトを残して掘り下げるか半截して、断面を観察・記録した後、完掘して平面の記録を行った。貼床のある竪穴住居跡は、床を剥がして掘方の状況を記録した。

(5) 記録

調査区における基準線・杭の設定は、測量業者に委託した。標高は JH の工事用水準点もしくは公共水準点を利用し、ベンチマークを設定した。遺構の平面測量は 8 m 格子に打設した中グリッドの基準杭を基にしてやり方を組んで行ったが、中原遺跡の杭を平面的に打てない狭小部にある遺構、野火附城跡の大規模な遺構や傾斜地にある遺構などは、測量業者に依頼して単点測量を行った。

写真は、35mm と 6 × 7 版の 2 種類のカメラを使用し、通常の撮影は 35mm、将来引き伸ばす可能性のあるものは 35mm と 6 × 7 版の各々についてカラーリバーサルと白黒フィルムで撮影した。

2 整理の方法と報告書の作成

(1) 基礎整理作業

調査の行われた各年度の冬季に、各遺構の調査担当者が、図面・写真などの整理と修正、遺構所見カードの記載を行い、本格整理作業に備えた。

(2) 本格整理作業

報告書への掲載・不掲載に関わらず、遺物の接合・復元・実測と遺構の計測など可能な限り行った。資料化されながらも、記述や図示できなかった遺構や遺物については、観察表や計測表のみを示して事実記載に替えた事例もある。出土土器については、章末に全出土量と図化量を遺構・器種別に重量で示した。

器種は、器形で分類した。供膳形態は、概ね一般的な口径 12cm 台のもので器高 5cm (器高 / 口径比 0.4) 以上と深めのあるものを壺、それ以下のものを坏、脚の付くものを高坏とした。貯蔵形態は、体部に対して口のすままるものを壺、開くものを鉢とした。煮炊形態は、底部に穿孔のあるものを甑、ないものを甕とした。数字で明確に定義されたものではないので、中間的で分けづらいものもあった。また、小片で器形の窺えないものは、器壁が薄くて曲線が小さく供膳形態と思われるものを坏、それ以外でミガキのあるものを壺、ないものを甕とした。したがって、壺や高坏の坏部で坏とされたもの、鉢の体部で甕とされたものなどがあると思われ、これら 3 器種の非図化遺物の量が若干多めで図化率は低め、他の器種の図化率が高めに出ていることをお断りしなければならない。

調査報告については、佐久 JC 部分の対象遺跡を佐久 JC 基点から南佐久 IC への順番、すなわち中原遺跡群、野火附遺跡、野火附城跡の順で掲載した。

第3節 調査および報告書刊行に至る経過

(1) 調査の経過

平成14年度より、前節の方法に準じて調査を行った。また、安全対策等については、『長野県埋蔵文化財センター埋蔵文化財発掘調査に関する安全基準』に則って行い、さらに、地元・JH・工事委託業者と協議の上、措置を施した。各遺跡の調査年度は、第1表の通りである。また、詳細な経過については、各遺跡の章に記載した。

(2) 整理作業および報告書刊行の経過

各調査年度に基礎的な記録類の確認等を済ませ、17年度から報告書刊行のための本格的な整理作業に入った。ただし、中部横断自動車道佐久南インターまでの供用開始が平成22年度と迫り、発掘調査作業が最優先されたため、18・19年度は整理作業を凍結した。

17年度には、遺物の接合・復元・実測・トレース・写真撮影、遺構原図の作成・トレース、図版の仮版組みと一部のデジタル化・版組み、写真図版の仮版組みを行った。20年度には残りの図版のデジタル化・版組み、原稿執筆、編集作業を行った。

第2章 遺跡の位置と環境

第1節 地理的環境

本書に収録された中原遺跡群、野火附遺跡、野火附城跡の3遺跡は、小諸市南部の御影新田に所在する。行政的には佐久市や北佐久郡御代田町に接する境界に近く、地形的には浅間山南麓の標高750m前後の台地上である。北緯36°18'0"、東経138°28'45"、日本測地座系のX=33,000、Y=-1,500付近である。

浅間山は過去に何度も大噴火を繰り返し、当地域の地形環境に大きな影響を与えている。約38,000年前には浅間火山の大部分を構成する黒斑火山が水蒸気爆発を起こして、山麓に流れ落ちた塚原泥流と呼ばれる山崩れの堆積物が、「流れ山」と呼ばれる小丘群を佐久市塚原地区に形成し、周囲の台地の基盤となっている。

約13,000年前と約11,000年前の2度の大噴火では軽石流が発生し、先に流出した第1軽石流堆積物は佐久盆地をほぼ埋め尽くし、後の第2軽石流堆積物は中原・野火附遺跡がある小諸市御影新田にまで達し、第1軽石流の上を覆っている。この軽石流堆積物は、厚さ10~30mもあるが、固結度が低く縦に割れやすいので小さな川でも容易に浸食されて深い谷となり、更に谷の両側が侵食されてその幅が広がっていく。このようにしてできた急崖は「田切り」と呼ばれ、谷底の低地は水田に、崖上の台地は畑や果樹園、住宅に利用されている。

浅間Cテフラが噴出した4世紀半ばの噴火では、群馬県の同遺跡などの水田が埋まっている。浅間Bテフラが噴出した嘉承3・天仁元年(1108)年の噴火では上野国(群馬県)一帯に多量の軽石が降り積もったほか、追分火砕流が北は吾妻川、南は西軽井沢まで流下している。浅間Aテフラが噴出した天明3(1783)年の大噴火では溶岩流と火砕流が発生し、群馬県嬬恋村録原地区を埋没させている。但し、これらの噴火は、当地域の地理的環境を一変させるまでには至っていない。

中原遺跡群、野火附遺跡が立地するのは、このような「田切り」に挟まれた北東-南西方向に細長い台地上で、野火附城跡もこのような細長い台地の先端を利用したものである。中原遺跡群と野火附遺跡は幅100m程の田切りを挟んだ別々の台地上に所在するが、野火附城跡は野火附遺跡と同じ台地上に立地する。

第2節 歴史的環境

中原遺跡群・野火附遺跡・野火附城跡が所在する小諸市・佐久市・御代田町にまたがる小田井・御影地区とその周辺地域は、古代には東山道が通過し、佐久郡衛、長倉駅家、塩野牧の推定地が所在する古代佐久郡の中心地で、古代の遺跡の稠密地域である。昭和50~60年代には県営圃場整備事業に伴って大規模に調査され、平成に入ってからには上信越自動車道の建設、長野新幹線の建設、長野新幹線佐久平駅の開業に伴う周辺地域の開発、さらに今回の中部横断自動車道の建設と、大規模な開発とそれに伴う調査が相次

ぎ、佐久地方で最も遺跡の発掘調査が多い地域でもある。

これらの遺跡は前述の田切りに挟まれた北東―南西方向に細長い台地上に位置し、その多くは立地する台地ごとに遺跡群として括られている。以下はその遺跡群の概要である。

中原遺跡群

佐久市側で周防畑遺跡群と命名された遺跡群と同一台地上で連なるが、行政上、小諸市側では中原遺跡群に括られ、佐久市側では周防畑遺跡群となっている。小諸・佐久市にまたがる曾根城遺跡、佐久市の周防畑B遺跡などが調査されている。

上信越自動車道建設に伴う中原遺跡群の調査では、古墳時代後期から平安時代前半までの竪穴住居跡140軒、掘立柱建物跡100棟などが検出され、丸軻・鉞尾の帯金具、和同開珎・萬年通寶の皇朝十二銭、鉄鐸等も出土している。曾根城遺跡は、小諸市側で古墳時代後期から平安時代までの竪穴住居跡13軒が検出されたほか、佐久市側でも同時期の竪穴住居跡が検出されている。周防畑B遺跡は、1980年の圃場整備前の確認調査で、弥生時代36軒、奈良～平安時代の竪穴住居跡62軒などが検出され、そのうち41軒が発掘調査され、残りは埋め戻されている。今回、中部横断自動車道の建設に伴って一部が再調査、一部が新たに調査され、弥生時代と平安時代の竪穴住居跡109軒、弥生時代の円形周溝墓20基、平安時代の掘立柱建物跡12棟などが検出され、川原寺式軒丸瓦も出土している。

鋤師屋遺跡群

中原遺跡群との間に田切りを挟んだ北側の台地上に所在する。小諸市、佐久市、御代田町の3市町にまたがり、御代田町の野火付(今回報告される小諸市の野火付遺跡とは別遺跡)・十二・根岸の各遺跡のほか、御代田町と佐久市にまたがる前田遺跡・佐久市の鋤師屋遺跡、小諸市の鋤師屋遺跡が含まれる。野火付遺跡はこの遺跡群には含まれないが、同一台地上にある。

野火付遺跡の上信越自動車道調査では、古墳時代前期末～中期初頭の竪穴住居跡3軒、古墳時代終末期の竪穴住居跡14軒、時期不明の掘立柱建物跡6棟などと、今回の調査地内に続く溝が検出されている。昭和56年には終末期の野火付古墳が調査され、勾玉、切子玉、丸玉のほか、追葬時のものと思われる土師器や刀子が出土している。

その他の遺跡は、県営圃場整備事業に伴い昭和59年から63年にかけて大規模に調査されている。御代田町の野火付遺跡は、奈良～平安時代初めの竪穴住居跡18軒、同時期と思われる掘立柱建物跡8棟、中世と思われる竪穴状遺構60基等のほか、内部に馬の土坑墓5基を含む特殊竪穴状遺構が検出されている。根岸遺跡では、奈良時代から平安時代初めの竪穴住居跡32軒と掘立柱建物跡40棟が検出され、皇朝十二銭の隆平永寶と鏡益神寶が出土している。十二遺跡では、奈良時代から平安時代初めにかけての竪穴住居跡71軒と掘立柱建物跡75棟が検出されている。前田遺跡では、御代田町・佐久市分を合わせて、古墳時代中・後期の竪穴住居跡11軒と、奈良時代から平安時代初めの竪穴住居跡258軒、掘立柱建物跡263棟などが検出され、唐三彩陶枕、円面祝、「長倉寺」・「長倉□」墨書土器、和銅開珎、巡方や埋葬馬、馬形石製品も出土している。鋤師屋遺跡では、奈良～平安時代初めの竪穴住居跡19軒と、掘立柱建物跡12棟、中世の竪穴状遺構15基等が検出されている。鋤師屋遺跡では、古墳時代終末期～平安時代初めの竪穴住居跡17軒と掘立柱建物跡25棟等が検出され、須恵器円面祝や須恵器杯の転用祝が出土している。掘立柱建物跡のうちの5棟は、奈良時代初めに東西約27m、南北35m以上の方形の区画溝に囲まれていたと考えられている。

宮ノ反A遺跡群

鐘師屋遺跡群の西側の台地上に位置し、小諸市の竹花遺跡・舟久保遺跡・宮の反遺跡などが含まれる。国道141号線バイパスの建設に伴って、平成2～3年にこの遺跡群中の竹花遺跡と船窪遺跡が調査され、竹花遺跡は古墳時代前・中期の竪穴住居跡3軒、古墳時代後期～平安時代初めの竪穴住居跡111軒と掘立柱建物跡86棟、舟窪遺跡からは古墳時代終末期～平安時代初めの竪穴住居跡21軒と掘立柱建物跡33棟が検出された。竹花遺跡からは「□布度玖段□□□□飯依」等の文字が見られる漆紙文書や、帯金具の鉸具も出土している。上信越自動車道関連調査時には、圃場整備で中間が壊滅していたためにこの遺跡群の範囲にはふくまれないがJHとの契約で宮ノ反A遺跡群となっていた地点も調査され、古墳時代後期～平安時代初めの竪穴住居跡91軒と、1辺5～60mの方形の区画溝に囲まれた掘立柱建物群を含む掘立柱建物跡78棟、中世の竪穴状遺構84基などが検出されている。

鎌田原遺跡・近津遺跡群

中原遺跡群の西側の台地上に位置する。佐久市の近津遺跡群と一連の遺跡であるが、小諸市では鎌田原遺跡と呼ばれる。中部横断自動車道の建設に伴って平成14年度に調査され、古墳時代前期の竪穴住居跡10軒と同後期の竪穴住居跡2軒と小規模な集落跡が検出されている。これに連なる近津遺跡群でもこれまでのところ、古墳時代前期・後期、平安時代の竪穴住居跡が散発的に検出されており、小規模な集落跡の集まりと推定されている。

西近津遺跡群

近津遺跡群の西側に連なる台地上に位置するが、北側の湧玉川に面する部分を除いて、田切り地形は不明瞭となっている。中部横断自動車道の建設に伴って平成18年から大規模に調査され、平成19年までに弥生時代後期、古墳時代後期～平安時代、中世の竪穴住居跡合わせて500軒以上と、古墳時代後期～中世の掘立柱建物跡68棟などが検出され、「郡」「大井」などのヘラ書き須恵器や、「釘子私印」の銅印が出土している。

芝宮遺跡群

中原遺跡群の南側の台地上に位置する。上信越道建設に伴う調査では、古墳時代後期～平安時代前半の竪穴住居跡237軒と掘立柱建物跡139棟が検出され、鉸具・巡方・丸駒・鉈尾の帯金具、和銅開珎・神功開寶の皇朝十二銭、海獸葡萄鏡のほか、報告書では不明品とされているが小型の焼印と思われる鉄製品も出土している。

長土呂遺跡群

芝宮遺跡群の南側の台地上に位置する。上大林遺跡、上聖端遺跡、下聖端遺跡、曾根新城遺跡、聖原Ⅱ遺跡などが調査されている。なかでも佐久市流通業務団地の造成に伴って昭和63～平成16年に調査された聖原遺跡は、古墳時代後期～平安時代の竪穴住居跡818軒、同掘立柱建物跡869棟などが検出された大遺跡で、「佛・甲斐国山梨郡大野郷戸主 乙作八千 此後与佛島 八千作願」のヘラ書きのある仏鉢形土器や「大方寺」黒書土器、円面鏡、白磁、瓦塔、「金」焼印、和銅開珎・隆平永寶・富壽神寶・承和昌寶・長年大寶の皇朝十二銭、鉸具・巡方・丸駒・鉈尾の帯金具、八稜鏡、馬鈴、金銅製鈴、銅鐃、「伯万私印」石製印などが出土している。

栗毛坂遺跡群

長土呂遺跡群の南側の台地上に位置する。芝間遺跡、中曾根遺跡、西曾根遺跡、前藤部遺跡などが調査されている。このうち、上信越自動車道と北陸新幹線の用地内の調査では、A～Eの5地区に分けられた調査区の中のA、D、E地区は小規模な集落跡であるが、B地区では古墳時代後期～平安時代前半の竪穴住居跡91軒と掘立柱建物跡93棟、C地区では平安時代初めの竪穴住居跡40軒と掘立柱建物跡54棟が検出され、B地区では神功開寶が出土している。

以上のように、本地域は古墳時代後期～平安時代の集落遺跡の密集地である。これより前の遺跡は、厚い浅間軽石流に覆われている旧石器時代は勿論、縄文時代の遺跡も平地部には少ない。ガラス質安山岩の産地で石器製作跡の八風山遺跡群香坂山遺跡、後期旧石器時代末～縄文時代初期の尖頭器製作跡の下茂内遺跡、縄文時代前期の後沢遺跡、前・中期の榛名平遺跡などの代表的な遺跡は、いずれも盆地周縁の山地に所在する。

弥生時代の遺跡は、佐久市の西近津遺跡群や、周防畑遺跡群、北西ノ久保遺跡、西一里塚遺跡など後期の大集落遺跡が、本地域より西側の沖積低地を臨む台地上や微高地上に見られる。

古墳時代前・中期の遺跡は、上述の前田遺跡や野火付遺跡、竹花遺跡、鎌田原遺跡のほか、佐久市の一木柳遺跡、家清水遺跡などの集落遺跡が見られるが、いずれも小規模で数も少ない。浅間Cテフラを降らせた4世紀中頃の浅間山の噴火活動の影響があったものと思われる。

古墳時代後期から継続する遺跡は多く、大規模である。その存続期間を見ると、中原遺跡群や宮の反A遺跡群、西近津遺跡群、芝宮遺跡群、長土呂遺跡群、栗毛坂遺跡群のように、古墳時代後期から平安時代初めまで存続する集落が多いが、鎗師屋遺跡群中の十二・前田・鎗師屋・野火付遺跡のように奈良時代かその直前から始まる「律令的計画村落」も見られる。

また、竪穴住居跡に対する掘立柱建物跡の比率がほぼ1:1と高かったり、集落の一部を区画する溝を持つものがあることなども特徴である。出土遺物も帯金具や皇朝十二銭などの律令政治と関わるものや、埋葬馬や焼印、馬銜、馬形石製品など馬に関するもの、川原寺式軒丸瓦や、瓦塔、銅塊、仏鉢など寺に関するものが見られるほか、文字資料が多く見られること、金属器に刀子や鉄鎌など農具以外のものが見付くことも特徴的である。これらは、佐久郡衛、東山道長倉駅、塩野牧や『三代實録』貞観八年二月二日条に見られる「佐久郡妙楽寺」に関係する可能性が高いが、これまでのところ、明確に比定された遺跡はない。こうした周辺遺跡との関係が、今回の調査課題となった。



第2図 周辺遺跡図

参考文献

- 一志茂樹 1993 『古代東山道の研究』 信毎書籍出版センター
- 小諸市教育委員会 1982 『野火付古墳』
- 小諸市教育委員会 1983 『曾根城遺跡』
- 小諸市教育委員会 1988 『鎗物館屋』
- 小諸市誌編纂委員会 1986 『小諸市誌 自然誌』 小諸市誌刊行会
- 佐久市教育委員会 1980 『周防畑遺跡』
- 佐久市教育委員会 1985 『鎗師屋遺跡』
- 佐久市教育委員会 1988 『鎗師屋遺跡Ⅱ』
- 佐久市教育委員会 1989 『前田遺跡（第Ⅰ・Ⅱ・Ⅲ次）』
- 佐久市教育委員会 2002 『聖原 第1分冊』
- 佐久市教育委員会 2003 『聖原 第2分冊』
- 佐久市教育委員会 2004 『聖原 第3分冊』
- 佐久市教育委員会 2004 『聖原 第4分冊』
- 佐久市教育委員会 2005 『聖原 第5分冊』
- 佐久市志編纂委員会 1984 『佐久市志 歴史編（一）』 佐久市志刊行会
- 佐久市志編纂委員会 1988 『佐久市志 自然編』 佐久市志刊行会
- 長野県教育委員会 1982 『長野県史 考古資料編 全一巻（二） 主要遺跡（北・東信）』
- 長野県文化財保護協会 2005 『信濃の東山道』 信毎書籍出版センター
- 長野県埋蔵文化財センター 1991 『木戸平A・吹付・東林・揚マネ・上中原・千草場・城の口・西林・東林ぶた・西赤ぶた・大屋尻古墳群・丸山古墳群・丸山Ⅱ・丸山・北山寺・東大久保・西人窪・腰巻・栗毛坂・西赤班・中大久保・琵琶坂』
- 長野県埋蔵文化財センター 1998 『県 県西南部 池尻 小田井城南部台地 頭板 金井城跡 中金井 粟毛坂 下蟹沢 長上呂 常石居屋敷 前田 砂原 中平・田中島 土合』
- 長野県埋蔵文化財センター 1999 『栗毛坂・長上呂・野火付・前田・宮の反A・下前出原・長野原・赤沼』
- 長野県埋蔵文化財センター 1999 『芝宮遺跡群 中原遺跡群』
- 長野県埋蔵文化財センター 2002・2006・2007 『長野県埋蔵文化財センター年報』 19・23・24
- 御代田町教育委員会 1985 『野火付遺跡』
- 御代田町教育委員会 1987 『前田遺跡』
- 御代田町教育委員会 1988 『十二遺跡』
- 御代田町教育委員会 1989 『根岸遺跡』
- 御代田町誌編纂委員会 1995 『御代田町誌 自然編』 御代田町誌刊行会
- 御代田町誌編纂委員会 1998 『御代田町誌 歴史編上』 御代田町誌刊行会

第3章 中原遺跡群

第1節 遺跡の概要

中原遺跡群は、小諸市御影新田に所在する。上信越自動車道は佐久市から小諸市へ入ってすぐに、中部横断自動車道と分岐する。この分岐地点(佐久ジャンクション)が今回の調査対象地である。調査地点は、北緯36°17'51"、東経138°28'54"、日本(旧)測地系X=32,660、Y=-1,390に位置する。

遺跡は、浅間軽石流堆積物が、濁川の支流によって解析されてきた田切り地形の台地上に立地する。この田切り台地は、北東-南西方向に約4km続く一方、幅は60~330mと狭い。調査地付近から南西部で田切り台地は南北に二股に分かれる。中原遺跡群は、この二股部分と南側に分かれた台地上であり、調査地は当遺跡群内では北東部寄りに位置している。一方、北側に分かれた台地上には近津遺跡群がある。調査地付近の台地幅は南側約230m、北側約260mで、低地との比高差は5~15mを計る。

上信越自動車道建設に伴い、12,300mを対象とした調査が平成4・5年度に行われ、古墳時代後期から平安時代の集落跡が検出されている(第2章参照)。今回の調査区はその隣接地である。

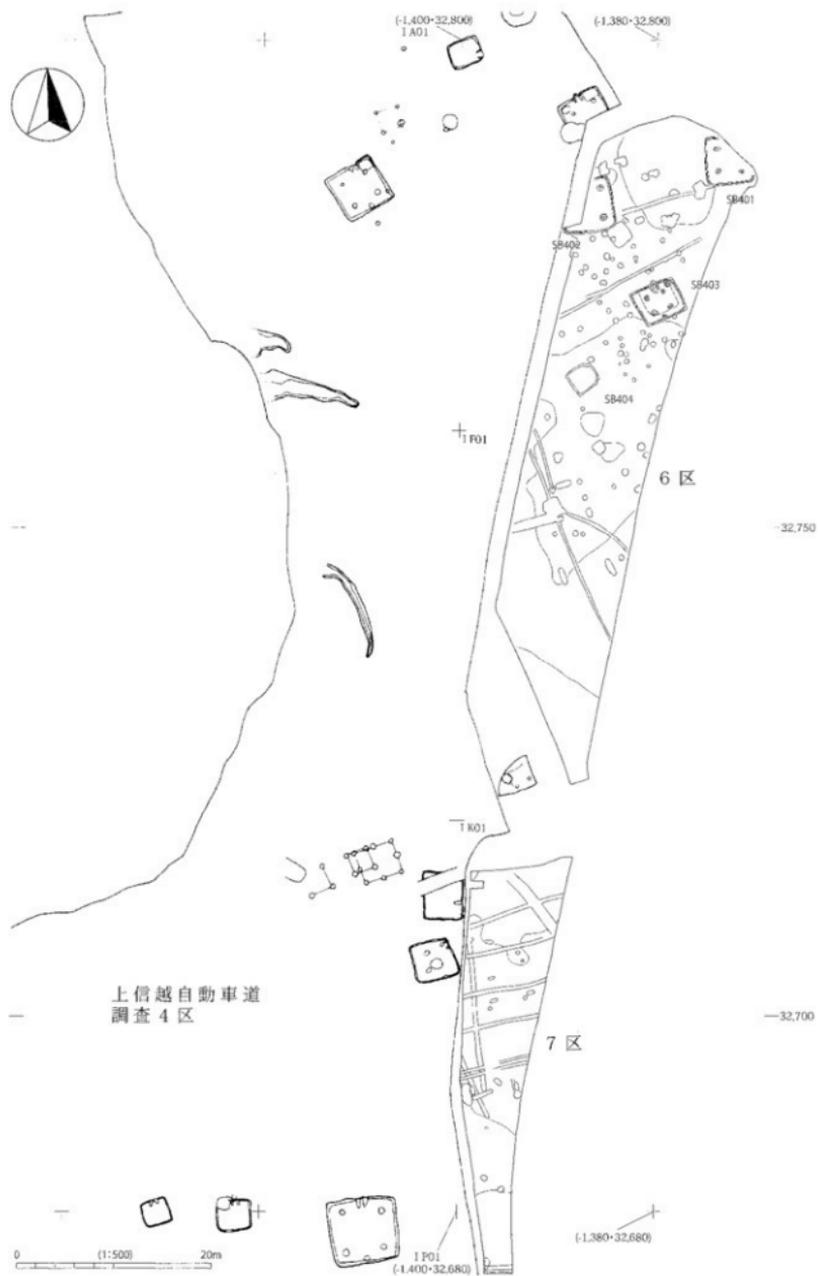
第2節 調査の概要

上信越自動車道関連調査時は、調査区を南から北に1~4の4区に分けている。北部の3・4区では遺構が疎らで、南部の1・2区では遺構が密集している。全体の遺構の9割以上が1・2区で検出されている。

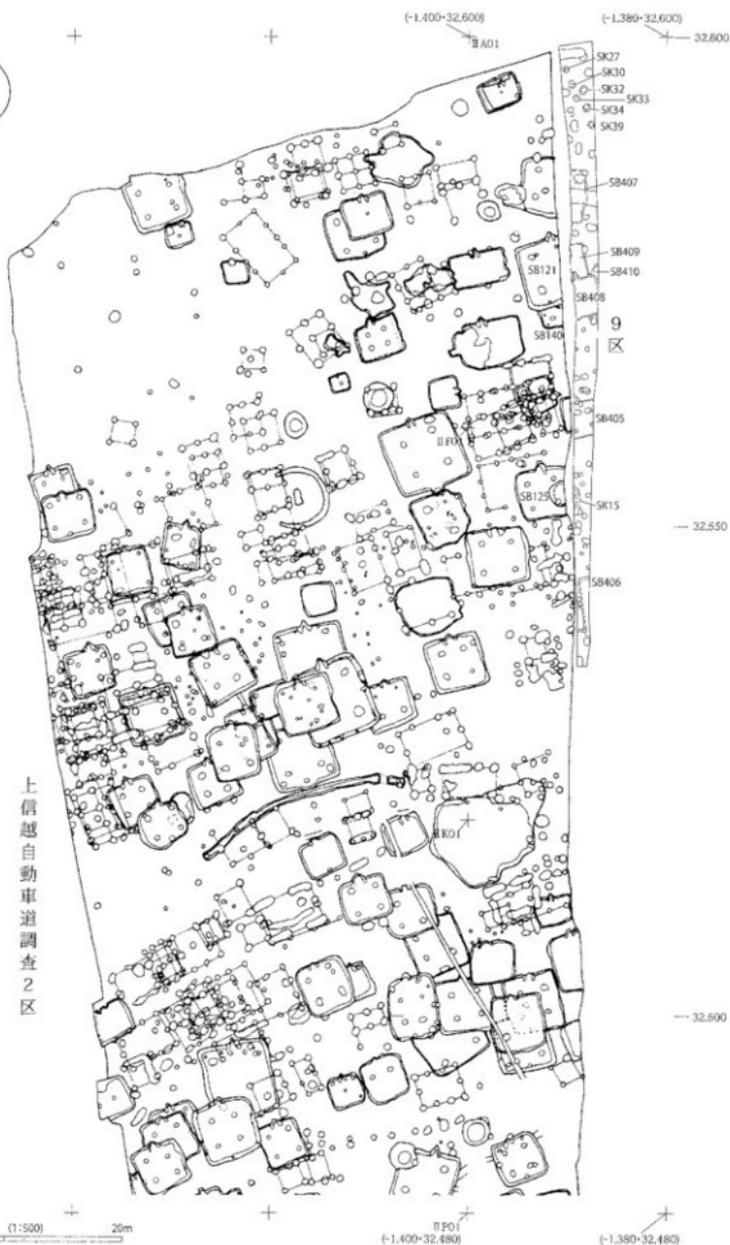
今回の調査区は、上信越自動車道関連調査区の東側に隣接するところで、農道で分かれた4箇所の調査区を北から6~9区(5区は欠番)とした。6・7区は上信越自動車道の4区に、8区が3区に、9区が2区にそれぞれ隣接する。特に、2区に隣接する9区では、古墳時代後期から平安時代前半の竪穴住居跡と掘立柱建物跡の集中が予想された。

調査は、平成16年8月9日、6区から着手した。佐久ジャンクションが上信越自動車道にすりつく部分であるため、調査区は南へ行くほど幅が狭く、最南端は1m幅であった。そのため、9区ではグリッド杭を平面的に打つことができず、平面測量は単点測量とせざるを得なかった。また、上信越自動車道関連調査区との図面の整合性で、調査の空白部分は概ね2m以内であったが、両方の調査区にまたがる遺構の壁に若干の食い違いが見られた。

調査の結果、6区と9区で竪穴住居跡または竪穴状遺構計10軒と掘立柱建物跡の一部と見られる柱穴列が検出されたが、7区では現況の畑に伴うと思われる溝と穴しか検出されず、浅い谷となっている8区では遺構は全く検出されなかった(第3図)。



第3図 6・7区遺構全体図



上信越自動車道調査2区

第4図 9区遺構全体図

調査日誌抄

- 8月9日 表土剥ぎ開始
- 8月18日 調査開始、竪穴住居跡6軒検出
- 10月8日 空撮、地形測量
- 11月4日 9区未調査分表土剥ぎ
- 11月5日 9区未調査分調査開始
- 11月30日 調査終了

第3節 遺構と遺物

1 概要

遺構の検出は、深さの違いはあるものの、調査区内はどこも耕作（表土）が浅間軽石層まで及んでいるため、浅間軽石層の上面で行った。検出遺構は、古墳時代後期～奈良時代の竪穴住居跡10軒と溝7条、土坑135基である。溝と土坑については、時期の決定が困難なものを含むため、現代の耕作に伴う可能性のあるものも含めて番号を付した。また、9区で検出された土坑には、一定の間隔で並び掘立柱建物跡の一部と考えられるものもあるが、調査区が狭く平面的に確認できないため、すべて土坑として報告する。

遺構番号について、上位越自動車道関連調査では、1区の遺構番号が2桁、2・3・4区の遺構番号が各100・200・300番台となっていた。今回の調査では検出された遺構が少なかったため、地区に関わらず400番台とした。但し、土坑については01号から番号を付した。前回調査との混同の恐れはほとんどないため、番号は付け替えずに報告する。

出土遺物は、土師器環・甕・甗、須恵器環・蓋が主で、土師器高環や甌はごくわずかである。土師器環は須恵器模倣環と半球形の環で平底のものは見られず、須恵器環は底面を全面ヘラ削りするものと回転糸切り後周辺ヘラ削りするもので、糸切りのままのものはなく、6～8世紀に限定される。須恵器蓋は、かえりが痕跡的なものと消失したものがあるが、直径20cmを超える大型のものが多く注目される。出土総重量26.7kgのうち57%が凶化できた（第15表）。

2 竪穴住居跡

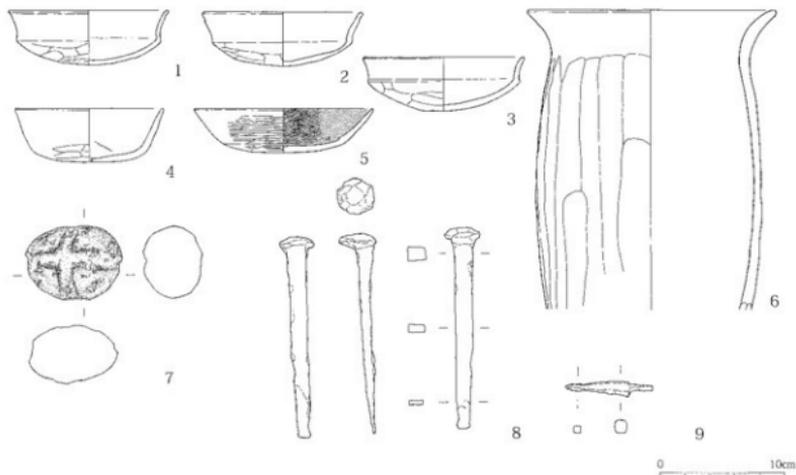
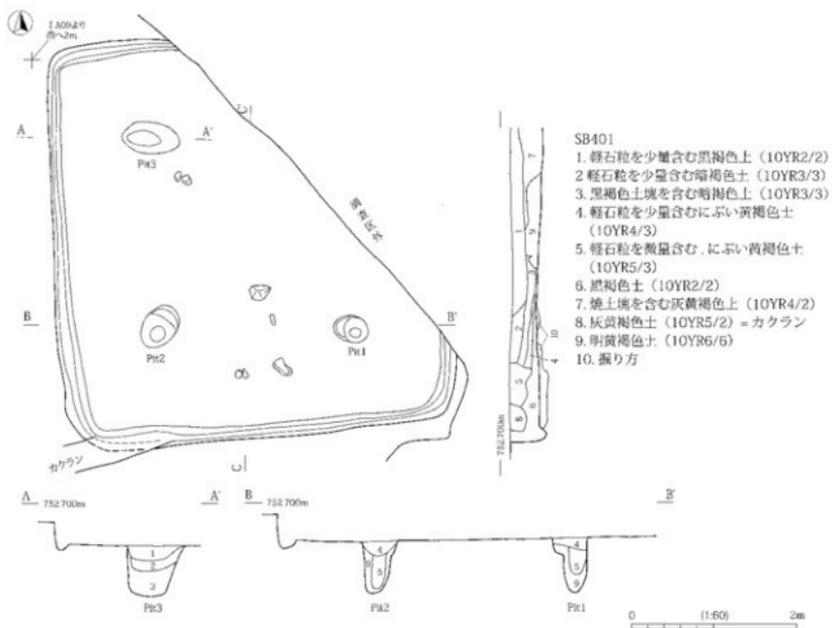
401号住居跡（第5図、PL1・3） 位置：6区北東部、I A09区

形状：方形（北東部が調査区外のため推定） 規模：東西4.8m（推定）、南北4.9m、深さ25～35cm 主軸方位：N5°W 遺構の重複：なし、南部の上層を暗渠に、北西隅の上層を鉄くずが大量に捨てられたごみ穴に壊される。

住居内施設：床は貼床だが脆弱である。壁はほぼ垂直に立ち上がる。周溝は幅15cm、床面からの深さ10cmほどで全周する。ピットは3基、直径30cmの円形～長径70cmの楕円形で、床面からの深さは65～70cm、主柱穴と考えられる。カマドは検出されていない。

堆積状況：カクラン部分を除いて8層に区分したが、レンズ状の自然堆積である。遺物出土状況：図示したもののほか、土師器環・甕・甗片が少量出土しているが、全て埋土からの出土である。

遺物：土師器環は、須恵器模倣環（1～3）と、丸底気味のもの（4）、皿状のもの（5）があり、甕（6）



第5図 401号住居跡・出土遺物

は最大径を口縁部に持ち、体外外面を縦にヘラ削りするものである。十字に紐を掛けた跡の残る石鍾(7)は安山岩製で多孔質であるが、225gと重い。鉄製品(8)は釘で、不明鉄製品(9)とともに北西隅のごみ穴のものが混入したと思われる。

時期：坏(1~5)から、7世紀後葉のものと考えられる。

番号	部位・位置	器種	口径	底径	器高	底面	体外外面	体内内面	底部内面	焼成	色調	胎土	残存率	備考
1		土師器坏	(12.8)	(11.7)	4.5	ヘラ削り	横ナデ	横ナデ	ナデ	普通	赤褐色	1mm以下の砂粒やや多	50%	
2		土師器坏	(12.8)	(11.3)	4.4	下の口縁直縁ヘラ削り	横ナデ	横ナデ	ナデ	良好	赤褐色	1mm以下の砂粒少量	40%	
3		土師器坏	(12.8)	(12.2)	4.4	下の口縁直縁ヘラ削り	横ナデ	横ナデ	ナデ(伏線跡?)	普通	赤褐色	1mm以下の砂粒少量	50%	底部内面磨成
4		土師器坏	(11.8)	9.2	4.3	ヘラ削り	横ナデ・下縁ヘラ削り	横ナデ後ヘラ削り	横ナデ	普通	赤褐色	1~2mmの砂粒少量	20%	
5		土師器坏	14.3	9.8	3.6	ヘラ削り	ミガキ	ミガキ	ミガキ	良好	赤~明赤褐色	1~3mmの砂粒少量	80%	内面着色処理
6		土師器坏	19.8	—	現高25.8	—	縦ヘラ削り、口縁横ナデ	横ナデ	—	普通	赤褐色	1mm以下の砂粒少量	50%	底面に黒痕

第2表 401号住居跡出土土器観察表

402号住居跡(第6図、PL1・3) 位置：6区の北西部、I A07・12区

形状：方形(北西部が調査区外のため推定) 規模：東西、南北とも5.4m(推定)、深さ25~35cm 軸方位：N15°W 遺構の重複：なし、カクランはある。

住居内施設：床は貼床だが軟弱である。壁はほぼ垂直に立ち上がる。周溝は幅15cm、床面からの深さ10cm足らずで南東隅を除いて全周する。ピットは2基、直径60cmの円形で、床面からの深さ40~55cm、主柱穴である。カマドは検出されていない。

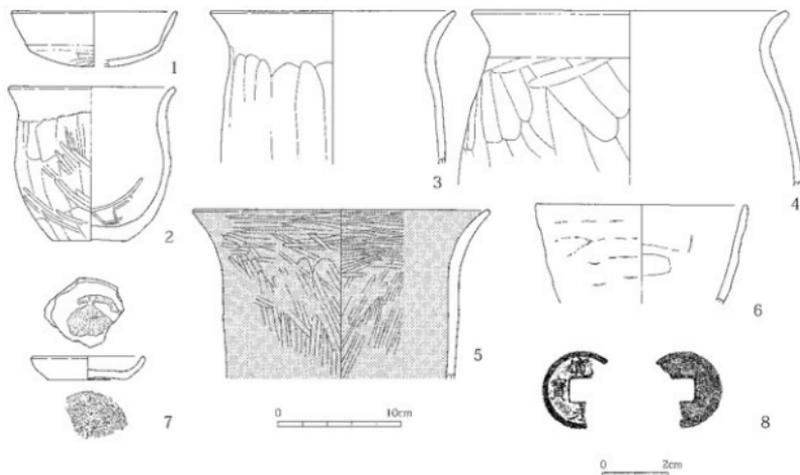
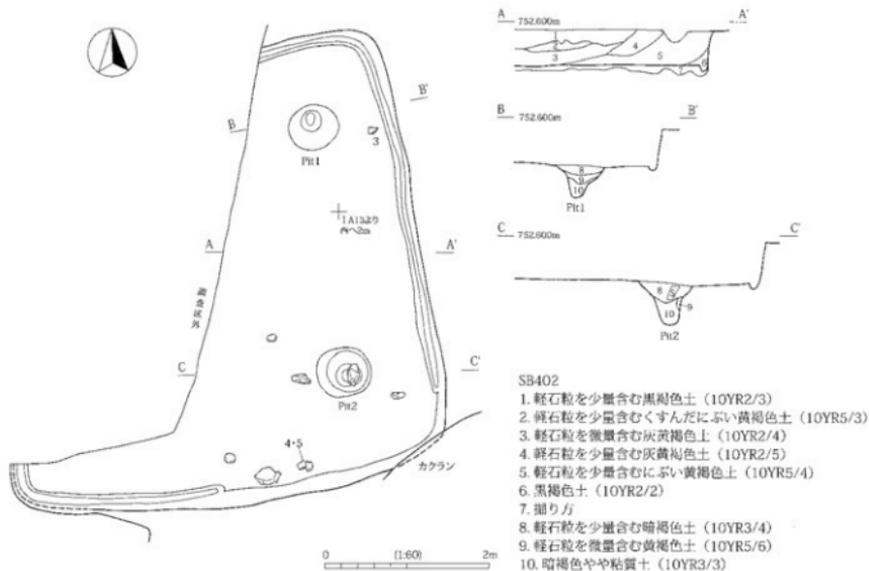
堆積状況：7層に区分したが、レンズ状の堆積である。遺物出土状況：土師器甕(3)が東壁際、土師器甕(4)・鉢(5)が南壁際の床面から出土したほか、図示したものを含む土師器坏・甕・壺・鉢片少量と須恵器坏・縄文土器細片が埋土から出土している。

遺物：土師器坏(1)は須恵器模倣坏で、甕(2~4)は体外外面をヘラ削りするもの、瓶(5)は内外面赤彩、鉢(6)は内外面に巻き上げ痕を残す。かわらけ(7)と寛永通宝(8)は後世の混入である。

時期：坏(1)から本住居跡は、7世紀初頭~前葉のものと考えられる。

番号	部位・位置	器種	口径	底径	器高	底面	体外外面	体内内面	底部内面	焼成	色調	胎土	残存率	備考
1		土師器坏	13.2	19.6	4.3	ヘラ削り	横ナデ	横ナデ	ナデ	普通	赤褐色	1mm以下の砂粒少量	20%	
2		土師器小型甕	13.3	6.1	12.5	ヘラ削り	縦ヘラ削り後一部ミガキ、口縁横ナデ	横ナデ後底部付ミガキ	ナデ後ミガキ	良好	赤褐色	1mm程度の白色砂粒やや多	70%	
3		土師器甕	19.4	—	現高12.4	—	縦ヘラ削り、口縁横ナデ	横ナデ	—	普通	赤~明赤褐色	1~2mmの砂粒少量	3%	
4		土師器甕	25.0	—	現高14.2	—	ヘラ削り、口縁の一部分ナデ、口縁横ナデ	横ナデ	—	普通	赤褐色	1~3mmの砂粒少量	10%	
5		土師器瓶	(23.6)	—	現高13.7	—	縦ヘラ削り後横ナデ	横ナデ後ミガキ	—	普通	赤褐色	1~2mmの砂粒少量	10%	
6		土師器鉢	(17.0)	—	現高8.0	—	横ナデ	横ナデ後一部ヘラ削り	—	普通	赤褐色	1~2mmの砂粒やや多	5%	外面に巻き上げ痕と粘土結着痕
7		土師器瓦	(8.8)	(5.5)	1.9	調整糸切り	横ナデ	横ナデ	ナデ	普通	赤褐色	1mm以下の砂粒少量	20%	内外面に民化物付着

第3表 402号住居跡出土土器観察表



第6図 402号住居跡

403号住居跡（第7・8図、PL1・4・5） 位置：6区の北部、I A18区

形状：やや横長の長方形 規模：東西4.5m、南北3.9m、礎礎面からの深さ45～60cm 主軸方位：N26°W
遺構の重複：下層の403B号住居跡を拡張している。

住居内施設：床は黒褐色土の薄い貼床である。壁はほぼ垂直に立ち上がる。ピットは4基あり、直径45～60cmの円形または楕円形で床面からの深さは30～40cmを計る。このほか北東隅に貯蔵穴、南壁下中央に入り口施設と思われるピットがある。周溝は幅15～20cm、床面からの深さ5～15cmでカマド部分を除いて全周する。カマドは北壁中央よりやや東で、芯材を用いず淡褐色の粘土で袖が築かれる。床面は軽石粒混じりの黒褐色土の貼床で、床下には東西3.1m、南北2.9mの住居跡（403B号住居跡）があり、403B号住居跡のカマドをそのままで、東、南、西壁を拡張して403号住居跡が作られたものと考えられる。

堆積状況：6層に区分したが、レンズ状の堆積である。遺物出土状況：土師器鉢（1）・壺（2・3・6）・甕（4・8・10・12・13）がカマド周辺、土師器壺（3）が南壁際中央の入口付近、土師器壺（5）が貯蔵穴（ピット5）と北壁の間、土師器甕（9・11）が北西コーナーの床面で出土したほか、土師器坏・甕・甍片が埋土から少量出土している。

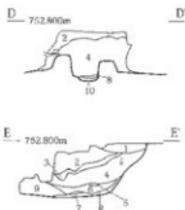
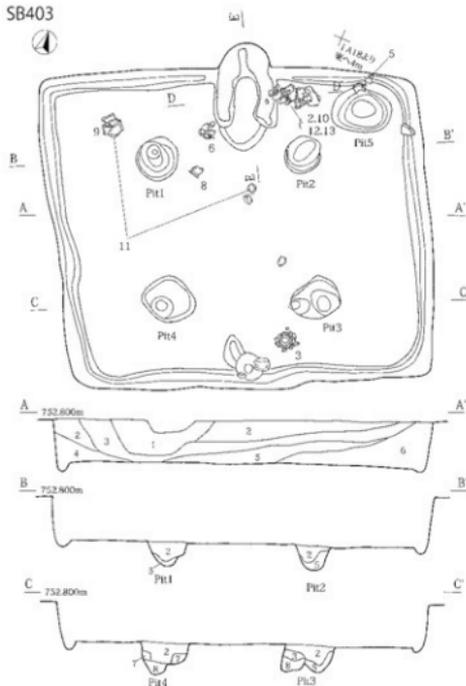
遺物：土師器鉢（1）と小型甕（4）は内面を黒色処理する。長胴甕（10～13）は胴部外面を長くヘラ削りするが、胴部最大径が中ほどにあるものと、上半にあるものが混在する。

時期：供膳形態の土器がなく時期を決めたいが、長胴甕（10～13）の形態から7世紀代のものと考えられる。

番号	層位・位置	形種	口径	底径	器高	蓋高	体形外観	体部内面	底部内面	焼成	色調	胎土	残存率	備考
1	カマド	土師器鉢	(14.6)	(7.1)	12.6	ヘラ削り	ヘラ削り後細分的にミギキリ、口縁縁ナゲ	縞かいいミギキ	縞かいいミギキ	普通	赤褐色	1～2mmの砂粒少量	50%	内面黒色処理
2		土師器甕	(11.4)	5.5	11.4	木製扉・一帯ヘラ削り	下平ヘラ削り・上平縁ミギキ	縞ナゲ後縁ヘラナゲ	ナゲ後縁ヘラナゲ	普通	赤褐色	1～2mmの砂粒少量	70%	
3	カマドソバ	土師器甕	10.4	5.3	19.0	ヘラ削り	ヘラ削り後ミギキ、口縁縁ナゲ後一部ミギキ	縞ナゲ後ミギキ	ナゲ後ミギキ	普通	赤褐色	1mm以下の砂粒少量	50%	
4	カマド	土師器小型壺	(10.6)	5.7	8.4	ヘラ削り	ヘラ削り、口縁縁ナゲ	縞ナゲ下平ミギキ	ミギキ	普通	赤褐色	1mm以下の砂粒少量	50%	内面黒色処理
5		土師器甕	(15.5)	—	現高12.2	—	ヘラ削り後ミギキ、上縁ナゲ後ミギキ	縞ナゲ後縁ヘラ削り	—	良好	赤褐色	顕微	20%	
6		土師器甕	—	9.3	現高4.3	ヘラ削り	ヘラ削り後ミギキ	縞ナゲ後ミギキ	ナゲ後ミギキ	普通	赤褐色	1mm以下の砂粒少量	5%	底部放射状の割れ
7		土師器甕	—	(6.8)	現高12.8	ヘラ削り	ヘラ削り	縞ナゲ	ナゲ	普通	赤褐色	1mm以下の砂粒少量	5%	
8	カマド	土師器壺	17.0	6.5	16.0	ヘラ削り	縞ヘラ削り、口縁縁ナゲ	縞ナゲ	ヘラナゲ	普通	赤褐色	1.2mmの砂粒多	80%	
9		土師器小型壺	(14.4)	—	現高14.5	—	ヘラ削り、口縁縁ナゲ	縞ナゲ	—	普通	赤褐色	1～2mmの砂粒少量	10%	体部内面に巻き上げ傷
10		土師器甕	16.0	—	現高23.1	—	縞ヘラ削り、口縁縁ナゲ	縞ナゲ	—	普通	赤褐色	1～3mmの砂粒やや多	60%	外面巻き上げの凹凸、内面の一部巻き上げ傷
11		土師器甕	(20.8)	(6.2)	現高38.6	ヘラ削り	ヘラ削り、口縁縁ナゲ	中径以上ハケ目・下位ナゲ	ナゲ	普通	褐色	1～2mmの砂粒やや多	40%	
12		土師器壺	17.5	—	現高21.1	—	縞ヘラ削り、口縁縁ナゲ	縞ナゲ後縁ヘラナゲ	—	普通	赤褐色	1～3mmの砂粒やや多	60%	
13	カマド	土師器壺	20.0	—	現高22.2	—	縞ヘラ削り、口縁縁ナゲ	縞ナゲ後縁ヘラナゲ	—	普通	褐色	1～5mmの砂粒やや多	40%	口縁一部欠損

第4表 403号住居跡出土土器観察表

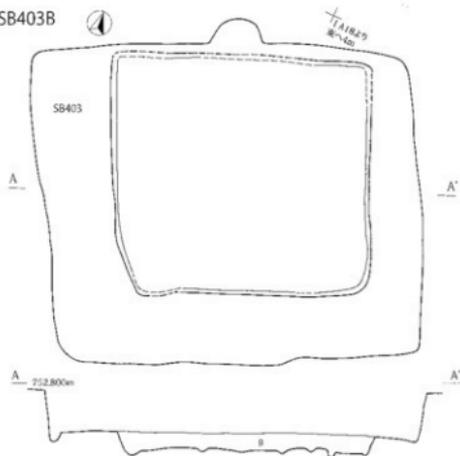
SB403



SB403 カマド

1. 明褐色粘質土 (5YR1/7)
2. 灰黄褐色土 (10YR4/2)
3. 暗赤灰土 (10YR3/1)
4. 褐灰色土 (5YR5/1)
5. 明褐色土 (5YR7/1)
6. 白色粘土粒を少量含む赤褐色土 (5YR3/1)
7. 赤褐色土 (5YR6/4)
8. 灰白色粘土 (5YR8/2)
9. にぶい褐色土 (5YR6/3)
10. 黒色土 (10YR2/2)

SB403B

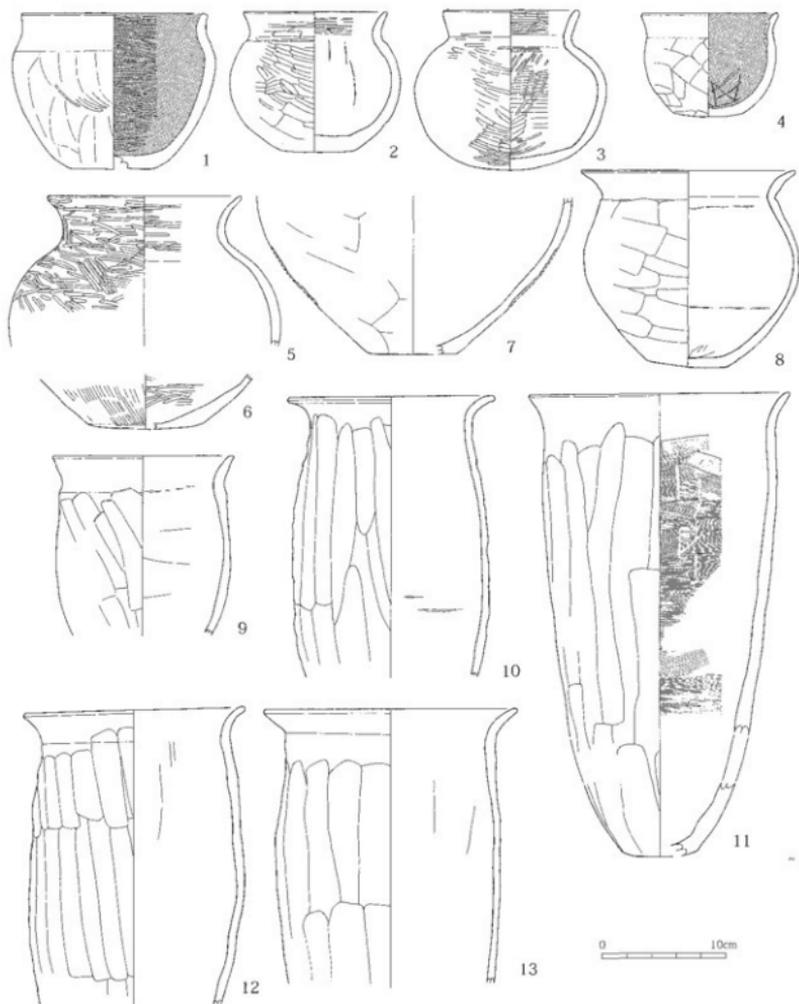


SB403

1. 黄色土塊を微量含む黒褐色土 (10YR2/2)
2. 黄色土塊と軽石を微量含む黒褐色土 (10YR2/3)
3. 黄色土塊と軽石を微量含む暗褐色土 (10YR3/4)
4. 黄色土塊・黒色土塊と軽石を含む暗褐色土 (10YR3/4)
5. 黄色土塊と軽石を微量含むにぶい黄褐～褐色土 (10YR4/3～/4)
6. 黒褐色土・軽石を微量含む暗褐色土 (10YR3/3)
7. 黒色土を少量含むくすんだ明黄褐色土 (10YR6/6)
8. 黒色土を少量含む鮮やかな明黄褐色土 (10YR6/5)
9. 灰黄褐色砂、軽石粒混じりの黒褐色土 (10YR2/2)

0 (1:60) 2m

第7図 403A・B号住居跡



第8图 403号住居跡出土遺物

404号竪穴状遺構（第9図） 位置：6区の中中部、I A22区

形状：ほぼ方形だが、東壁が凸字上に40cm突出する。 規模：東西2.8m、南北2.6m、確認面からの深さ約45cm 主軸方位：N40°W 遺構の重複：なし

住居内施設：床は灰黄褐色の砂層、北西隅、南西隅、東壁下の一部は硬く締まる。壁はほぼ垂直に立ち上がる。柱穴、周溝、カマドは見られない。

堆積状況：4層に区分したが、レンズ状の堆積である。遺物出土状況：図示したものを含む土師器・甕・壺片、須恵器・壺片が埋土から極少量疎らに出土している。

時期：底面を回転糸切り後外周ヘラ削りする須恵器高台付坏（2）の存在から8世紀後半のものと考えられる。

所見ほか：小さいこと、施設のないことから住居とは思わず、倉庫・厩などの用途が考えられる。

番号	層位・位置	器種	口径	底径	器高	底面	体部外面	体部内面	底面内面	焼成	色相	胎土	残存率	備考
1	土師器坏	(13.6)	—	—	現高 3.7	—	横ナデ	横ナガキ	—	普通	黒灰色	1m以下の砂状少量	5%	内面紫色帯粒
2	須恵器高台付坏	—	(13.0)	—	現高 1.4	回転糸切り後外周回転糸切り後削り	回転ナデ	回転ナデ	回転ナデ	良好	明灰色	1～2cmの砂状やむら	5%	

第5表 404号住居跡出土土器観察表

405号住居跡（第9図、PL1） 位置：9区の北部、II A22

形状：方形（推定） 規模：1辺約3.7m（推定）、確認面からの深さ60cm 主軸方位：N13°W 遺構の重複：ないが、カクランはある。東側は上信越道調査2区の144号住居跡である。

住居内施設：床は固く締まった黒褐色・黄褐色土の貼床である。壁はほぼ垂直に立ち上がる。ピットは3基、直径50～80cmの円形または楕円形で、床面からの深さは20～60cm、主柱穴である。カマドは北壁にあるが、右袖部と煙道の下部のみ残存し、他はカクランを受けている。

堆積状況：6層に区分したが、レンズ状の堆積である。遺物出土状況：土師器坏（1）と須恵器坏（2）がカマド周辺で出土したほか、図示したものを含む土師器坏・甕・壺片、須恵器蓋が埋土から少量出土している。

遺物：土師器坏（1）は半球形、須恵器坏は僅かに丸底気身で底面を全面ヘラ削りする。須恵器蓋（4）はかえりが痕跡的に残る。

時期：出土土器から8世紀初頭頃のものと考えられる。

番号	層位・位置	器種	口径	底径	器高	底面	体部外面	体部内面	底面内面	焼成	色相	胎土	残存率	備考
1	カマド	土師器坏	(12.9)	(13.4)	現高 3.3	ヘラ削り	横ナデ	横ナデ	ナデ	普通	赤赤褐色	1m以下の砂状少量	10%	
2	カマド	須恵器坏	(10.8)	(8.0)	3.6	回転糸切り後削り	回転ナデ	回転ナデ	回転ナデ	良好	灰色	1m以下の砂状少量	25%	
3	カマド	須恵器蓋	—	—	—	—	回転ナデ	回転ナデ	—	普通	灰色	1m以下の砂状やむら	5%	
4	Pl.4	須恵器蓋	(20.6)	—	現高 2.6	—	回転ナデ	回転ナデ	—	普通	灰色	1m以下の砂状少量	2%	

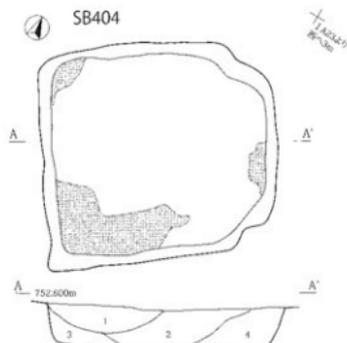
第6表 405号住居跡出土土器観察表

406号住居跡（第9図、PL2） 位置：9区の南部、II F07・12区

形状：方形または長方形（推定） 規模：南北約6.2m、確認面からの深さ70cm 主軸方位：N8°W 遺構の重複：SK23・24とカクランに西壁際と南西角の上層を切られている。

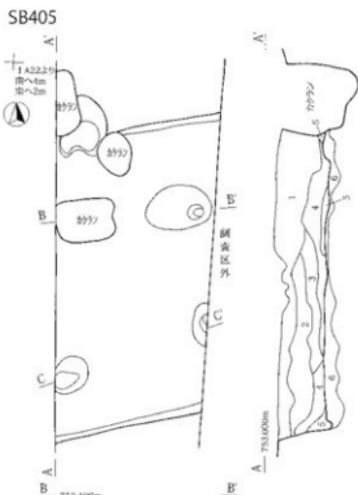
住居内施設：床は黒色土混じりの黄褐色土の貼床である。壁はほぼ垂直にたちあがる。主柱穴、周溝、カマドは検出されていない。

堆積状況：9層に区分したが、レンズ状の堆積である。遺物出土状況：図示した土師器坏（1）を含む土



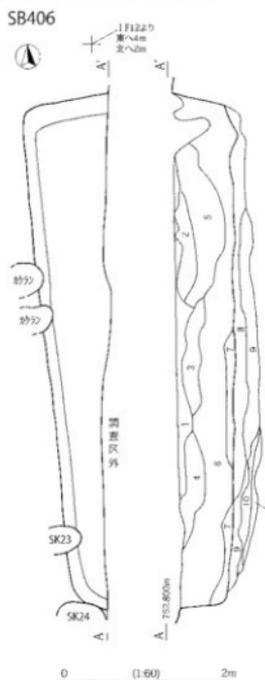
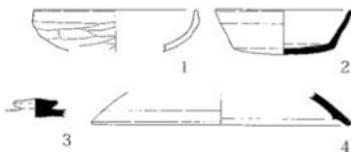
SB404

1. 軽石粒を少量含む黒褐色土 (10YR2/3)
2. 軽石粒・黄色土粒を少量含む黒褐色土 (10YR2/3)
3. 軽石粒を少量含む暗褐色土 (10YR3/4)
4. 黒色土塊を少量含む黒褐色土 (10YR2/3)



SB405

1. 黒褐色土 (10YR4/2)
2. 黄色土を20%含むにぶい黄褐色土 (10YR4/3)
3. 黄色土を10%含む黒褐色土 (10YR2/2)
4. 黄色土と黒褐色土の混土 (10YR3/2)
5. 黒褐色土 (10YR2/2)
6. 黄色土と黒褐色土の混土 (10YR3/2)
7. 灰黄褐色土 (10YR4/2)
8. 褐色土 (10YR4/4)



SB406

1. 灰黄褐色土 (10YR4/2)
2. 黄・灰・黒色土を含む黄褐色土 (10YR5/6)
3. 軽石粒を少量含む褐色土 (10YR4/4)
4. 軽石粒・黄色土を含むにぶい黄褐色土 (10YR4/3)
5. 明灰褐色土 (10YR6/8)
6. にぶい黄褐色土 (10YR5/3)
7. 黒褐色土 (10YR2/2)
8. 黒色土粒を含む黄褐色土 (10YR5/6)
9. 黒色土塊を含む灰褐色土 (10YR5/8)
10. 黒色土を含むにぶい黄褐色土 (10YR5/4)
11. 黒色土を含む明灰褐色土 (10YR6/6)



0 10cm

第9図 404・405・406号住居跡・出土遺物

師器杯・壺・甕片が埋土から極少量疎らに出土している。

遺物:土師器鉢(1)は内外面を黒色処理する黒色土器で、口縁部が内湾する山梨県的なものである。ヘラ削りされる底部も一部黒色化するが、平滑でないため全面黒色にはなっていない。

時期:器形的に6世紀後半頃のものと考えられる。

番号	部位・位置	器種	口径	底径	器高	底面	外部外面	外部内面	底部内面	焼成	色澤	胎土	残存率	備考
1		土師器鉢	(12.0)	(11.0)	3.3	ヘラ削り	黒い土ガキ	黒い土ガキ	黒い土ガキ	良好	黒褐色	1mm以下の砂粒少量	20%	外部内外面一底部内面黒色処理。底部削り跡多

第7表 406号住居跡出土土器観察表

407号住居跡(第10図、PL2・5) 位置:9区の北部、II A07・12区

形状:方形(推定) **規模:**西部は北壁に若干の食い違いが見られるものの、上信越道関連調査2区の129号住居跡に当たると考えられ、1辺約5.2m(推定)。確認面からの深さ40~60cm **主軸方位:**N5°E

遺構の重複:44号土坑に北東角、51・52号土坑に北東隅、2号溝に南北の中央部を切られる。

住居内施設:床は黒褐色の貼床であるが、軟弱である。壁はほぼ垂直。ピットは1基、直径約25cm、主柱穴かもしれない。その他の施設は検出されていない。

堆積状況:6層に区分したが、レンズ状の堆積である。**遺物出土状況:**図示した土師器高杯(1)と壺(2)を含む土師器杯・壺・甕、須恵器杯・甕片が埋土から少量疎らに出土している。

時期:土師器高杯が残ることから7世紀代のものと考えられる。

番号	部位・位置	器種	口径	底径	器高	底面	外部外面	外部内面	底部内面	焼成	色澤	胎土	残存率	備考
1		土師器高杯	—	—	深さ7.3	胴部内面に平腕ヘラ削り・下平腕リナゲ	胴部外面ヘラ削り	—	土ガキ	良好	赤褐色	1mm以下の砂粒少量	10%	
2		土師器壺	—	9.5	深さ6.5	ヘラ削り	横ヘラ削り後部外側に黒い土ガキ	胴ナゲ部分外側に土ガキ	ナゲ部分外側に土ガキ	普通	赤褐色	1~2mmの砂粒	10%	
3		土師器甕	14.8	—	深さ16.3	—	ヘラ削り、口縁横ナゲ	胴ナゲ	—	やや軟	灰褐色	1~3mmの砂粒やや多	70%	

第8表 407号住居跡出土土器観察表

408号住居跡(第10図、PL2・5) 位置:9区の中中部、II A17区

形状:長方形 **規模:**南北4.0m、東西7.0m、確認面からの深さ65cm **主軸方位:**N15°W **遺構の重複:**北側の409号住居跡を切るが、隣接する上信越自動車道関連調査2区では切り合いが逆になっていた。切り合い部分に本住居跡のカマドが存在し、本住居跡の出土土器が409号住居跡と同一のものと思われる120号住居跡のものより新しいことから前回の所見を訂正する。西部と南東隅が調査区外であるが、西部は上信越自動車道関連調査2区の140号住居跡と思われる。

住居内施設:床は地山のままである。壁はほぼ垂直に立ちあがる。柱穴や周溝は見られない。カマドは損壊が著しく、右袖が残るが、煙道と左袖は痕跡のみである。

堆積状況:2層に区分したが、レンズ状の堆積である。**遺物出土状況:**図示した須恵器杯(1)を含む土師器杯・壺・甕、須恵器甕片が埋土から極少量出土している。

遺物:八角錐台状に削られた軽石(2)はカマドの支脚であったと思われる。

時期:底面をヘラ削りする盤状の須恵器杯(1)から8世紀前半のものと考えられる。

番号	部位・位置	器種	口径	底径	器高	底面	外部外面	外部内面	底部内面	焼成	色澤	胎土	残存率	備考
1		須恵器杯	(11.5)	(8.7)	3.2	皿縁ヘラ削り	皿縁ナゲ	皿縁ナゲ	皿縁ナゲ	普通	黒灰色	1~2mmの砂粒やや多	10%	

第9表 408号住居跡出土土器観察表

409号住居跡（第10図、PL2・5） 位置：9区の中中部、II A12・17区

形状：方形（推定） 規模：1辺約7.0m（推定）、確認面からの深さ60cm 主軸方位：N10°W 遺構の重複：408号住居跡に南部を、48号土坑に北東部壁際を切られる。西部は、上信越自動車道関連2区の121号住居跡と思われ、切り合いが逆になっているが、前述のように前回の所見を訂正する。

住居内施設：床は地山のままである。壁はほぼ垂直に立ち上がる。柱穴や周溝は見られない。カマドは西部の調査区外である。

堆積状況：3層に区分したが、レンズ状の堆積である。遺物出土状況：土師器甕（1）は位置不明であるが床直上で出土しているほか、土師器鉢（2）を含む土師器坏壺、須恵器甍片が埋土から少量出土している。

時期：土師器甕（1）の最大径が口縁部になっていることから7世紀後葉以後のものと思われる。

番号	部位・位置	形状	口径	底径	器高	底面	体部外面	体部内面	底面内面	焼成	色調	胎土	残存率	備考
1	床直	土師器甕	18.7	—	現高 14.6	—	縦へう割り口縁 横ナブ	縦へう割縦へう ナブ	—	普通	茶褐色	1～3mmの砂粒 少量	10%	
2		土師器鉢	(13.7)	—	現高 5.9	—	ミガキ後赤影	ミガキ後黒色胎 遺	—	良好	赤褐色	1mm以下の砂粒 やや多	5%	内外面に7～8本の 平行線の火押痕

第10表 409号住居跡出土土器観察表

410号住居跡（第10図、PL2） 位置：9区の中中部、II A12・17区

形状：不明 規模：不明、確認面からの深さ60cm 主軸方位：不明 遺構の重複：408号住居跡に南部を切られる。

住居内施設：床は地山のままである。柱穴や周溝は見られない。カマドは西部の調査区外にあると思われる。

堆積状況：単層である。遺物出土状況：出土していない。

時期：不明であるが、切り合いから8世紀初頭以前である。

3 土 坑

6・7号土坑（第11図） 位置：9区の中中部、II A22区

遺構の重複：7号土坑が6号土坑を切る。構造：6号土坑は直径60cmの円形で確認面からの深さ40cm、7号土坑は長軸75cm、短軸60cmの楕円形で確認面からの深さは30cmである。堆積状況：単層である。遺物出土状況：6号・7号のどちらからかは不明であるが、内黒の半球形の土師器坏（1）が出土している。時期：8世紀初頭のものと考えられる。

番号	部位・位置	形状	口径	底径	器高	底面	体部外面	体部内面	底面内面	焼成	色調	胎土	残存率	備考
1		土師器坏	(11.6)	—	現高 4.9	—	へう割り口縁横 ナブ	縦かいミガキ後 黒色胎遺	—	普通	赤褐色	1～2mmの砂 粒やや多	10%	

第11表 6・7号土坑出土土器観察表

15号土坑(第11図、PL5) 位置:9区の南部ⅡF2・7区

遺構の重複:東側の15号土坑を切る。西部が調査区外であるが、西部は上信越道関連調査2区で125号住居跡を切る65号性格不明遺構であると思われる。構造:1辺約3.0mの隅丸方形で、確認面からの深さは60cmである。堆積状況:単層である。遺物出土状況:埋土中から土師器、須恵器がまとまって出土している。遺物:土師器小塊(1)は内外面赤彩、土師器高坏(2)は外面赤彩、内面黒色処理される。須恵器蓋(4)は推定口径が21.4cmと大きく、高盤の盤部の可能性もある。内面に黒痕があり、転用碗である。須恵器坏は底面が糸切りされるもの(5)とヘラ切りされるもの(6)がある。時期:8世紀後半頃のものと考えられる。

番号	層位・位置	器種	口径	高さ	部高	底面	外部外面	外部内面	底部内面	焼成	色澤	胎土	残存率	備考
1		土師器小塊	(5.2)	(4.0)	4.6	ヘラ削り	ヘラ削り法羅か いりつき、赤彩	磨かいしがき 赤彩	—	良好	赤褐色	1mm以下の砂粒 少量	20%	
2		土師器高坏	(13.8)	—	残高 4.4	小地方向とが 赤彩	東方向とが赤 彩	西方を段黒色 焼成	—	普通	灰赤褐色	1mm以下の砂粒 少量	10%	
3		須恵器蓋	(17.2)	—	3.6	天井部外周面 ナテ外中縁を 削りヘラ削り	口縁部外周面 ナテ	天井部内周面 ナテ	—	普通	灰褐色	1mm以下の砂粒 少量	20%	
4		須恵器蓋	(21.8)	—	残高 2.8	天井部外周面 ナテ外中縁を 削りヘラ削り	口縁部外周面 ナテ	天井部内周面 ナテ	—	普通	灰褐色	1～3mmの砂粒 やや多	15%	内面に赤痕
5		須恵器高坏	11.7	7.8	5.0	胴縁糸切り後半 持ちヘラ削り	胴縁ナテ	胴縁ナテ	胴縁ナテ	普通	酸化し て赤褐色	1～2mmの砂粒 少量	50%	
6		須恵器高坏	(12.9)	(10.0)	4.9	胴縁ヘラ削り後 木目状平削り ヘラ削り	胴縁ナテ	胴縁ナテ	胴縁ナテ	普通	青灰色	1～2mm以下の 砂粒少量	50%	外部外周面に灰付
7		須恵器高坏	—	—	残高 9.0	—	胴縁ナテ	胴縁ナテ	—	良好	明灰色	胎土	10%	

第12表 15号土坑出土土器観察表

27・30・33号土坑(第11図、PL2) 位置:9区の北部ⅡA2区

検出面:浅間軽石層上面 遺構の重複:なし 構造:直径70～80cm、確認面からの深さ40～55cmの土坑が、150～170cm間隔で1直線に並んでいるが、調査区内にも隣接する上信越自動車道関連調査2区にも、これから直角方向に同様の土坑は見られない。東側の調査区外に延びる掘立柱建物の一部なのか、単独の土坑が偶然並んだだけなのか不明である。堆積状況:単層である。遺物出土状況:27号土坑より、かえりが退化した須恵器蓋(1)が出土しているほか、33号土坑からは須恵器蓋小片が出土している。時期:8世紀初頃のものと考えられる。

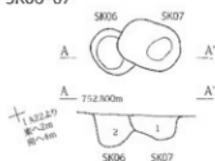
番号	層位・位置	器種	口径	高さ	部高	底面	外部外面	外部内面	底部内面	焼成	色澤	胎土	残存率	備考
1	SR27	須恵器蓋	(21.6)	—	残高 3.2	天井部外周面 ナテ	口縁部外周面 ナテ	天井部内周面 ナテ	—	良好	灰色	1～3mmの砂粒 やや多	5%	

第13表 27号土坑出土土器観察表

32・34・39号土坑(第11図、PL2) 位置:9区の北部ⅡA2・7区

検出面:浅間軽石層上面 遺構の重複:なし 構造:直径70～80cm、確認面からの深さ40～50cmの土坑が、180cm間隔で1直線に並び、調査区内で西側の直角方向に同様の土坑が見られ、隣接する上信越自動車道関連調査2区は南辺には2間先まで土坑があるが、西辺、北辺にはちょうどよい位置に土坑が見られない。2間×3間の掘立柱建物一部であるのか、単独の土坑が偶然並んだだけなのか不明である。堆積状況:単層である。遺物出土状況:32・39号土坑から土師器壺・壺片、34号土坑から須恵器片が出土しているが、いずれも小片で図示できなかった。時期:不明である。

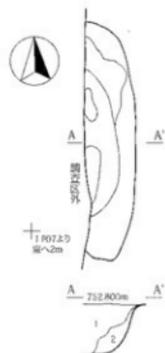
SK06・07



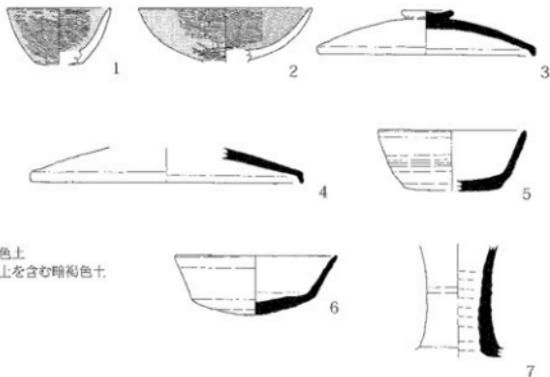
SK06・07
1. 黒褐色土
2. くすんだ黒褐色土



SK15



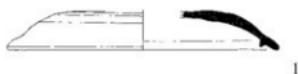
SK15
1. 黒褐色土
2. 黄色土を含む暗褐色土



SK32・34・39



SK27・30・33



第11図 6・7・15・27・30・32・33・34・39号土坑・出土遺物、遺構外出土遺物

4 遺構外出土遺物(第11図)

遺物：環状鈕の須恵器蓋(1)が検出面より出土している。天井部糸切りのままであり、8世紀後半のものと思われる。

番号・位置	器種	口径	底径	高さ	底面	胴部外面	胴部内面	蓋部内面	構成	色調	胎土	残存率	備考
1	環状器蓋	〔2〕.8	〔6.2〕	4.2	天井部環状糸切り	胴部後中心付五箇孔へう取り	同紙ナテ	—	良好	青緑灰色	胎土少量	10%	

第14表 遺構外出土土器観察表

第15表 中原遺跡群出土土器重量表

出土遺構	土製器										須恵器					縄文土器	近世陶磁器	不判	その他	計	回収率
	杯	酒杯	壺	壺	壺	壺	壺	高台付杯	酒杯	蓋	壺	壺	壺	壺	壺						
SB401	385	0	1210	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	1595	57%	
	563	0	2140	100	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	2806		
SB402	80	0	2070	0	0	135	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	20	2355	60%	
	209	0	3100	260	0	145	5	0	0	0	0	0	0	0	0	0	15	20	3865		
	0	0	5065	2090	153	470	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	8410		
SU403	215	0	6762	3370	150	470	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	10973	77%	
	10	0	0	0	0	0	0	15	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	25		
SD404	30	0	10	20	0	0	0	15	0	0	40	10	0	0	33	0	0	160	16%		
	20	0	0	0	0	0	30	0	0	30	0	0	0	0	0	0	0	80			
SB505	90	0	480	200	0	80	0	0	65	45	30	0	0	25	0	0	0	1015	8%		
	25	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	25	6%		
SB406	60	0	25	180	0	15	0	5	0	45	65	5	0	0	0	0	0	400			
	0	145	0	1140	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	1285			
SB407	50	145	460	1395	0	0	19	0	0	20	0	0	10	0	0	0	0	2090	61%		
	0	0	0	0	0	0	30	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	30			
SU408	20	0	210	60	0	80	0	0	40	45	0	0	0	0	0	0	0	435			
	0	0	420	0	0	135	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	463			
SH409	10	0	30	50	0	123	20	0	0	10	10	5	0	0	0	0	0	728	77%		
SD01	10	0	0	2	0	2	0	0	0	0	70	0	0	0	0	0	0	194	0%		
SD02	45	0	50	175	0	75	0	0	0	40	8	0	0	0	0	0	0	263	0%		
SD03	1	0	0	10	0	5	0	0	0	0	30	0	0	0	0	0	0	56	0%		
SD10	0	0	0	5	0	0	0	0	0	0	20	0	0	0	0	0	0	25	0%		
SD401	30	0	80	70	0	2	0	0	0	33	0	0	0	0	5	0	0	202	0%		
SD402	4	0	30	0	0	0	0	0	0	10	0	0	0	0	0	0	0	44	0%		
SD403	0	0	3	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	3	0%		
SD406	0	0	8	0	0	0	0	0	0	30	0	0	0	0	0	0	0	38	0%		
SD04	5	0	0	5	0	0	0	0	0	0	15	0	10	0	0	0	0	35	0%		
SD06	0	0	0	38	0	0	0	0	0	0	5	0	0	0	0	0	0	40	0%		
SD06	0	0	0	43	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	45	0%		
SD07	0	0	0	5	0	0	2	0	0	15	0	0	0	0	0	0	0	22	0%		
SD6	0	0	15	50	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	52	0%		
SK6・7	18	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	18			
	18	0	5	5	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	28	64%		
SK11	0	0	10	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	10	0%		
SK12	0	0	0	10	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	10	0%		
SK13	0	0	10	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	10	0%		
SK15	0	30	0	0	0	214	0	0	200	0	0	0	0	0	0	0	246	700	59%		
	60	40	240	15	0	249	0	0	200	120	15	0	0	0	0	0	246	1185			
SK16	0	0	0	8	0	0	5	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	10	0%		
SK18	5	0	10	15	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	30	0%		
SK23	5	0	0	0	0	0	0	0	0	0	10	0	0	0	0	0	0	15	0%		
SK24	10	0	0	0	0	5	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	15	0%		
SK27	1	0	10	0	0	0	0	0	40	0	0	0	0	0	0	0	0	41	0%		
SK29	0	0	15	0	0	5	0	0	5	0	0	0	0	0	0	0	0	5	0%		
SK32	0	0	15	10	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	25	0%		
SK33	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	20	0	0	0	0	0	0	20	0%		
SK34	0	0	0	0	0	0	0	0	0	35	0	0	0	0	0	0	0	35	0%		
	0	0	0	0	0	0	0	0	48	0	0	0	0	0	0	0	0	48	34%		
SK37	0	0	20	10	5	0	0	0	48	0	0	0	0	0	0	0	0	83			
SK39	0	0	20	20	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	40	0%		
SK40	0	0	5	5	0	5	0	0	0	70	0	0	0	0	0	0	0	85	0%		
SK41	0	0	0	0	0	0	0	0	0	10	0	0	0	0	0	0	0	10	0%		
SK42	5	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	5	0%		
SK43	0	0	5	0	0	30	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	35	0%		
SK44	0	0	0	50	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	50	0%		
SK46	6	0	0	30	0	1	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	37	0%		
SK46	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	5	0	0	0	0	0	5	0%		
SK47	0	0	0	0	0	5	5	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	10	0%		
SK49	5	0	35	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	40	0%		
SK51	0	0	19	0	5	0	0	0	0	0	7%	0	0	0	0	0	0	40	0%		

SK52	5	0	15	10	0	0	5	0	0	0	0	0	0	0	5	0	40	0%
SK5・9	5	0	5	10	0	0	5	0	0	0	0	35	0	0	0	0	60	0%
SK401	1	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	1	0%
SK403	5	0	0	20	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	25	0%
SK405	0	0	10	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	10	0%
SK406	0	0	5	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	5	0%
SK407	5	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	5	0%
SK418	1	0	10	0	0	0	0	0	0	0	0	10	0	0	0	0	21	0%
SK424	0	0	0	20	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	20	0%
SK432	0	0	0	10	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	10	0%
SK436	0	0	0	5	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	5	0%
SK442	0	0	0	10	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	10	0%
SK443	0	0	5	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	5	0%
SK448	0	0	5	20	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	25	0%
SK449	1	0	5	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	6	0%
SK452	0	0	5	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	5	0%
SK453	10	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	10	0%
SK461	5	0	35	0	0	0	20	0	0	0	0	0	0	0	0	0	60	0%
SK462	1	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	1	0%
SK463	0	0	1	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	1	0%
SK464	1	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	15	0	0	0	0	16	0%
SK475	5	0	5	0	0	0	2	0	0	0	0	0	0	0	0	0	12	0%
SK480	0	0	0	15	0	0	0	0	0	10	0	0	0	0	3	0	28	0%
SK481	0	0	10	15	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	25	0%
SK25	0	0	0	45	0	0	0	0	0	0	10	0	0	0	0	0	55	0%
遺構外	0	0	0	0	0	0	0	0	0	76	0	0	0	0	0	0	76	8%
	87	0	230	145	0	0	115	0	0	96	10	185	0	20	27	0	915	8%
計	538	185	9445	3230	150	738	274	15	0	354	0	0	0	0	0	206	15200	52%
	1582	185	14657	6937	165	748	748	15	5	487	630	998	40	35	115	266	26658	
同化率	34%	100%	84%	49%	94%	99%	52%	100%	0%	73%	0%	0%	0%	0%	0%	100%	57%	

(単位：g、2行の遺構の上段：同化遺物重量、下段：出土遺物総重量、1行の遺構：出土遺物重量のみで同化遺物なし)

第4節 小 結

今回の調査で検出された遺構は、堅穴住居跡9軒、堅穴状遺構1基、土坑135基等である。6区は、隣接する上信越道関連調査4区と同様、遺構は疎らで、3軒の堅穴住居跡と1基の堅穴状遺構が検出されたのみである。7・8区では、古墳時代～古代の遺構は検出されなかった。遺跡の中心に近い9区は遺構が密集しており、堅穴住居跡6軒と掘立柱建物跡の一部と見られるビット列などが検出された。残念ながら、調査区が1～2m幅で全形に分かる遺構はなかったが、上信越道2区に繋がる堅穴住居跡も確認できた。

これらの遺構の時期は、6世紀中葉から8世紀後葉に限定される。平安時代にかかるものがなく、前回の上信越道用地調査時のものと比べて若干時期幅が狭めであるが、検出された遺構の少なさによる偏りであろうか。今回は調査された面積の狭さもあって、調査成果は前回の結果をなぞるものであった。そのなかで、403号住居跡や15・27号土坑で出土した口径20cmを超える須恵器蓋や、15号土坑出土の口径10cm未満の小塊は、都の食器の量量による器種分化が、地方において最もよく及んだ官衙の近辺の遺跡であることを窺わせる好資料である。

参考文献

- 西 弘海 1971 「土器様式の成立とその背景」『考古学論考』
津野 仁 1987 「器種文化成及の一例」『磨澤考古』7

第4章 野火附遺跡

第1節 遺跡の概要

野火附遺跡は浅間軽石流によって形成された台地上にあり、中原遺跡群が載る台地との間に谷を挟んだ北側に位置する。この台地は中原遺跡群の台地と比べると南北に幅広で、調査地点で幅約1,000mを計る。また、南側に隣接する低地との比高差は6～10mである。

元々周知の遺跡ではなかったが、同一台地上に鍔形屋遺跡群が存在していたため、上信越自動車道建設に伴って平成5年に県教委文化課の試掘調査が行われた。その結果、遺跡であることが分かり、同年調査が実施された。約4,500㎡の調査区で古墳時代前期末～中期初頭と同後期～終末期の集落が検出されている。

また、本遺跡南側の田切りの斜面上には、かつて終末期の野火付古墳が存在し、昭和56年に小諸市教委により調査されている（小諸市教育委員会1982）。現在では田切り崖面が造成され、消滅している。

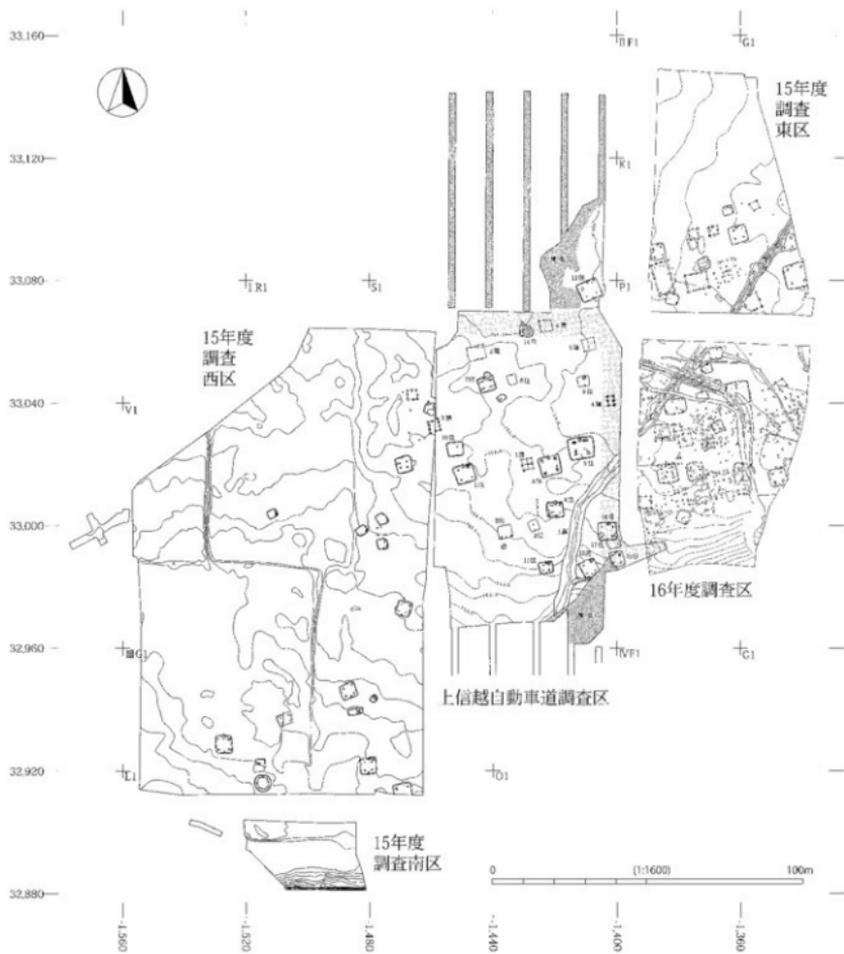
第2節 調査の概要

今回の佐久ジャンクションに関連する野火附遺跡の調査は、中部横断自動車道と上信越自動車道が立体交差する所で、前回の上信越自動車道関連での調査区の東西両側に当たる。上信越自動車道調査区の南北では遺構が途切れているが、東西は調査区境まで遺構が分布しており、これに繋がる主として古墳時代後～終末期の集落跡の存在が予測された。調査は平成14～16年度の3ヶ年にかけて用地の全面で行われた。

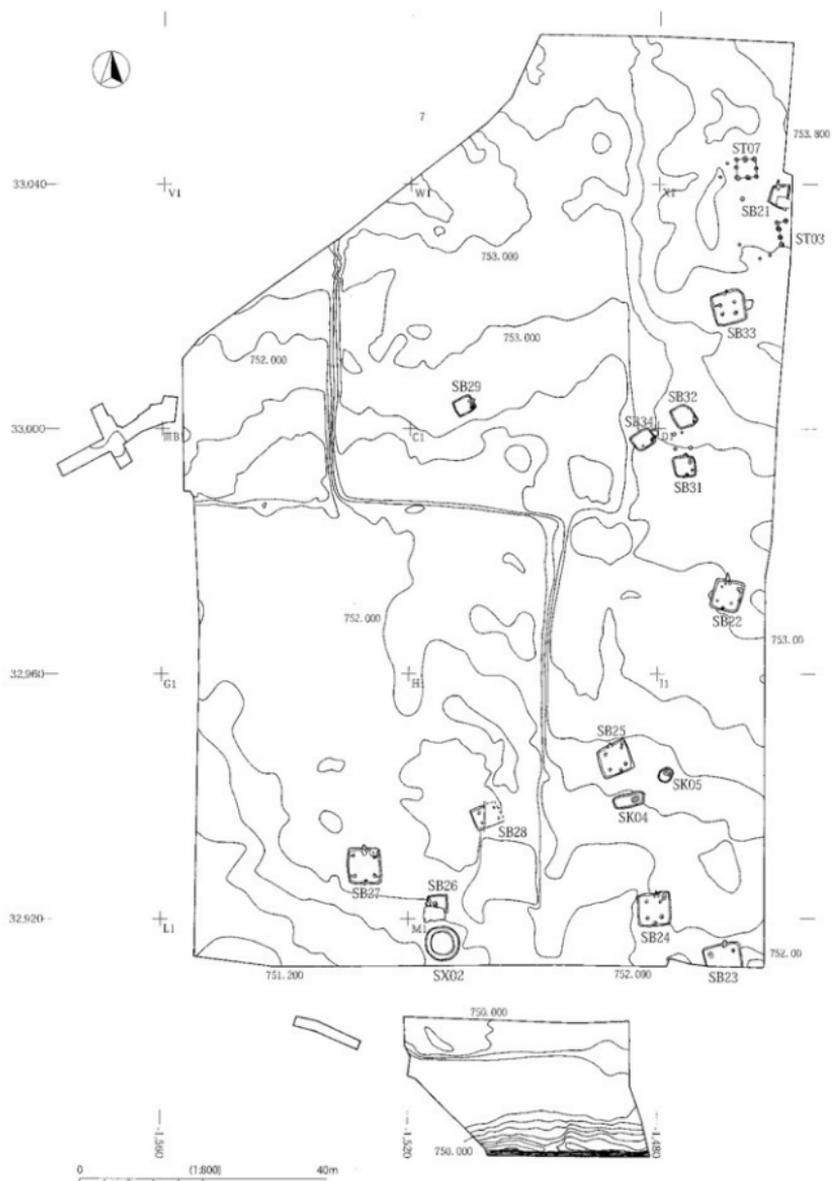
平成14年度は、10月から12月にかけて平成15年度調査西区北側の工事用道路部分の調査を行い、竪穴住居跡1軒、掘立柱建物1棟を検出した。同時に西区の試掘調査を行い、圍場整備で浅間軽石層中まで削平されていることが確認され、以後の調査はこの浅間軽石層上面を検出面として行った。

平成15年度は、7月から12月にかけて、平成14年度調査区の南側（平成15年度西区）、上信越道と市道を挟んだ北東のはす向かいの部分（15年度東区）、野火附古墳があったと推定される西区との間に市道を挟んだ南方の部分（15年度南区）の3ヶ所合わせて10,000㎡の調査を行った。南区では残念ながら野火附古墳の形跡は確認できなかったが、西・東区では平成14年度調査分も合わせて、竪穴住居跡21軒、掘立柱建物跡7棟、円形周溝遺構1基、上信越自動車道用地内の1号溝に繋がると思われる大溝（暫定1号溝）などを検出している。

平成16年度は、15年度東区の市道を挟んだ南方の地区4,800㎡を調査した。古墳時代前期末～中期初頭の竪穴住居跡2軒、同終末期の竪穴住居跡13軒、同掘立柱建物跡6棟などが検出されたほか、上信越自動車道用地内の1号溝と、15年度東区の暫定1号溝の間の部分が検出され、これらが同一の溝であることが確定した。



第12図 野火附遺跡遺構全体図



第13图 15年度西・南調査区遺構全体図

33,160--

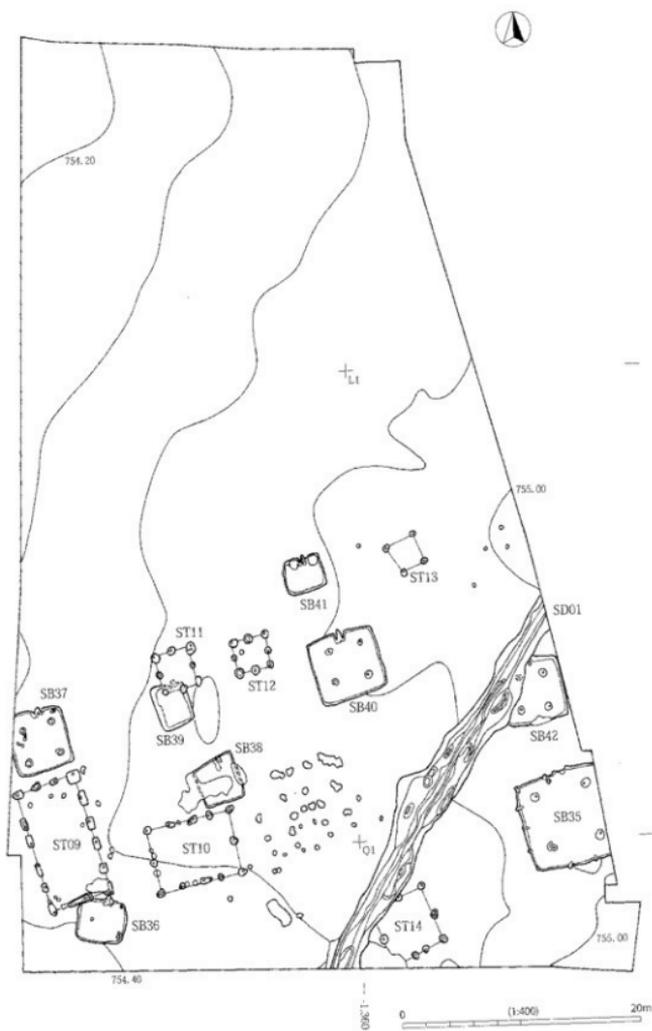
61

33,120--

61

33,080--

1:400



第14图 15年度東調査区遺構全体図



第15图 16年度調査区遺構全体图

調査日誌抄

平成14年度

10月15日	工事用道路部分の調査開始	11月13日	地形測量（～15日）
10月23日	15年度西区の試掘調査開始	12月12日	14年度調査終了
11月12日	調査区全景空中撮影		

平成15年度

7月24日	西地区調査開始	10月29日	西地区全景空中撮影
9月16日	東地区調査開始	11月20日	東地区全景空中撮影
10月16日	南地区調査開始	12月3日	南地区全景空中撮影、地形測量
10月25日	小田井育成会体験発掘、現地説明会	12月12日	15年度調査終了

平成16年度

4月22日	調査開始	9月17日	調査区全景空中撮影、地形測量
6月30日	56号住居跡から石鏡出土	10月25日	調査終了
8月7日	現地説明会		

第3節 遺構と遺物

1 概要

3カ年の調査で検出された遺構は、古墳時代前期末～中期初頭の堅穴住居跡2軒、同後～終末期の堅穴住居跡34軒、掘立柱建物跡14棟、溝9条、土坑260基等である。上信越自動車道関連調査分も含めて、古墳時代前期末～中期初頭の堅穴住居跡5軒、同後～終末期の堅穴住居跡48軒、掘立柱建物跡20棟となった。遺構の番号は、すべて上信越自動車道関連調査時に付されたものからの続き番号である。ただし、30号住居跡は年度途中での調査担当者交替の際の引継ぎの不慎から欠番となった。また、15年度調査東区の1号溝は、調査時点では上信越自動車道関連調査での1号溝に繋がるかどうか不確定のため番号を付していなかったが、16年度調査で繋がるのが確実になったため1号溝とした。

主な出土遺物は、土師器坏・埴・高坏・甕・壺・甌・鉢、須恵器坏・高坏・提瓶などであるが、土師器が圧倒的に多く、須恵器は少ない。土師器は古墳時代前期の住居跡から出土するものと6世紀に遡るものが若干あり、8世紀に下るものが極少量あるほかは、7世紀代のものである。古墳時代前期の56号住居跡からは、集落出土のものとしては珍しい石銅3片が出土している。

2 堅穴住居跡

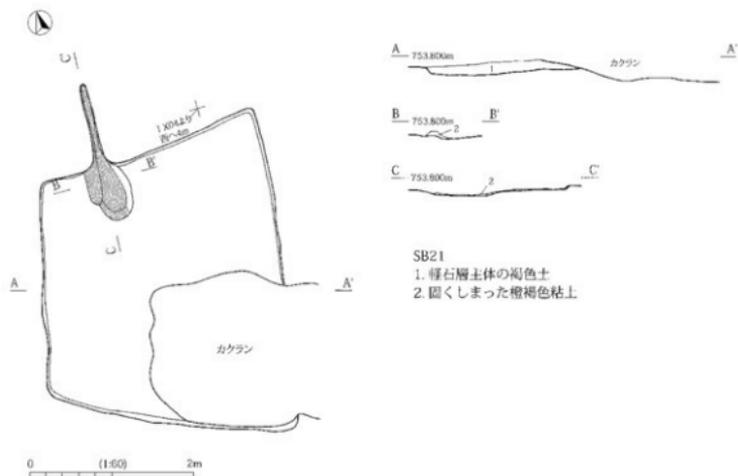
21号住居跡（第16図） 位置：15年度調査西区の北東部、I S23、X3区

形状：東辺が西辺より長い台形 規模：東西3.0m、南北4.0m、確認面からの深さ10～15cm 主軸方位：N11°W 遺構の重複：なし、南西部にカクランあり

住居内施設：床は地山のままで、壁はほぼ垂直に立ち上がる。ピット・周溝は検出されていない。カマドは北壁の西寄りにあり橙褐色粘土の左袖と燃烧部、煙道がわずかに残っていた。

堆積状況：単層である。 遺物：出土していない。

時期：22号住居跡と類似した構造であり、6世紀代のものと考えられる。



第16図 21号住居跡

22号住居跡 (第17・18図、PL7・15) 位置: 15年度調査西区の東部、ⅢD12・17区

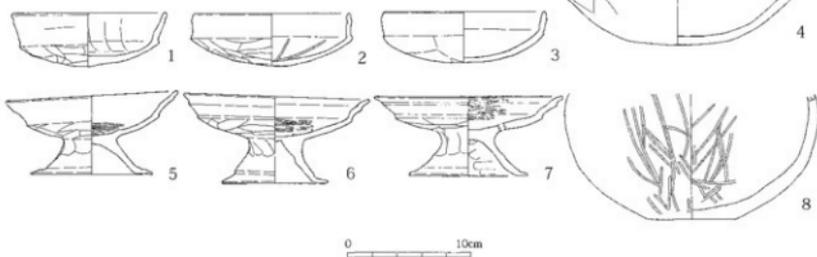
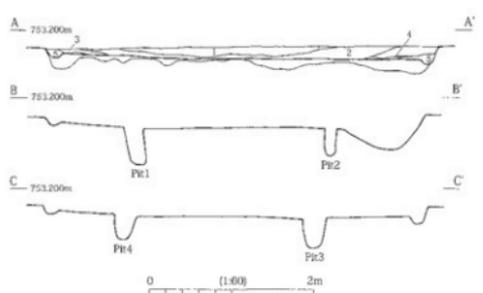
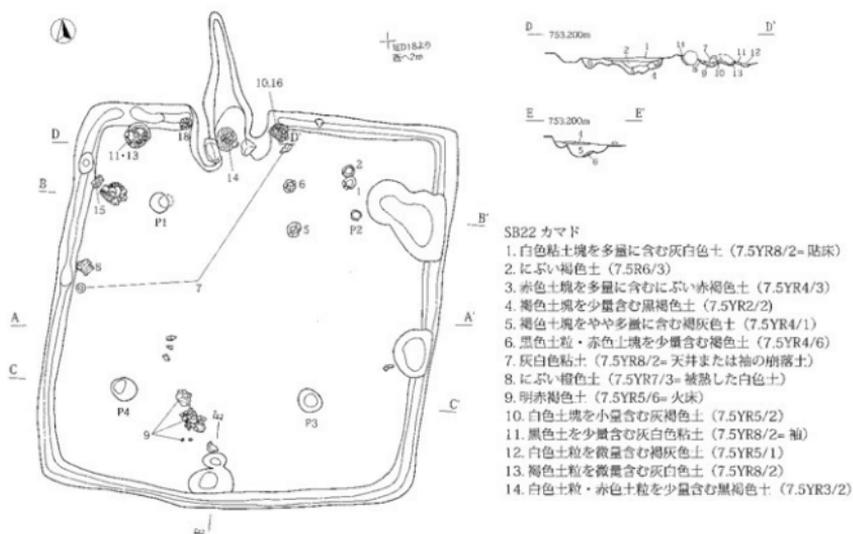
形状: 方形 規模: 東西4.6m、南北4.9m、確認面からの深さ5~15cm 主軸方位: N12° E 遺構の重複: なし

住居内施設: 床は粘土質の土の貼床で、中央部ほど固い。壁はほぼ垂直に立ち上がる。周溝は幅20cm、床面からの深さ5~10cmで全周する。ピットは1~4が支柱穴で、直径15~35cmの円形、床面からの深さは30~45cmを計る。南壁下中央の長径55cm、短径35cmの楕円形で、床面からの深さ15cmのピットは入り口施設と見られる。カマドは北壁やや西寄りで、基部の地山を掘り残し、その前面に礫を置いて芯材とし、粘土質の土を貼って袖が作られるが、支脚や天井部は壊されて残っていない。

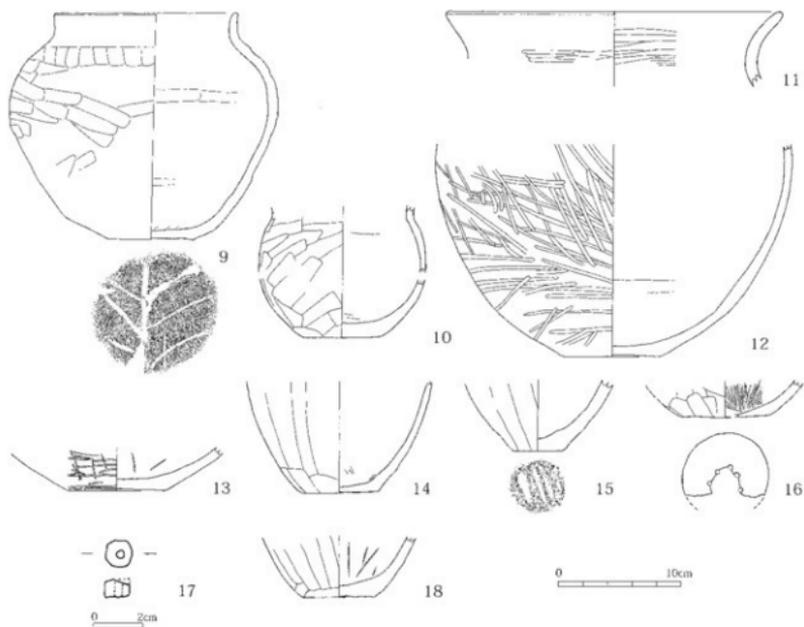
堆積状況: 5層のレンズ状の堆積である。遺物出土状況: 主に供膳形態の土器がカマド南東方、煮炊形態の土器がカマド内と両脇、貯蔵形態の土器がカマド南西方の床面でまとまって出土している。

遺物: 須恵器坏を模倣する土師器坏(2)は底部内面に8方向の放射状にミガキが施される。土師器壺(9)は底面に木葉痕、土師器甕(15)は底面にすのこ状の圧痕がある。白玉(17)は滑石裂である。

時期: 坏や短脚の高坏の形状から6世紀中葉~後葉のものと考えられる。



第17図 22号住居跡・出土遺物(1)



第18图 22号住居跡出土遺物(2)

番号	単位・位置	器種	口径	直径	器高	底面	体部外形	体部内面	底部内面	施文	胎土	残存率	備考
1		土師器杯	12.1	11.1	4.3	ヘラ形	楕円ナ	横ナ	横ナ	良好	赤褐色	90%	体部内面の一部に巻き上げ痕
2		土師器杯	12.3	12.9	4.3	ヘラ形	楕円ナ	横ナ	横ナ	良好	赤褐色	98%	
3	カマド	土師器杯	12.7	12.7	4.1	大まかなヘラ形	楕円ナ	横ナ	ナ	普通	灰褐色	50%	2～3mm砂粒と微細な鉄少量を含む
4		土師器蓋	—	8.2	器高17.4	ヘラ形	ヘラ形	ナ	ナ	普通	灰褐色	70%	1mm以下の砂粒少量
5		土師器酒杯	13.5	13.8	6.8	胴部内面ヘラ形	胴部上半ヘラ形下半ナ、内底面ヘラ形、外底面ナ	胴部内面ナ	一方隅の高さ異なる	良好	灰褐色	99%	1～5mmの砂粒やや多
6		土師器酒杯	14.8	14.8	7.4	胴部内面ヘラ形	胴部上半ヘラ形下半ナ、内底面ヘラ形、外底面ナ	胴部内面ナ	ミギキ後中央部磨滅	良好	灰褐色	99%	3mm以下の砂粒やや多
7		土師器酒杯	14.8	14.8	6.6	胴部内面ヘラ形	胴部上半ヘラ形下半ナ、内底面ヘラ形、外底面ナ	胴部内面ミギキ	ミギキ	良好	灰褐色	30%	3mm以下の砂粒やや多
8		土師器蓋	—	7.1	器高10.1	ヘラ形	楕円ナ	ナ	ナ	普通	灰褐色	15%	1～2mmの砂粒やや多
9		土師器蓋	14.7	7.0	13.7	木蓋	ナ	ナ	ナ	普通	灰褐色	60%	1～2mmの砂粒やや多
10		土師器蓋	—	6.4	器高10.7	ヘラ形	ヘラ形	楕円ナ	ナ	普通	灰褐色	40%	1～2mmの砂粒やや多
11		土師器蓋	26.4	—	器高6.2	—	口縁部ナ、胴部ナ	—	—	普通	灰褐色	10%	1～2mmの砂粒
12		土師器蓋	—	7.8	器高15.4	ヘラ形	ヘラ形	楕円ナ	ナ	良好	灰褐色	15%	1～2mmの砂粒少量
13		土師器蓋	—	7.8	器高13.5	ヘラ形	楕円のミギキ	ナ	ナ	普通	灰褐色	10%	5mmの砂粒やや多い
14	カマド	土師器蓋	—	6.4	器高9.1	ヘラ形	ヘラ形	楕円ナ	ナ	普通	灰褐色	5%	1mm以下の砂粒少量
15		土師器蓋	—	3.8	器高5.9	ヘラ形	ヘラ形	ナ	ナ	普通	灰褐色	5%	底面にすのこ状圧痕
16		土師器蓋	—	7.0	器高3.0	ヘラ形	ヘラ形	ナ	ナ	普通	灰褐色	10%	1mm以下の砂粒少量
18		土師器蓋	—	5.8	器高5.0	ヘラ形	ヘラ形	ナ	ナ	普通	灰褐色	10%	1mm以下の砂粒やや多い

第16表 22号住居跡出土土器観察表

23号住居跡(第19図、PL7・15) 位置: 15年度調査西区の南東部、ⅢN1・2区

形状: 方形または長方形 規模: 東西5.8m、確認面からの深さ25～40cm 主軸方位: N7°W 遺構の重複: なし、南部は調査区外となる。

住居内施設: 床は貼床で、壁はほぼ垂直に立ち上がる。ピットは1・2が主柱穴、ピット1は直径100cmの円形で深さ75cm、ピット2は直径45cmの円形で深さ35cmを計る。周溝は幅15～20cm、床面からの深さ10～15cmで全周する。カマドは北壁やや東寄り、基部の地山を掘り残し、その前面に礫を置いて芯材とし、粘土質の土を貼って袖が作られ、煙道は短い。燃焼部に落ち込んでいる礫は天井か左袖の一部と見られる。

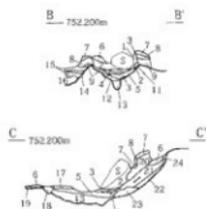
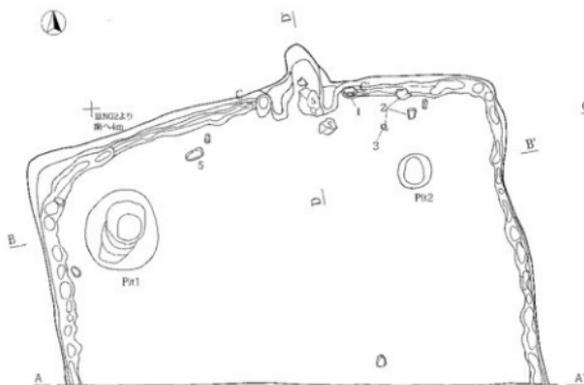
堆積状況: 6層のレンズ状の堆積である。遺物出土状況: ほとんどがカマド周辺の床面から出土している。

遺物: 土師器杯(1)は口縁が短く直立する須臾器蓋の模倣で内面黒色処理される。軽石(5)は1方の端(図の下部)が平に磨滅しており、磨石のように使われたらしい。

時期: 杯の形状から6世紀後葉～末葉のものと考えられる。

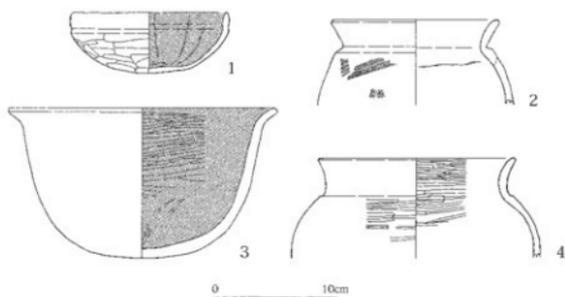
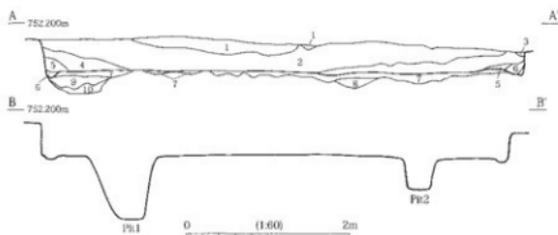
番号	単位・位置	器種	口径	直径	器高	底面	体部外形	体部内面	底部内面	施文	胎土	残存率	備考
1		土師器杯	12.3	12.8	5.0	ヘラ形	楕円ナ	横ナ	横ナ	良好	赤褐色	80%	
2		土師器蓋	13.2	—	器高7.0	—	胴部の風乾なヘラ目	横ナ	—	不良	赤褐色	40%	1～2mm砂粒少量
3		土師器杯	(21.3)	—	12.0	ヘラ形と差別的	ヘラ形?、口縁部外側ナ	横ナ	横ナ	普通	赤褐色	35%	1～5mmの砂粒やや多
4	カマド	土師器蓋	(15.6)	—	器高8.1	—	楕円ナ	楕円ナ	楕円ナ	良好	赤褐色	10%	1mm以下の砂粒少量

第17表 23号住居跡出土土器観察表



SB23 カマド

1. 赤色粘土粒を少量含む黒褐色土 (7.5YR2/3)
2. 焼土粒を多量に含む暗赤褐色土 (5YR3/3)
3. 炭層
4. 黄褐色土 (火床)
5. 赤褐色土 (火床下部)
6. 赤色粘土を多量に含むにぶい褐色土 (7.5YR5/3)
7. 赤色粘土を多量に含むにぶい褐色土 (5YR6/3)
8. 赤色粘土を少量含む暗赤灰色土 (2.5YR3/1)
9. 赤色粘土を多量に含むにぶい赤褐色土 (2.5YR4/3)
10. 赤・黄褐・白・黒褐色土粒を少量含む明褐色土 (7.5YR5/1)
11. やや白っぽい赤褐色土 (2.5YR4/3)
12. 明赤褐色土 (5YR5/6)
13. 黄褐色土塊を多量に含む黒色土 (7.5YR2/1)
14. 黄褐色土塊を少量含む黒色土 (7.5YR2/1)
15. 黄色土粒をやや多量に含む黒色土 (7.5YR2/1)
16. 黄褐色土塊を多量に含む黒色土 (7.5YR2/1)
17. 黒色土粒を少量含む黄褐色土 (10YR5/6= 貼床)
18. 黄色土粒をやや多量に含む黒色土 (7.5YR2/1)
19. 黄褐色土塊を多量に含む黒色土 (7.5YR2/1)
20. 焼土粒を微量含む褐色土 (7.5YR4/4)
21. 焼土塊をやや多量に含む暗赤褐色土 (5YR3/2)
22. 焼土粒を微量含むにぶい褐色土 (7.5YR5/3)
23. 軽石・炭化物・焼土を微量含む暗褐色土 (10YR3/3)
24. 暗赤褐色土 (5YR3/2= 焼土)



SB23

1. 黄褐色土粒を少量含む黒褐色土 (10YR3/2)
2. 黄褐色土粒を少量含む黒色土 (10YR2/1)
3. 褐色土 (7.5YR6/8= 地山ブロック)
4. 黄褐色土粒をやや多量に含む黒褐色土 (10YR2/2)
5. 黄褐色土塊を少量含む黒色土 (10YR2/1)
6. 黄褐色土粒を少量・黒色土粒を微量含む褐色土 (7.5YR4/6)
7. 黒色土粒を微量含む黄褐色土 (7.5YR7/8= 貼床)
8. 軽石粒・赤色粘土をやや多量に含む褐色土 (10YR4/6)
9. 褐色土塊を少量含む黒色土 (10YR1/7/1)
10. 褐色土塊を微量含む褐色土 (10YR4/6)

第19図 23号住居跡・出土遺物

24号住居跡（第20・21図、PL7・16・17） 位置：15年度調査西区の南東部、ⅢH25・I21・M5・N1区、
形状：方形 規模：東西・南北とも5.1m、確認面からの深さ25～40cm 主軸方位：N4°W 遺構の重複：
なし

住居内施設：床は薄い貼床で、中央部ほど高い。壁はほぼ垂直に立ち上がる。周溝は幅10～15cm、床面からの深さ5～10cmで全周する。ピットは1～4が主柱穴、直径50～65cmの円形、床面からの深さは50～60cmを計る。このほかカマドの東方に長辺50cm、短辺25cmの隅丸長方形で、深さ70cmの貯蔵穴が、南壁下中央に長径60cm、短径50cmの楕円形で深さ20cmの入口施設が、それぞれ見つかった。ピット2と貯蔵穴は掘方が重なっており、ピット2に柱を据えて埋め戻した後、貯蔵穴が掘られたものと思われる。カマドは北壁中央で、基部の地山を掘り残すが、損壊が著しく芯材を用いたかどうかは不明である。カマドの前方1mのところにある3～40cm大の焼けた礫が芯材、燃焼部に落ち込んだ30cm長の礫がカマドの天井石であったと思われる。

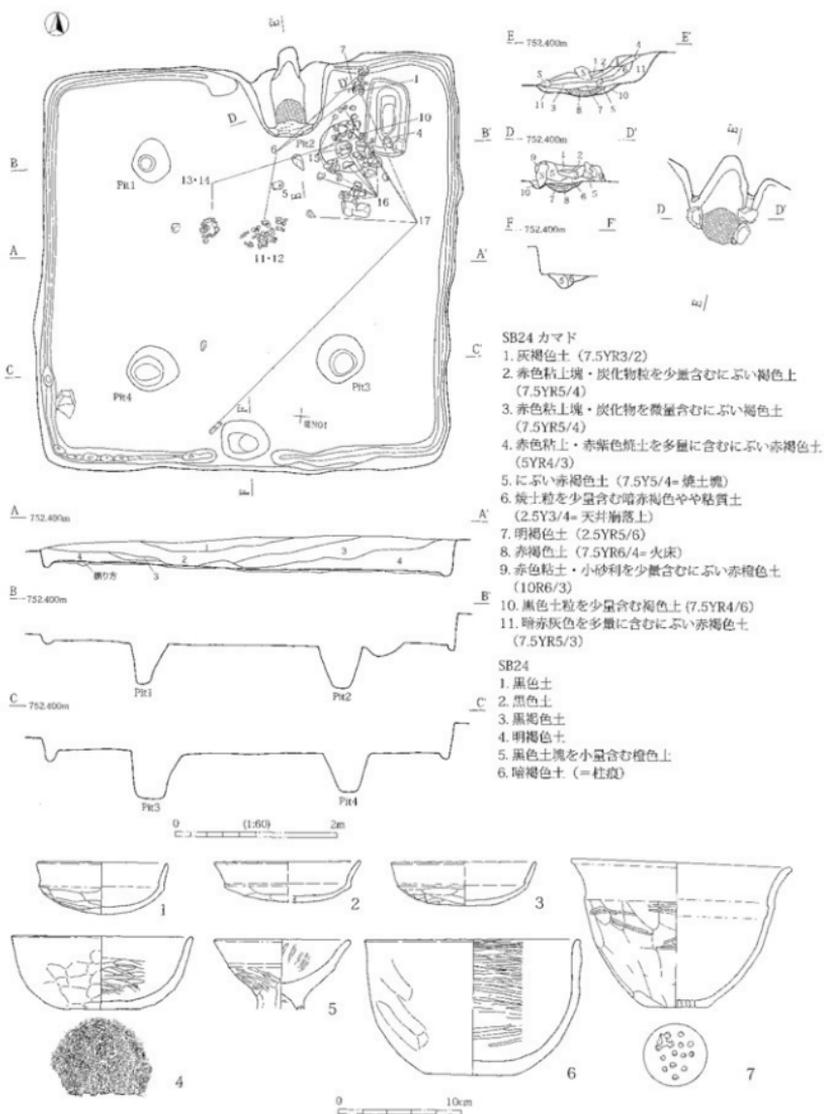
堆積状況：4層のレンズ状の堆積である。遺物出土状況：土師器杯(1)、埴(4)、鉢(6)、14孔の瓶(7)が主にかまど東側、壺頸(10～16)がカマド前方及び、ピット2の上層、把手付壺(17)が広く分散して出土している。

遺物：土師器埴(4)は底面がヘラ削りされる。凹部に弧状の線があり、静止糸切りのようにも見えるが、はっきりしない。把手(9)は瓶(8)と同一個体と見られる。

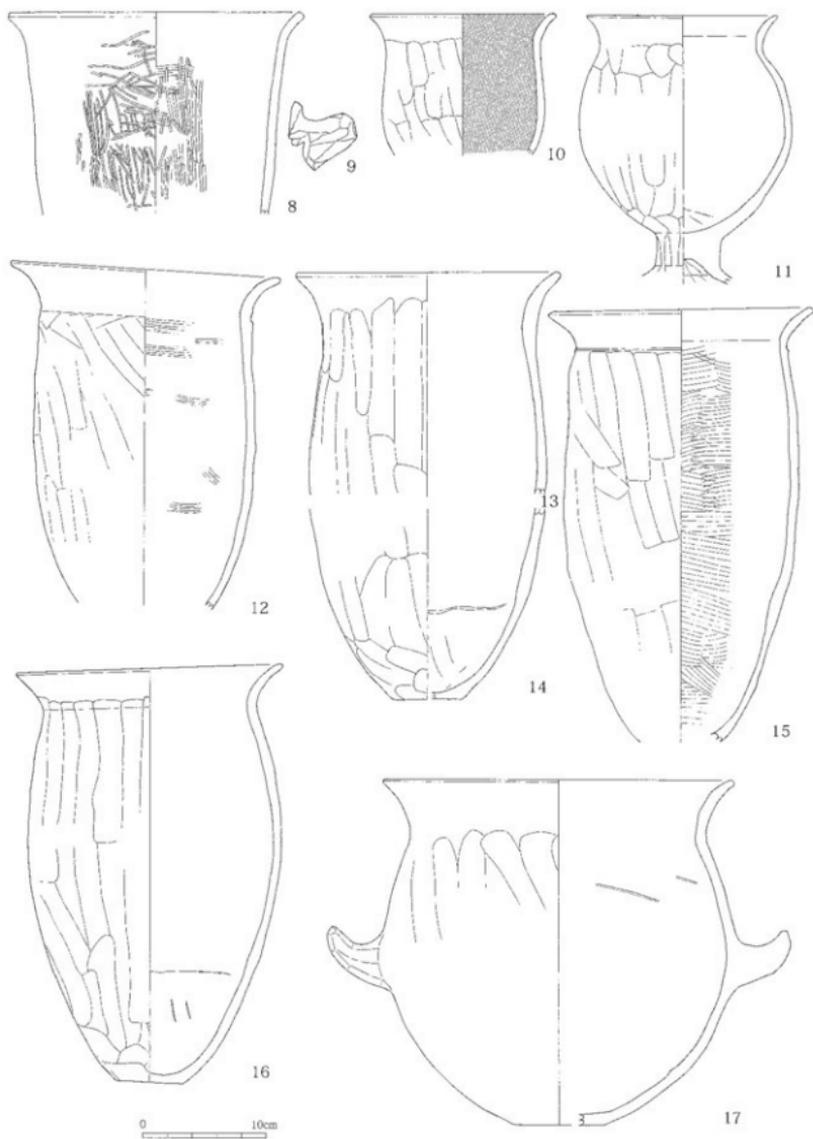
時期：瓶(7)はやや古め、埴(4)は新しめであるが、須恵器模倣の坏(1～3)や最大径を口縁部に持つ甕(12～16)から、7世紀後葉頃のものと考えられる。

番号	層位・位置	形種	口径	底径	高さ	底面	体部外周	体部内周	造法内周	焼成	色調	胎土	残存率	備考
1		土師器杯	10.5	10.3	4.3	ヘラ削り	横ナデ	横ナデ	ナデ	良好	明褐色	胎土	95%	
2		土師器杯	11.7	10.3	3.4	ヘラ削り	横ナデ	横ナデ	ナデ	普通	赤褐色	1cm以下の砂粒	70%	
3		土師器杯	11.7	10.6	3.6	ヘラ削り	横ナデ	横ナデ	ナデ	普通	明褐色	胎土	100%	
4		土師器埴	(14.7)	6.4	6.2	狭さふり? 後ヘラ削り	ヘラ削り、口縁縁ナデ	ミゴキ、口縁縁ナデ	ミゴキ	良好	灰白色	2～3mmの砂粒	50%	
5		土師器壺杯	(10.6)	—	現高5.7	ヘラ削り	縁部ヘラ削り、底部下ミゴキ	横ナゲ後ミゴキ	ナゲ後ミゴキ	普通	赤褐色	1cm以下の砂粒	20%	内面の側面磨着
6	下層	土師器鉢	17.1	7.3	11.4	ヘラ削り	縁部ヘラ削り、口縁縁ナデ	横ミゴキ	ミゴキ	良好	赤褐色	胎土	95%	内外面赤赤、黒炭
7		土師器瓶	17.7	3.3	7.4	ヘラ削り	ヘラ削り後部分削りミゴキ、口縁縁ナデ	横ナデ	ナデ	普通	赤褐色	1～2mmの砂粒	70%	
8		土師器瓶	(23.2)	—	現高16.5	—	ナゲ縁部のミゴキ	ハケ刷洗後縁のミゴキ	—	普通	茶褐色	1～2mmの砂粒	10%	把手と同一個体と思われる
10		土師器壺	(14.4)	—	現高11.4	—	ヘラ削り、口縁縁ナデ	縁部のナゲ、口縁縁ナデ	—	普通	赤褐色	1～3mmの砂粒	10%	内面黒色処理
11		土師器台付壺	15.0	—	現高22.0	底部内周ヘラ削り	縁部外周一部削り	横ナデ	ヘラナデ	普通	灰褐色	1～5mmの砂粒	50%	
12		土師器甕	21.6	—	現高27.3	—	ヘラ削り、口縁縁ナデ	ナゲ部分削り	ハケ目	普通	灰褐色	1～2mmの砂粒	30%	
13-14		土師器甕	20.6	5.6	現高32.7	ヘラ削り	縁ヘラ削り	横ナデ	ヘラナデ	普通	茶褐色	1～2mmの砂粒	40%	
15		土師器甕	20.5	—	現高33.2	—	縁ヘラ削り、口縁縁ナデ	ハケ目、口縁縁ナデ	—	良好	茶褐色	1～2mmの砂粒	70%	
16		土師器甕	21.3	5.5	33.7	ヘラ削り	縁ヘラ削り、口縁縁ナデ	横ナゲ、下層ヘラナデ	ヘラナデ	普通	茶褐色	1～2mmの砂粒	50%	内周内面の一部に磨き上げ痕
17	下層	土師器把手付壺	27.8	(7.5)	28.0	ヘラ削り	縁部ヘラ削り	横ナデ	—	良好	茶褐色	3mm以下の砂粒	50%	2ヶ所に10～15cmの磨き上げ痕

第18表 24号住居跡出土土器観察表



第20図 24号住居跡・出土遺物 (1)



第21图 24号住居跡出土遺物(2)

25号住居跡（第22回、PL7・17）位置：15年度調査西区の南東部、ⅢH9・10・14・15区

形状：やや歪な方形 規模：東西5.1m、南北4.9mだが、東辺が西辺より50cm長い。確認面からの深さ25～30cm 主軸方位：N20°W 遺構の重複：なし

住居内施設：床は薄い貼床、東・南・西部は比較的掘方が深い。壁はほぼ垂直に立ち上がる。周溝は幅10～25cm、床面からの深さ5～10cmで全周する。主柱穴はピット1～4で、直径50～55cmの円形、床面からの深さは55～70cmを計る。北東隅に長径65cm、短径50cmの楕円形で深さ50cmの貯蔵穴がある。また、南壁下中央寄りやや東寄りに直径50cmの円形で深さ15cmと、直径35cmの円形で深さ20cmのピットが南北につながった形で配置されており、入口施設と見られる。カマドは北壁中央で、掘り残した基部の地山と、燃焼部に落ち込んだ芯の石材のみ残存している。

堆積状況：7層のレンズ状堆積である。遺物出土状況：土師器杯（1）が入口ピット内、高坏（2）がカマドの東方、甕（3）がカマドの前方、垂飾（4）が貯蔵穴内と散らばって出土している。

遺物：杯（1）は被熱によると見られる表面の弾けがある。

時期：口縁部の大きく外反する杯や高坏の存在から6世紀中葉～後葉頃のものと考えられる。

番号	層位・位置	器種	口径	底径	器高	底面	体部外側	体部内面	底部内面	構成	色調	胎土	残存率	備考
1		土師器杯	(14.8)	(8.8)	4.1	ヘラ削り	横ナデ、赤彩	横ナデ下平底 斜状ミダキ	ナデ縁状斜状ミ ダキ	漆色	(A)褐色	1mm以下の砂粒 少量	30%	内外面複雑による 表面の弾け跡
2		カマド 土師器高杯	(16.7)	口径 11.0	取高 7.9	縁部内面へラ削 り斜状ナデ	杯縁横ナデ、杯 縁部へラ削り、 筒状ミダキへラ 削り下平底ナデ	横ナデ	ナデ	漆色	赤褐色	1～2mmの砂粒 やや多	50%	内外面色別型
3		土師器甕	19.5	—	取高 14.3	—	縁へラ削り、口 縁横ナデ	横ナデ後一部へ ラナデ	—	漆色	赤褐色	1～2mmの砂粒	20%	内面の一部に巻き上 り筋

第19表 25号住居跡出土土器観察表

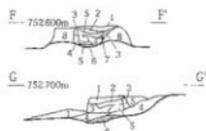
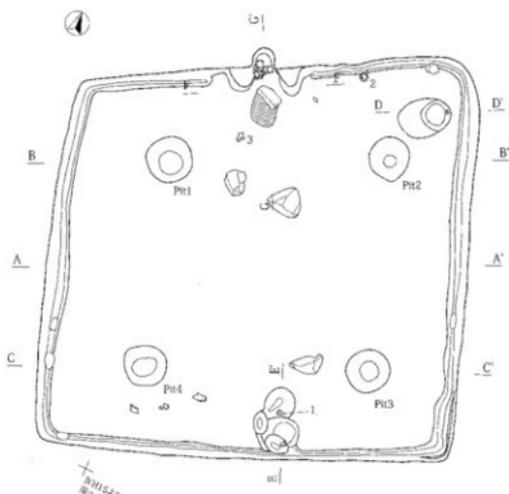
26号住居跡（第23回、PL7）位置：15年度調査西区の南部、ⅢH21区

形状：方形（推定） 規模：東西3.2m、南北3.0m（推定）、確認面からの深さ50～60cm 主軸方位：W1°S 遺構の重複：なし、南西部にカクランあり

住居内施設：床は地山の上に薄く貼って作られ、壁はほぼ垂直に立ち上がる。ピットはないが、カマド前方の床下に直径65cmの円形、床面からの深さは15cmの浅い窪みが見られる。周溝はないが、壁下が内側よりも2～3cm下がる。カマドは西壁で、基部の地山を掘り残し、その前面に礫を置いて芯材とし袖が作られているが、損壊。煙道は短い。

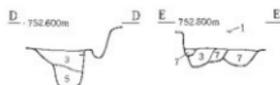
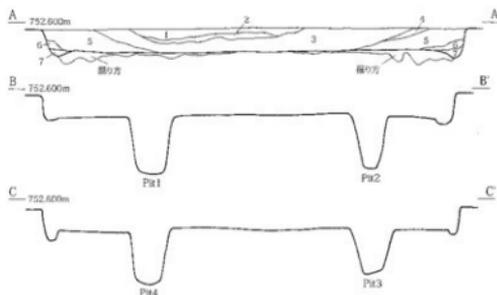
堆積状況：5層のレンズ状の堆積である。遺物出土状況：土師器壺が1片出土しているだけで、小片のため図示できなかった。

時期：周回の6・7世紀代の住居跡と類似した構造であり、同時期のものと考えられる。



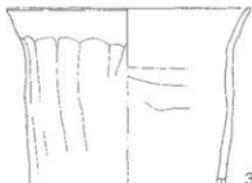
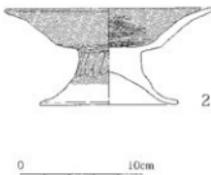
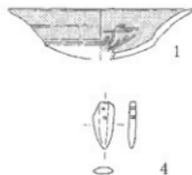
SB25 カマF

1. にぶい褐色土 (5YR6/4=天井崩落土?)
2. 焼土粒・橙色土粒を微量含む黒色土
3. 炭化物粒を少量含むにぶい褐色土 (7.5YR5/4=袖部の粘土)
4. 炭化物粒・赤色粘土を多量に含むにぶい褐色土 (7.5YR6/4)
5. にぶい赤褐色土 (2.5YR4/4=天井か袖)
6. 炭化物粒を微量含む黒褐色土
7. 黄褐色土 (地山ブロック)
8. 黒色土・焼土を少量含む小礫混じりの褐色土 (7.5YR6/6)

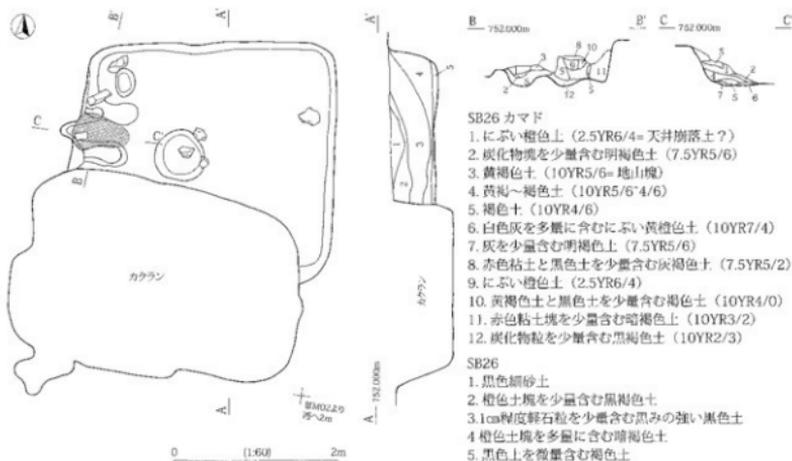


SB25

1. 橙色土塊を少量含む暗褐色土
2. 黒色土
3. 橙色土塊を多量に含む黒褐色土
4. 黒褐色土
5. 明褐色土
6. 黒色細砂
7. 黒色土塊と橙色土塊の混土



第22図 25号住居跡・出土遺物



第23図 26号住居跡

27号住居跡 (第24・25回、PL7・17・18) 位置:15年度調査西区の南部、ⅢG19・20・24・25区、形状:方形 規模:東西5.4m、南北5.5m、確認面からの深さ25~30cm 主軸方位: N7°W 遺構の重複:なし

住居内施設:床は薄い貼床である。壁はほぼ垂直に立ち上がる。ピットは1~4が支柱穴、直径40~60cmの円形、床面からの深さは45~75cmを計る。各支柱穴から東西の壁に向かって、幅15~20cm、深さ10cmの間仕切り溝、ピット1・3・4の脇に浅い掘込みがある。カマド東側には長辺120cm、短辺100cmの長方形で深さ50cmの貯蔵穴、カマドの西側にも長径60cm、短径40cmの楕円形で深さ20cmのピット、南壁下中央に長径60cm、短径40cm、深さ20cmと、長径45cm、短径20cmで深さ10cmの2つの楕円形の入口施設と見られるピットがある。周溝は、幅10~20cm、床面からの深さ5~10cmで全周する。カマドは、北壁中央で、基部の地山を掘り残し、その前面に礫を置いて芯材とし袖が作られている。

堆積状況:6層のレンズ状の堆積である。 遺物出土状況:北東隅から東壁下にかけて土師器環(1・2)、壺(3)、貯蔵穴内とカマド内で甃(4)、南西隅で石製紡錘車(7)などが出土している。

遺物:甃(6)は焼成後に穿孔されている。

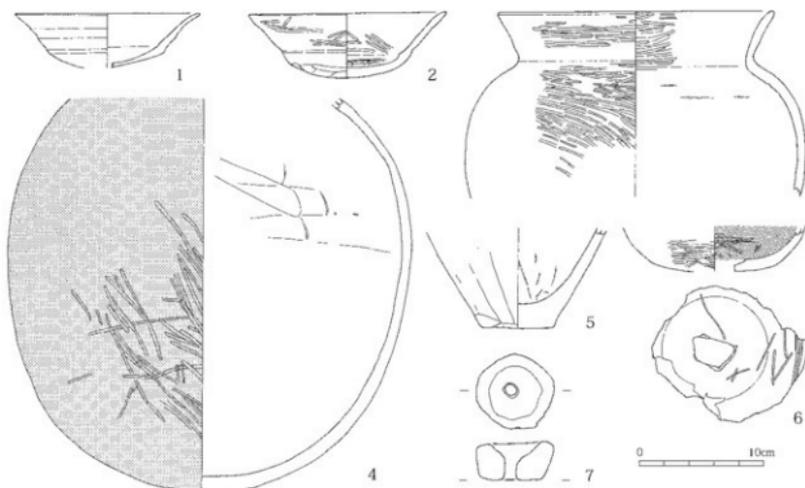
時期:口縁が大きく外反する環(1・2)の存在から6世紀後半頃のものと考えられる。

番号	部位・位置	形種	口径	底径	器高	底面	径縁外周	径縁内面	底面内面	焼成色	粘土	残存率	備考
1	作遺	土師器環	14.9	9.3	器高4.3	ヘリ削り	横ナデ	横ナデ	ナデ	やや赤	灰赤土 1m以下の砂粒少量	60%	内外両面黒、内面黒縁による美観の保持
2		土師器環	(18.6)	10.1	5.3	ヘリ削り	横ナデ後傾いミガキ	横ナデ後傾いミガキ	ミガキ	良好	暗赤土 1~2cmの砂粒少量	50%	
3		土師器壺	21.8	—	器高15.1	—	ミガキ、口縁部横ナデ後一部ミガキ	横ナデ、底し縁部内側ミガキ	—	良好	赤褐色 1~2cmの砂粒少量	10%	体部内面の一部に赤赤上げ灰
4		カマド	—	8.5	器高32.0	ヘリ削り	ミガキ	横ナデ仕一部ヘリナデ	ナデ	普通	灰赤褐色 1m以下の砂粒少量	30%	底面にすのこ状圧痕、外面赤赤・黒縁跡
5		土師器壺	—	3.7	器高5.1	ヘリ削り	縦ヘリ削り	横ナデ後傾ヘリナデ	ナデ後ヘリナデ	普通	赤褐色 3m以下の砂粒やや多	10%	底面に網代痕
6		広口土師器甃	—	—	器高3.6	—	縁ならなくミガキ・焼成後に穿孔	ミガキ	ミガキ	普通	灰赤土 1m以下の砂粒多	10%	内面黒色焼成

第20表 27号住居跡出土土器観察表



第24図 27号住居跡



第25図 27号住居跡出土遺物

28号住居跡（第26図、PL7・18） 位置：15年度調査西区の南部、ⅢH12・17区

形状：長方形（推定） 規模：東西4.4m（推定）、南北3.6m、確認面からの深さ0～40cm 軸方位：N 26°W（推定） 遺構の重複：なし、東部は削平される。

住居内施設：床は薄い貼床で、壁はほぼ垂直に立ち上がる。ピットは1～4が支柱穴、直径または直径25～45cmの円形または楕円形、床面からの深さ40～50cmを計る。周溝は幅10～15cm、床面からの深さ3～5cmを計り、西壁下から北壁西部のみ廻る。カマドは北壁東寄りと思われるが、カクランに壊され火床のみを検出した。

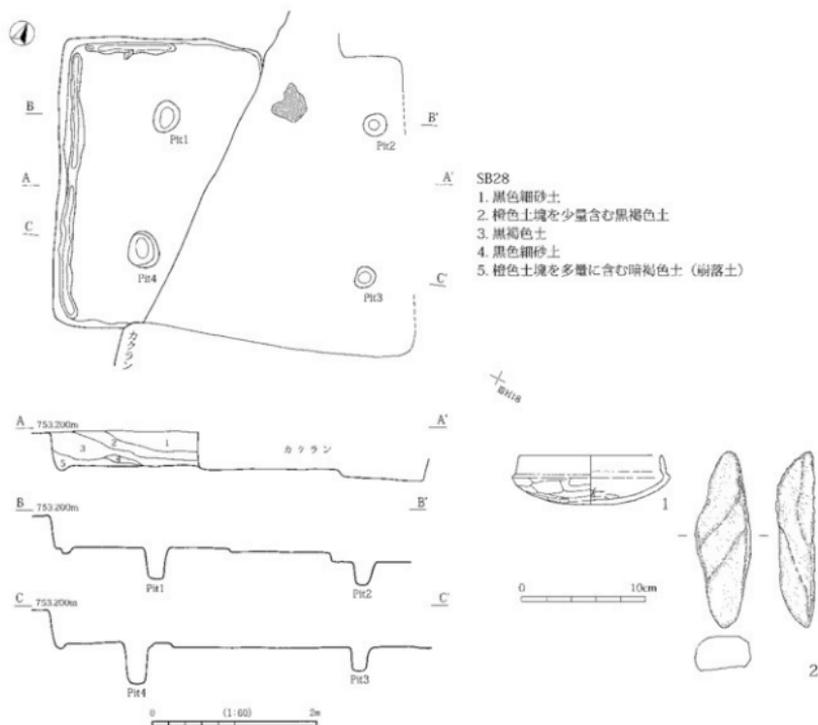
堆積状況：5層のレンズ状の堆積である。遺物出土状況：土師器甕片が北側周溝際の床面で出土しているが、小片で図示できなかった。図示した須恵器坏身模倣の土師器坏（1）と砥石（2）は埋土からの出土で、ほかは土師器甕・壺、須恵器甕の小片のみである。

遺物：砥石（2）は、底面を除く上面3面、側面2面、側面と底面の間1面が使用され、境の稜線が明瞭となっている。

時期：坏の形態から6世紀後半頃と思われる。

番号	器名・位置	器種	口径	底径	高さ	底面	体部外側	体部内側	底部内面	組成	色調	胎土	残存率	備考
1	土師器坏		(1) 3	(12) 6	3.8	へう割り	横ナデ	横ナデ	ナデ紋線らなご	黄緑	黒灰色	1cm以下の砂状	20%	

第21表 28号住居跡出土土器観察表



第26図 28号住居跡・出土遺物

29号住居跡 (第27図、PL7・18) 位置: 15年度調査西区の中央部、I W21・22区

形状: やや歪な方形 規模: 東西3.1m、南北2.6mだが、南辺が北辺より30cm長い。確認面からの深さは20~30cm 主軸方位: E30°N 遺構の重複: なし

住居内施設: 床は貼床だが、比較的軟弱である。壁はほぼ垂直に立ち上がる。ピットは、カマドの南方に長径90cmで短径50cmの楕円形で、床面からの深さは20cmの貯蔵穴がある。また、南壁下の中央よりやや西寄りに40cm幅で長径15~20cm、深さ5cmの小ピット2個が入口の梯子穴である。周溝は、幅10~15cm、床面からの深さ3~5cmで、南壁西部から西壁、北壁まで廻る。カマドは東壁中央で、礫を芯材として粘土質の土を貼り付けて袖が作られ、煙道は短い。支脚に使用したと思われる礫も残存するなど残りはよいほうである。

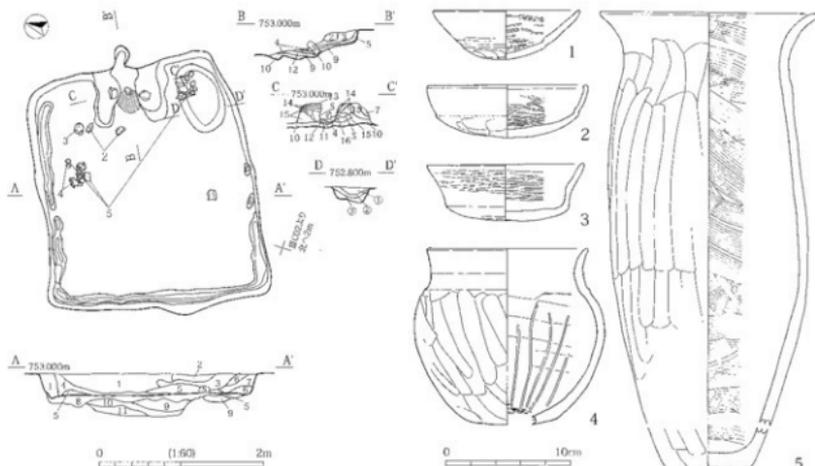
堆積状況: 7層のレンズ状の堆積である。遺物出土状況: 土師器坏(2・3)がカマド左袖前、甕(4・5)が西壁際やカマド東側の貯蔵穴上で出土しているほか、甕片、壺片、須恵器片少量が埋土から出土している。

遺物：土師器環（1）は、口縁部が大きく外反し、（2）は口唇が内湾、（3）は陶邑 TK10窯式以前の須志器蓋の模倣品である。

時期：陶邑 TK10窯式以前と TK43窯式以降の須志器環蓋模倣の土師器環が混在しており、6世紀中葉頃と考えられる。

番号	器名・位置	器種	口径	口径	器高	底径	作部外面	作部内面	底面内面	施文	色票	胎土	残存率	備考
1		土師器環	11.5	6.7	4.0	ヘラ削り	横ナガ後一部ヘラ削り	横ナガ後一部横ミガキ	ナガ後ミガキ	赤褐色	5mm以下の砂粒少量	50%	作部外面の一部に色き上げと磁合度	
2		土師器環	12.5	11.4	4.3	ヘラ削り	横ナガ	横ミガキ	ミガキ	赤褐色	2mmの砂粒少量	50%		
3		土師器環	12.4	9.8	4.6	ヘラ削り	ミガキ・下縁横ナガ	ミガキ	ミガキ	赤褐色・薄褐色	2mmの砂粒多量	50%	内径的互に黒磁	
4		土師器環	12.7	7.1	14.3	ヘラ削り	縦ヘラ削り、口縁横ナガ	ナガ後横ミガキ、口縁横ナガ	ミガキ	赤褐色	1~2mmの砂粒やや多量	70%	作部内面に色き上げ痕	
5		土師器環	17.2	6.4	器高35.6	ヘラ削り	縦ヘラ削り口縁部外縁横ナガ	ハケ目	ナガ	黄褐色	2~3mmの砂粒やや多量	80%		

第22表 29号住居跡出土土器観察表



SB29

1. 黒色土と黄褐色土塊の混土（攪乱？）
 2. 黄褐色土細粒を多量に含む暗褐色土（10YR3/3）
 3. 黄褐色土粒を少量含む黒褐色土（10YR2/3）
 4. 褐色土塊を少量含む黒色土（7.5YR2/1）
 5. 黄褐色土粒を多量に含むぶい褐色土（7.5YR5/3）
 6. 黄褐色土塊・炭化物を少量含むぶい褐色土（7.5YR6/4）
 7. 炭化物を少量含む黒褐色土（10YR2/3）
 8. 黒色土粒を微量含む明褐色土（7.5YR5/6）
 9. 明褐色土塊の黒褐色土（7.5YR3/1）
 10. 黒色土粒・黄褐色土塊を少量含む褐色土（7.5YR4/3）
 11. 黒色土粒を微量含むぶい褐色土（7.5YR5/4）
 12. 赤褐色土（2.5YR4/6=火灰）
 13. 固く締まったぶい赤褐色土（5YR5/4）
 14. 灰褐色土（7.5YR4/2）
 15. 小礫を少量含む固く締まったぶい赤褐色土（5YR5/4）
 16. 黒褐色土（7.5YR3/2）
- ①. 黄褐色・赤色土塊・炭化物を少量含むぶい褐色土
 ②. 黄褐色土粒・炭化物を少量含む黒褐色土
 ③. 焼土・赤色土塊を多量に含む淡赤褐色土

第27図 29号住居跡・出土遺物

31号住居跡（第28図、PL7・19） 位置：15年度調査西区の西、ⅢD1区

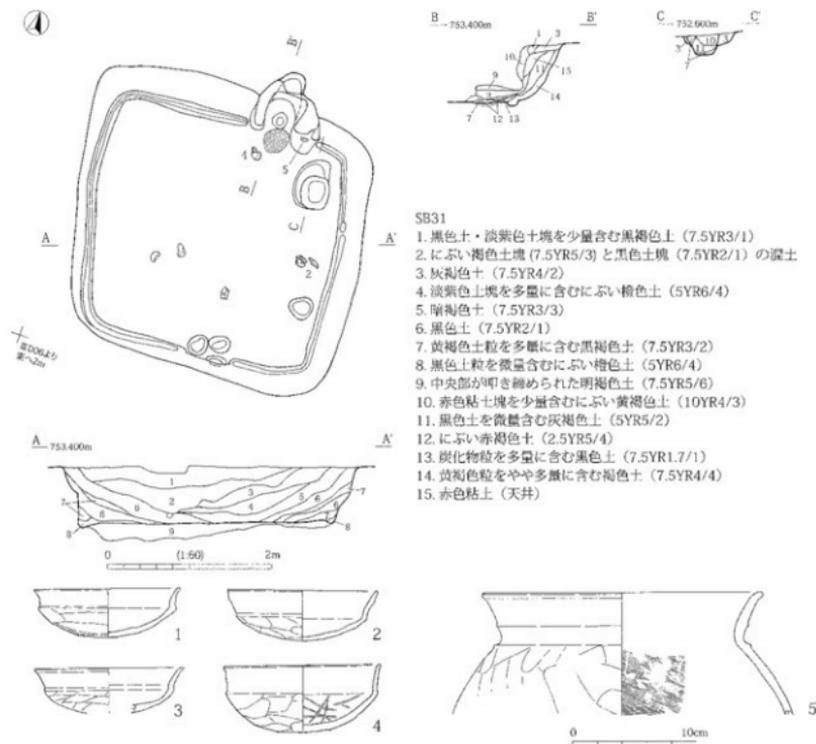
形状：やや歪な方形 規模：東西3.5m、南北3.4m、確認面からの深さ65~70cm 主軸方位：N 8° W
 遺構の重複：なし

住居内施設：床は貼床だが、やや軟弱。壁はやや緩やかに立ち上がる。ピットは5基である。北東隅には貯蔵穴と見られ、長径60cm、短径40cmの楕円形で深さ15cmのもの、それを掘り直した40cm×35cmの隅丸方形で深さ25cmの2基がある。南壁中央よりやや東寄りに、1対の直径25cmの円形の入口施設と見られるピットがある。この他、東壁下中央より南に直径30cmのピットがある。周溝は、幅10～15cm、床面からの深さ1～5cmで全周する。カマドは北壁の東寄り、掘り残しの地山と粘質土を併用した袖が残存している。支脚石の抜き取り跡は壁のライン上で、天井部は壁の外となっており、カマドは全体に整穴の外寄り、煙道は比較的短い。

堆積状況：8層のレンズ状の堆積である。遺物出土状況：東壁下から土師器杯（2）、カマド前面の崩落土上から坑（4）、カマド東袖上から壺（5）が出土しているが、遺物の量は少ない。

遺物：壺（5）は、32号住居跡カマド前床直出土土器と接合する。

時期：須恵器杯蓋模倣の土師器杯（1～4）の形態から6世紀後葉～末葉のものと考えられる。



第28図 31号住居跡・出土遺物

番号	層位・位置	器壁	口径	高さ	器高	底面	体部外面	体部内面	底部内面	地色	色調	粘土	残存率	備考
1	上層	土師器坏	11.6	11.0	4.0	ヘラ面り	横ナデ	横ナデ	横ナデ・厚底	良好	赤褐色	1m以下の層砂	60%	
2		土師器坏	11.9	10.2	4.3	ヘラ面り	横ナデ	横ナデ	横ナデ	良好	赤褐色	1m以下の層砂	90%	底面にすこの状凹痕
3		土師器坏	(11.8)	(10.3)	規高3.6	ヘラ面り	ナデ	ナデ	ナデ	良好	赤褐色	1m以下の層砂	30%	
4	カマド 上	土師器残	12.4	12.2	5.5	ヘラ面り	ナデ	ナデ	ナデ(赤褐色)と 赤褐色(黒褐色)混	普通	赤褐色	5mm厚程度の 小粒・粉粒を含む	90%	
5	土師器底	(22.2)	—	規高 10.1	—	ヘラ面り口縁残 ナデ	ハナゲ口縁残 ナデ	—	—	普通	赤褐色	1~2mmの層砂 を含む	5%	SB32・P1と整合

第23表 31号住居跡出土土器観察表

32号住居跡 (第29図、PL8) 位置：15年度調査西区の南東部、I X 21区

形状：やや歪な方形(推定) 規模：東西3.4m、南北3.8mの掘方のみの残存 主軸方位：E23°N(西壁と東壁の中間)、E17°S(北西角と南東角間) 遺構の重複：なし

住居内施設：床面は削平されている。壁は残っていない。ピット、周溝は検出されていない。カマドは東南角で、火床の一部と両側の赤色粘土の袖の部分のみ残存。

堆積状況：掘方のみで埋土は残っていない。遺物出土状況：カマド前面より31号住居跡出土土師器(5)と接合する甕片が出土している。

時期：接合関係から、31号住居跡と同時期の6世紀後葉～末葉頃と思われる。

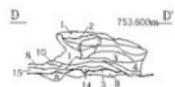
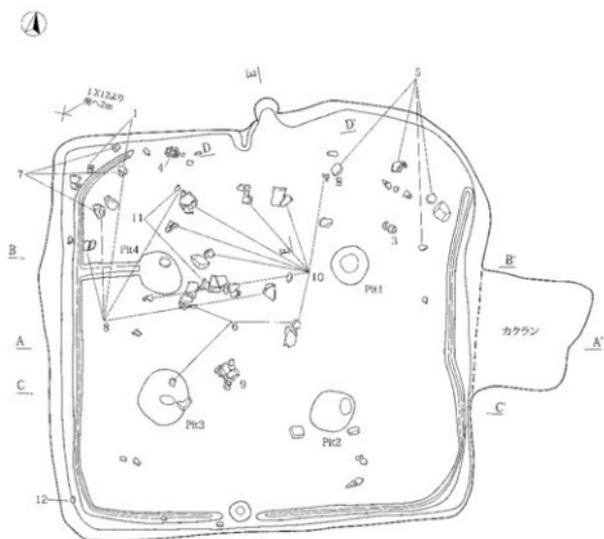


第29図 32号住居跡

33号住居跡 (第30・31図、PL8・19・20) 位置：15年度調査西区の北東部、I X 12区

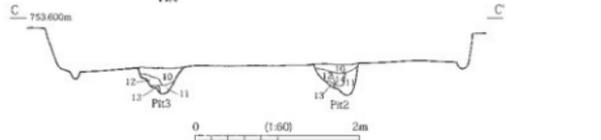
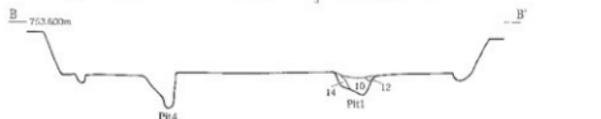
住居内施設：床は貼床で、カマド前がやや固い。壁はほぼ垂直に立ち上がる。ピットは1~4が主柱穴で、直径50~70cmの円形、床面からの深さは30~45cmを計る。ピット4から西壁に向かって、幅20cmの間仕切り溝が延びている。このほか南壁下中央寄りやや西に直径30cmの円形で、床面からの深さ20cmの入り口施設がある。周溝は幅5~15cm、床面からの深さ5~10cmで、北壁下と入口ピットの部分以外を周る。カマドは北壁中央、損壊が著しく、崩落土がカマド前の東西2m、南北1mの範囲に広がる。

堆積状況：8層のレンズ状の堆積である。遺物出土状況：長副の甕(8~11)がカマド崩落土上とその周辺から出土しているほか、埋土中からも多量に出土している。



SB33 カマド

1. 小礫を少量含むにぶい褐色土 (5YR6/4)
2. 白色・赤色粘土を多量に含む黒褐色土 (10YR3/1)
3. 固く締まったにぶい赤褐色土 (5YR5/3)
4. 黒褐色土 (10YR3/1)
5. 灰白色土 (10YR8/2= 燃焼部)
6. にぶい赤褐色土 (5YR6/4)
7. 赤色粘土を少量含む黒褐色土 (10YR3/1)
8. 赤色粘土塊を少量含む黒色土 (7.5YR2/1)
9. 灰白色土 (7.5YR8/2= 灰層)
10. 炭化物層
11. 黄褐色土粒を多量に含む褐色土 (7.5YR6/6)
12. 赤褐色土 (2.5YR4/6= 火床)
13. 焼土粒を少量含む極暗赤褐色土 (5YR3/3)
14. 灰を少量含む灰褐色土 (7.5YR5/2)
15. 黄褐色土塊を少量含む暗褐色土 (10YR3/4)



0 (1:60) 2m

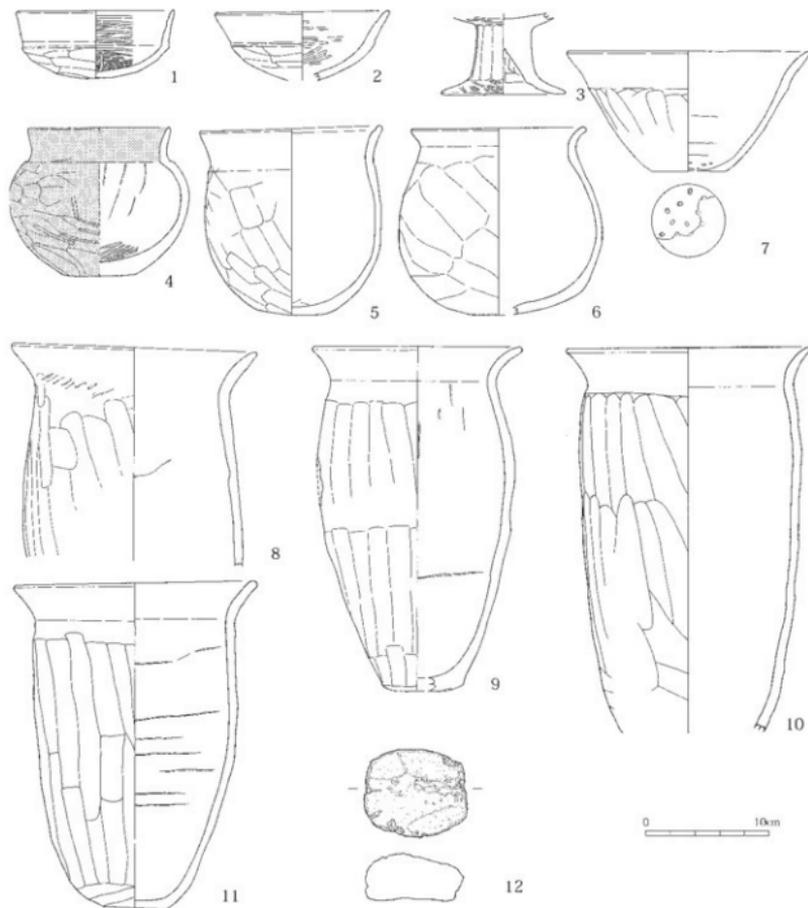
SB33

1. 黄褐色土粒を少量含む黒褐色土 (7.5YR3/1)
2. 黄褐色土粒を少量含む暗褐色土 (7.5YR3/3)
3. 黄褐色土粒・塊を少量含む極暗褐色土 (7.5YR2/3)
4. 黄褐色土粒・炭化物を少量含む黒色土 (7.5YR2/1)
5. 黄褐色土粒を少量含む暗褐色土 (7.5YR3/5)
6. 黄褐色土塊を少量含む暗褐色土 (7.5YR3/4)
7. 黄褐色土粒を少量含む黒褐色土 (7.5YR2/2)
8. 黄褐色土塊を多量に含む褐色土 (7.5YR4/4)
9. 黒色土・赤色粘土を少量含む黄褐色土 (10YR2/2)
10. 黒褐色土 (10YR3/1)
11. 暗褐色土 (10YR3/2)
12. 褐色土粒・塊を少量含む褐色土 (10YR3/3)
13. 褐色土塊を少量含む暗褐色土 (10YR3/4)
14. 橙・赤色土塊を少量含む黒褐色土 (10YR3/4)

第30図 33号住居跡

遺物：高坏（3）は内面が黒色処理されている。甕（8）は、胴部を削ったヘラが勢い余って口縁部に当たっており、倒位で胴部を削ったと思われる。石錘（12）は一文字に紐を掛けた跡が残る。

時期：口縁部が大きく開く坏（2）の残存、胴部最大径を上半部に持つ甕（8～11）などから、7世紀前半頃のものと考えられる。



第31図 33号住居跡出土遺物

番号	発掘位置	図例	17世紀	18世紀	19世紀	20世紀	体部外周	体部内周	底面内周	形状	色調	土質	残存率	備考
1	土師器塚	(12.6)	11.8	5.5	ヘラ削り	横ナデ	横らなヘラナデ	深らなヘラナデ	普通	赤褐色	1～2mmの砂粒多量	25%	内外面赤彩	
2	土師器外	(13.8)	(11.8)	5.0	ヘラ削り	横ナデ	ミガキ	ミガキ	普通	赤褐色	1mm以下砂粒少量	20%		
3	土師器高杯	—	加津10.0	5.6	器部内周削ヘラ削り、器部外周ナデ	—	—	—	普通	赤褐色	1mm以下砂粒少量	40%	内面黒色焼酎	
4	土師器壺	(11.6)	5.8	12.2	ヘラ削り	横ヘラ削り(上部にミガキ、下部横ナデ)	横ナデ	横らなヘラナデ	普通	赤褐色	1～2mmの砂粒やや多量	70%		
5	土師器壺	14.5	5.4	13.3	ヘラ削り	横ヘラ削り、口縁横ナデ	横ナデ	横らなヘラナデ	普通	赤褐色	1～2mmの砂粒やや多量	80%		
6	土師器壺	13.8	10.8	15.2	ヘラ削り	ヘラ削り	横ナデ	横ナデ	普通	赤褐色	1～3mmの砂粒多量	90%	焼酎	
7	土師器壺	19.4	(6.0)	9.9	ヘラ削り	横ヘラ削り、口縁横ナデ	横ナデ	ナデ	普通	赤褐色	1mm以下の砂粒少量	40%		
8	土師器壺	19.6	—	17.6	—	横ヘラ削り、口縁横ナデ	横ナデ、口縁横ナデ	—	普通	赤褐色	1～3mmの砂粒少量、10cmの溝1箇所	30%	器部を焼酎で焼けたヘラの土質が口縁部にいくつも突き刺さる	
9	土師器壺	16.5	6.5	26.0	霽成	横ヘラ削り、口縁横ナデ	横ヘラナデ	—	良好	赤褐色	1mm以下の砂粒	90%	体部内周の一部に焼き直し	
10	土師器壺	19.0	—	30.9	—	下縁横ナデ、上縁横ナデ	横ナデ	—	普通	赤褐色	1～5mmの砂粒、小粒やや多量	60%		
11	土師器壺	19.3	(5.2)	26.7	霽成	横ヘラ削り、口縁横ナデ	横ナデ	横らなヘラナデ	良好	赤褐色	1～2mmの砂粒少量	90%		

第24表 33号住居跡出土土器観察表

34号住居跡(第32図、PL8) 位置:15年度調査西区の東部、I W25、III C 5区

形状:長方形 規模:東西3.4m、南北2.9m、確認面からの深さ30～35cm 主軸方位:E34°N 遺構の重複:なし、東部にカクランあり

住居内施設:床は貼床で、壁はほぼ垂直に立ち上がる。ピットは南西隅の直径20cmの円形で床面からの深さ25cmのもの、南東隅の70cm×60cmの隅丸長方形で深さ40cmの貯蔵穴とみられるものがある。周溝は検出されていない。カマドは東壁中央と思われるが、カクランに壊される。カクランを免れた北西部と南東部に炭化材が分布するが、それ以外の遺物がほとんどなく、焼却された可能性がある。

堆積状況:6層のレンズ状堆積である。遺物出土状況:土師器壺(1)が床面西部で出土している。

遺物:土師器壺(1)は外側を縦、内側を横にヘラミガキされている。

時期:不明であるが、周辺と同じ6～7世紀と思われる。

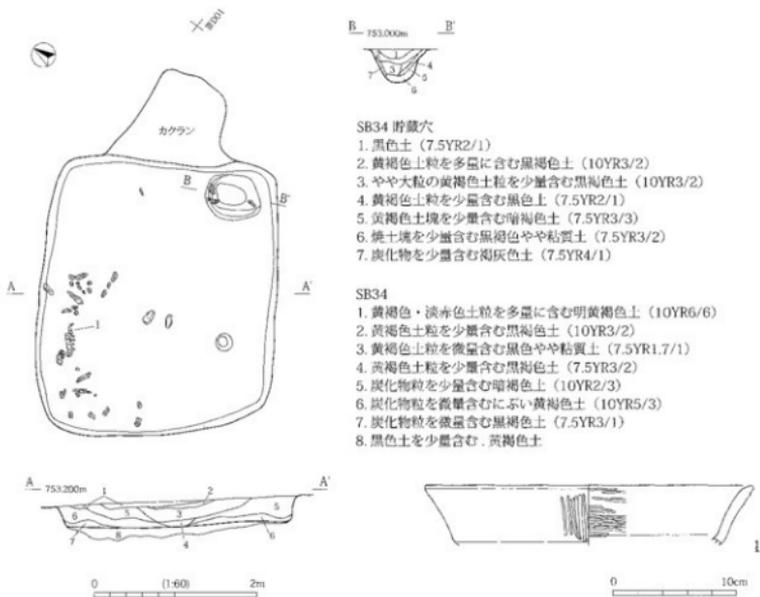
番号	発掘位置	図例	17世紀	18世紀	19世紀	20世紀	体部外周	体部内周	底面内周	形状	色調	土質	残存率	備考
1	土師器壺	(26.5)	—	4.8	—	横ミガキ	横ミガキ	—	—	良好	赤褐色	細砂少量	3%	

第25表 34号住居跡出土土器観察表

35A号住居跡(第33～35図、PL8・21・22) 位置:15年度調査東区の南東部、II L22・23、Q2・3区、

形状:方形(推定) 規模:東西は7.6m(柱穴の位置からの推定)、南北7.5m、確認面からの深さ35～40cm 主軸方位:N14°E 遺構の重複:なし、東部は調査区外

住居内施設:床は粘土質の土の貼床で、壁はほぼ垂直に立ち上がる。ピットは1～4が主柱穴で、直径40～80cmの円形または楕円形で、床面からの深さは60～80cmを計る。このほか南壁下中央には直径80cmの円形で、深さ10cmの浅い入り口施設、カマドの東側には、長辺120cm以上、短辺70cmの隅丸長方形で深さ15cmの貯蔵穴がある。このほか、北西・南西角と西壁中のその間ほぼ等間隔に3ヶ所、北壁中のカマドを挟む位置の2ヶ所、南壁中の入口ピットを挟む位置の2ヶ所に、長径30～60cm、短径15～30cm、床面からの深さ15～35cmの小ピットがある。これらは、4隅と東西壁でその間3ヶ所、南北壁でその間2ヶ所に廻らされた、地表に出た壁を支えるための壁柱穴であると思われる。周溝は、幅20～30cm、床面からの深さ1～10cmの浅いものが南壁下から西壁、北西角まで周る。カマドは北壁中央であるが、損壊が著しく、東西2m、南北1mの範囲に袖の芯材の礎と粘土質の土が広がり、崩れ残した地山の袖の基部と短い煙道のみ残存する。



SB34 貯蔵穴

1. 黒色土 (7.5YR2/1)
2. 黄褐色土粒を多量に含む黒褐色土 (10YR3/2)
3. やや大粒の黄褐色土粒を少量含む黒褐色土 (10YR3/2)
4. 黄褐色土粒を少量含む黒色土 (7.5YR2/1)
5. 黄褐色土塊を少量含む暗褐色土 (7.5YR3/3)
6. 焼土塊を少量含む黒褐色やや粘質土 (7.5YR3/2)
7. 炭化物を少量含む褐灰色土 (7.5YR4/1)

SB34

1. 黄褐色・淡赤色土粒を多量に含む明黄褐色土 (10YR6/6)
2. 黄褐色土粒を少量含む黒褐色土 (10YR3/2)
3. 黄褐色土粒を微量含む黒色やや粘質土 (7.5YR1.7/1)
4. 黄褐色土粒を少量含む黒褐色土 (7.5YR3/2)
5. 炭化物粒を少量含む暗褐色土 (10YR2/3)
6. 炭化物粒を微量含むにぶい黄褐色土 (10YR5/3)
7. 炭化物粒を微量含む黒褐色土 (7.5YR3/1)
8. 黒色土を少量含む・黄褐色土

第32図 34号住居跡・出土遺物

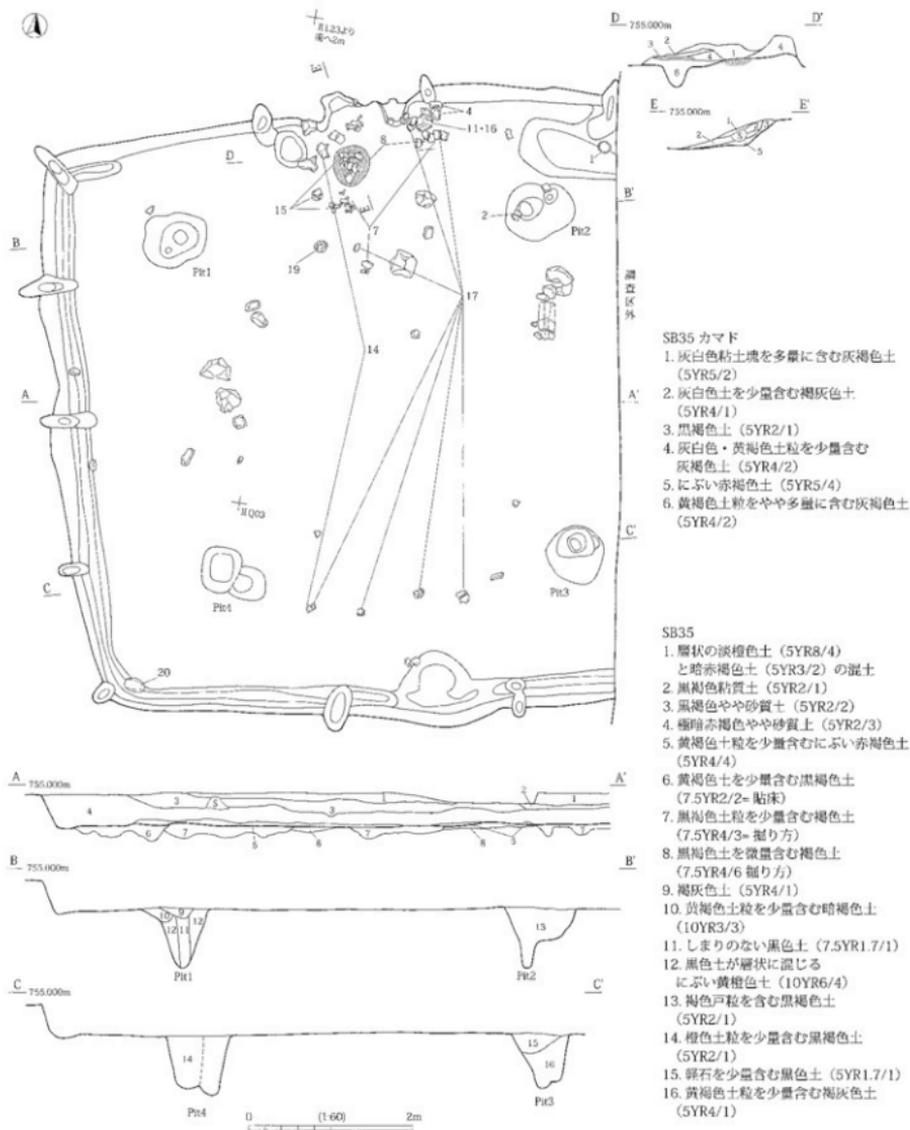
堆積状況：4層のレンズ状の堆積である。遺物出土状況：土師器杯（1・2）、須恵器高台付杯（4）がカマド東側の床面より10cm程度浮いて、土師器壺（7・8・11）、壺（15・16）がかまど崩落土上で、壺（14・17）がかまど崩落土上から南壁近くまで広く分散して出土している。

遺物：砂礫塊（19）は鉄分を含み、当初は塊形鍛冶滓かと思われたが、分析の結果溶けた形跡がないため、鉄滓ではなく、砂鉄や礫が何らかの要因で固まった砂礫塊である（第4節）。

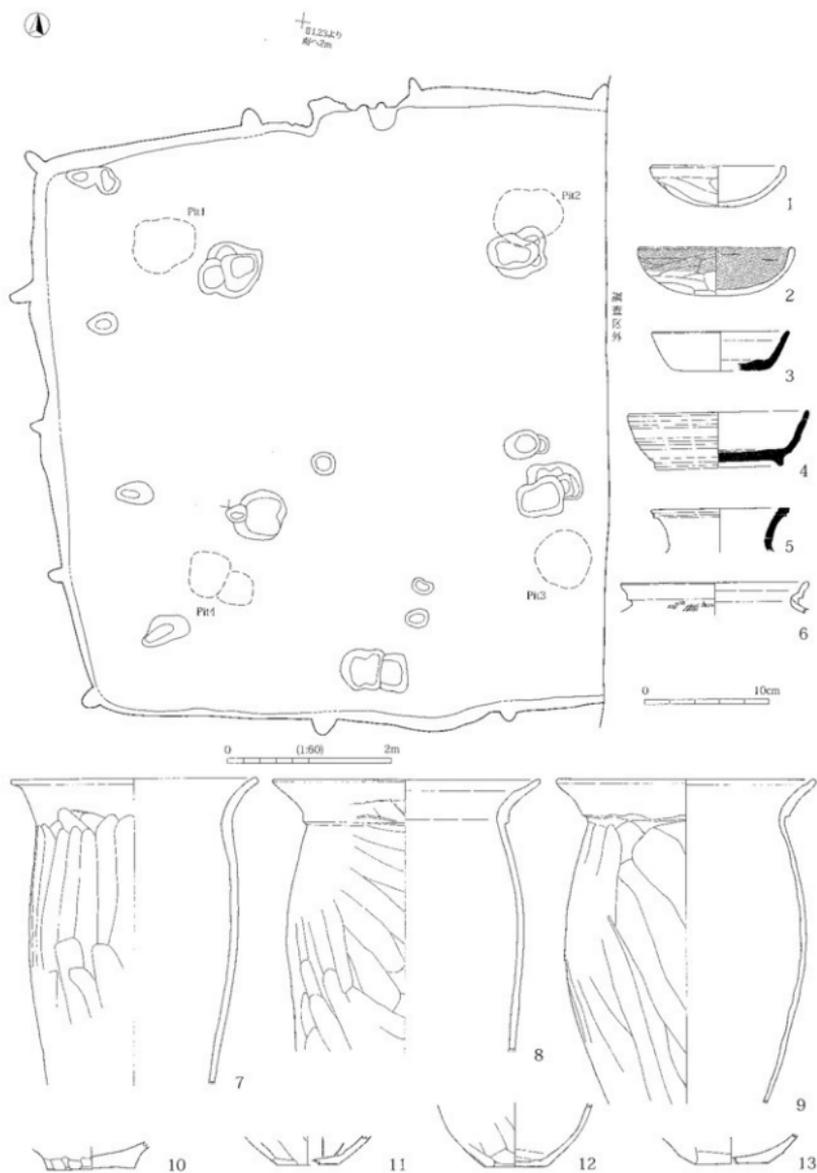
時期：杯（1～4）から7世紀末葉～8世紀初頭頃のものと考えられる。

35B号住居跡：本住居跡の床下からは、主柱穴のビット1～4の内側に当たる位置に60～80cmの円形または隅丸方形で、掘方からの深さ65～70cmのビットと、西壁から80cm内側に長径35～50cmの楕円形で深さ35～50cmの小ビットが2m前後の間隔で等間隔に並び、南壁中央の1.2m内側に直径30cmで深さ15～35cmの円形の小ビットが見つまっている。いずれも拡張前の主柱穴と、壁柱穴であったと思われる。したがって、本住居後は拡張前には1辺約6mの方形で、壁柱穴が3×2間だった住居跡を、7.6×7.5mで4×3間に拡張したと思われる。

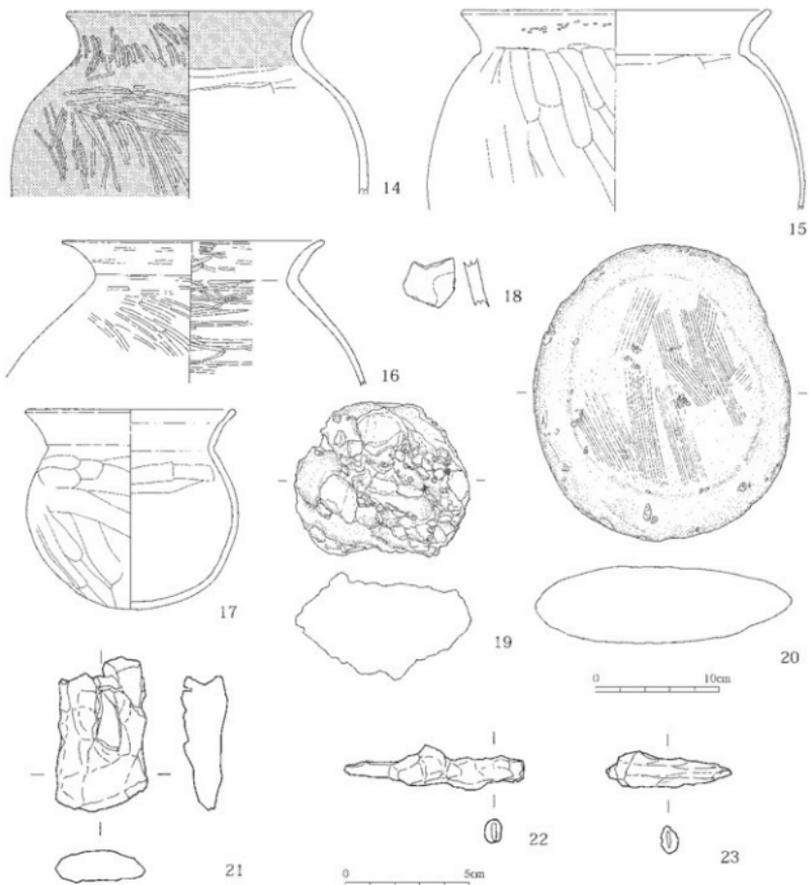
番号	層位・位置	器種	口径	底径	器高	底面	体部外側	体部内側	底面内面	底面	色調	胎土	残存率	備考
1		土師器杯	10.6	10.7	3.4	ヘラ削り	横ナデ	横ナデ	ナデ	良好	赤褐色 少量	1～2mmの砂粒	99%	
2		土師器杯	(12.4)	(9.4)	4.0	一方ヘラ削り	横ヘラ削り、口 縁ナデ	ヘラナデ	ヘラナデ	良好	赤褐色	1～2mmの砂粒 少量	40%	体部外周上部～内周 内面赤褐色、各部内面 の一面に赤い土層
3		須恵器杯	(10.7)	(7.7)	3.2	回転ヘラ削り 持ちヘラ削り	回転ナデ	回転ナデ	回転ナデ	良好	灰色	1～3mmの砂粒 多い	20%	
4		須恵器高台付杯	14.4	10.3	4.7	回転ヘラ削り	回転ナデ 回転ナデ 回転ヘラ削り	回転ナデ	回転ナデ	普通	暗灰色	1mm以下の白色 砂粒多	95%	
5		須恵器壺	(9.6)	—	現高 3.6	—	回転ナデ	回転ナデ	—	良好	黄灰色	1～2mmの砂粒 多	5%	



第33図 35A号住居跡



第34图 35B号住居跡、35号住居跡出土遺物(1)



第35図 35号住居跡出土遺物(2)

6	土師器底	(14.6)	—	現高 2.7	—	ハケ目	横ナデ	—	普通	淡褐色	1~2mmの砂粒 少量	1%	
7	土師器底	19.8	—	現高 25.0	—	縦ハケ目、口縁ナデ	横ナデ	—	普通	淡赤褐色	1~2mmの砂粒 少量	30%	
8	土師器底	(21.4)	—	現高 21.9	—	斜めハケ目、口縁ナデ	横ナデ	—	普通	茶褐色	2mm以下の砂粒 少量	10%	口縁外側の一部に黒色を施したハケ目の模様・色まじりが見られる
9	土師器底	(20.5)	—	現高 20.4	—	縦ハケ目、口縁ナデ	横ナデ	—	普通	赤褐色	1~2mmの砂粒 少量	30%	
10	土師器底	—	(7.0)	現高 2.2	ヘラ割り	ヘラ割り	—	ナデ	普通	淡赤褐色	1~2mmの砂粒 少量	2%	
11	土師器底	—	(5.0)	現高 2.3	ヘラ割り	ヘラ割り	ハラナデ	ハラナデ	良好	淡赤褐色 が多少	1mm以下の砂粒 が多少	2%	
12	土師器底	—	4.8	現高 5.1	ヘラ割り	ヘラ割り	横ナデ	ナデ	普通	淡赤褐色	1~2mmの砂粒 少量	2%	
13	土師器底	—	(6.0)	現高 2.4	ヘラ割り	ヘラ割り	ナデ	ナデ	普通	淡赤褐色	1mm以下の砂粒 少量	3%	
14	土師器底	19.4	—	現高 15.1	—	ヘラ割り、縦ハケ目、口縁ナデ	横ナデ、縦ナデ	—	普通	淡褐色	2mm以下の砂粒 少量	20%	

15	土師器壺	24.2	—	現高 16.3	—	ヘラ削り、口縁 積ナテ	積ナテ	—	普通	赤褐色	1~5cmの砂状 やや多	10%	
16	土師器壺	20.7	—	現高 11.7	—	積ナテ後残らな く多	積ナテ後残らな く多	—	普通	淡褐色 やや多	1~2cmの砂状 やや多	40%	
17	土師器壺	36.4	—	16.4	ヘラ削り	土師器下平組ヘ ラ削り、口縁ナ テ	積ナテ、土器の 一部ヘラナテ	ナテ	普通	赤褐色	1cm以下の砂状 少量	70%	

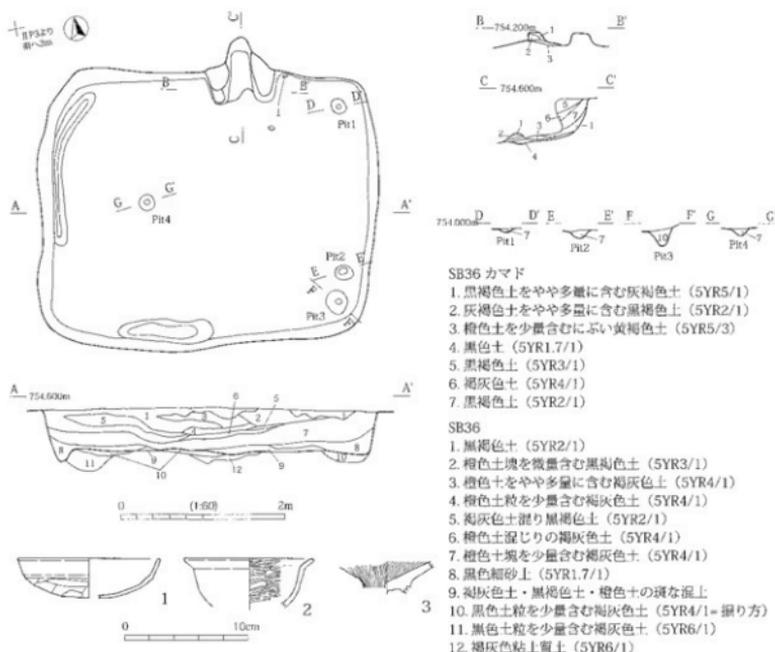
第26表 35号住居跡出土土器観察表

36号住居跡 (第36図、PL8) 位置：15年度調査東区の南西部、II P 2・3区

形状：長方形 規模：東西4.1m、南北3.4m、確認面からの深さ50cm 主軸方位：N15° E 遺構の重複：19号掘立柱建物跡のピット10に北西角を切られる。

住居内施設：床は貼床で、壁はほぼ垂直に立ち上がる。柱穴は、北東隅と南東隅に直径20~30cmの円形で床面からの深さ5cmのピット1・3があるが、角に寄り過ぎている上に浅く、ピット2・4は位置も悪く、主柱穴かどうか不明である。厨溝は西壁下の中央より北側に、幅10~15cm、深さ10cmのものが部分的に見られ、南壁下中央より西寄りの、幅25cm、長さ110cm、深さ25cmのものは、厨溝ではなく、入口施設に伴うものと思われる。カマドは北壁中央寄りやや東寄りで、地山を掘り残した袖の基部と、短い煙道だけが残っていた。堆積状況：9層のレンズ状の堆積である。遺物出土状況：土師器坏(1)がカマド東側の床面から出土しているほか、高坏、鉢、甕、壺の小片が埋土から出土している。

時期：半球形に近くなった坏(1)から7世紀後葉のものと考えられる。



SB36 カマド

1. 黒褐色土をやや多量に含む灰褐色土 (5YR5/1)
2. 灰褐色土をやや多量に含む黒褐色土 (5YR2/1)
3. 褐色土を少量含むに深い黄褐色土 (5YR5/3)
4. 黒色土 (5YR1/7/1)
5. 黒褐色土 (5YR3/1)
6. 褐灰色土 (5YR4/1)
7. 黒褐色土 (5YR2/1)

SB36

1. 黒褐色土 (5YR2/1)
2. 褐色土塊を微量含む黒褐色土 (5YR3/1)
3. 褐色土をやや多量に含む褐灰色土 (5YR4/1)
4. 褐色土塊を少量含む褐灰色土 (5YR4/1)
5. 褐灰色土混り黒褐色土 (5YR2/1)
6. 褐色土混じりの褐灰色土 (5YR4/1)
7. 褐色土塊を少量含む褐灰色土 (5YR4/1)
8. 黒色細砂土 (5YR1/7/1)
9. 赤灰色土・黒褐色土・褐色土の混な混土
10. 黒灰色土粒を少量含む褐灰色土 (5YR4/1=掘り方)
11. 黒色土粒を少量含む褐灰色土 (5YR6/1)
12. 褐灰色粘土質土 (5YR6/1)

第36図 36号住居跡・出土遺物

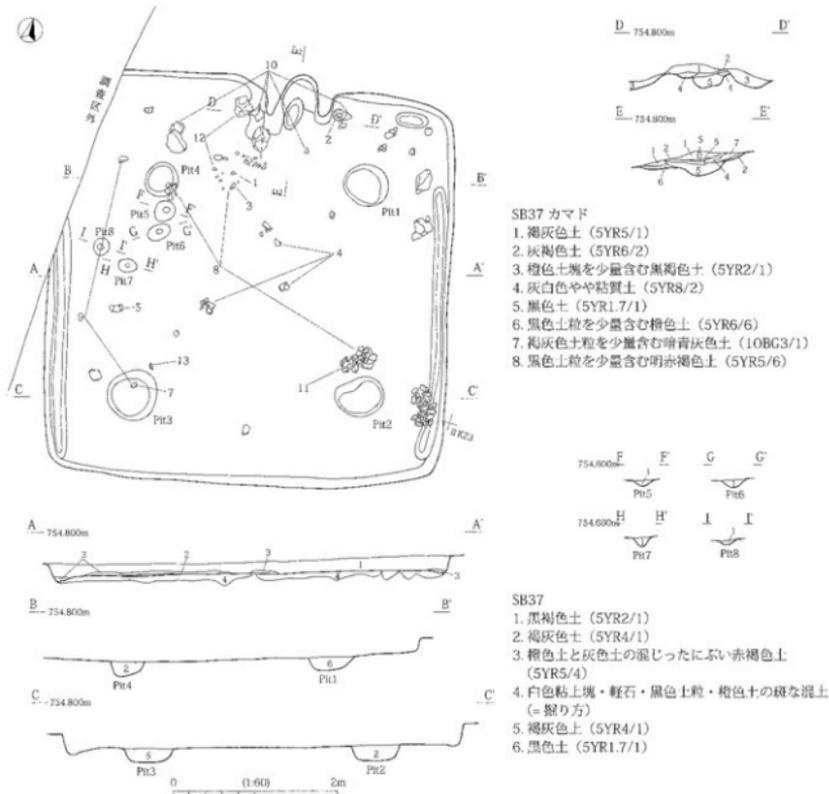
番号	埋没位置	器種	口径	底径	体高	底面	体部外面	体部内面	底部内面	焼成	色調	胎土	残存率	備考
1	土師器環	(11.5)	(10.4)	反高 2.7	ヘラ取リ	横ナテ	横ナテ	環状+一方向ナ	---	良材	灰赤褐色 1mm以下の砂粒 少量	---	30%	---
2	土師器鉢	(10.4)	---	反高 3.9	---	横ナテ	横ナガキ	---	---	普通	灰赤褐色 砕雲	---	10%	体部外周にすのこ状 年痕
3	土師器高杯	---	---	反高 2.6	---	縦かい縦ミガキ	ナテ	---	---	普通	灰赤褐色 1mm以下の磁砂 や中砂	---	10%	内面黒色結膜

第27表 36号住居跡出土土器観察表

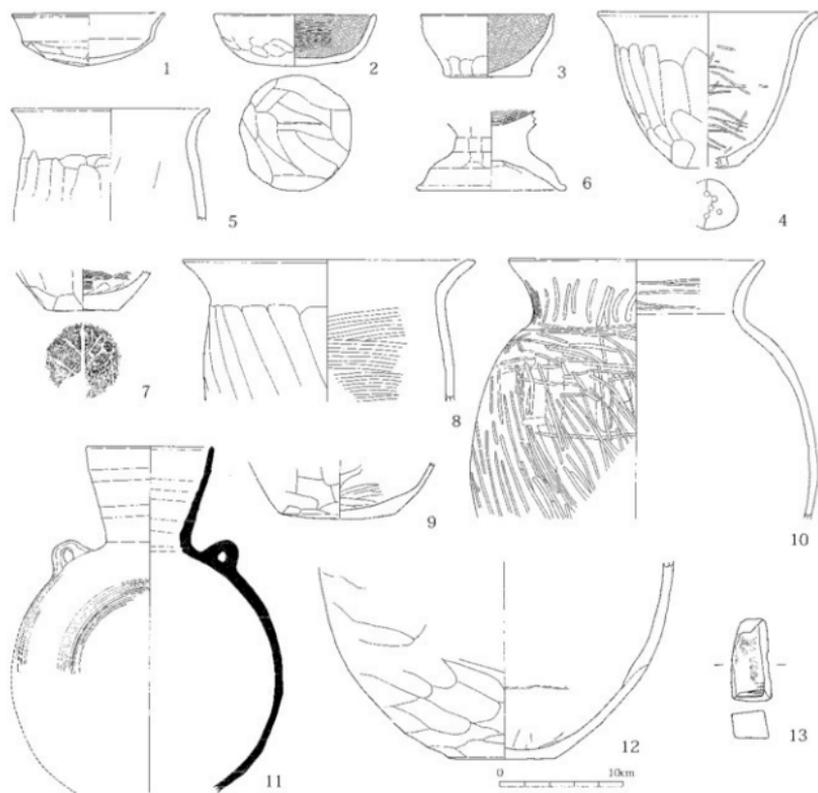
37号住居跡 (第37・38図, PL8・9・22・23) 位置: 15年度調査西区の南西部、II K17・22区

形状: 方形 規模: 東西4.8m、南北4.9m、確認面からの深さ20~25cm 主軸方位: N13°W 遺構の重複: なし、北東角は調査区外

住居内施設: 床は貼床で、壁はほぼ垂直に立ち上がる。ピットは、1~4が主柱穴で、直径40~60cm、床面からの深さ20cmを計る。周溝は、幅15~20cm、深さ2~5cmで、東西の壁下と北壁下の東端近くに見られる。カマドは北壁中央で、基部の地山を掘り残し、その前面に礫を置いて芯としていたと思われるが、損壊し、1.3mの半円形の範囲に崩落土が広がる。



第37図 37号住居跡



第38图 37号住居跡出土遺物

堆積状況：9層のレンズ状の堆積である。遺物出土状況：土師器杯（1・2）、埴（3）がカマド周辺、甌（4）はカマド前方、須恵器提瓶（11）はピット2の北側、土師器甕（5・7～9）は住居跡内に広く分散して出土しているほか、長さ10cm前後のこも編み石17個が東壁下南端近くでまとまって出土している。

時期：須恵器提瓶（11）の輪状の把手は、陶器窯では6世紀中葉のTK10窯式まででなくなるが、土師器杯（1）の模倣している土蓋はそれよりも新しく、平底に近い丸底の杯（2）も共存することから、7世紀前葉頃のものと考えられる。

番号	層位・位置	形状	口径	底径	高さ	底面	体部外面	体部内面	底部内面	焼成	色調	出土	残存率	備考
1	土師器杯	12.2	10.6	4.3	ヘラ削り	横ナデ	横ナデ	ナデ	良好	褐色	100%			
2	土師器杯	12.8	8.2	4.3	ヘラ削り	下平縁 底平さへ、上平縁ナデ	横ミガキ	小欝方向ミガキ	良好	褐色	95%			底面へう記号「一」 底面内外面磨滅
3	土師器埴	(10.4)	(7.0)	5.0	ヘラ削り	横ナデ	横ナデ	ナデ	普通	灰褐色	3mm以下の砂粒 やや多	30%		内面染色処理
4	土師器甌	17.5	(5.2)	12.7	ヘラ削り	底へう削り、口縁ナデ	横ナデ	横ナデ	普通	灰褐色	1mm以下の砂粒 少な	60%		
5	土師器甌	(15.0)	—	底径 9.1	—	底へう削り、口縁ナデ	横ナデ	横ナデ	良好	灰褐色	1～2mmの砂粒 少な	10%		
6	土師器高杯	—	(11.4)	底径 8.4	胴部内面上平縁 ヘラ削り、下平 縁ナデ	胴部内面上平縁 ヘラ削り、下平 縁ナデ	—	—	普通	灰褐色	2mm以下の砂粒 やや多	7%		
7	土師器甕	—	5.9	3.1	木製版	ヘラ削り	横ハケ目	ヘラナデ	普通	灰褐色	1～2mmの砂粒 少な	5%		
8	土師器甕	23.2	—	底径 11.6	—	底へう削り、口縁ナデ	横ナデ	横ナデ	普通	灰褐色	1mm以下の砂粒 少な	30%		
9	土師器甕	—	9.2	底径 4.6	ヘラ削り	横ナデ	横ナデ	ヘラナデ	普通	赤褐色	1～2mmの砂粒 少な	10%		
10	カマド 土師器甕	20.3	—	底径 11.6	—	底へう削り、口縁ナデ	横ナデ	横ナデ	普通	赤褐色	1～2mmの砂粒 少な	50%		
11	須恵器提瓶	10.1	底径 22.4	底径 22.4	—	胴部内面上平縁 ヘラ削り、下平 縁ナデ	胴部内面上平縁 ヘラ削り、下平 縁ナデ	—	良好	灰色	1mm以下の砂粒 少な	95%		断面17.2、外底の片 に灰土はたは灰燼
12	土師器甕	—	8.4	底径 16.0	ヘラ削り	横ナデ	横ナデ	ナデ	普通	灰褐色	1～2mmの砂粒 少な	30%		外面の2ヶ所に30cm 厚縁、体部内面の 一部に巻き上げ痕

第28表 37号住居跡出土土器観察表

番号	長さ (cm)	幅 (cm)	厚さ (cm)	重量 (g)	番号	長さ (cm)	幅 (cm)	厚さ (cm)	重量 (g)	番号	長さ (cm)	幅 (cm)	厚さ (cm)	重量 (g)
1	9.2	5.3	4.5	300	7	9.4	6.3	4.5	255	13	8.8	6.2	4.2	250
2	9.7	5.3	4.9	295	8	9.9	6.3	4.6	310	14	9.8	5.5	4.3	290
3	9.9	6.5	3.5	310	9	9.2	6.0	3.8	295	15	9.0	5.2	3.1	190
4	9.5	5.1	4.5	380	10	9.0	6.6	4.3	310	16	8.8	4.8	3.2	180
5	10.3	5.3	4.8	410	11	10.1	4.7	4.3	360	17	8.4	5.3	4.6	320
6	10.7	4.7	4.5	335	12	9.1	6.1	5.8	230					

第29表 37号住居跡出土こも編み石計測表

38号住居跡（第39図、PL9・23） 位置：15年度調査東区の南東部、II K24区

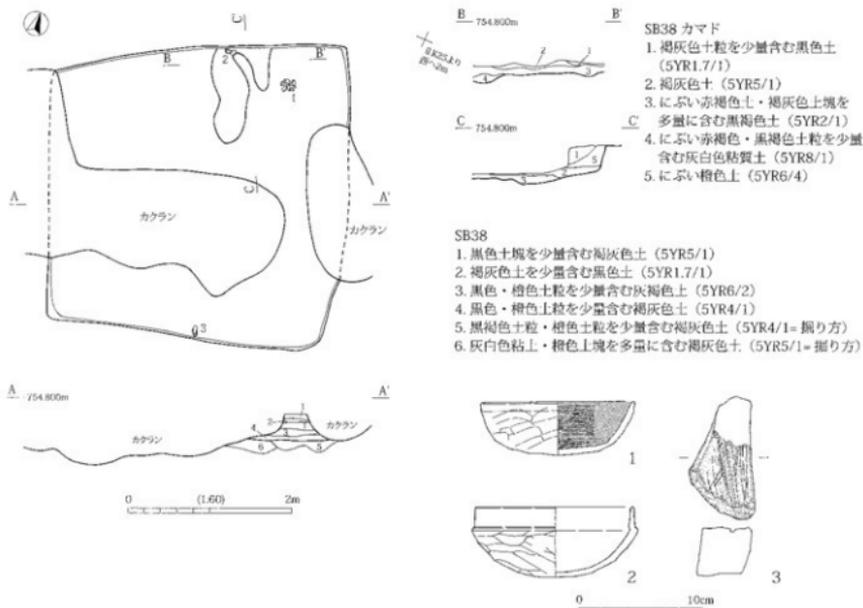
形状：やや歪な方形 規模：東西3.6m、南北3.7mだが、西辺が東辺より60cm短い。確認面からの深さ30～40cm 主軸方位：N18°E 遺構の重複：なし、東壁下、西壁下から中央部とカマド上にカクランあり 住居内施設：床は貼床で、カマドの前が硬い。壁はほぼ垂直に立ち上がる。ピット、周溝は検出されていない。カマドは北壁中央より東寄りで、袖材の褐灰色土がわずかに残って前面に流れている。

堆積状況：4層に分かれる。遺物出土状況：平底に近い丸底の土師器杯（1）がカマド東側、須恵器杯身模倣の埴（2）がカマド崩落土上、砥石（3）が南壁下中央の床面で出土している。

時期：杯の形態から7世紀前葉頃と考えられる。

番号	層位・位置	形状	口径	底径	高さ	底面	体部外面	体部内面	底部内面	焼成	色調	出土	残存率	備考
1	土師器杯	12.3	7.3	4.3	木製版	横ハケ目、口縁外縁ナデ	横ハケ目	横ハケ目	横ハケ目	普通	灰褐色	1mm以下の砂粒 少な	75%	内面染色処理
2	土師器埴	(12.6)	(13.4)	5.7	ヘラ削り	横ナデ	横ナデ	ナデ	普通	灰褐色	1mm以下の砂粒 少な	40%		内面に1～2mm深の 付着土

第30表 38号住居跡出土土器観察表



第39図 38号住居跡・出土遺物

39号住居跡 (第40図、PL9) 位置：15年度調査東区の南東部、II K18・19区

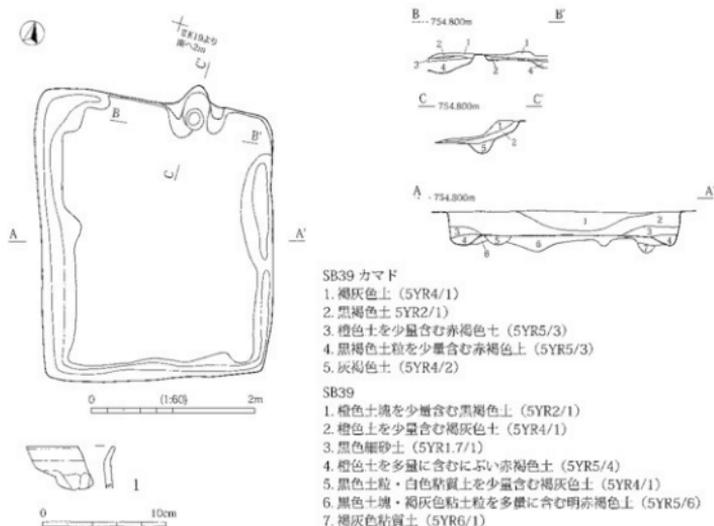
形状：やや歪な方形 **規模**：東西2.8m、南北3.6mだが、西辺が東辺より60cm短い。確認面からの深さ30cm **主軸方位**：N15°E **遺構の重複**：11号掘立柱建物跡のピット6・7に切られる。**住居内施設**：床は貼床で、葦はほぼ垂直に立ち上がる。ピットは検出されていない。周溝は、幅20~35cm、床面からの深さ5~15cmと幅広く、東壁から南壁、西壁、北西角にかけて廻る。カマドは北壁中央より東寄り、基部の掘り残した地山を芯としているが、軸材の褐灰色土は周囲に流れている。

堆積状況：4層のレンズ状の堆積である。 **遺物**：非常に少なく、図示した土師器壺(1)小片のほか、葉片が少量出土しているだけである。

時期：7世紀代のものと考えられる。

番号	層位・位置	器種	口径	底径	器高	底面	外部外面	外部内面	底部内面	構成	色調	胎土	残存率	備考
1	カマド	土師器壺	—	—	器高3.4	—	ヘラ削り	縞ナガ	—	黄褐色	赤褐色	10cm以下の砂状少量	1%	

第31表 39号住居跡出土土器観察表



SB39 カマド

1. 褐色土 (5YR4/1)
2. 黒褐色土 (5YR2/1)
3. 褐色土を少量含む赤褐色土 (5YR5/3)
4. 黒褐色土粒を少量含む赤褐色土 (5YR5/3)
5. 灰褐色土 (5YR4/2)

SB39

1. 褐色土塊を少量含む黒褐色土 (5YR2/1)
2. 褐色土を少量含む褐色土 (5YR4/1)
3. 黒色細砂土 (5YR1.7/1)
4. 褐色土を多量に含む赤褐色土 (5YR5/4)
5. 黒色土粒・白色粘質土を少量含む褐色土 (5YR4/1)
6. 黒色土塊・褐色土粘土粒を多量に含む赤褐色土 (5YR5/6)
7. 褐色粘質土 (5YR6/1)

第40図 39号住居跡・出土遺物

40号住居跡 (第41・42図、PL9・23) 位置: 15年度調査東区の中央部、II K15・20、L11・16区

形状: 長方形 規模: 東西5.7m、南北5.3m、確認面からの深さ35~45cm 主軸方位: N17° E 遺構の重複: なし

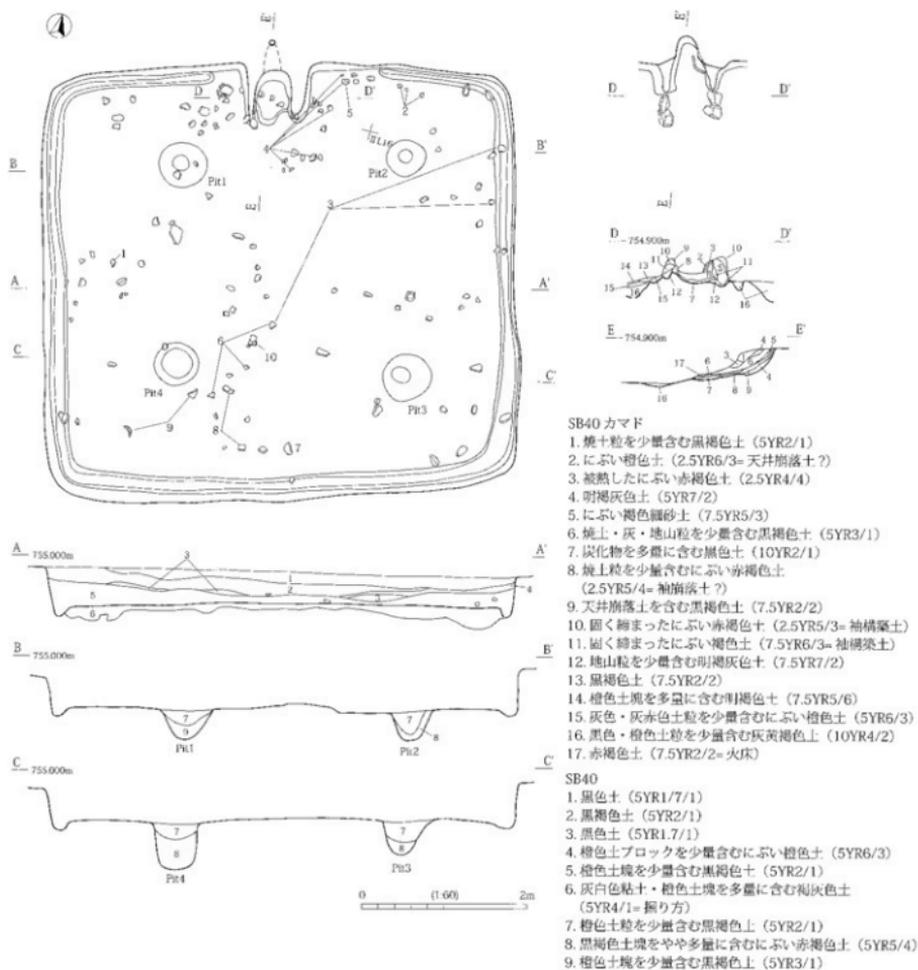
住居内施設: 床は貼床である。壁はほぼ垂直に立ち上がる。ピットは1~4が支柱穴で、直径50~60cmの円形、床面からの深さ35~55cm。周溝は、幅10~25cm、深さ5~10cmで全周。カマドは北壁中央寄りやや東寄りで、袖は幅20~25cm、奥行き25~30cm、高さ30cmの地山掘り残しの基部と、直径15~20cm、長さ35cmの石の芯にぶい褐色~赤褐色の土を貼り付けられる。地山を掘り抜いた煙道の天井も残存。

堆積状況: 5層のレンズ状の堆積である。遺物出土状況: 埋土中から多くの遺物が出土しているが、すべて床面から浮いた状態で出土している。

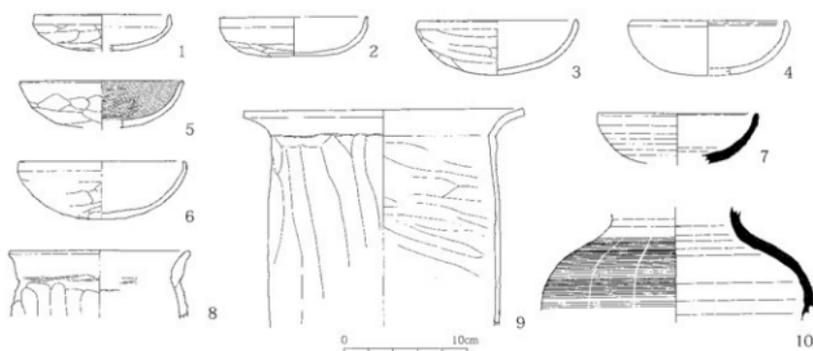
時期: 土師器環 (1~6) がすべて半球形となり、須恵器 (7・10) も共存することから、本遺跡としては新しく、7世紀末葉~8世紀初頭のものと考えられる。

番号	層位・位置	器種	口径	直径	高さ	底面	体部外面	体部内面	底部内面	釉色	胎土	胎土	残存率	備考
1	土師器環	(10.8)	(11.2)	3.0	ヘラ削り	楕円ナデ	楕円ナデ	ナデ	滑漕	赤褐色	細砂少量		20%	
2	土師器環	(11.6)	(11.0)	3.2	ヘラ削り	楕円ナデ	楕円ナデ	ナデ	滑漕	赤褐色	1cm以下の砂粒やや多		20%	
3	土師器環	12.8	13.1	4.5	ヘラ削り	楕円ナデ	楕円ナデ	ナデ	滑漕	赤褐色	細砂少量		90%	
4	土師器環	12.3	7.5	4.5	ヘラ削り	ヘラ削り	板ナデ	ナデ	滑漕	赤褐色	1cm以下の砂粒少量		50%	外面滑漕減衰
5	土師器環	(12.8)	—	短径3.8	ヘラ削り	ヘラ削り、口縁縁ナデ	上ゴキ、口縁縁ナデ	ミゴキ	滑漕	灰褐色	1cm以下の砂粒		20%	
6	土師器環	(13.3)	(13.7)	4.8	ヘラ削り	楕円ナデ	楕円ナデ	ナデ	滑漕	赤褐色	細砂少量		40%	S100内土師片と類似
7	須恵器環	(12.8)	—	短径4.1	回転ナデ	回転ナデ	回転ナデ	回転ナデ	滑漕	灰褐色	1~2mmの砂粒やや多		23%	
8	土師器小形甕	(14.4)	—	短径3.5	—	短ヘラ削り、口縁縁ナデ	楕円ナデ	—	滑漕	赤褐色	1~2mmの砂粒少量		10%	体部内面の一部に巻き上げ痕
9	土師器甕	(22.1)	—	短径17.7	—	短ヘラ削り、口縁縁ナデ	楕円ナデ	短ヘラナデ	—	良好	赤褐色	1mm以下の砂粒やや多	10%	
10	須恵器平底	—	—	短径9.3	—	回転ナデ	回転ナデ	—	滑漕	灰褐色	1~2mmの砂粒やや多		10%	

第32表 40号住居跡出土土器観察表



第41図 40号住居跡



第42図 40号住居跡出土遺物

41号住居跡（第43図、PL9・23） 位置：15年度調査東区の中央部、ⅡK15区

形状：長方形 規模：東西3.4m、南北2.9m、確認面からの深さ20～30cm 主軸方位：N15°W 遺構の重複：なし

住居内施設：床は地山のままで、壁はほぼ垂直に立ち上がる。カマドの東側に直径90cmの円形で床面からの深さ30cm、カマドの西側に80×70cmの隅丸方形で深さ40cmの貯蔵穴とみられるピットがある。周溝は幅10～15cm、深さ2～5cmと浅く、東壁下の南部から南壁下にかけてと、西壁下の北半に見られる。カマドは北壁中央で、火床が上下2枚あり、西側の袖は共通であるが、東側の袖は上の火床では5～6cm東側にずれている。ただし、東側の袖は損壊が著しい。

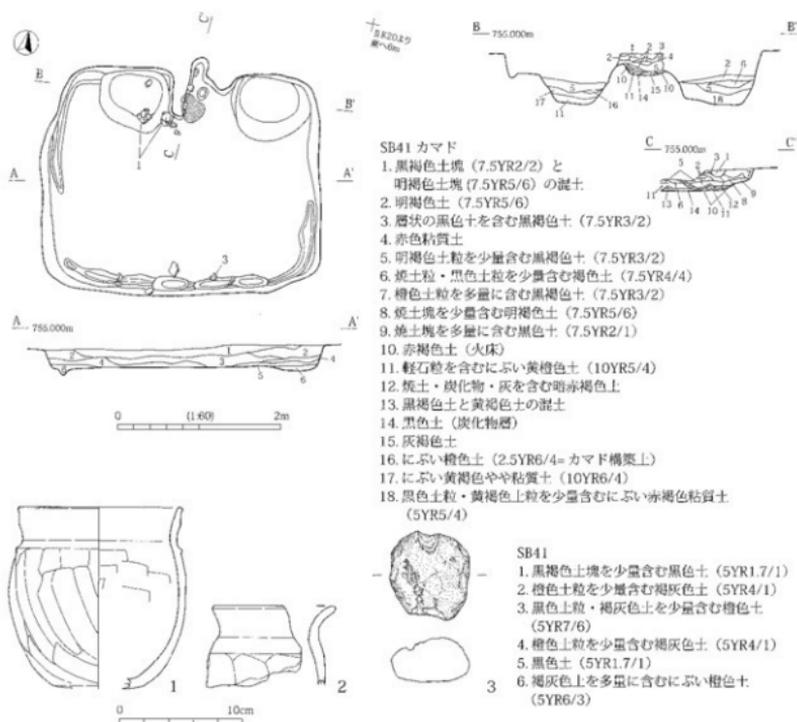
堆積状況：6層のレンズ状の堆積である。遺物出土状況：土師器甕（1）がカマド西側のカマド天井崩落土の上と、貯蔵穴の上から、安山岩製の石錘（3）が南壁下から出土している。

遺物：石錘（3）は上下に縄掛け用の打ち欠きを持ち、縄を掛けた痕も見られる。側面の打ち欠けは意図的かどうか不明である。

時期：7世紀代のものと考えられる。

番号	層位・位置	器種	口径	口径	器高	底面	体部外面	体部内面	底面内面	焼色	色澤	胎土	残存率	備考
1		土師器甕	13.1	7.4	14.8	不明	へろ周りに縁角ナデ	ナデ後腹へろナデ	ナデ後へろナデ	普通	淡紅色	1m以下の砂粒少量	90%	
2	カマド・東側	土師器甕	—	—	現高6.4	—	縁へろ周りに縁角ナデ	縁ナデ	—	普通	赤褐色	1m以下の砂粒少量	2%	

第33表 41号住居跡出土土器観察表

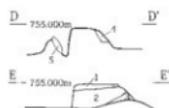
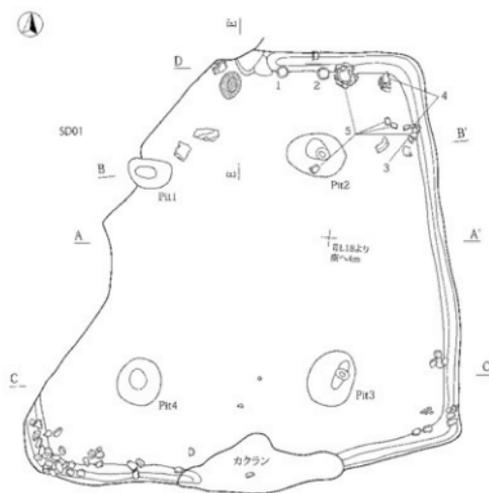


第43図 41号住居跡・出土遺物

42号住居跡 (第44図、PL9・23・24) 位置: 15年度調査東区の南東部、II L17・18区

形状: 方形 (推定) 規模: 東西5.3m、南北5.0m (推定)、確認面からの深さ20~30cm 主軸方位: N13° W 遺構の重複: 1号溝に切られる。南壁中央にカクランあり

住居内施設: 床は貼床で、壁はほぼ垂直に立ち上がる。ピットは1~4が主柱穴で、長径50~70cmの楕円形で床面からの深さ25~70cmを計る。周溝は幅10~15cm、深さ5~10cmで、カマド部分を除いて全周する。カマドは北壁中央で、左袖から煙道部分を1号溝に壊され、右袖も地山を掘り残した基部と貼り付けた灰白色の粘土がわずかに残存するのみである。

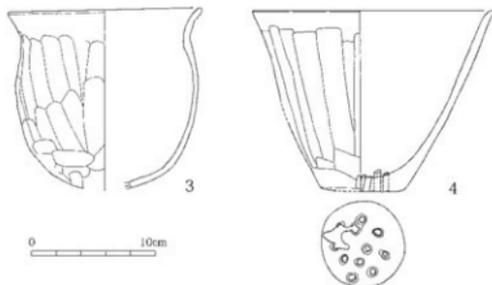
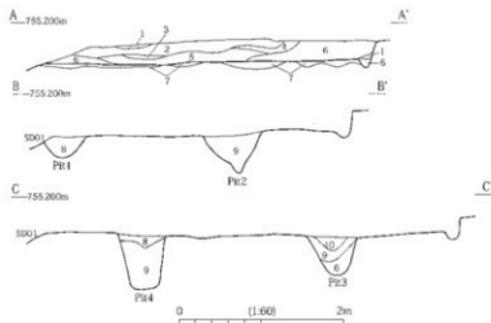


SB42 カマド

1. 橙色土塊を少量含む灰褐色土 (5YR4/2)
2. 暗赤褐色土 (5YR3/2)
3. 黒色土 (5YR1.7/1)
4. にぶい橙色粘質土 (2.5YR6/3)

SB42

1. 橙色土 (5YR7/6=カクラン)
2. 層状の黒褐色土を少量含む暗赤褐色土 (5YR3/3)
3. 褐灰色をやや多量に含む灰白色土 (5YR3/3)
4. にぶい赤褐色土 (5YR5/3)
5. 黒褐色土塊を微量含む暗赤褐色土 (5YR3/2)
6. やや黄味がかつたにぶい赤褐色土 (5YR4/4)
7. 黒色土粒を少量含むにぶい赤褐色土 (5YR5/4=振り方)
8. 黒色土 (5YR1.7/1)
9. 褐灰色土 (5YR4/1)
10. 橙色土塊をやや多量に含む褐灰色土 (5YR5/1)



第44図 42号住居跡・出土遺物

堆積状況：6層のレンズ状の堆積である。遺物出土状況：図示した土師器坏（1）、壺（2）、甕（3・5）、瓶（4）がカマド東側の床面から出土しているほか、坏、甕片が埋土から少量出土している。また、長さ8.9~14.3cm、幅5.5~8.5cm、厚さ2.6~7.0cm、重さ260~930gの礫と軽石46点が西南と東南隅からままとまって出土している。こも編み石としては形と大きさが不ぞろいであり、用途は不明である。

時期：後の退化した坏（1）から7世紀中葉頃のものと考えられる。

番号	層位・位置	器種	口径	底径	器高	底面	体部外側	体部内側	底面内側	状況	色類	胎土	残存率	備考
1		土師器坏	12.3	9.8	3.8	一方向へ丸がり	横ナデ	横ナデ	ナデ	普通	緑灰色	1~2mmの砂粒少量	99%	内外両面色地埋
2		土師器壺	13.6	—	9.0	—	斜めのへら削り、口縁横ナデ	横ナデ残一部へら削り、口縁横ナデ	—	普通	褐色	1~2mmの砂粒少量	40%	—
3		土師器甕	15.4	—	現高14.5	—	上平削り・下平へら削り	ナデ	—	普通	淡黄色	1~3mmの砂粒やや多	80%	—
4		土師器瓶	19.2	6.8	14.6	へら削り	縦へら削り、下縁斜めへら削り、口縁横ナデ	横へら削り、口縁横ナデ	ナデ	良好	淡褐色	2~3mmの砂粒	95%	内面灰色地埋
5	カマド	土師器甕	(19.7)	—	現高17.5	—	縦へら削り	横ナデ	—	良好	淡赤褐色	1~5mmの砂粒、小礫少量	30%	—

第34表 42号住居跡出土土器観察表

43号住居跡（第45・46図、PL9・24） 位置：16年度調査区の東部、II V12・17区

形状：隅丸方形 規模：東西5.6m、南北5.8m、確認面からの深さ50~60cm 主軸方位：N11°W 遺構の重複：なし、南東隅は調査区外

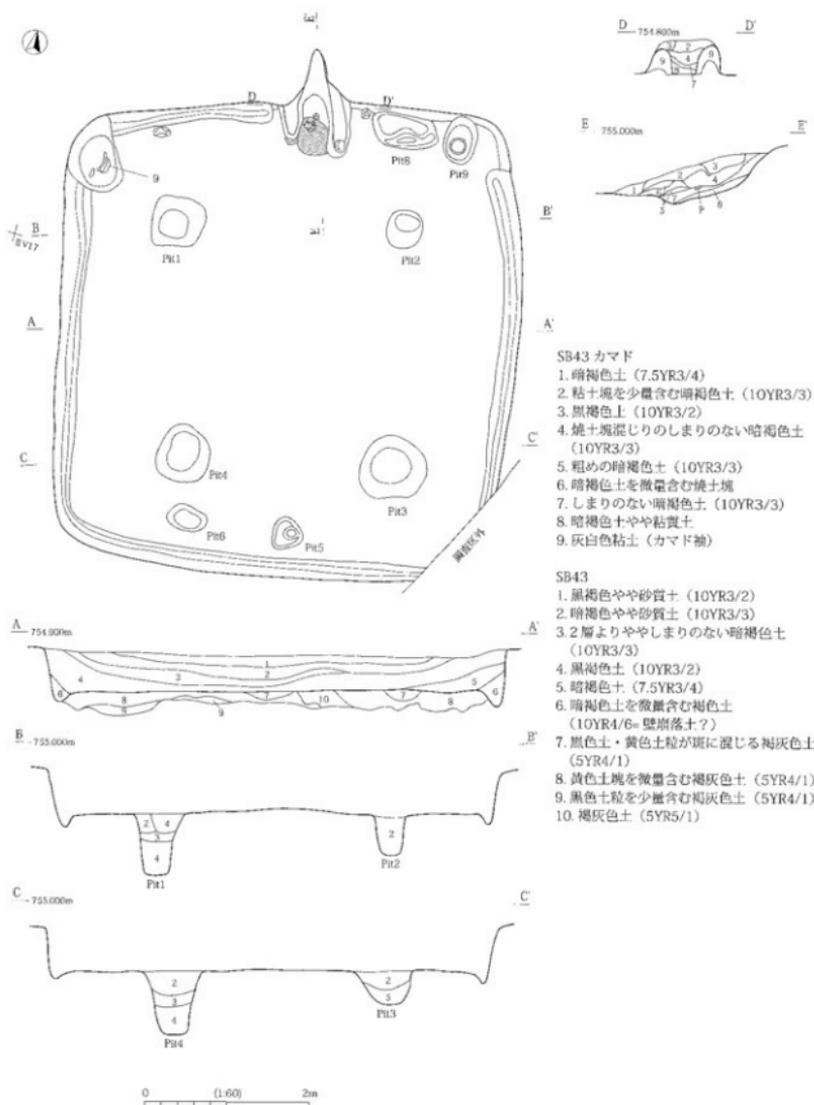
住居内施設：床は貼床であるが軟弱である。壁はほぼ垂直に立ち上がる。支柱穴はビット1~4で、1辺40~80cmの方形または、角張り気味の楕円形で、床面からの深さは50~80cmである。このほか、南壁中央下へ入口施設と見られるビット5、カマド東側に貯蔵穴と見られるビット8、南壁下と北壁下にビット6・7・9がある。幅約20cm、床面からの深さ約10cmの溝溝が、北壁下東半を除いて全周している。カマドは北壁ほぼ中央で、掘り残した地山とその前面に立てられた石を芯にして灰白色の粘土を貼って袖とし、火床の後部には支柱石、天井の一部も残るなど残存状態はよかった。

堆積状況：6層のレンズ状の堆積である。遺物出土状況：土師器壺（7）、鉢（8）の一部がカマド内、土師器甕（9）の一部がカマド内とビット7内、図示はしていないが土師器甕の胴部片がビット9から出土している。これらと同一個体とみられる破片を含めて、ほとんどの遺物は埋土中に散在している。

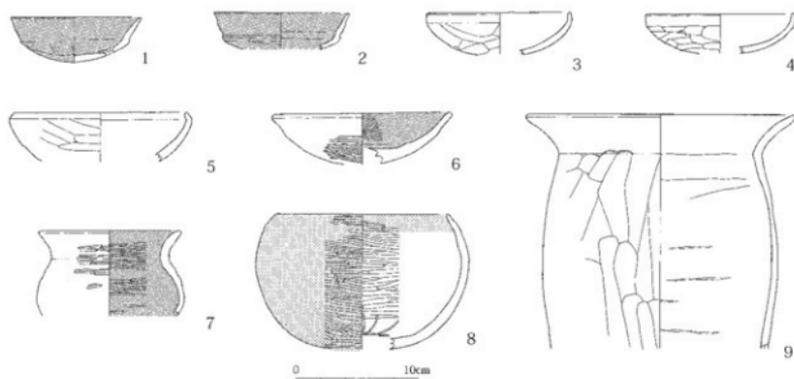
時期：半球形の土師器坏（3~5）の存在から7世紀後葉のものと思われる。

番号	層位・位置	器種	口径	底径	器高	底面	体部外側	体部内側	底面内側	状況	胎土	胎土	残存率	備考	
1	床下	土師器坏	10.5	8.9	3.7	へら削り	横ナデ	横ナデ	ナデ	普通	黒	黒灰色	1~2mmの砂粒少量	99%	内外両面色地埋、遺物散在、内面両面片
2		土師器坏	(10.8)	(9.2)	現高3.5	へら削り	横ナデ、窪形底部分の横へら削り	横ナデ	ナデ	普通	黒灰色	1mm以下の砂粒少量	39%	内外両面色地埋、面下の土状痕	
3		土師器坏	(11.5)	(11.6)	現高3.5	へら削り	横ナデ	横ナデ	ナデ	良好	褐色	1mm以下の砂粒少量	23%	—	
4	内下	土師器坏	(11.8)	(11.9)	現高3.2	へら削り	横ナデ	横ナデ	ナデ	良好	褐色	1mm以下の砂粒少量	33%	—	
5		土師器坏	13.9	—	現高3.9	へら削り	へら削り、口縁横ナデ	横ナデ	ナデ	普通	淡赤褐色	1mm以下の砂粒少量	25%	—	
6	2層	土師器高杯	12.0	—	現高4.1	—	ミガキ、口縁横ナデ	ミガキ	ミガキ	良好	赤褐色	胎土	23%	内面灰色地埋	
7	カマド・床下	土師器壺	(11.4)	—	現高6.9	—	横へら削り・斜め削り、口縁横ナデ	ミガキ、口縁横ナデ	—	良好	赤褐色	1mm以下の砂粒少量	10%	内面両面色地埋・泥・腐成	
8	カマド・2層	土師器鉢	(13.6)	(4.9)	10.9	ミガキ	ミガキ	ミガキ	ミガキ	良好	灰白色筒状赤褐色	1mm以下の砂粒少量	23%	—	
9	カマド	土師器甕	(21.4)	—	19.0	—	縦へら削り、口縁横ナデ	横ナデ後縁上縁の一部へら削り	—	良好	淡赤褐色	1~2mmの砂粒少量	10%	体部内面に巻き上げ痕	

第35表 43号住居跡出土土器観察表



第45図 43号住居跡



第46図 43号住居跡出土遺物

44号住居跡（第47・48図、PL10・24・25） 位置：16年度調査区の中央部、Ⅱ U13・14・18・19区、形状：ほぼ方形 規模：東西5.2m、南北5.5m、確認面からの深さ65～70cm 主軸方位：N7°W 遺構の重複：なし、中央部に南側にあった住宅のカクランあり

住居内施設：床は地山のままである。壁はほぼ垂直に立ち上がる。主柱穴はビット1・2・4・5で、直径40～60cmの楕円形で、床面からの深さは40～50cmである。その間にあり、深さ20cmと浅めのビット3・6は支柱穴になると思われる。南壁下中央には各35・50cmの角礎2個があり、入口に伴う踏み台と思われる。周溝は見られない。カマドは北壁中央で、基部の地山を掘り残し、その前面に礎を置いて芯材とし、褐色の粘土を貼って袖が作られているが、粘土はほとんど流れて、残りはよくない。

堆積状況：5層のレンズ状の堆積である。遺物出土状況：土師器碗（2）、鉢（3）、甕（4・5・7）などがカマドから離れた床面でまとまって出土し、残存率も高い。遺物：有孔磨製石鏃または垂飾（11）、滑石製の鈍尾の破片（12）は、混入品とみられる縄文土器（10）とともに詳しい出土位置は不明である。

時期：半球状の土師器環（1）の存在から7世紀後葉のものと考えられる。

番号	器名・位置	器種	口径	底径	器高	底面	外部外面	内部内面	器底内面	焼成	色調	粘土	残存率	備考
1	カマド	土師器環	(13.9)	(6.6)	4.2	ヘラ削り	ヘラ削り、口縁部横ナデ	ミガキ、口縁部横ナデ	ミガキ	良好	淡褐色	1～2mmの砂粒少量	25%	
2		土師器碗	12.8	11.3	5.0	ヘラ削り	横ナデ	横ナデ	ナデ	良好	淡褐色	濃密	95%	
3		土師器鉢	22.0	(7.8)	13.9	ヘラ削り	底ヘラ削り、口縁部横ナデ	底ナデ後放射状ミガキ	横ナデ後縁ミガキ	良好	淡褐色	濃密	90%	外面の大部分と内面高気色成
4		土師器碗	12.1	7.1	18.5	ヘラ削り	上平削り、下半削り、口縁部横ナデ	横ナデ	ナデ後縁ミガキ	良好	淡褐色	1～2mmの砂粒やや多	95%	
5		土師器碗	22.5	—	37.8	—	ヘラ削り、口縁部横ナデ	横ナデ底上平ヘラ削り	—	良好	淡褐色	1～2mmの砂粒やや多	90%	
6		土師器碗	(19.5)	—	現実(13.3)	—	底ヘラ削り口縁部横ナデ	横ナデ後縁ヘラ削り	—	良好	淡褐色	1～2mmの砂粒少量	10%	体部内面に巻き上げ成す
7		土師器甕	30.6	6.7	31.4	ヘラ削り	底ヘラ削り	横ナデ	ナデ	良好	淡褐色	1～2mmの砂粒少量	85%	体部外面下半寸付成す
8		土師器者	(20.6)	—	現実15.5	—	ヘラ削り後縁部横ナデ	横ナデ後縁ミガキ	—	普通	赤褐色	1～2mmの砂粒やや多	5%	
9		土師器環	—	7.2	ほぼ1方向へラ削り	—	ヘラ削り	横ナデ	ナデ	良好	淡褐色	3mm以下の砂粒やや多	10%	

第36表 44号住居跡出土土器観察表



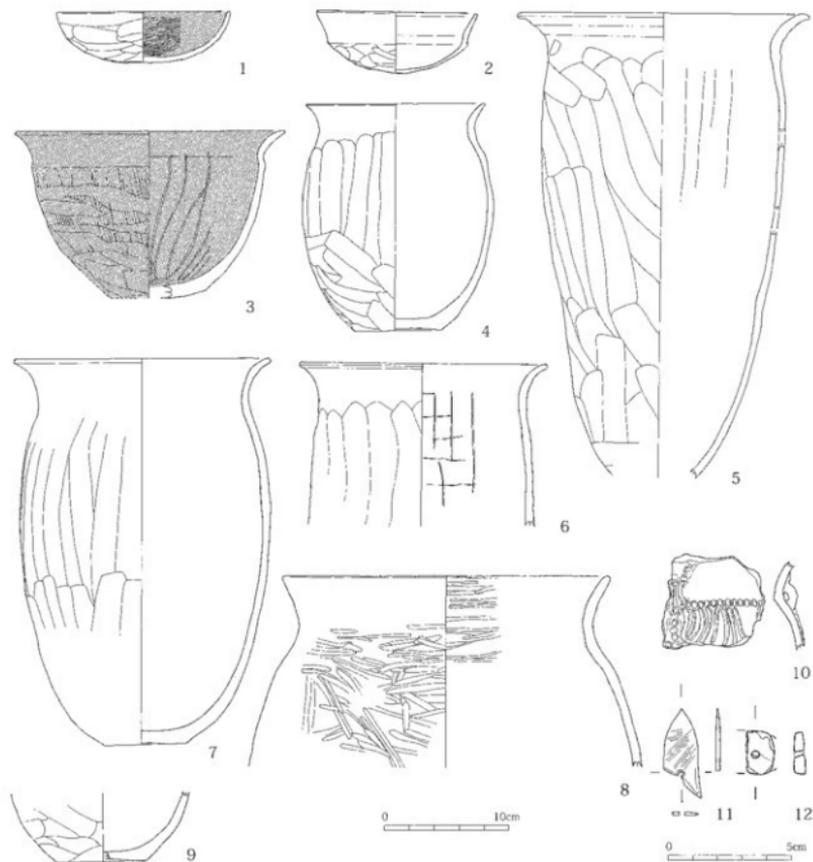
SB44 カマド

1. 黄褐色土粒・褐灰色成粒を少量含む黒褐色土 (5YR2/1)
2. 黒色土粒を少量含む褐灰色粘質土 (5YR5/1)
3. 橙色土 (5YR7/5)
4. 黒色土粒・黄褐色土粒を少量含む褐灰色土 (5YR4/1)
5. 黒色土粒を少量含む褐灰色粘質土 (5YR5/1)
6. にぶい橙色土 (5YR6/4)
7. 黒色土塊を多量に含む褐灰色土 (5YR4/1)
8. 褐灰色やや粘質土 (5YR4/1)
9. 炭をやや多量に含む褐灰色粘質土 (5YR5/1)

SB44

1. 褐灰色土 (5YR4/1)
2. 赤褐色土を微量含む黒褐色土 (5YR2/1)
3. 黒褐色土 (5YR3/1)
4. にぶい赤褐色土 (5YR4/4)
5. 細かい黒色土 (5YR1/7/1)
6. にぶい赤褐色土 (5YR4/4)
7. 黒色土粒を微量含むにぶい赤褐色土 (5YR4/4)

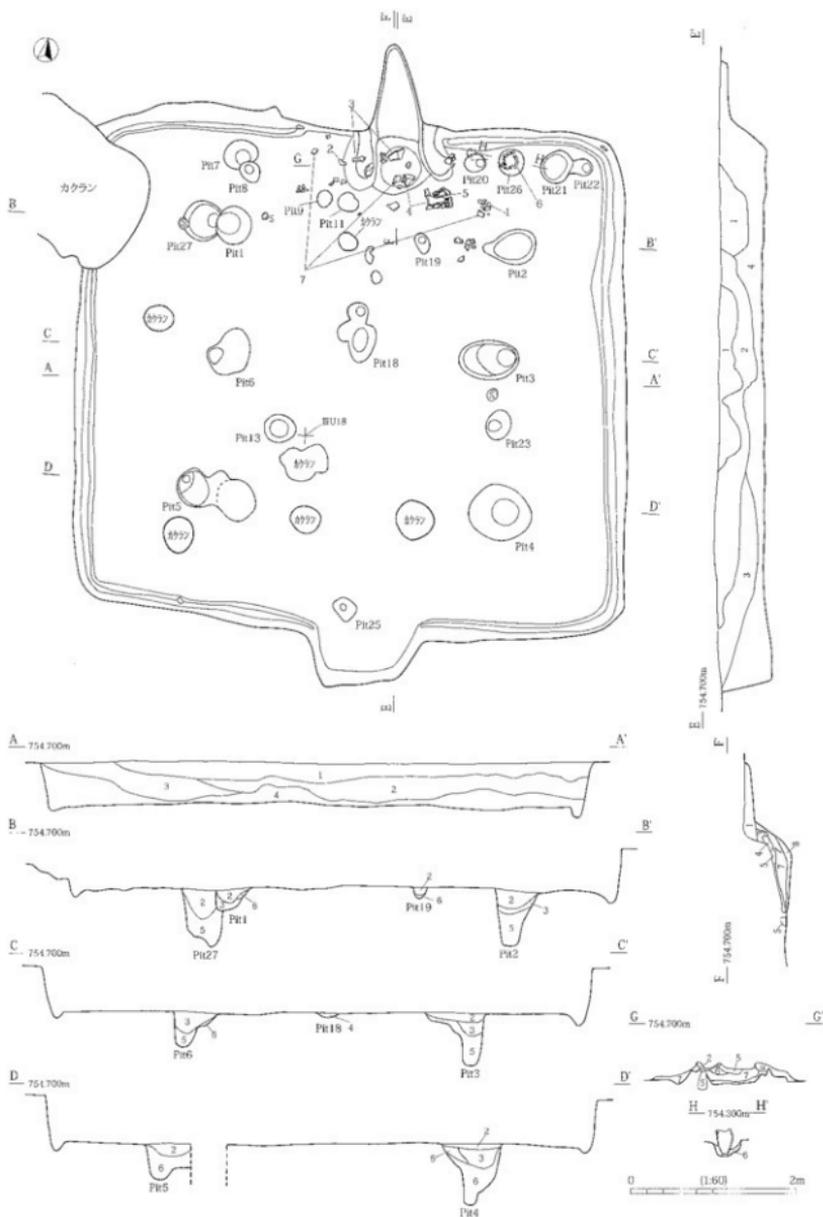
第47図 44号住居跡



第48図 44号住居跡出土遺物

45号住居跡 (第49・50図、PL10・25・26) **位置**: 16年度調査区の中央部、Ⅱ U12・13・17・18区、**形状**: ほぼ方形 **規模**: 東西6.7m、南北6.2mで、南壁中央に上底90cm、下底140cm、高さ6cmの台形の入口施設と思われる張り出し部がある。確認面からの深さは50~60cm **主軸方位**: N11°W **遺構の重複**: なし、北西角ほかに南側にあった住宅のカクランがある。

住居内施設: 床は地山のままで、壁はほぼ垂直に立ち上がる。主柱穴はビット1~6の6個で、直径または長径45~75cmの円形または楕円形で、床面からの深さは45~70cmである。このほか、カマド東側には土師器甕(6)の底部が埋められて、体部上半が床面上に出ている直径30cm、深さ30cmのビット26、南側張り出し部の内側に30×25cmの方形で深さ20cmの入口屋根の支柱穴と思われるビット25など、多数のビット



第49図 45号住居跡

SB45
 1. 灰黄褐色土 (10YR5/2)
 2. 黒褐色土 (10YR2/3)
 3. 暗褐色土 (10YR3/3)
 4. 褐色土 (10YR4/4)
 5. 灰黄色土を少量含む灰褐色土 (10YR4/3)
 6. 黒色土を少量含む黄褐色土 (10YR5/8)

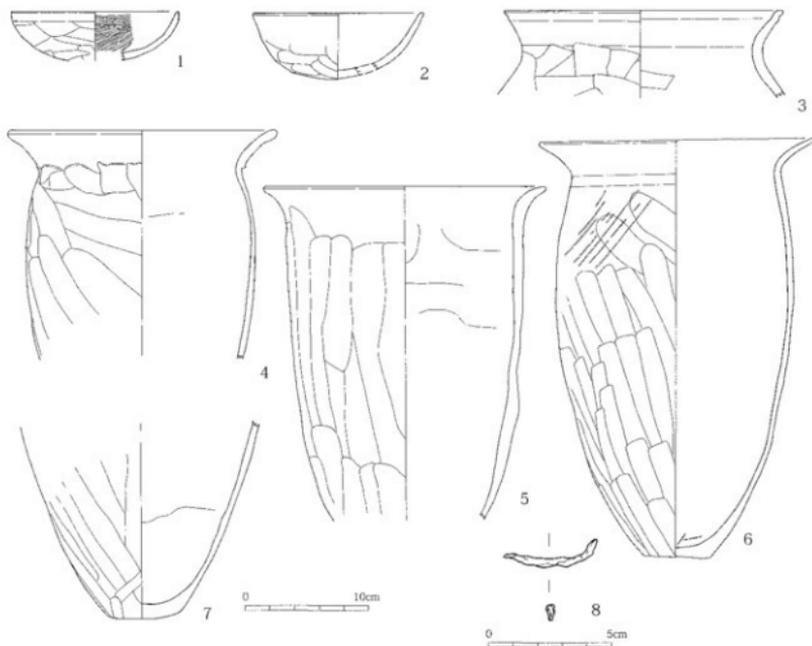
SB45 カマド
 1. 灰黄色土 (5YR4/1)
 2. 黒褐色土 (7.5YR2/2)
 3. やや暗めの黒褐色土 (5YR2/1)
 4. 黄褐色土 (10YR2/1)
 5. 灰黄色土を少量含むに灰褐色土 (5YR7/3)
 6. 黒色土を少量含む浅黄褐色土 (7.5YR6/6)
 7. やや明るめの黒褐色土 (10YR3/2)
 8. 褐色土 (5YR6/8)

が見られるが、ほかは深さ10～15cm程度のくぼみである。南側張り出し部分とカマド部分を除いて、幅15～20cm、深さ5～15cmの周溝が全周している。カマドは北壁中央よりやや東寄り、基部の地山を掘り残り、粘土を貼って袖が作られ、芯材であったと思われる石片も出土している。

堆積状況：4層のレンズ状の堆積である。遺物出土状況：土師器坏（1）、埴（2）、甕（3～7）がいずれもカマド内または周辺でまともに出土している。

遺物：鉄製品（8）は刀子の柄が折れたものか。

時期：半球状の土師器坏（1）から7世紀末～8世紀初頭のものと考えられる。



第50図 45号住居跡出土遺物

番号	構造・位置	設備	口径	底径	高さ	底周	体形外周	体形内周	底部内面	焼成	色調	胎土	残存率	備考
1	カマド	土師器環	(13.4)	—	取高 4.0	ヘラ削り	ヘラ削り、口縁 磨ナデ	1.方肉ミダキ、 口縁磨ミダキ	—	—	良好 淡褐色	1~2mmの砂粒 少量	32%	
2	カマド	土師器環	13.6	—	5.5	ヘラ削り	ヘラ削り、口縁 磨ナデ	磨ナデ	ナデ	良好	褐色	5cm以下の砂粒 少量	49%	
3	土師器環	(21.9)	—	取高 7.2	—	—	煎焼のヘラ削り、 口縁磨ナデ	磨ナデ	—	良好	赤褐色	1cm以下の砂粒 少量	40%	
4	カマド	土師器環	21.4	—	取高 13.3	—	上煎焼・手彫り 下部のヘラ削り	磨ナデ	—	良好	灰赤褐色	1cm以下細粒少 量	46%	内周縁部研ぎ
5	土師器環	22.4	—	取高 27.3	—	—	磨ナデ兼上平ヘ ラ削り	磨ナデ	—	普通	淡褐色	5cm以下の砂粒 を多く含む	70%	
6	土師器環	(22.9)	5.2	33.8	ヘラ削り	ヘラ削り、口縁 磨ナデ	磨ナデ	ヘラナデ	ヘラナデ	普通	淡褐色	5cm以下の砂粒 少量	95%	底部外面の一部にす のこ状凸出
7	土師器環	—	5.7	取高 12.8	—	中心部代取、周 縁ヘラ削り	煎〜新めヘラ削り	磨ナデ	ヘラナデ	普通	赤褐色	5cm以下の砂粒 少量	20%	

第37表 45号住居跡出土土器観察表

46号竪穴状遺構（第51図、PL10） 位置：16年度調査区の南西部、II U23・24区

形状：方形 規模：東西・南北とも4.2m、確認面からの深さは北側で30cm、南側で10cm 主軸方位：N 20° E 遺構の重複：90号土坑に南東隅を切られる。南東部に北側にあった住宅のカクランがある。

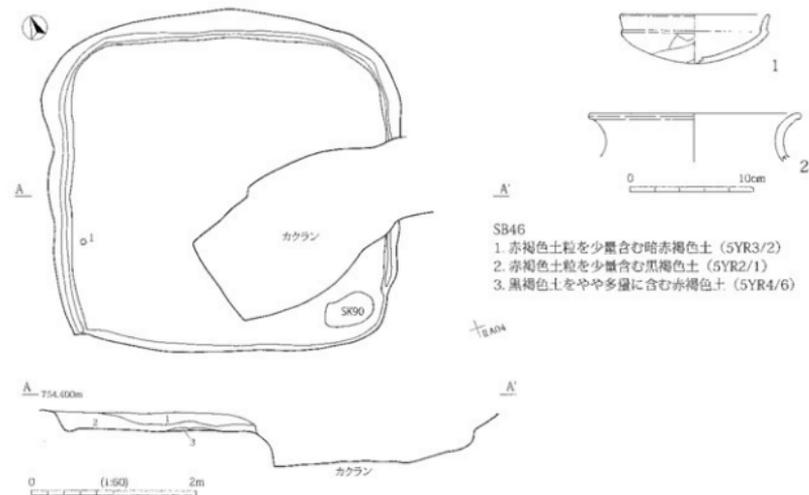
住居内施設：床は地山のままである。壁はほぼ垂直に立ち上がる。柱穴やカマドの施設は見られず、南を除く3方の壁下に幅10~20cm、深さ1~5cmの周溝が巡るのみである。住居とは思わず、倉庫等の施設と思われる。

堆積状況：3層のレンズ状の堆積である。遺物出土状況：図示した土師器環（1）、甕（2）のほか、葉片が埋土から出土しているが、小片で接合しないため図示できなかった。

時期：土師器環の形態から7世紀前葉のものと思われる。

番号	構造・位置	設備	口径	底径	高さ	底周	体形外周	体形内周	底部内面	焼成	色調	胎土	残存率	備考
1	土師器環	(11.7)	(11.2)	4.0	ヘラ削り	磨ナデ	磨ナデ	ナデ	ナデ	良好	灰赤褐色	細砂	20%	
2	七段甕	16.4	—	取高 9.9	—	磨ナデ	磨ナデ	—	—	普通	淡赤褐色	1~2mmの砂粒 少量	20%	内周縁部による表面 の磨け多

第38表 46号住居跡出土土器観察表



SB46

1. 赤褐色土粒を少量含む暗赤褐色土（5YR3/2）
2. 赤褐色土粒を少量含む黒褐色土（5YR2/1）
3. 黒褐色土をやや多量に含む赤褐色土（5YR4/6）

第51図 46号竪穴状遺構・出土遺物

47号住居跡 (第52・53図、PL10・26) 位置:16年度調査区の東部、II U15・20、V11・16区

形状:方形 規模:東西・南北とも5.8m、確認面からの深さ50~70cm 軸方位:N3°E 遺構の重複:上層を2・4号溝に切られる。西部に西側にあった住宅のカクランがある。

住居内施設:床は貼土、壁はほぼ垂直に立ち上がる。主柱穴はビット1~4で、上部をカクランに壊されているビット4を除くと、直径30~50cmの円形で、床面からの深さは50~70cmである。南壁中央下には南北に並んだ長径40cmの楕円形で深さ10~15cmのビットがあり入口施設と見られ、このほかにも北東、南東隅に深さ5~15cmの浅いビットが見られる。東壁から南壁下と西壁下中央付近に幅20cm深さ1~5cmの浅い間溝が通っている。カマドは北壁中央で、基部の地山を掘り残し、その前面に礫を置いて芯材とし、灰白色の粘土を貼って袖が作られていたと思われるが、粘土はほとんどが前面に流れていた。

堆積状況:6層のレンズ状の堆積である。遺物出土状況:土師器壺(6~8)、壺(9・10)がカマド周辺の床面から、畿内産と思われる土師器杯(4)がカマド内から出土している。このほか、埋土から在地の土師器杯・埴(1~3)、畿内系の土師器杯(5)、須恵器すり鉢(11)が出土している。

遺物:畿内産と思われる土師器杯(4)はやや厚ぼったく、焼きが軟らかめで淡褐色を呈するが、外面の削り、内面のミガキとも丁寧で、口唇は揃まれて内外面が凹面となっている。畿内系の杯(5)は器壁は薄いものの、底面に木葉痕、体部外面に指頭痕が残り、化粧土の表面があちこちで剥げ落ち、一見して粗雑な印象を受ける。須恵器鉢(11)は厚めの底部が外側に突出するすり鉢の体部下半部である。沈線施工後に指でナデた所に、刻印状のものが見られるが、残存部分が極わずかである。詳細は不明である。

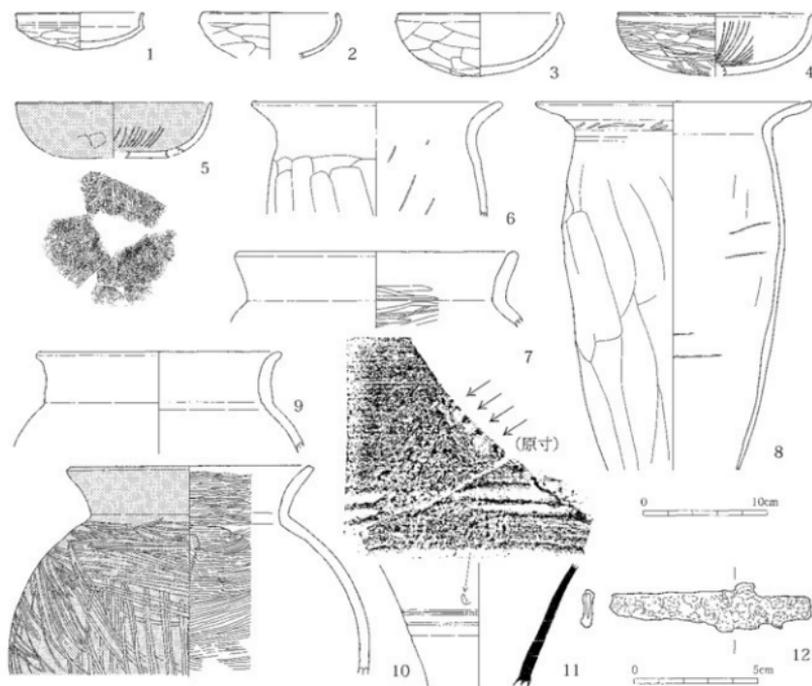
時期:半球形の杯が主体で須恵器模倣杯がわずかに残ることから7世紀後葉のものと考えられる。

番号	層位・位置	径	口径	直径	深さ	遺物	体部外側	体部内面	底面内面	状況	色調	胎土	保存率	備考
1	土師器杯	10.4	10.4	3.1	ヘラ削り	頸ナテ	横ナテ	ナテ	良好	赤褐色 1mm以下の砂粒 少量	20%			
2	土師器杯	(10.8)	11.4	3.7	ヘラ削り	横ナテ	横ナテ	ナテ	良好	赤褐色 1mm以下の砂粒 少量	30%			
3	土師器杯	(12.8)	(13.4)	5.2	ヘラ削り	横ナテ	横ナテ	ナテ	良好	赤褐色 1mm以下の砂粒 やや多	50%			
4	カマド 土師器杯	(15.7)	—	5.1	不整方向ミガキ	横ミガキ、口唇 横ナテ	横ナテ後部射状 ミガキ、口唇横 ナテ	ナテ後部射状ミ ガキ	ナテ後部射状ミ ガキ	良好	淡褐色	1~2mmの砂粒 やや多	40%	
5	土師器杯	(17.0)	9.0	4.6	木葉痕	丁寧削り、口 唇横ナテ	横ナテ後部射状 ミガキ	横ナテ後部射状 ミガキ	ナテ後部射状ミ ガキ	普通	赤褐色 1mm以下の砂粒 少量	50%	内外面剥離	
6	土師器杯	(20.0)	—	高さ 9.4	—	丁寧削り、口 唇横ナテ	横ナテ後部射状 ミガキ	横ナテ後部射状 ミガキ	—	普通	赤褐色 1mm以下の砂粒 少量	10%		
7	土師器杯	(22.1)	—	高さ 6.2	—	ヘラ削り?、口 唇横ナテ	横ナテ後部射状 ミガキ、口唇横 ナテ	横ナテ後部射状 ミガキ	—	普通	赤褐色 1mm以下の砂粒 やや多	5%		
8	カマド 土師器杯	22.0	—	高さ 29.9	—	ヘラ削り、口唇 横ナテ	横ナテ後部射状 ミガキ、口唇横 ナテ	横ナテ後部射状 ミガキ	ナテ後部射状ミ ガキ	普通	赤褐色 1mm以下の砂粒 少量	30%	体部内面の一部に巻き 上げ痕	
9	土師器杯	(19.4)	—	高さ 8.2	—	ヘラ削り?、口 唇横ナテ	横ナテ後部射状 ミガキ、口唇横 ナテ	横ナテ後部射状 ミガキ	—	普通	赤褐色 1mm以下の砂粒 少量	10%		
10	土師器杯	(19.3)	—	高さ 17.1	—	丁寧削り、口唇 横ナテ	横ナテ後部射状 ミガキ、口唇横 ナテ	横ナテ後部射状 ミガキ	—	良好	赤褐色 1mm以下の砂粒 やや多	10%	外面剥離、体部の1 箇所10cm大剥離	
11	須恵器鉢	—	—	高さ 10.2	—	丁寧削り	横ナテ	横ナテ	—	普通	灰白色 1mm以下の砂粒 少量	5%	外周剥離3条、上下 縁剥離、刻印の一部	

第39表 47号住居跡出土土器観察表



第52図 47号住居跡



第53図 47号住居跡出土遺物

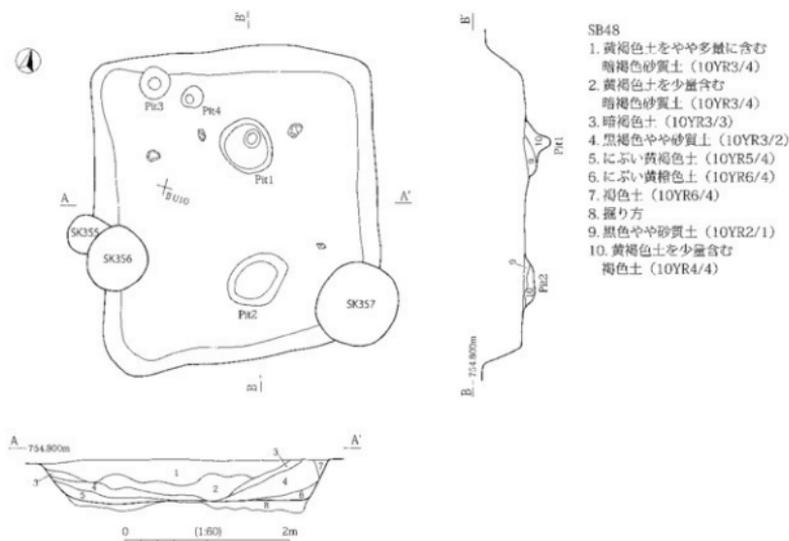
48号竪穴状遺構 (第54図、PL10) 位置：16年度調査区の中央部、ⅡU 4・5・9・10区

形状：ほぼ方形 規模：東西3.4m、南北3.7m、確認面からの深さ40～45cm 主軸方位：N20°W 遺構の重複：355～357号土坑に切られる。

住居内施設：床は貼床であるが軟弱である。壁はほぼ垂直に立ち上がる。南北の中心線に沿って長径65～80cmの楕円形で床面からの深さ15cmピット1・2があり、ピット1には直径20cmの柱が約15cm底にめり込んだ跡があり主柱穴であるが、2本のみでしかも浅いことから不安定で、上部構造はなかったものと思われる。これ以外には各直径35・25cmの円形のピット3・4が見られるだけで、周溝やカマドなどの施設は見られない。北西隅を中心に数～30cmの厚さの焼土が堆積していたが、炭化材が見られないことから上部構造はなかったと思われる、住居ではなく、ピット部分を尿溜めとする厩などの可能性がある。

堆積状況：5層のレンズ状の堆積である。遺物出土状況：土師器壺、鉢が埋土から少量出土しているが、小片のため図示できなかった。

時期：時期は不明であるが、周辺と同じ7世紀代のものと思われる。



第54図 48号堅穴状遺構

49号住居跡 (第55図、PL10・26) 位置: 16年度調査区の西部、II U 7・8区

形状: 方形 規模: 東西3.1m、南北2.9m、確認面からの深さは北側で50cm前後、南側で約20cm 主軸方位: N15°W 遺構の重複: 17号掘立柱建物跡と116号土坑に切られる。

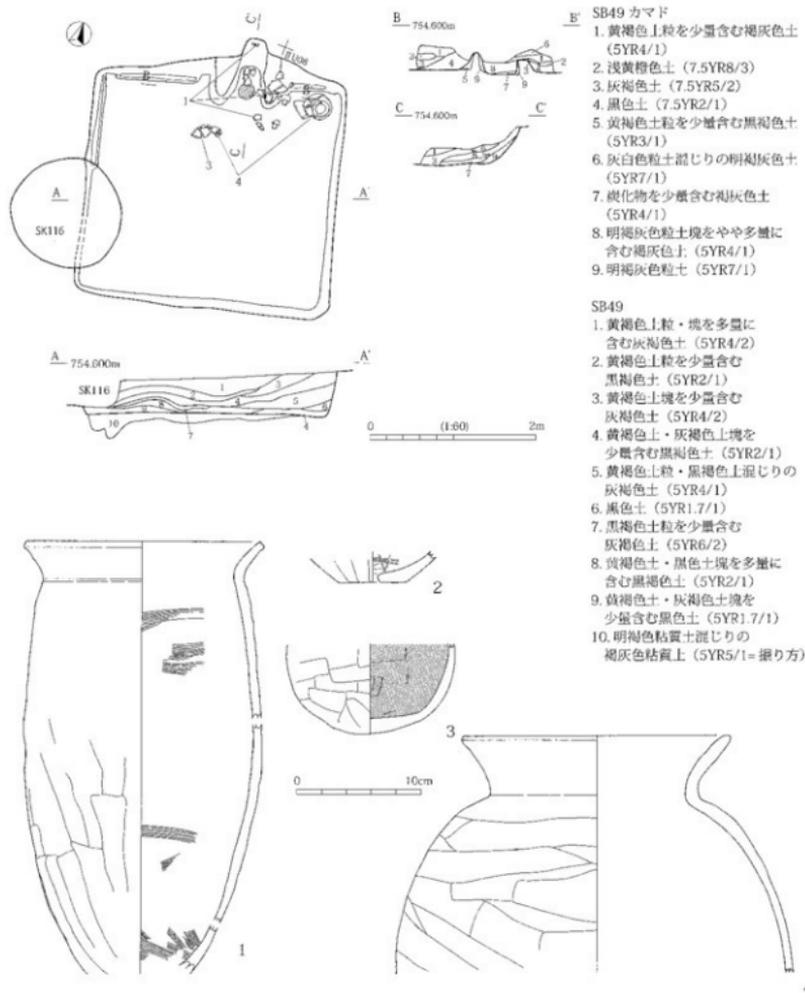
住居内施設: 床は貼床で、壁はほぼ垂直に立ち上がる。床面からはピットは検出されず、掘方から直径30cmで地山面からの深さ各45・30cmのピット1・2が検出されているだけである。周溝も検出されていない。カマドは北壁中央よりやや東寄りで、掘り残した基部の地山に灰白色の粘土を貼って軸が作られ、煙道は短く急に立ち上がる。火床の奥には支柱石も残っていた。

堆積状況: 9層のレンズ状の堆積である。遺物出土状況: 土師器甕(1)がカマド内から、内面が軽く黒色処理された壺(3)がカマド前面、大型の壺(4)がカマド東方の床面からまとまって出土している。

時期: 土師器甕(1)の最大径が胴部中位であることから7世紀前葉頃と考えられる。

番号	遺物・設備	形状	口径	底径	高さ	表面	外部外面	外部内面	内部内面	焼成	色澤	粘土	残存率	備考
1	土師器甕	—	19.0	—	高さ 33.0	—	縦へら削り	横へら削り	横へら削り	普通	淡褐色	3層以下の砂状や中層	50%	外部外面に灰が厚く付着
2	土師器甕	—	(5.4)	—	高さ 2.5	ナデ	縦へら削り	横へら削り	横へら削り	良好	淡赤褐色	1~2mmの砂状や中層	3%	基部に焼成前穿孔、孔径0.8cm
3	土師器壺	—	(5.4)	—	高さ 7.3	ナデ	縦へら削り	横へら削り	横へら削り	普通	赤褐色	1~2mmの砂状や中層	30%	内面黒色処理
4	カマド	土師器甕	21.2	—	高さ 19.7	—	縦へら削り、口縁ナデ	横ナデ	横ナデ	普通	淡褐色	1~2mmの砂状や中層	50%	

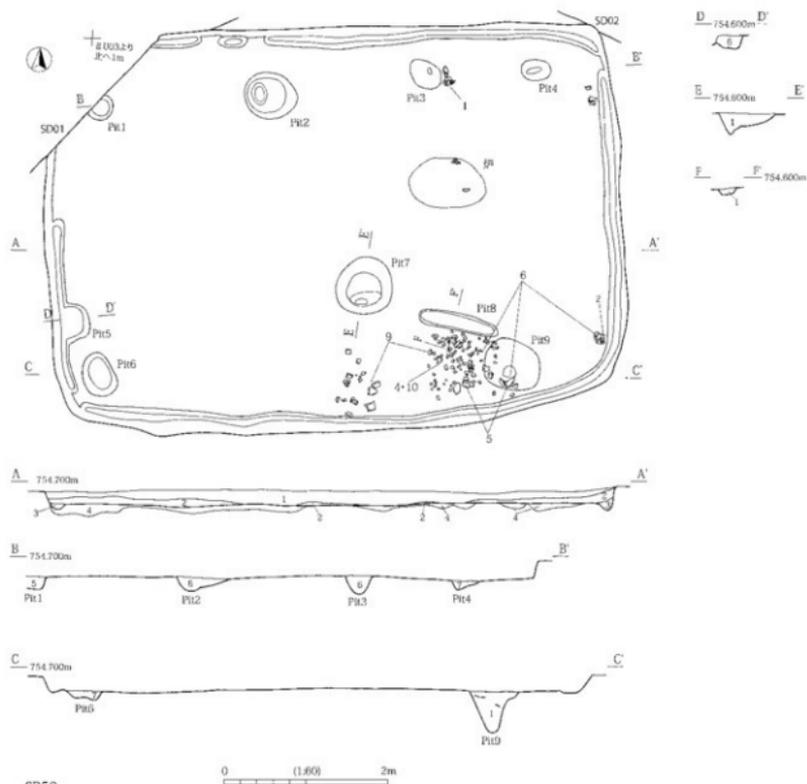
第40表 49号住居跡出土土器観察表



第55図 49号住居跡・出土遺物

50号住居跡（第56・57図、PL11・27・28） 位置：16年度調査区の北西部、II P 22・23、U 2・3区、形状：長方形 規模：東西6.9m、南北4.9m、確認面からの深さ10～20cm 主軸方位：E 4° N 遺構の重複：1・2号溝に各北西角と北東角の上層を切られる。

住居内施設：床は貼床だが軟弱で、敷はほぼ垂直に立ち上がる。主柱穴は直径または長さ35～65cmの円形または楕円形で床面からの深さ5～25cmのピット1～4・6・9と思われる。ただし、北側が4本、南側が2本だけで、南側2本は壁まで30～50cmと近く変則的である。このほか、竈の南西1.3mのところには直径65cmの円形で床面からの深さ25cmのピット7がある。また、ピット7と9との間に幅20cm、深さ5cm



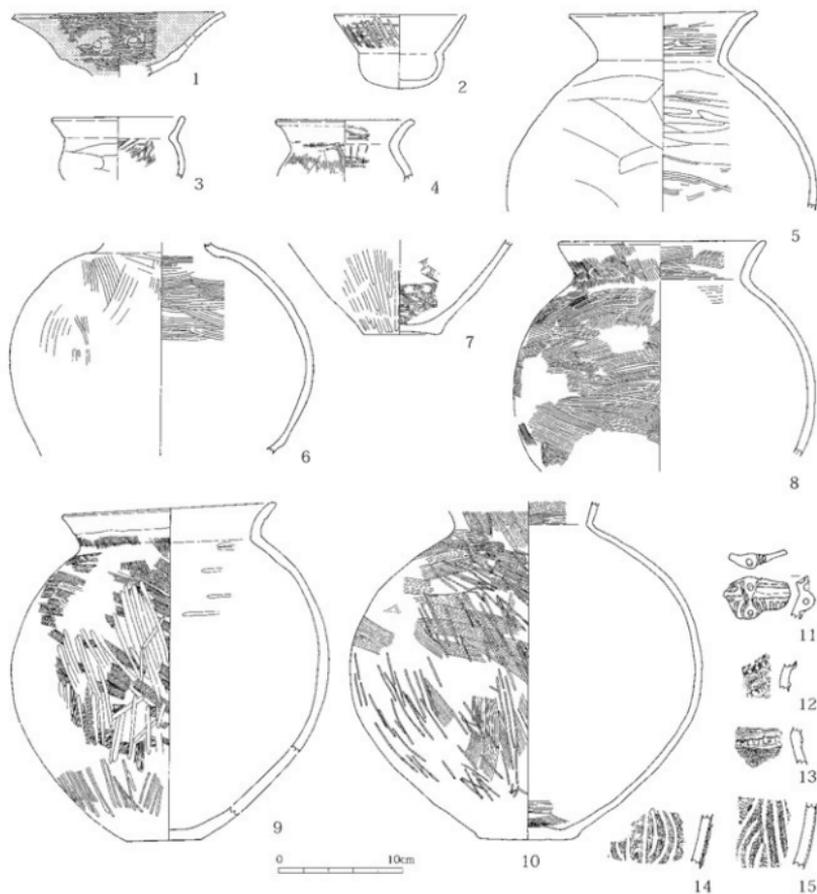
SB50

1. 黒色シルト質土 (5YR1.7/1)
2. にぶい橙色土塊を少量含む褐灰色土 (5YR4/1)
3. 褐灰色やや粘質土 (5YR4/1)
4. 掘り方
5. 明褐色土上・黒色土・黄褐色土塊を多量に含む黒褐色土 (5YR3/1)
6. 赤褐色土塊を多量に含む黒褐色土 (5YR3/1)
7. 黒褐色土・黄褐色土塊を多量に含む褐灰色土 (5YR4/1)

第56図 50号住居跡

の間仕切り状の溝が見られる。幅15~20cm、深さ5~10cmの周溝が、所々切れながら、西壁北部下を除いて全周している。炉は床面中央より1.4m東寄り、長径90cm、短径60cmの楕円形に薄い焼土が見られるが、これを囲む施設や内部の礫などは見られない。**堆積状況**：3層のレンズ状の堆積である。**遺物出土状況**：坏部に穿孔のある土師器高坏（1）がピット3の脇から出土しているほかは、小型丸底壺（2）壺（4~6・10）、甕（8・9）が床面南東部から集中して出土している。縄文土器（11~15）は、周囲に同時代の遺構はなく、2号溝に伴う混入と思われる。

時期：小型丸底の土器があり、壺に箱清水的な下部が屈曲するものがない点などから、古墳時代前期後葉の4世紀後半頃ものと考えられる。



第57図 50号住居跡出土遺物

番号	層位・位置	形状	口径	底径	高さ	取柄	外部形状	内部内面	底部内面	焼成	色調	胎土	残存率	備考
1		土師器高杯	16.8	—	現高 5.2	—	ミゴキ	ミゴキ	—	普通	赤褐色	2mm以下の砂粒 少量	50%	内側面直線、体部に 2箇1組の直径9～ 10mmの孔1対
2		土師器小瓶丸地 蓋	10.4	—	6.0	ヘラ削り	横ナゲ、口縁ミ ゴキ	横ナゲ後ミゴキ?	ナゲ後ミゴキと 思われるが確認	普通	赤褐色	1mm以下の砂粒 少量	98%	内面磨成
3		土師器蓋	10.4	—	現高 5.1	—	横ヘラ削り、口 縁横ナゲ	ミゴキ	—	普通	赤褐色	1mm以下の砂粒 少量	30%	
4	Pir 5 ハ9	土師器蓋	10.8	—	5.0	—	ハケ目、口縁横 ナゲ	横ナゲ後ミゴ キ?	—	普通	赤褐色	1mm以下の砂粒 少量	40%	内面磨成
5	Pir 3	土師器蓋	14.7	—	現高 16.3	—	ヘラ削り、口縁 横ナゲ	上平ハケ目・下 手横ナゲ	—	普通	褐色	1～2mmの砂粒 やや多	50%	
6	Pir 9	土師器蓋	—	—	現高 17.2	—	上平ハケ目・口 縁ミゴキ・下手 手削り	上平ハケ目・下 手横ナゲ	—	普通	赤褐色	1～2mmの砂粒 やや多	50%	
7		土師器蓋	—	6.0	現高 7.4	ナゲ	縦ミゴキ	ハケ目	ハケ目	普通	赤褐色	1mm以下の砂粒 やや多	5%	
8		土師器蓋	16.4	—	現高 16.8	—	横ヘラ削り、口縁 横ナゲ	横ナゲ、口縁横 ナゲ	—	普通	赤褐色	1mm以下の砂粒 少量	30%	
9	Pir 9	土師器蓋	16.8	6.0	26.9	ヘラ削り	ヘラ削り後ミゴ キ、口縁横ナゲ	横ナゲ後部分約 にミゴキ	ナゲ	普通	赤褐色	1mm以下の砂粒 少量	50%	
10	Pir 9	土師器蓋	—	8.0	現高 27.4	ヘラ削り	ハケ目・口縁横 ナゲ	ナゲ、口縁及び 下部一部ハケ 目	ハケ目	普通	赤褐色	1～2mmの砂粒 やや多	40%	

第41表 50号住居跡出土土器観察表

51号住居跡（第58図、PL11・28） 位置：16年度調査区の北部、ⅡP24、V4区

形状：長方形 規模：東西3.8m、南北3.1m、確認面からの深さ50～60cm 主軸方位：N20°W 遺構の重複：2・3号溝に上層を切られる。

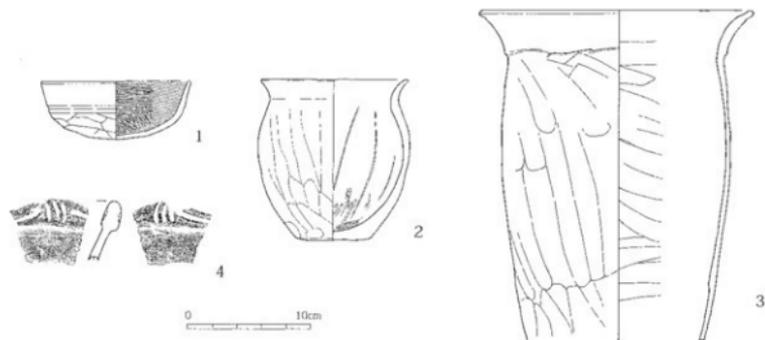
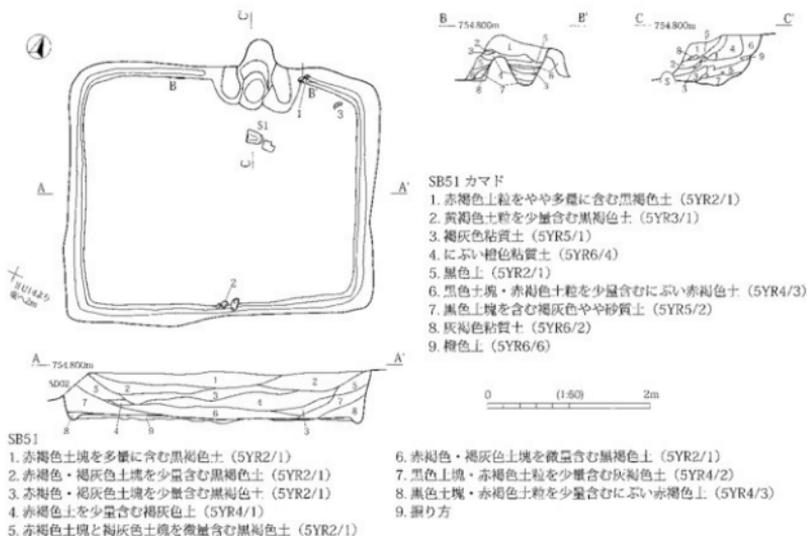
住居内施設：床は貼床であるが軟弱で、壁はほぼ垂直に立ち上がる。柱穴は見られない。幅約15cm、床面からの深さ3～6cmの浅い周溝が、カマド部分を除いて全周している。カマドは北壁中央より東寄りで、基部の地山を掘り残し、褐灰色の粘土を貼って袖が作られていたと思われるが、粘土はほとんどが崩れていた。

堆積状況：8層のレンズ状の堆積である。遺物出土状況：内面を黒色処理する土師器杯（1）や甕（3）がカマド東部から出土している。縄文土器（4）は、周辺に同時代の遺構がないことから、2・3号溝のカクランに伴う混入と思われる。

時期：半球形に近い須恵器模倣杯（1）や、最大径が口縁部の甕（3）から、7世紀後葉のものと考えられる。

番号	層位・位置	形状	口径	底径	高さ	取柄	外部形状	内部内面	底部内面	焼成	色調	胎土	残存率	備考
1		土師器杯	12.0	10.9	4.8	ヘラ削り	横ナゲ	横ミゴキ	不整方向ミゴキ	良好	赤褐色	1mm以下の砂粒 少量	96%	
2		土師器小甕	11.6	6.0	13.1	ヘラ削り	横ヘラ削り、口 縁横ナゲ	横ヘラナゲ、口 縁横ナゲ	ミゴキ	良好	赤褐色	1mm以下の砂粒 やや多	50%	
3	カマド	土師器甕	21.8	—	27.0	—	横ヘラ削り、口 縁横ナゲ	ヘラナゲ、口縁 横ナゲ	—	良好	赤褐色	1mm以下の砂粒 少量	20%	5000出土土器目録と併 合

第42表 51号住居跡出土土器観察表



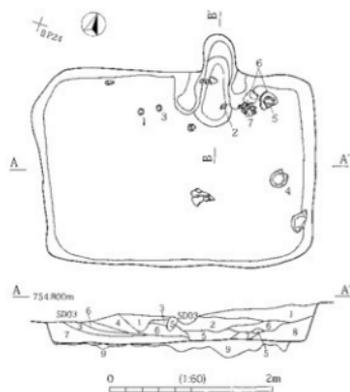
第58図 51号住居跡・出土遺物

52号住居跡 (第59図, PL11・28・29) 位置: 16年度調査区の北部、II P19・24区

形状: 長方形 規模: 東西3.4m、南北2.4m、確認面からの深さ35~45cm 主軸方位: N20°W 遺構の重複: 3・4号溝に切られる。

住居内施設: 床は貼床であるが軟弱で、壁はほぼ垂直に立ち上がる。柱穴、周溝とも見られない。カマドは北壁中央で、基部の地山を掘り残し、褐灰色の粘土を貼って軸が作られていたと思われるが、粘土はほとんどが崩れてしまっている。

堆積状況: 8層のレンズ状の堆積である。遺物出土状況: 土師器坏 (1) と小型の壺 (3) がカマド西方、坏 (2) がカマド内、単孔の甌 (5) と壺 (6・7) がカマド東側の床面、甕 (4) の口縁部が東壁際

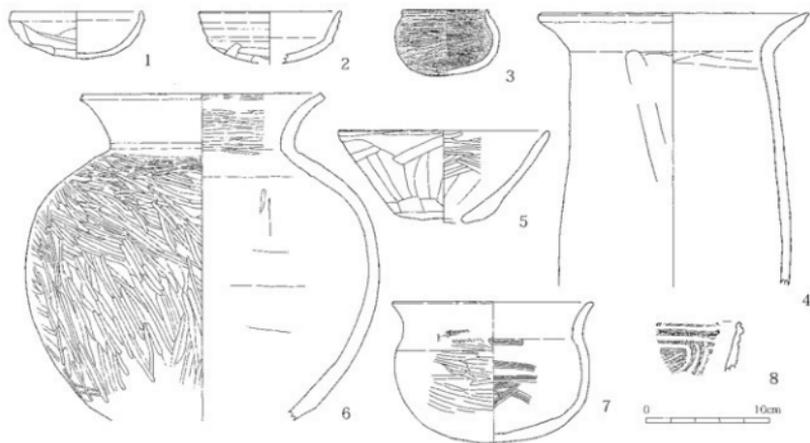


SB52 カマド

1. 黒褐色土を少量含む褐灰色粘質土 (5YR5/1)
2. 黒褐色土 (5YR2/1)
3. 褐灰色土を少量含む黒褐色土 (5YR3/1)
4. にぶい赤褐色土 (5YR4/1)

SB52

1. 黒褐色土 (5YR2/1)
2. 褐灰色土 (5YR4/1)
3. 黒色土塊を少量含む褐色土 (5YR6/6)
4. にぶい赤褐色土・黒褐色土塊を多量に含む褐灰色土 (5YR4/1)
5. 灰褐色粘土 (5YR6/2)
6. 黒褐色土塊を少量含む褐灰色土 (5YR4/1)
7. 褐灰色土 (5YR4/1)
8. 灰褐色土 (5YR4/2)
9. 掘り方



第59図 52号住居跡・出土遺物

床面から出土している。

時期：半球形の坏（1）と須恵器模倣坏（2）の共存から、7世紀後葉のものと考えられる。

番号	器名・器種	口径	高さ	器高	裏面	体形外面	体形内面	底部内面	焼成	色調	胎土	残存率	備考
1	土師器坏	10.5	11.0	3.9	短いヘラ割り	横ナデ	横ナデ	ナデ	—	良好 灰褐色	1～2mmの砂粒 やや多	—	—
2	土師器坏	(11.6)	(10.2)	4.4	ヘラ割り	横ナデ	横ナデ	ナデ	—	良好 灰褐色	細密	40%	裏面に6mm程度の黒点、体形外面にヘラ割りによる凹凸
3	土師器小型器	6.7	3.2	5.4	細かいミゴキ	細かいミゴキ、 上唇ヘラ割り	細かいミゴキ	細かいミゴキ	—	良好 赤褐色	細密	98%	外側面、内面黒色点状
4	土師器甕	21.4	—	現高 22.6	—	縦ヘラ割り、口縁 横ナデ	横ナデ、厚縁斜 面ヘラナデ	—	普通	灰褐色	1～2mmの砂粒 やや多	30%	体形外面に凹凸有
5	土師器瓶	16.9	8.1	7.7	ナデ面すのこば 任痕	下平縁ヘラ割り、 上唇のヘラ割り、口縁横 ナデ	横ナデ縁上平縁 いミゴキ、下平 縁ヘラナデ	ヘラナデ	普通	灰褐色	1～2mmの砂粒 やや多	85%	体形外面に10cm大黒 点
6	土師器甕	19.4	—	現高 27.2	—	ヘラ割り縁上平 縁、下平縁ミゴ キ、口縁横ナデ	横ナデ縁短ヘラ ナデ、口縁横ナ デ後縁ミゴキ	—	良好	灰褐色	1～3mmの砂粒 やや多	25%	体形外面の一部に黒 点、上げ痕
7	土師器甕	15.5	6.8	11.7	砂痕	ミゴキ、口縁横 ナデ	横ナデ後縁斜 面に砂痕、口 縁横ナデ	ナデ	普通	灰褐色	1～2mmの砂粒 やや多	99%	—

第43表 52号住居跡出土土器観察表

53号住居跡（第60園、PL11・29） 位置：16年度調査区の北部、II P24・25区

形状：台形 規模：東西4.0m、南北3.3mだが、西辺が東辺より約40cm短い。確認面からの深さ30～40cm
主軸方位：N1°W 遺構の重複：3・4号溝に切られる。

住居内施設：床は貼床であるが軟弱で、壁はほぼ垂直に立ち上がる。柱穴、溝溝とも見られない。カマドは北壁中央より東寄りであるが、真上を通る4号溝に壊されて、西側の袖の基部の掘り残した地山と煙道、炊き口のみ残り、炊き口の中には袖に構築した粘土やその芯材と思われる礫が落ち込んでいた。

堆積状況：6層のレンズ状の堆積である。遺物出土状況：土師器甕（3）、甕（4）がカマド内、ほかが埋土より出土している。縄文土器（5～7）は、周辺に同時代の遺構がないことから、3・4号溝のカクランに伴う混入と思われる。

時期：半球形の坏（1）、最大径が口縁部の甕（4）があるが、古墳時代的須恵器蓋（2）も残り、7世紀後葉頃と考えられる。

番号	器名・器種	口径	高さ	器高	裏面	体形外面	体形内面	底部内面	焼成	色調	胎土	残存率	備考
1	土師器坏	13.4	—	4.3	ヘラ割り	ヘラ割り、口縁 横ナデ	ミゴキ	ミゴキ	普通	灰褐色	1mm以下の砂粒 やや多	90%	内側面に黒点
2	須恵器蓋	—	—	現高 4.1	—	縦横ナデ	縦横ナデ	—	良好	灰色	1～2mmの砂粒 やや多	5%	—
3	カマド 土師器甕	17.6	—	現高 21.0	—	ヘラ割り、口縁 横ナデ	横ナデ後縁斜 面ヘラナデ	—	普通	灰褐色	1mm以下の砂粒 やや多	50%	体形外面黒点
4	カマド 土師器甕	22.6	—	現高 27.3	—	縦ヘラ割り、口 縁横ナデ	横ナデ	—	良好	灰褐色	1mm以下の砂粒 少量	50%	SR2カマド出土土器 片が複数

第44表 53号住居跡出土土器観察表



第60図 53号住居跡・出土遺物

54号住居跡 (第61図、PL11) 位置: 16年度調査区の北部、II P19区

形状: ほぼ方形 規模: 東西3.3m、南北3.6m、確認面からの深さ5~10cm 主軸方位: N18°W 遺構の重複: 5号溝と352号土坑に切られる。

住居内施設: 床は貼床であるが軟弱である。壁はほぼ垂直に立ち上がる。ピットは、1が直径55cmで床面からの深さ25cmを有し主柱穴とみられるが、他は深さ10cm以下と浅い。周溝は見られない。カマドは北壁中央より東寄り、基部の掘り残した地山と、その前面に芯材の礫を埋めたと思われる穴がわずかに残っ

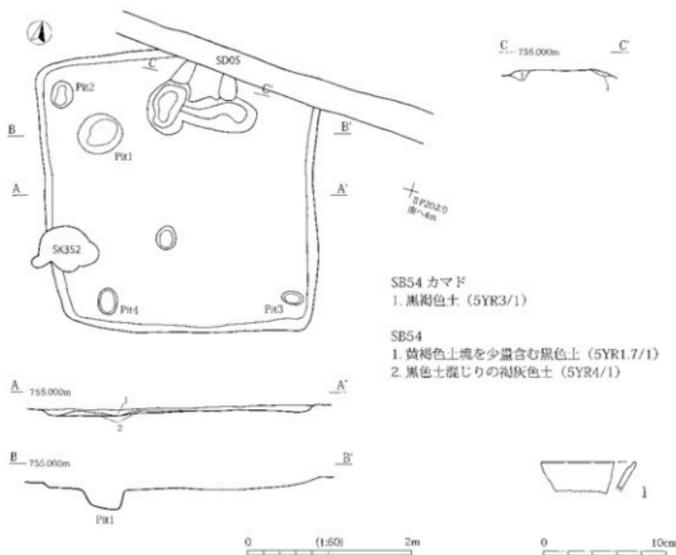
ているが、構築材の粘土はすべて崩れている。

堆積状況：2層に分かれる。**遺物出土状況：**図示した土師器甕口縁部のほか、坏・甕・壺の小片が少量出土した。

時期：不明であるが、周辺と同じ7世紀代のものと思われる。

番号	層位・位置	形状	口径	直径	器高	蓋高	体部外径	体部内径	底径内径	底径	色相	胎土	焼成率	備考
1	カマド前部	—	—	径高2.7	—	横ナゲ	横ナゲ	—	—	—	黄褐色 黒灰色	1m以下の硬砂	5%	—

第45表 54号住居跡出土土器観察表



第61図 54号住居跡・出土遺物

55号住居跡 (第62図、PL11・29) 位置：16年度調査区の北部、II P14・15・19・20区

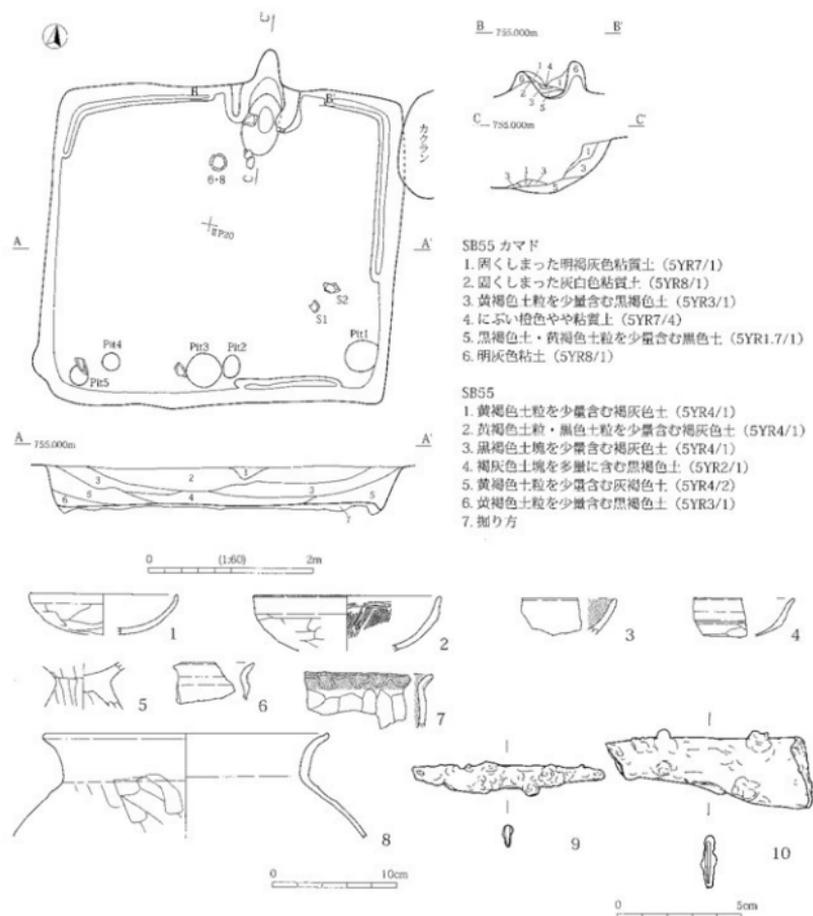
形状：長方形 規模：東西4.3m、南北3.8m、確認面からの深さ45~55cm **主軸方位：**N 6°W **遺構の重複：**1・6号溝に切られる。

住居内施設：床は貼床であるが軟弱。壁はほぼ垂直に立ち上がる。ピットは、南壁際に浅いものがいくつか見られるが、主柱穴にはなりそうもない。ピット2・3は入り口施設に関係するものかもしれない。周溝は、幅20cm、深さ5~10cmでカマド部分を除く北壁から東壁北~中央、南壁東半、西壁北端から北壁の3箇所に見られる。カマドは北壁中央より東寄り、基部の地山を掘り残し、灰白色の粘土を貼って袖が作られ、煙道は短く立ち上がっていた。

堆積状況：6層のレンズ状の堆積である。**遺物出土状況：**土師器坏 (1・2) がカマド内、壺 (6.8) がカマド前方の床面から出土しているほか、坏・甕・高坏などが出土しているが、いずれも小片で接合せず、残りは悪い。

遺物：鉄製品（9）は刀子、（10）は鎌と思われる。

時期：半球形の坏（1）、半球形に近い坏（2）の存在から、7世紀後葉のものと考えられる。



第62図 55号住居跡・出土遺物

番号	壁型・位置	壁幅	口径	高さ	積高	遺物	体部外周	体部内周	底部内周	構成	色調	胎土	残存率	備考
1	土師器坏	(11.8)	(11.8)	現高3.3	積高4.5	ヘラ削り	横ナデ	横ナデ	ナデ	良好	赤褐色	1cm以下の砂粒少量	20%	底面にすこぼれ痕
2	カマド	土師器坏	(14.9)	—	現高4.5	ヘラ削り	横ナデ	横ナデ	横ナデ	良好	赤褐色	1cm以下の砂粒少量	10%	—
3	カマド	土師器坏	—	—	現高3.0	—	横ナデ	横ナデ	—	普通	褐色	1cm以下の砂粒少量	5%	口部外周に凹痕、内面赤褐色、胎土
4	土師器坏	—	—	現高3.2	—	ヘラ削り	横ナデ	横ナデ	ナデ	良好	赤褐色	1cm以下の砂粒少量	5%	—
5	土師器坏	—	—	現高3.7	—	ヘラ削り	横ナデ	横ナデ	ナデ	普通	赤褐色	1～2mmの砂粒やや多量	5%	—
6	土師器坏	—	—	現高3.0	—	—	横ナデ	横ナデ	—	良好	赤褐色	1cm以下の砂粒少量	5%	—
7	土師器坏	—	—	現高4.5	—	ヘラ削り	横ナデ	横ナデ	ナデ	普通	赤褐色	1～2mmの砂粒やや多量	5%	口部外周に凹痕、内面赤褐色、胎土
8	土師器坏	22.6	—	現高8.3	—	ヘラ削り	横ナデ	横ナデ	—	普通	赤褐色	1～2mmの砂粒少量	10%	—

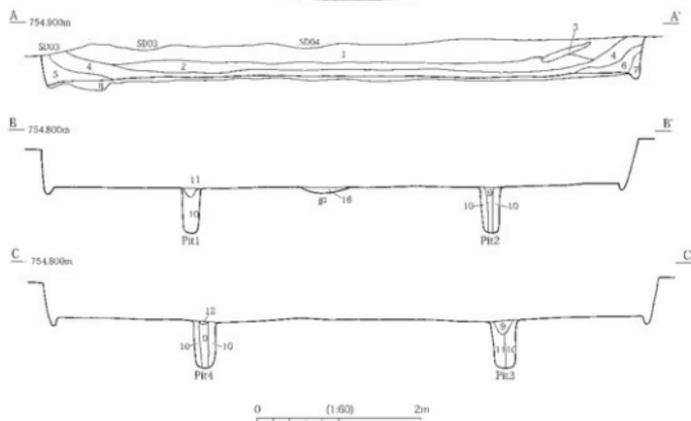
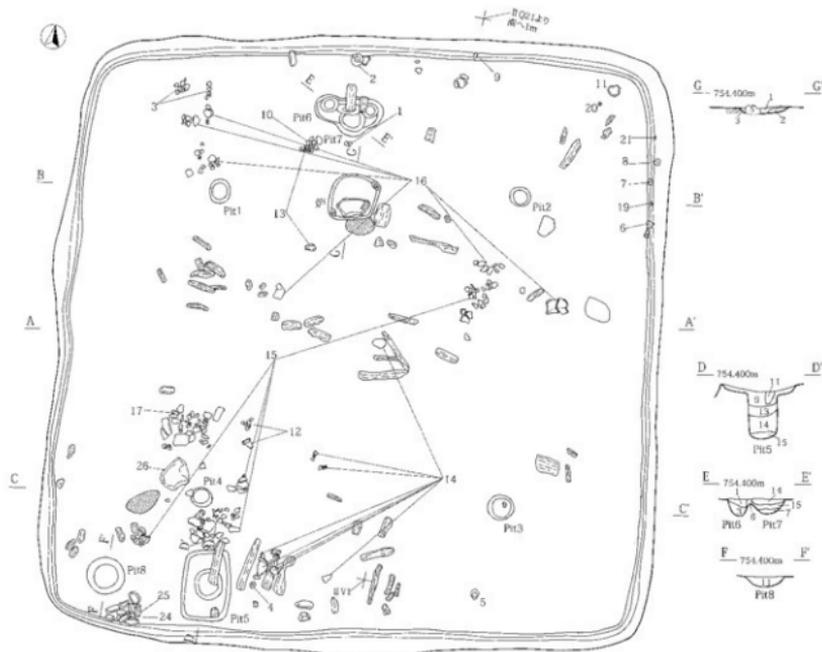
第46表 55号住居跡出土土器観察表

56号住居跡（第63～65図、PL11・12・30～32） 位置：16年度調査区の北部、II P25、Q21、U5、V1区、形状：ほぼ方形 規模：東西7.3m、南北7.6m、確認面からの深さ40～50cm 主軸方位：N9°W 遺構の重複：2・3・4号溝に切られる。

住居内施設：焼失または焼却住居であり、多量の炭化材がわら状になつたものも検出されている。床は貼床で、壁はほぼ垂直に立ち上がる。ピットは、1～4が主柱穴で、直径または長径25～30cmの円形または楕円形と小さめで、床面からの深さは約55cmを計る。このうちピット2・4の断面では直径約10cmで先がやや細くなる柱痕が見られた。南壁際西寄りのところのピット5は、90×60cmの長方形で深さ5cmの中央が、長径40cm、短径35cmの楕円形で深さ55cm窪み、板で蓋がされた貯蔵穴と思われる。炉と北壁の間のピット6・7は、直径30cm、深さ15cmで、周囲に直径20cmの円形や長径30cmの楕円形で深さ15～20cmの小穴が付属している。棟を受けた柱とその補強の柱の穴であろうか。南西隅のピット8は、直径45cmの円形で深さ15cmの皿状のくぼみであるが、性格は不明である。周溝は幅10～15cm、深さ5～10cmで全周している。炉はピット1・2の中間にあり、60cm四方のやや不整形な方形に床面から7～8cm掘り下げられ中の北東と南西の角には炉底面より約3cmくぼんだ7、8cmの小穴が見られ、南半部には40cm×25cmの平石が落ち込んでいた。

堆積状況：7層のレンズ状の堆積である。遺物出土状況：炭化材の下から大量の土器と砥石のほか、石銅が出土している。土師器塊（2）、高坏（3・9・10）、小型丸底埴（6～8）は南北の壁と、東壁の北端の下で出土し、壁際に棚状の施設があったことが想定される。壺（12～17）は、床全面に拡がり、同一個体が分散しているものも多い。砥石（24・25）と白石（26）は南西隅に集中しており、作業場であったと思われる。石銅（19～21）は東北隅の壁際で床面から数cm浮いた位置で出土している。縄文土器（18）は周辺に同時代の遺構がなく混入と見られる。このほか図示はしていないが、こも編み石がピット8の周囲でまとまって出土している。

遺物：砥石は粗いもの（24）、緻密なもの（25）、柔らかいもの（23）とあり、工程により使い分けていたようである。石器（22）は安山岩製のくぼみを持った石であるが用途は不明である。石銅（19～21）は緑色凝灰岩製で淡緑色を呈し、材質・形態の一致から同一個体と見られるが、互いに接合しない。推定される高さは2.2cm、厚さ1.0cm、外径8.6cmで、内径は6.1cmである。各片は、幅2.6～3.4cm（推定全周の約1/10～1/8）で、3片を合わせても全周の約1/3にしかならない。断面形は頂部丸みを帯びるか尖り気味で、外面の文様帯はわずかに凸面となり、文様帯の下端に稜をなして、細い沈線が入り、その下は凹面をなして底面に至る。底面の端部は内外とも丸みを帯び、底面は平坦、頂部までの内面は凹面となる。文様帯の沈線は、約1.5mm間隔で入れられる。よく磨かれて、内面、外面の沈線間の凸部、底面の一部に光沢がある。



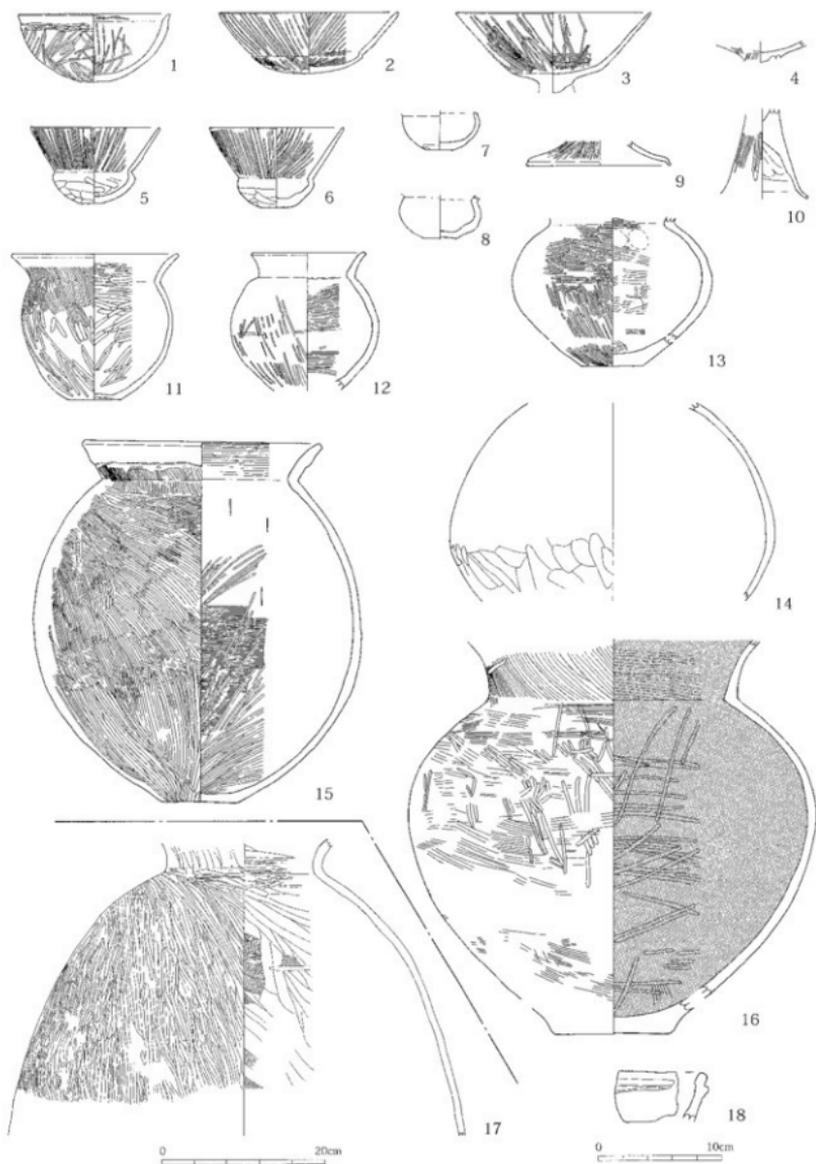
SB56

1. 暗褐色土 (10YR3/3)
2. 炭化物を多量に含む黒色土 (10YR2/2)
3. にぶい黄褐色土 (10YR5/3)
4. 暗褐色土を微量含む褐色土 (10YR4/4)
5. 暗褐色土を少量含む褐色土 (10YR4/4)
6. 黄褐色土塊を少量含む暗褐色土 (7.5YR3/3)
7. 黄褐色土 (10YR5/8)
8. 掘り方
9. 黒褐色砂質土 (10YR2/2)
10. 明黄褐色土 (10YR6/6)
11. 暗褐色砂質土 (10YR3/4)
12. ローム塊
13. しまりのないにぶい黄褐色土 (10YR5/3)
14. 褐色土 (10YR4/4)
15. 黒褐色土 (10YR2/1)

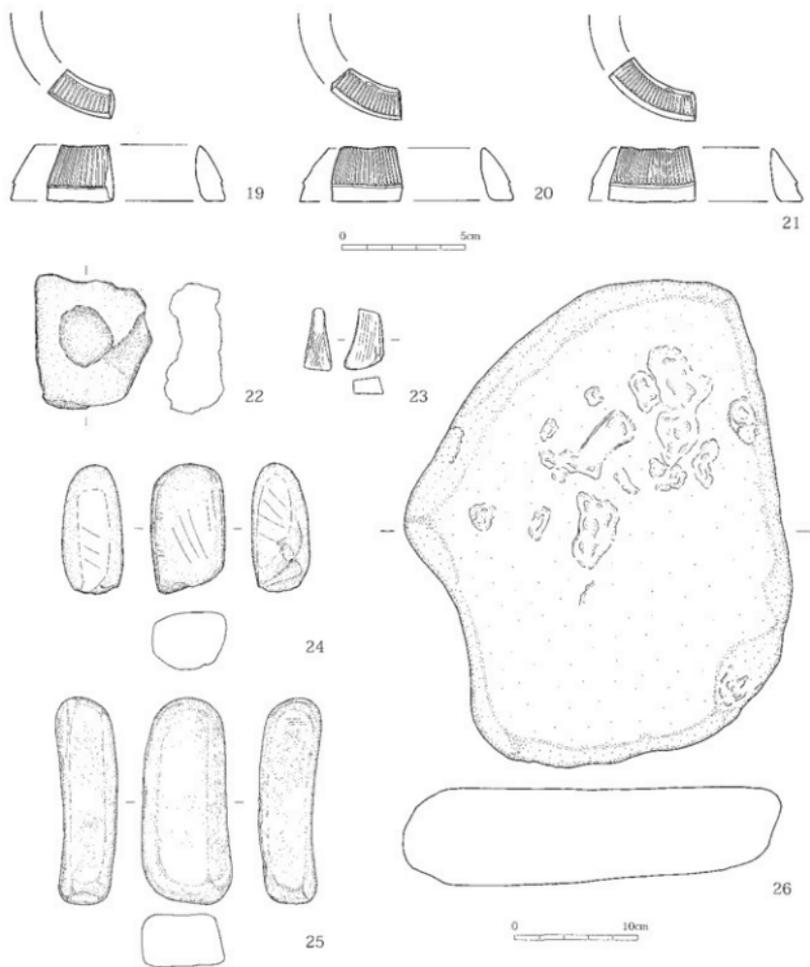
SB56 甲

1. 暗褐色砂質土 (10YR3/4)
2. 黒褐色砂質土 (10YR2/3)
3. 暗赤褐色土 (5YR3/4)

第63図 56号住居跡



第64图 56号住居跡出土遺物 (1)



第65图 56号住居跡出土遺物(2)

第4章 野火燬遺跡

時期：出土土器から古墳時代前期後葉のものと考えられる。

番号	部位・位置	器種	口径	底径	器高	底面	外部外面	内部内面	底部内面	焼色	色票	胎土	残存率	備考	
1		土師器甕	12.1	2.2	5.5	ヘラ削り	ヘラ削り後上縁のみ、口縁部ナゲ	横ナゲ後縁射ミミガキ	ナゲ後縁射ミミガキ	普通	淡赤褐色	1m以下の砂粒少量	70%		
2		土師器甕	14.4	8.9	6.0	ヘラ削り後縁部削ミガキ	横ナゲ後縁部削ミガキ	横ナゲ後縁射ミミガキ	ナゲ後縁射ミミガキ	良好	赤褐色	1~2mmの砂粒やや多	95%		
3		土師器高杯	15.6	—	6.6	坏意型ナゲ	下平ヘラ削り、上平ヘラ削り	上平横ナゲ、下平ヘラ削り	ナゲ後縁ミガキ	普通	褐色	1m以下の砂粒少量	50%	内外面共に黒炭	
4		土師器高杯	—	—	器高1.7	—	ハケ目	—	ミガキ?	良好	淡褐色	1m以下の砂粒少量	5%	内面黒炭	
5		土師器小型丸底甕	10.3	2.0	6.2	ヘラ削り	ヘラ削り、口縁部の削いミガキ	ヘラ削り、口縁部の削いミガキ	ヘラナゲ	良好	淡褐色	1~2mmの砂粒やや多	80%		
6		土師器小型丸底甕	10.6	3.0	6.5	ヘラ削り	ヘラ削り、口縁部の削いミガキ	横ナゲ、口縁部の削いミガキ	ナゲ	良好	明赤褐色	1~5mmの砂粒やや多	90%		
7		土師器小型丸底甕	—	—	器高2.9	ヘラ削り	横ナゲ、下縁ヘラ削り	横ナゲ	ナゲ	普通	暗褐色	1m以下の砂粒少量	40%		
8		土師器小型丸底甕	—	—	器高2.8	押タヌ	横ナゲ	横ナゲ	ナゲ	良好	明褐色	1m以下の砂粒少量	40%		
9		土師器高杯	—	—	器高2.0	横ナゲ内面ナゲ	胎外黒炭のミガキ	—	—	良好	淡赤色	1m以下の砂粒少量	5%		
10		土師器高杯	—	—	—	ヘラ削り	ナゲ後縁ミガキ	—	—	良好	赤褐色	1m以下の砂粒少量	10%		
11		土師器甕	(13.4)	4.1	11.9	ミガキ	ヘラ削り後上平ヘラ削り、下平ヘラ削り	横ナゲ後ミガキ	ヘラナゲ	良好	淡褐色	1m以下の砂粒少量	70%		
13		土師器甕	9.0	—	器高11.2	—	ナゲ後上平ミガキ、下縁ヘラ削り、口縁部削ミガキ	横ナゲ後一型ハケ目、口縁部削ミガキ	—	普通	褐色	1m以下の砂粒少量	70%		
14		土師器甕	—	5.0	器高12.0	ヘラ削り	上平横ナゲ、下平横ナゲ	ハケ目、上縁部削ミガキ	ハケ	普通	淡赤褐色	1m以下の砂粒少量	40%		
15		土師器甕	—	—	器高16.0	—	下平ヘラ削り、上平横ナゲ削いハケ目	横ナゲ	—	普通	淡褐色	1m以下の砂粒少量	20%	外周赤彩・敷瓦	
16		土師器甕	19.0	6.3	29.3	ヘラ削り後上縁部削ミガキ	ヘラ削り後上縁部削ミガキ、口縁部削ミガキ	横ナゲ後上縁部削ミガキ、口縁部削ミガキ	横ナゲ後上縁部削ミガキ	良好	褐色	1m以下の砂粒少量	95%		
17		土師器甕	—	9.2	器高12.0	ヘラ削り	ハケ削り後上縁部削ミガキ	横ナゲ後上縁部削ミガキ、口縁部削ミガキ	横ナゲ後上縁部削ミガキ	普通	赤褐色	1~2mmの砂粒やや多	70%		
18		土師器甕	—	—	器高15.1	—	上平横ナゲ、下平ヘラ削り、口縁部削ミガキ	横ナゲ後上縁部削ミガキ、口縁部削ミガキ	横ナゲ後上縁部削ミガキ	—	良好	赤褐色	1~2mmの砂粒少量	40%	

第47表 56号住居跡出土土器観察表

57号住居跡（第66図、PL12） 位置：16年度調査区の北西部、II P16・17区

形状：長方形（推定） 規模：東西5.0m程度（推定）、南北4.6m、確認面からの深さは40~50cm 主軸方位：N20°W 遺構の重複：3・4号溝に切られる。

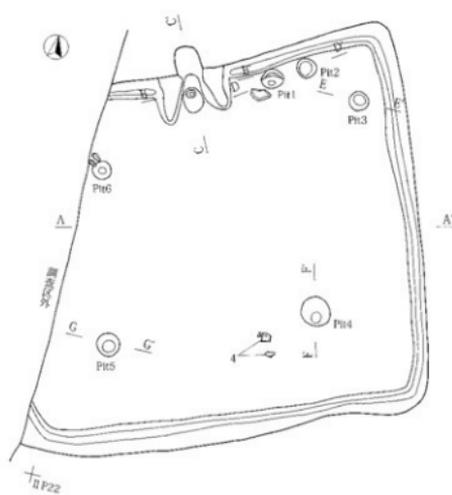
住居内施設：床は貼床であるが軟弱で、壁はほぼ垂直に立ち上がる。ピットは、4~6が支柱穴で、直径25~35cmの円形で床面からの深さ40~50cm。そのほかのピット1~3は壁に近すぎるうえ深さも15~20cmと浅く支柱穴とは考えられない。溝溝は、幅15~20cm、深さ5~10cmで全周している。カマドは北壁中央で、基部の地山を掘り残し、褐灰色の粘土を貼って袖が作られ、煙道は短く立ち上がっていた。

堆積状況：6層のレンズ状の堆積である。 遺物出土状況：土師器甕底部（4）が床面から出土しているほか、坏（1・2）、埴（3）、鉢（5）、砥石（6）などが埋土から出土している。

時期：須恵器坏を模倣した土師器坏（1・2）の立ち上がりが高く、7世紀後葉頃のものと考えられる。

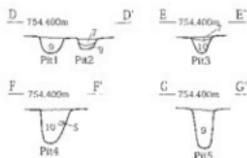
番号	部位・位置	器種	口径	底径	器高	底面	外部外面	内部内面	底部内面	焼色	色票	胎土	残存率	備考
1		土師器坏	(12.8)	(13.0)	器高2.9	ヘラ削り	横ナゲ	横ナゲ	ナゲ	普通	淡赤褐色	1m以下の砂粒少量	5%	
2		土師器坏	(13.6)	(14.0)	4.3	ヘラ削り	横ナゲ	横ナゲ	ナゲ	良好	赤褐色	1~2mmの砂粒少量	30%	
3		土師器甕	—	—	器高4.9	—	上平横ナゲ、下平ヘラ削り	横ナゲ	—	普通	淡褐色	1~2mmの砂粒少量	5%	内面黒色処理
4		土師器甕	—	—	器高5.5	ヘラ削り	ヘラ削り	横ナゲ	ナゲ	普通	暗褐色	1~3mmの砂粒やや多	5%	内外面とも焼き上げ粘土製の割れ産
5		土師器体	(15.8)	—	器高9.0	—	下平ミガキ、上平ヘラ削り、口縁部削ミガキ	横ナゲ後上縁部削ミガキ	—	良好	淡赤色	1m以下の砂粒やや多	10%	

第48表 57号住居跡出土土器観察表



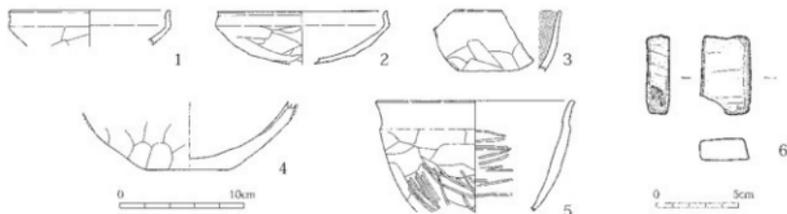
SB57 カマド

1. 明褐色灰やや粘質土 (5YR7/2)
2. にぶい赤褐色土 (5YR4/4)
3. 褐灰色土 (5YR4/1)
4. 褐灰色土・軽石を少量含むにぶい赤褐色土 (5YR4/4)
5. 黒褐色やや砂質土 (5YR2/1)



SB57

1. 黒褐色土 (5YR2/1)
2. 黄褐色土塊を少量含む灰褐色土 (5YR4/2)
3. 砂利とにぶい赤褐色土塊を少量含む暗赤褐色土 (5YR3/3)
4. 砂利を少量含むにぶい赤褐色土 (5YR4/3)
5. 黒褐色土塊を少量含む暗赤褐色土 (5YR3/3)
6. 砂利を少量含む黒褐色土 (5YR3/1)
7. 黄褐色土混じりの黒褐色土 (5YR4/4)
8. 掘り方
9. 褐灰色土 (5YR4/1)
10. 2～3cmの礫をやや多量に含むにぶい赤褐色土 (5YR4/3)



第66図 57号住居跡・出土遺物

3 掘立柱建物跡

3号掘立柱建物跡 (第67図) 位置: 15年度調査西区の北東部、I X 3・8区

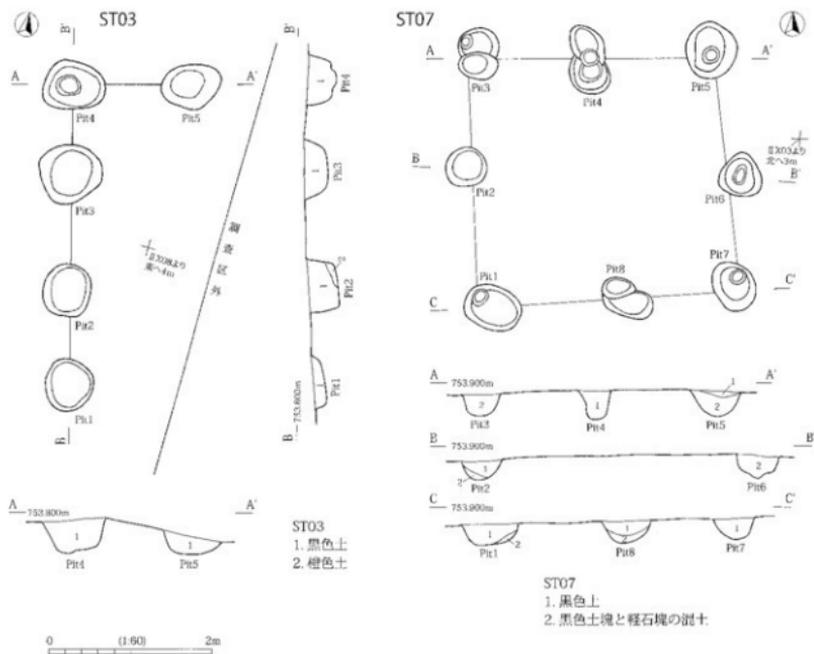
形状: 側柱建物 規模: 図面上では上信越自動車道地区内の3号掘立柱建物と同一の遺構で、両地区の検出分を合わせると、桁行3間、梁間2間で3.7m×2.8m、桁行の柱間は心々で1.15、1.4、1.15m、梁間の柱間は同1.4m 長軸方位: N15°W

遺構の重複: なし

柱穴: 直径または長径65~80cmの円形または楕円形で、確認面からの深さ15~35cmである。ピット4の底面には長径30cm、短径25cmの楕円形で底面からの深さ7cm、柱のめり込みによると見られるくぼみがある。埋土はほぼ単層で、柱痕はどのピットの断面でも見られなかった。

遺物出土状況: 皆無

時期: 不明



第67図 3・7号掘立柱建物跡

7号掘立柱建物跡（第67図） 位置：15年度調査西区の北東部、I S22区

形状：側柱建物 規模：桁行2間、梁間2間で2.8～2.95m×2.75～2.8m、桁行の柱間は心々で1.3～1.65m、梁間の柱間は同1.25～1.7m 長軸方位：E7°N

遺構の重複：ないが、ピット3・4・8で建て替えによると見られるピット同士の切り合いがある。

柱穴：直径または長径50～70cmの円形または楕円形で、確認面からの深さ15～25cmである。ピット1・3～7の底面には、直径または長径20～25cmの円形または楕円形で、底面からの深さ5～10cmの柱のめり込みによると見られるくぼみがある。埋土はほぼ単層で、柱痕はどのピットの断面でも見られなかった。

遺物出土状況：皆無 時期：不明

9号掘立柱建物跡（第68図、PL12） 位置：15年度調査東区の南西部、II K22・23、P2・3区

形状：側柱建物 規模：桁行5間、梁間3間で9.7～9.8m×5.0m、桁行の柱間は柱痕間で1.7～2.2m、梁間の柱間は柱痕間または心々で1.4～1.9m 長軸方位：N18°W

遺構の重複：36号住居跡を切る。南端部をカクランに切られる。

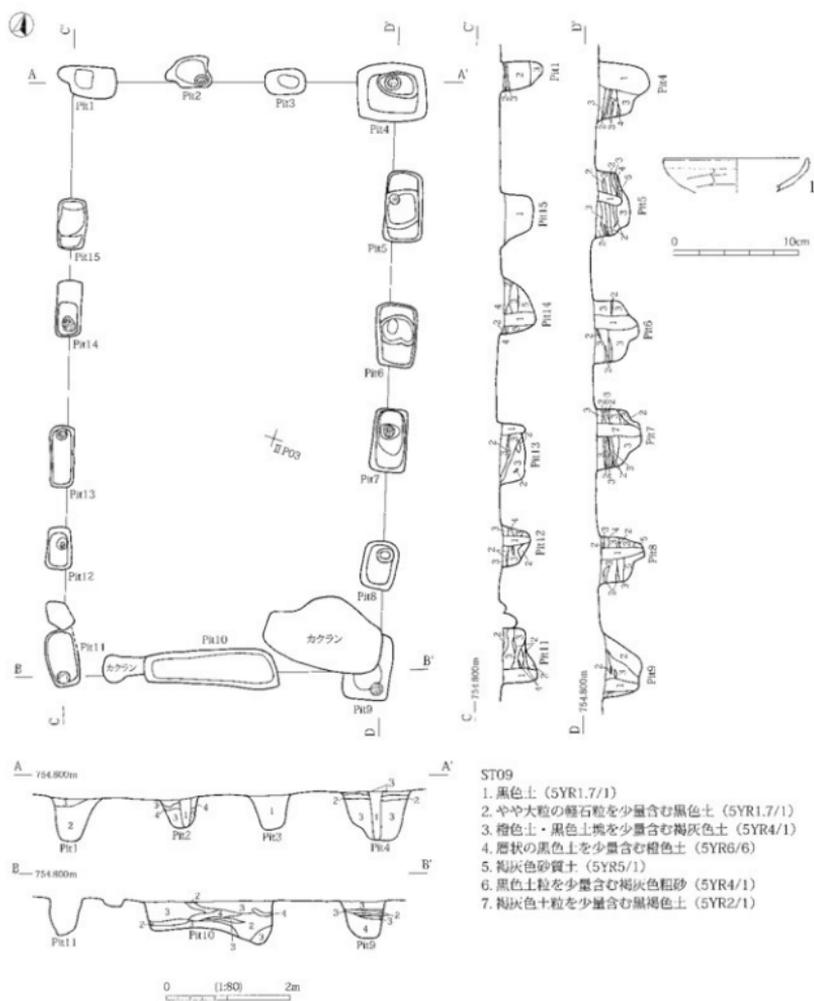
柱穴：平側（桁行方向）が40×70cm～100×120cmの長方形なのに対して、妻側（梁間方向）の中間は、50×50cmの方形または65×40cmの長方形と小さめである。南側の梁間のピット10は柱2本分兼用で210×60cmの長大な長方形のは掘方となっている。底面は平らなものもあるが（ピット3・13・15）、丸いもの（ピット1・2・10～12・14）や、2段になっているもの（ピット4～9）もある。ピット2・4～9・11～14の平面及び断面で直径15～20cmの柱痕が見られ、そのほとんどで柱の埋め込み時の叩き締めに伴う縞状の層が見られた。

遺物出土状況：図示した土師器坏（1）がピット4から出土したほか、ピット5・9・10から土師器坏・甕片が出土しているが、小片のため図示できなかった。

時期：36号住居跡を切り、半球形の土師器坏のみが出土していることから、7世紀末～8世紀初頭のものと思われる。

遺物 番号	器種	口形	底形	器高	底径	外部外圍	内部内圍	底面内徑	焼成	色澤	胎土	残存率	備考
1	Fig. 4 土師器坏	(11.5)	—	遺高 2.7	ヘラ形	横ナテ	横ナテ	ナテ	良好	灰中褐色	1m以下Fの砂粒 やや多	5%	

第49表 9号掘立柱建物跡出土土器観察表



第68図 9号掘立柱建物跡・出土遺物

10号掘立柱建物跡（第69図、PL12） 位置：15年度調査東区の南西部、ⅡK23・24、P3・4区

形状：側柱建物 規模：桁行4間、梁間2間で7.0～7.1m×5.0m、桁行の柱間は心々で1.5～1.9m、梁間の柱間は同2.4～2.6m 長軸方位：E12°N

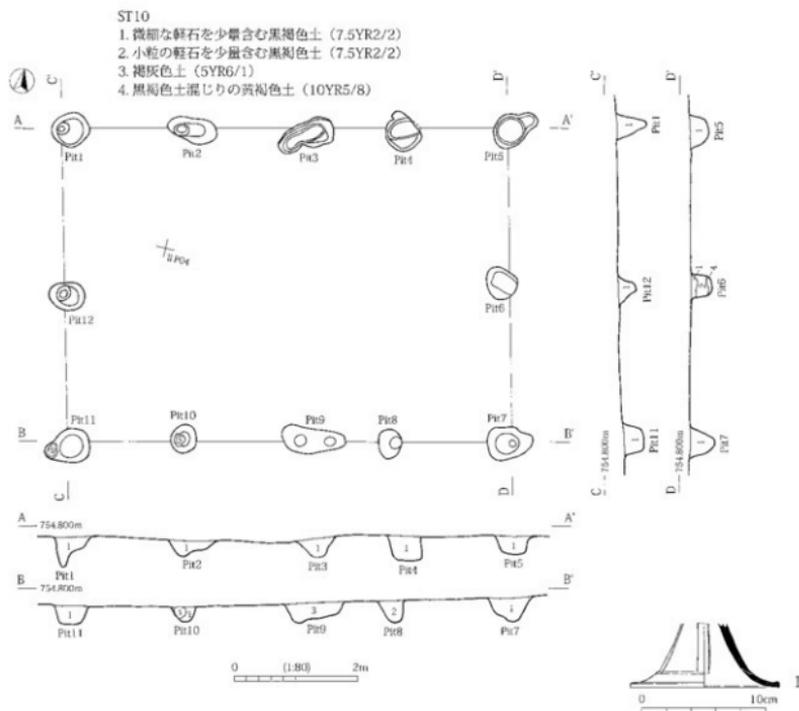
検出面：浅間軽石層上面 遺構の重複：なし

柱穴：直径長径50～60cmのほぼ円形であるが、ピット5は柱の倒壊に伴うと思われる張り出し部があり、ピット3・9も柱の倒壊または、切り合う土坑との結合により、長径100cmの長円形となっている。確認面からの深さは15～40cmで、ピット1・2・12の底面には、直径または長径25cmの円形または楕円形で底面からの深さ10～20cmの柱のめり込みによると見られるくぼみがある。埋土はほぼ単層で、柱痕はどのピット断面にも見られなかった。

遺物出土状況：ピット4から方形の透かしを持つ長脚の須恵器高坏脚部片(1)が出土しているのみである。

時期：7世紀代のものと思われる。

所見ほか：本建物跡の東側、ⅡK25・P5区にかけても、南側の柱筋をほぼ揃えた南面庇の建物がありそうであるが（第14図）、柱の並びがよくないために掘立柱建物とはしなかった。床を柱で支えない平地式の建物ならあり得たかも知れない。



第69図 10号掘立柱建物跡・出土遺物

番号	拠点・位置	遺構	Li径	底径	底高	体部外面	体部内面	底面内面	焼成	色調	胎土	灰含有	備考
1	Plc 4	瓦器器高杆	—	(12.0)	残高 5.2	—	回転ナテ	回転ナテ	—	灰緑 灰色	黒灰	5%	方形透かし4方

第50表 10号掘立柱建物跡出土土器観察表

11号掘立柱建物跡 (第70図、PL12) **位置**: 15年度調査東区の西部、II K14・18・19区

形状: やや歪な方形の側柱建物 **規模**: 桁行2間、梁間2間で2.9～3.1m×2.7～2.8m、桁行の柱間は心々で1.4～1.6m、梁間の柱間は同1.3～1.4m、**長軸方位**: N17°W

遺構の重複: 39号住居跡を切る。

柱穴: 平側の方が直径50cmの円形～長径90cmの楕円形で確認面からの深さ15～30cmなのに対して、妻側の中間のピットは40～50cmの円形と小さめで、深さも10～15cmと浅めである。ピット3の底面には、直径15～20cmの円形で底面からの深さ5～10cmのくぼみが3個ある。ピット6・7については、調査上の手違いから、上端の記録のみで、切っている39号住居跡を掘り下げてしまったために、上端以外の形状は不明である。埋土はほぼ単層で、柱痕はどのピットにも見られなかった。

遺物出土状況: 皆無

時期: 39号住居跡を切ることから7世紀以後と思われる。

12号掘立柱建物跡 (第70図、PL12) **位置**: 15年度調査東区の中央部、II K14・15・19・20区

形状: 側柱建物 **規模**: 桁行2間、梁間2間で2.7m×2.4m、桁行の柱間は心々で1.3～1.4m、梁間の柱間は1.1～1.3m **長軸方位**: E14°Nで、11号掘立柱建物跡とは約90°振れる。

遺構の重複: なし

柱穴: 平側（桁行方向）の方が直径60～80cmの円形または1辺70cmの隅丸方形で確認面からの深さ30～40cmなのに対して、妻側（梁間方向）の中間のピットは40～50cmの円形と小さめで、深さも15cmと浅めである。ピット7の底面には、直径15cmの円形で底面からの深さ7cmのくぼみがあり、柱のめり込みによるものと思われる。埋土はほぼ単層で、柱痕はどのピット断面にも見られなかった。

遺物出土状況: 土師器壺片が出土しているが、小片で図示できなかった。

時期: 不明

13号掘立柱建物跡 (第70図) **位置**: 15年度調査東区の西部、II L6・11区

形状: 側柱建物 **規模**: 桁行1間、梁間1間で2.4m×2.4～2.0m **長軸方位**: N25～35°W

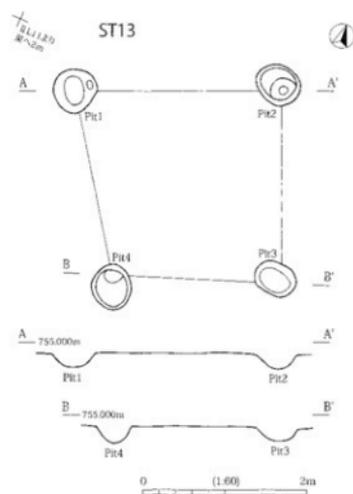
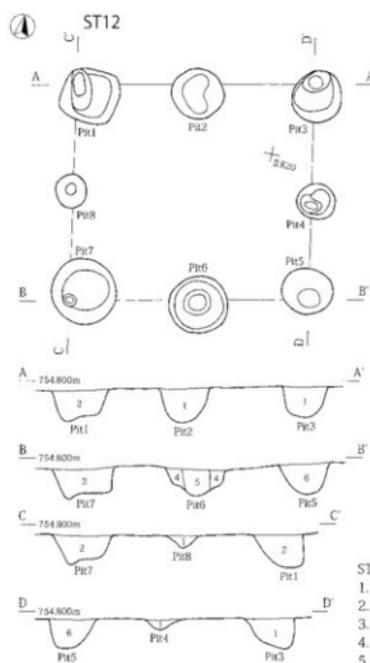
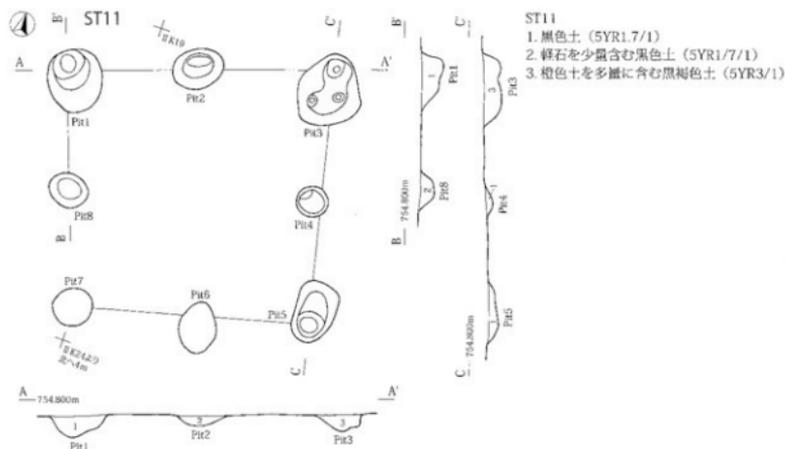
遺構の重複: なし

柱穴: 直径または長径50cmの円形または楕円形で確認面からの深さ15～25cmである。埋土は単層で、柱痕はどのピットにも見られなかった。

遺物出土状況: 皆無

時期: 不明

所見ほか: 形はやや歪であるが、他の土坑の希薄なところで大きさ、深さの揃った土坑が方形にまとまるため、掘立柱建物跡とした。



第70図 11・12・13号掘立柱建物跡

14号掘立柱建物跡 (第71図、PL12) 位置: 15年度調査東区の南部、II Q 1・6区

形状: 台形の側柱建物 (推定) 規模: 桁行2間、梁間2間で4.0m×4.4m、南側のみ妻側の中間の柱が2本の3間、桁行の柱間は心々で2.0m、梁間の柱間は北妻側が2.2m、南妻側の東西の外側が1間1.7m、中間が1.0m 長軸方位: E14°W

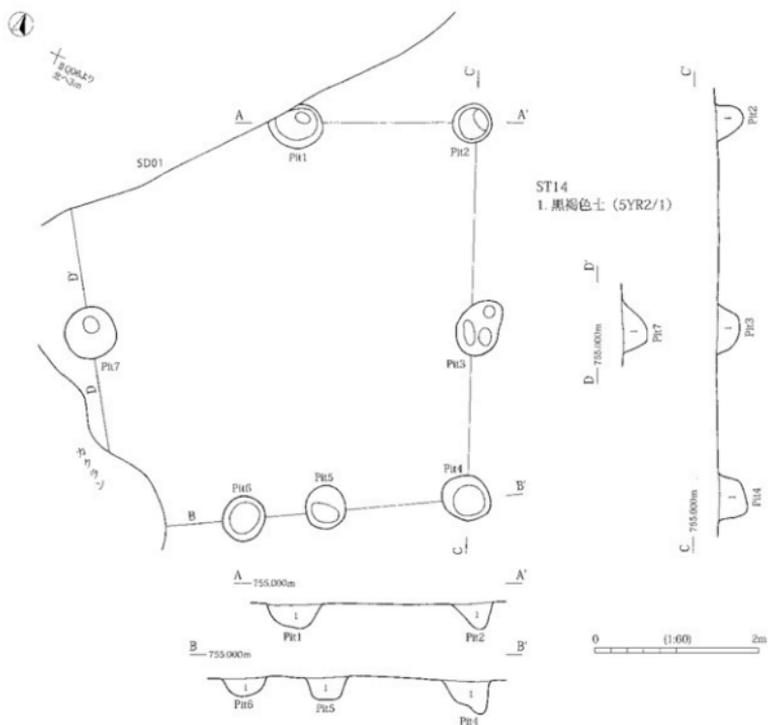
遺構の重複: 北西部を1号溝に切られる。南部にカクランあり

柱穴: 直径または長径50~70cmの円形または楕円形で、確認面からの深さ25~35cmである。埋土はほぼ単層で、柱痕はどのピットにも見られなかった。

遺物出土状況: 土師器坏・甕が出土しているが、小片で図示できなかった。

時期: 不明

所見ほか: 南妻側中央の柱間の狭いピット5・6間が出入口か。東辺と南辺の間が鈍角(100°)であり、西辺のピット7が中心で折り返した位置よりやや外側に位置するなど、必ずしも柱の並びはよくないが、各ピットの大きさや深さが揃っており、掘立柱建物とした。



第71図 14号掘立柱建物跡

15号掘立柱建物跡（第72図） 位置：16年度調査区の南西部、II U16・17・21・22区

形状：側柱建物 規模：調査区内で桁行2間、梁間2間で3.4～3.65m×3.75mであるが、西辺の梁間の中間の柱がないことから、西側の調査区外に桁行がもう1間程度延びる桁行3間、梁間2間の建物であると思われる。桁行の柱間は心々で1.55～2.1m、梁間は東の妻側で1間1.8～1.95m 長軸方位：W1°N
遺構の重複：なし。西部は調査区外である。

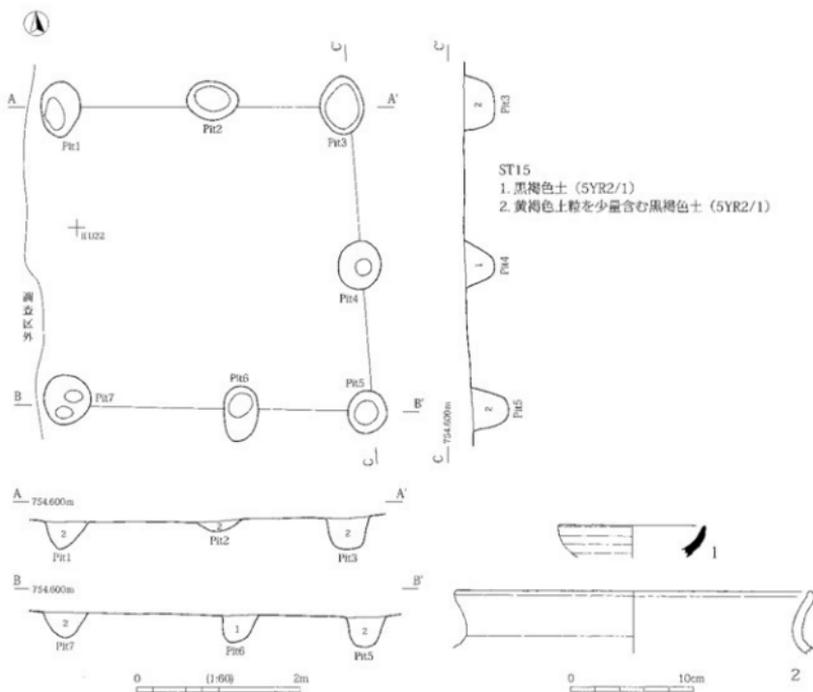
柱穴：直径または長径50～70cmの円形または楕円形で、確認面からの深さ15～40cmである。埋土はほぼ単層で、柱痕はどのピットにも見られなかった。

遺物出土状況：図示した須恵器坏（1）、土師器壺（2）のほか、土師器坏・壺片が出土している。

時期：丸底と思われる須恵器坏（1）の存在から7世紀末～8世紀初頭頃のものと思われる。

番号	遺物 記号	器種	口径	底径	底厚	外部形状	内部形状	底面形状	焼成	色調	出土 状況	埋存率	備考
1	Plr 4	須恵器坏	(11.7)	—	底高 2.6	楕円ナデ	楕円ナデ	—	—	外面黒 灰色、 内面赤 褐色	1m以下の砂粒 少量	3%	外面薄い自然釉
2	Plr 1	土師器壺	(28.5)	—	底高 5.0	楕円ナデ	楕円ナデ	—	—	良好 赤褐色	1～5mmの砂粒 やや多	1%	

第51表 15号掘立柱建物跡出土土器観察表



第72図 15号掘立柱建物跡・出土遺物

16号掘立柱建物跡 (第73図、PL13) 位置: 遺構 16年度調査区の中央部、II U 9・10区

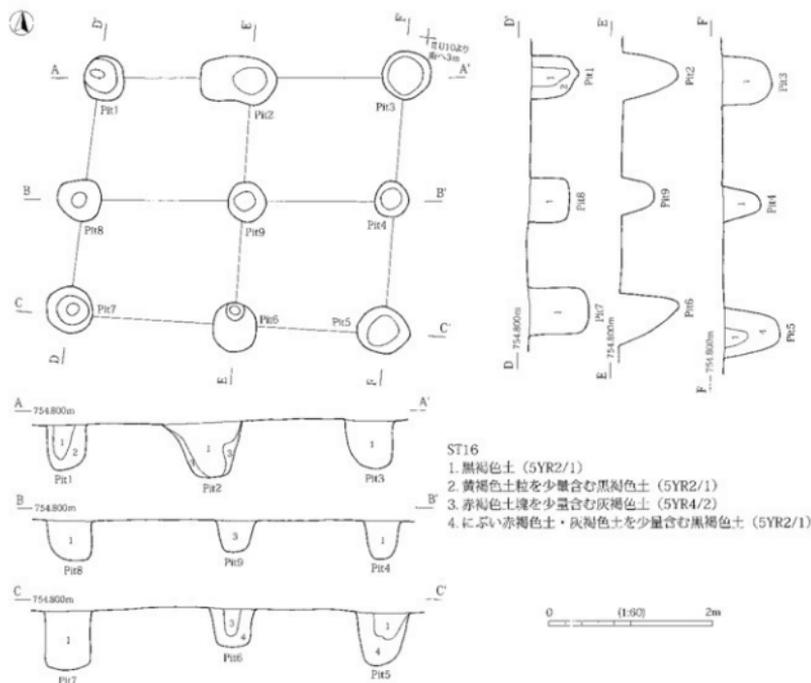
形状: 総柱建物 規模: 桁行2間、梁間2間で2.8~3.1m×3.7~3.9m、桁行の柱間は心々で1.8~2.0m、梁間は同1.3~1.6m 長軸方位: 南北で異なり、E3~6°N

遺構の重複: なし

柱穴: ビット2が長径80cmの楕円形であるのを除くと、いずれも直径45~60cmの円形で、確認面からの深さ50~75cmと深い。埋土はほぼ単層であるが、ビット1・5・6の断面では径20~25cmの柱痕が見られた。

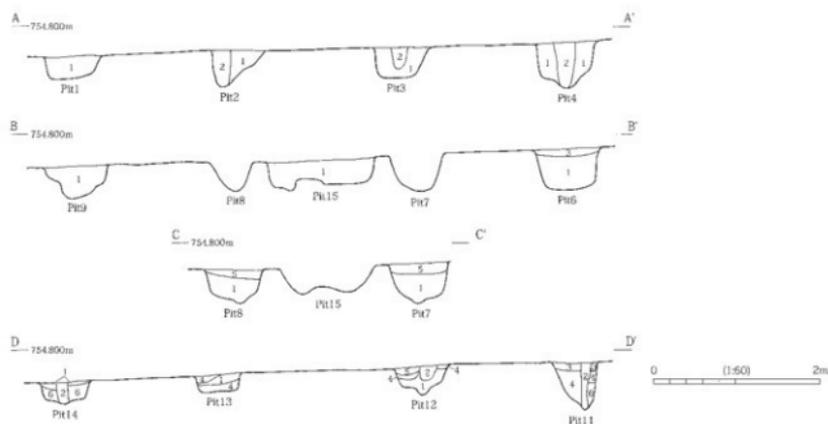
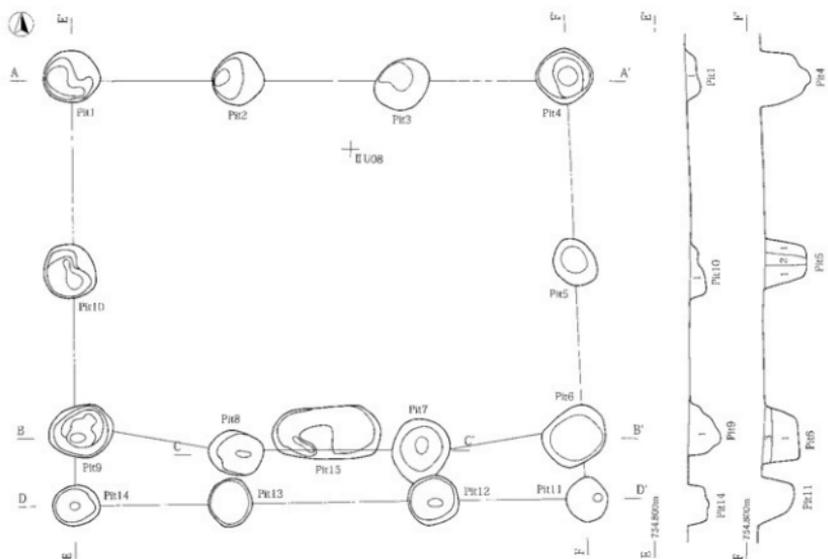
遺物出土状況: ビット2・3から土師器片が出土しているが、小片で図示できなかった。

時期: 不明



17号掘立柱建物跡 (第74図、PL13) 位置: 16年度調査区の西部、II U 2・3・7・8区

形状: 前面庇付の側柱建物、南側の桁行中央のビット7・8は南東・南西角のビット6・9を結んだ線よりも15~20cm外にずれており、その間の長円形のビット15はこの線上に載っている。規模: 桁行3間、梁間2間で5.95m×4.3~4.4m、桁行の柱間は心々または、心一柱痕、柱痕間で東西の外側が1.8~1.95m、内側が2.05~2.2mと、内側が外側に比べて広めとなっている。梁間は心々または心一柱痕間で1.95~2.35m、南平側と庇柱間の距離は、平が直線でないため外側と内側で異なり、外側が80cm、内側が60~



ST17

1. 黒褐色土 (5YR2/1)
2. 棕色土塊を少量含む
褐色土 (5YR4/1)
3. 黒褐色土を少量含む棕色土 (5YR7/6)
4. 黒色土粒・棕色土粒をやや多量に含む黒褐色土 (5YR3/1)
5. 棕色土塊・棕色土を少量含む黒褐色土 (5YR3/1)
6. 黒褐色土・褐色土塊を多量に含む棕色土 (5YR7/6)

第74図 17号掘立柱建物跡

65cm 長軸方位：E 2° N

遺構の重複：49号住居跡と114号土坑を切る。

柱穴：側柱のビット1～10が直径60～85cmの円形または円形に近い楕円形で確認面からの深さ30～50cm、庇柱のビット11～14が直径55～60cmのほぼ円形で確認面からの深さ35cm、南側中央のビット15が長径110cm、短径65cmの長円形で確認面からの深さ35cmで中央部が10cm浅い。埋土は、単層か2～3層の水平な堆積で、ビット2～5・11・12・14の断面で計20～25cmの柱痕が見られた。

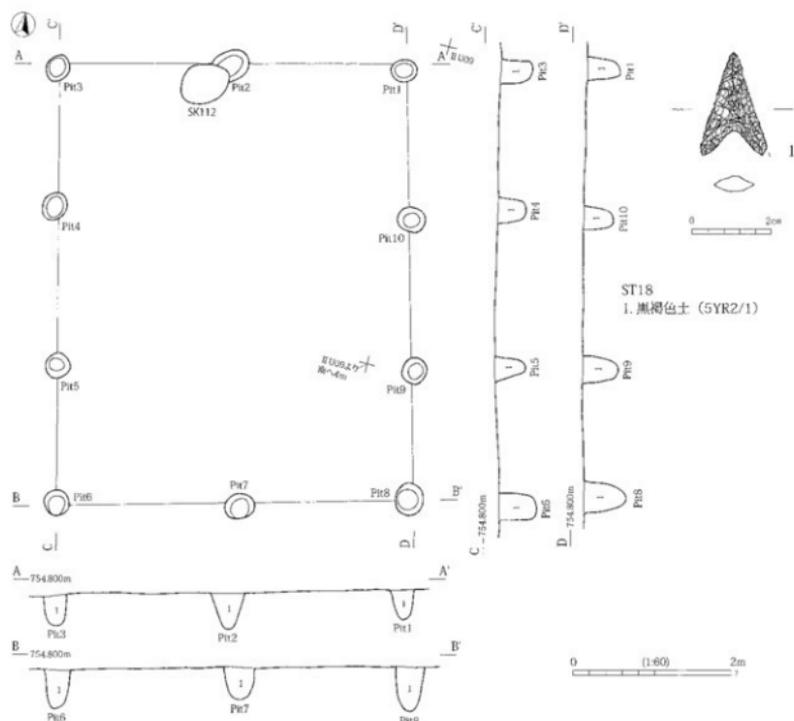
遺物出土状況：ビット1・3～7・10・11・13から土師器杯・壺・壺片が出土しているが、いずれも小片で図示できなかった。

時期：49号住居跡を切ることから、7世紀中葉以後と思われる。

所見ほか：ビット7・8間が出入口で、その両側の柱のみが壁の外側に出ていたものと思われる。

18号掘立柱建物跡 (第75図、PL13) 位置：16年度調査区の西部、II U 8・9区

形状：側柱建物 規模：桁行3間、梁間2間で5.25～5.3m×4.2～4.3m、桁行の柱間は心々で1.65～1.95m、梁間は同2.1～2.25m 長軸方位：N14° W



第75図 18号掘立柱建物跡・出土遺物

遺構の重複：112号土坑に切られる。

柱穴：直径30～40cmの円形と小さめであるが、確認面からの深さは30～55cmと深い。埋土は単層で、柱痕はどのピットにも見られなかった。

遺物出土状況：ピット7から黒曜石製の石鏃（1）が出土しているが混入である。そのほかに出土遺物はない。

時期：不明

19号掘立柱建物跡（第76図、PL13） 位置：16年度調査区の北東部、II Q22区

形状：ほぼ正方形の側柱建物 規模：桁行1間、梁間1間、桁行の柱間は心々2.45～2.7m、梁間で同2.55～2.6m 長軸方位：E41°N

遺構の重複：324号土坑に切られる。

柱穴：ピット1が長径95cm、短径60cmの楕円形であるのを除くと、直径60～65cmの円形で、確認面からの深さは55cm前後と揃っている。埋土は単層で、柱痕はどのピットにも見られなかった。

遺物出土状況：半球形の土師器杯（1）がピット2から出土しているほか、ピット1～3から土師器甕・壺・坏片が出土している。

時期：7世紀後葉頃と思われる。

番号	部位・位置	形状	口径	底径	高さ	底面	底部外面	底部内面	底面内面	底面	色澤	胎土	残存率	備考
1	Fig 2 土師器杯		11.4	—	見透 2.9	ハツ割り	楕円形	楕円形	円形	良好	灰赤褐色 1～2mmの砂粒 少量		5%	

第52表 19号掘立柱建物跡出土土器観察表

20号掘立柱建物跡（第76図） 位置：16年度調査区の東部、II V3区

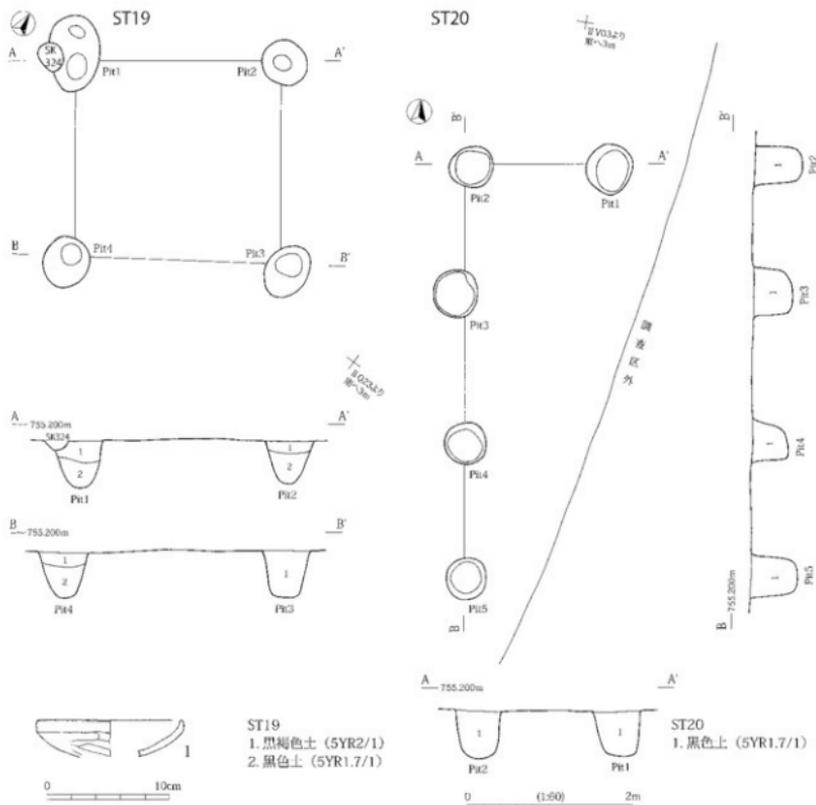
形状：側柱建物 規模：調査区内で、桁行3間、梁間1間で5.0m×1.65mであるが、東側の調査区外へ梁間がもう1間程度延びる桁行3間、梁間2間の建物であったと思われる。桁行の柱間は心々で南北の角幅が1.55m、その間が1.9m、梁間は同1.65m 長軸方位：N8°W

遺構の重複：なし。東部は調査区外である。

柱穴：直径50～60cmのほぼ円形で、確認面からの深さは40～60cmと揃っている。埋土は単層で、柱痕はどのピットにも見られなかった。

遺物出土状況：皆無

時期：不明

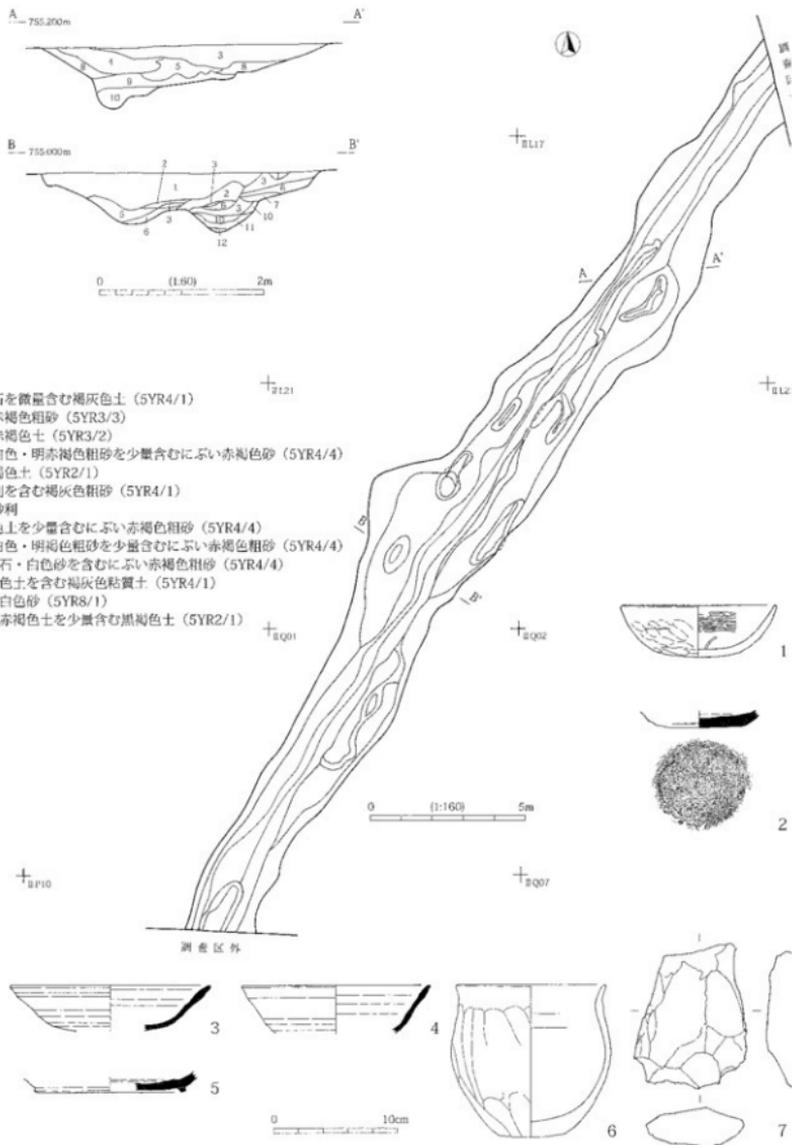


第76図 19・20号掘立柱建物跡・出土遺物

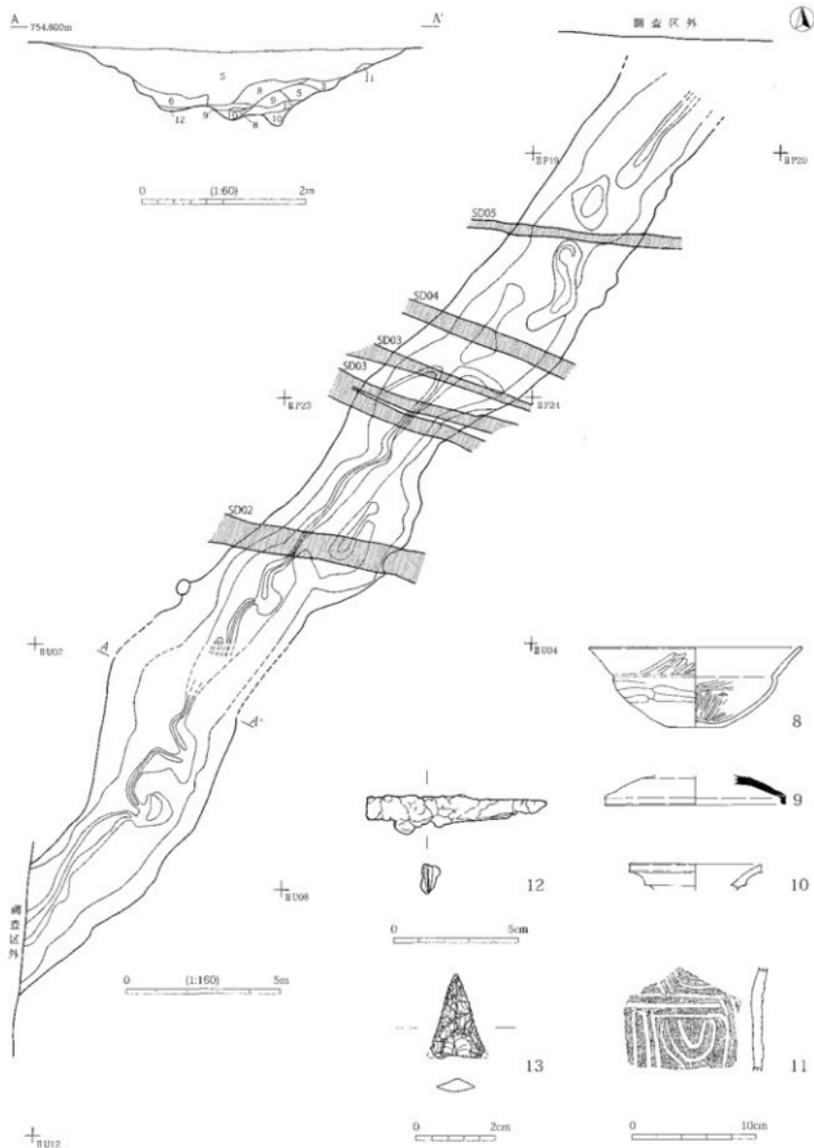
4 溝跡

1号溝跡 (第77・78図, PL13・14・32・33) **位置**: 15年度調査東区の南西部、II L12・13・16・17・21・22、P5・10、Q1・6区、16年度調査区の北西部、II P14・18・19・22・23、U1・2・3・7区、ほかに上信越自動車道関連調査区内でも検出されている。

形状: 断面形は、凹凸があるが、緩い傾斜の逆台形で、一見糞研攪りに見える底面の筋状のくぼみは、砂や粘土が堆積しており、浸食されやすい底面の浅間軽石層が雨水の流れによって削られてきたものである。II L21区などの斜面途中で見られる幅30~60cm、長さ1.3~2.6mの溝状のくぼみは、溝掘削時の昇り降りのための足場であったと思われる。**規模**: 確認面での幅は2.0~4.4m、確認面からの深さは55~100cm、全長は15・16年度調査区内で約80m、平成5年度調査分を含めると約150mであるが、南北の未調査区にさらに延びている。3調査区を合わせても全体としては直線的であり、どこかを囲むようには見えない。**走行方向**: N37°E、上信越自動車道関連調査区内でわずかに南に折れてN10°E。



第77図 1号溝跡 (15年度東調査区)・出土遺物



第78图 1号溝跡(16年度調査区)・出土遺物

遺構の重複：42・50・55号住居跡、14号掘立柱建物跡、56号土坑を切り、2～5号溝に切られる。北部、南部とも調査区外である。堆積状況：底面のくぼみが砂や粘土で埋まった後、外側から埋まっており自然堆積と思われる。ⅡL21区の溝の幅が広がっているところでは、溝が埋まった後、前の溝から西へずれた部分を掘り直している様子が、断面で窺えた。

遺物出土状況：図示した土師器杯（1）、須恵器杯（2～5）、土師器甕（6）、土師器鉢（8）、灰釉陶器長頸瓶（10）、刀子（12）のほか、土師器・須恵器合わせて10kg余りが埋土の上層から出土し、下層からはほとんど出土しない。いずれも残りは悪く、よいもので残存率20～30%、ほとんどが数%である。打製石斧（7）、縄文土器（11）、石鏃（13）は混入であるが、周辺に同時代の遺構はない。本溝、または2～5号溝中を流されてきたもの混入か。

遺物：灰釉陶器長径瓶（10）は内面の降灰が顕著で意図的に火前に置かれた原始灰釉と思われる。

時期：平底気味の土師器杯（1）や底面を全面ヘラ削りする須恵器杯は、8世紀前～中葉のものと思われるが、上層出土のこれらの遺物を廃絶時のものとすると、7世紀後葉の42号住居跡埋没後に掘削してすぐに埋没したことになり不自然で、8世紀中葉以降と思われる原始灰釉の長径瓶（9）の年代とも合わない。掘って脇に盛り上げた土に混入したものが、土とともに徐々に落ち込んだもので、これらの土師器・須恵器は掘削時のもの、灰釉陶器は廃絶時のものであろうか。9世紀の黒色土器が出土しないことから8世紀中には埋まったものと思われる。

所見ほか：溝の方向は田切りに平行に近く、底面のレベルは15年度調査東区の北端で約754.3m、同南端で754.0m、16年度調査区北端で753.8m、同南端で753.5mと80mで約80cm下がり、北から南への傾斜はわずかにあるものの、この垂直方向に比べるとずっと緩やかで、常時水流があったとは思えない。

番号	製法・ 位置	器種	口径	高さ	器高	底面	体部外面	体部内面	底面内面	釉色	胎土	残存率	備考
1		土師器杯	(12.2)	(7.8)	4.2	ヘラ削り	捺刷押え、 口縁ナデ	2がみ、口縁 ナデ	ミガキ	青濁	1～2mmの砂粒 少量	3%	
2		須恵器杯	—	6.5	高さ 1.4	底面ヘラ削り後 平研ヘラ削り	—	—	同底ナデ 1片 四ナデ	不灰 赤赤褐色	5mm以下の砂粒 やや多	28%	
3		須恵器杯	(16.0)	(9.4)	3.6	同底ヘラ削り	同底ナデ	同底ナデ	同底ナデ	青濁	同底ナデ 1mm以下の砂粒 やや多	30%	
4		須恵器杯	(15.0)	—	高さ 3.9	—	同底ナデ・下唇 同底ヘラ削り	同底ナデ	—	青濁	同底ナデ 1mm以下砂粒 少量	10%	外周灰・捺刷軸付
5		原始磨山台付杯	—	高さ (12.2)	高さ 1.1	同底ヘラ削り	同底ナデ	同底ナデ	同底ナデ	良好 灰色	緻密	3%	
6		土師器甕	(11.8)	5.3	12.3	ヘラ削り	底ヘラ削り、口 縁ナデ	ナデ・上土の一 部ヘラナデ、口 縁ナデ	ナデ	青濁	赤褐色 1～2mmの砂粒 少量	50%	
8		土師器鉢	(16.9)	4.5	6.5	ヘラ削り	下平研ナデ、上 平研ヘラ削り、 口縁ミガキ	上平研ミガキ、 下平研捺刷ミガ キ	捺刷ミガキ	青濁	淡灰色 1mm以下の砂粒 少量	30%	
9		須恵器甕	(14.0)	—	高さ 2.3	底面同底ヘラ 削り	同底ナデ	同底ナデ	同底ナデ	良好 灰色	1mm以下の砂粒 少量	5%	
10		灰釉陶器長径瓶	—	—	—	—	同底ナデ	不明	—	良好 明灰色	緻密	2%	外周灰釉施釉、内面 灰付葉

第53表 1号溝出土土器観察表

2・3・4号溝（第79図、PL14・33） **位置**：16年度調査区の北部から東部、ⅡP16～19・21～25、Q21、U4・5・10、V1・6・11・16・21区

形状：断面形は、2号溝が逆三角形で、3・4号溝が船底状で、2号溝には一見葉研掘りに見える底面の筋状のくぼみが見えるが、侵食されやすい底面の浅間軽石層が、雨水の流れによって削られてきたものであろう。いずれの溝も調査区内北部で曲がって、北西西—南東東からほぼ南北に方向を変えている。

規模：全長は調査区内で2号溝が約77m、3号溝が約40m、4号溝が約58m。確認面での幅は2号溝が60～240cm、3号溝が1条の溝とした場合190～230cmで、3条の別々の溝とした場合25～180cm、4号溝が40～140cm。確認面からの深さは2号溝が10～50cm、3号溝が5～25cmで、4号溝は0～10cmと浅く所々途切れている。

遺構の重複：47・50～53・56・57号住居、1号溝のほか、土坑多数を切る。2～4号溝の西部と2号溝

の南部は調査区外であり、2号溝南部のⅡV21区からⅣB1区にかけては浄化槽が撤去できずに残っており、調査できなかった。2～4号溝は、同一の溝の底面の残りかとも思われたが、2号溝と3号溝は北部で平行しない部分があり、3号溝と4号溝は一定の距離を保って交わる部分がないことから、それぞれ別の溝と判断した。また、3号溝も調査段階では1条の溝としたが、近接して平行する3条の溝が所々交わったものと考えた方がよいかもしれない。 **堆積状況**：2号溝の筋状の窪みや底面の一部に軽石層の侵食による暗赤褐色土が堆積しているほかは、ほぼ黒褐色土の単層である。

遺物出土状況：2・3号溝から土師器・須恵器・縄文土器少量が出土しているが、いずれも小片で図示できなかった。寛永通宝（1）と馬の右脛骨（2）と右尺骨・橈骨（3）は2号溝から出土しており、縄文土器（4）は4号溝出土の唯一の遺物である。このほか、3号溝からも馬と思われる骨数片が出土しているが、小片で図示できなかった。

時期：2号溝の骨2点（1・2）は土師器・須恵器の共伴から当初古代の馬のものかと思われたが、AMS法による放射性炭素年代測定で、BP100±30と幕末頃の年代となり、混入と思われた寛永通宝が共伴で、土師器・須恵器の方が混入であることが明らかとなった（第4節）。

所見ほか：本地区で縄文土器が出土した遺構、43・44・50～53・56号住居跡、1号溝のほとんどを2～4号溝が切るか近接しており、これらの縄文土器が2～4号溝中を流れてきたものと思われる。

5 土坑

野火附遺跡で検出された土坑は、400基近くになり、そのすべてを紹介することは紙幅の関係上不可能である。ここでは、特異な形状のものと、図示しうる遺物が出土したもののみを取り上げることとする。

4号土坑（第80図、PL33） 位置：15年度西調査区の南東部、ⅢH15区

遺構の重複状況：なし **構造**：長さ4.8m、幅1.9～2.2mのほぼ長方形で、確認面からの深さは25～40cm、底面の東部には1.2×0.7mの長方形で底面からの深さ15cmの窪みがある。全体の底面、この窪みの底面とも平らで、壁は急に立ち上がる箱形を呈する。底面の東部には、1.2×0.7mのほぼ長方形で底面からの深さ15cmの窪みがある。 **堆積状況**：窪みの部分はレンズ状で自然堆積と思われるが、それより上層はブロック状の土層が見られ、人為的な埋め戻しと思われる。 **遺物出土状況**：図示した土師器高坏（1・2）、壺（3）のほか須恵器高坏片が出土している。 **時期**：□縁部の深い須恵器壺の模倣坏（1）の存在から、6世紀中葉～後葉頃のものと思われる。 **所見ほか**：施設のないことから住居ではありえず、墓坑とするには大きすぎるうえ、窪みの説明がつかない。規模で東京都北区御殿前遺跡 SX002に、構造で同日野市旧515住居跡に類似し、どちらも馬小屋と考えられている（篠崎譲治 2006「古代の厩舎構造について」『土壁』第10号）。窪みの部分を尿溜めとする25号住居跡に付属した馬小屋の可能性が考えられる。

番号	形状・位置	器種	口径	底径	器高	底面	外部外装	内部内装	裏面内装	焼色	色調	胎土	残存率	備考
1	土師器高坏	12.5	11.7	4.5	ヘラ割り	横ナデ	横ナデ	ナデ	青褐色	赤褐色	1cm以下の砂粒少量	70%		
2	土師器高坏	(13.6)	(14.0)	4.3	ヘラ割り	横ナデ	横ナデ	ナデ	青褐色	赤褐色	細砂少量	15%	内外両面赤色染	
3	土師器壺	—	7.2	7.1	ヘラ割り	ミガキ	ミガキ	ミガキ	青褐色	赤褐色	1cm以下の砂粒少量	10%	底面内面赤色	

第54表 4号土坑出土土器観察表

5号土坑（第80図） 位置：15年度西調査区の南東部、ⅢH15、I6・11区

遺構の重複状況：なし **構造**：長径2.5m、短径2.2mの円形に近い楕円形で、確認面からの深さは10～15cmである。底面は平らで壁は緩やかに立ち上がる皿状を呈する。底面の北東部には直径85cmで底面から

の深さ40cmの深い穴、東部には長径50cmの楕円形で底面からの深さ15cmの浅い窪みが見られる。堆積状況：レンズ状で自然堆積と思われる。遺物出土状況：図示した土師器徹底部(1)のほか土師器杯・甕が出土している。このほか、軽石と礫数点が床面から出土しているが、窪みの部分では埋土の上から出土している。時期：不明 所見ほか：平面形は全く異なるが、長軸の一方の端に掘り込みを持つことでは4号土坑と共通し、規模・構造は東京都日野市落川・一の宮遺跡1～3号馬小屋と類似する(前掲。篠崎2006)。4号土坑と同じく窪みを尿溜めとする25号住居跡に付属する馬小屋の可能性が考えられる。

番号	層位・位置	図様	口径	底径	器高	底面	外部内面	内部内面	底部内面	底面	色質	胎土	残存率	備考
1		土師器徹底	—	—	短径 5.9	ヘラ削り	ヘラ削り	不明	—	—	赤褐色	3mm以下の砂粒 やや多	5%	内面磨光

第55表 5号土坑出土土器観察表

279号土坑(第80図) 位置：16年度調査区の中央部、II U 4区

遺構の重複状況：なし 構造：長径55cmの楕円形で、確認面からの深さは20cm 堆積状況：単層 遺物出土状況：縄文土器(1)が出土している。時期：不明

109号土坑(第80図、PL33) 位置：16年度調査区の西部、II U 3区

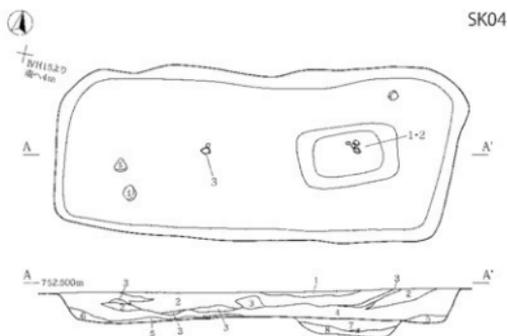
遺構の重複状況：ないが、17号掘立柱建物の内側である。構造：直径50cmのほぼ円形で、確認面からの深さ30cm。南側にテラスを持ち北側が一段深くなる。堆積状況：単層 遺物出土状況：図示した滑石製の白玉(1)のほか土師器杯・甕が出土している。時期：いずれも小片で不明。17号掘立柱建物跡と同時期か。所見ほか：17号掘立柱建物跡の鬼門(北東)に当たるピット4の脇に当たり、鬼門避けの可能性がある。

178号土坑(第80図、PL33) 位置：16年度調査区の東部、II V 2・7区

遺構の重複状況：177号土坑に切られる。構造：長径1.4m、短径1.0mの楕円形の北西部の縁が崩れたような形で、確認面からの深さは25cmである。西半部にテラスを持ち、東半部はそれより5cm下がる。堆積状況：単層 遺物出土状況：図示した土師器杯(1)と須恵器杯(4)が南の縁近くで出土したほか、土師器杯(2)・甕・壺、須恵器蓋(3)が出土している。時期：7世紀中葉頃のものと思われる。

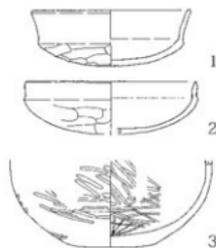
番号	層位・位置	器種	口径	底径	器高	底面	外部内面	内部内面	底部内面	底面	色質	胎土	残存率	備考
1		土師器杯	(10.9)	(10.9)	短径 2.6	ヘラ削り	横ナテ	横ナテ	ナテ後一部ミギキ	—	良好 淡赤色	1mm以下の砂粒 少量	10%	
2		土師器杯	(10.9)	(10.6)	短径 2.2	ヘラ削り	横ナテ	横ナテ	ナテ	—	良好 茶褐色	1mm以下の砂粒 少量	10%	
3		須恵器蓋	(30.9)	—	短径 3.6	天亦部周縁ヘラ削り	縦横ナテ	縦横ナテ	—	—	良好 明灰色	1mm以下の砂粒 少量	30%	
4		須恵器杯	8.4	2.5	2.5	ヘラ削り	縦横ナテ	縦横ナテ	縦横ナテ	—	良好 明灰色	1～2mmの砂粒 少量		定形

第56表 178号土坑出土土器観察表



SK04

1. 黒褐色土
2. 軽石塊主体の褐色土
3. 黒色土
4. 暗褐色土
5. 明褐色土 (壁崩落土)
6. 軽石塊と黒色土塊の混土 (壁崩落土)
7. 黒褐色細砂
8. 軽石粒主体の褐色土

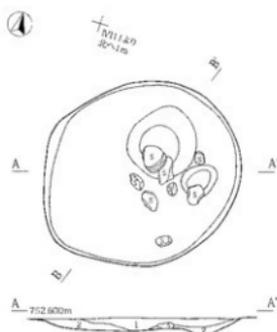


SK279



SK279

1. 黒褐色土 (5YR2/1)



SK05

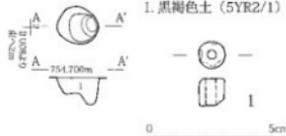
1. 黒色土
2. 軽石を含む黒褐色土
3. 黒色土塊と軽石塊の混土



SK109

SK109

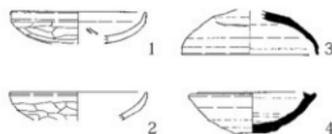
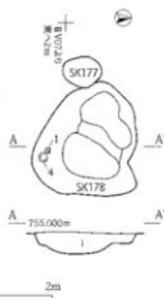
1. 黒褐色土 (5YR2/1)



SK178

SK178

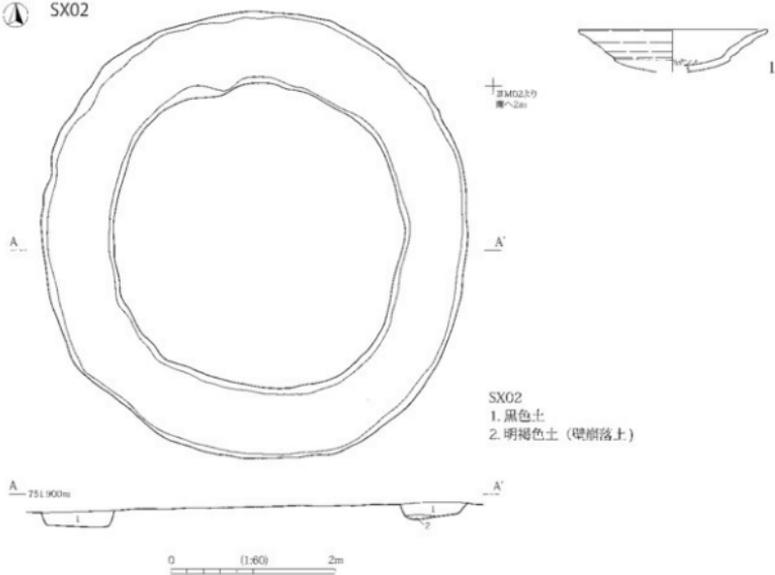
1. にぶい赤褐色土塊を含む黒褐色土 (5YR2/1)



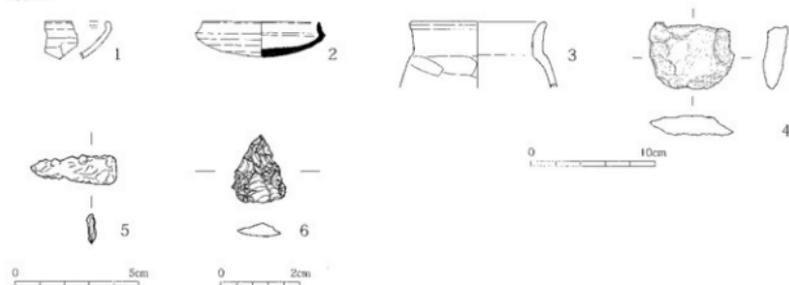
0 10cm

第80図 4・5・109・178・279号土坑・出土遺物

SX02



遺構外



第81图 2号性格不明遺構・出土遺物、遺構外出土遺物

第3節 遺構と遺物

出土遺構	土器類										遺物類										銅土器	鉄土器	中世陶器	近世陶器	長崎・その他	計	陶化率		
	杯	碗	高杯	盃	壺	瓶	器台	小瓶・土瓶	鉢	その他	杯	鳥台杯	高杯	壺	甕	鉢	その他												
SK269	0	0	0	0	30	0	0	10	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	40	0%
SK275	0	0	0	10	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	5	0	0	0	0	0	0	0	15	0%	
SK279	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	65	0	0	0	0	0	0	0	65	0%	
SK280	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	20	0	0	0	0	0	0	0	20	0%	
SK291	0	0	0	10	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	10	0%	
SK340	0	0	0	5	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	20	0	0	0	0	0	0	0	25	0%	
SK341	0	0	0	20	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	20	0%	
SK342	0	0	0	20	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	20	0%	
SK351	0	0	0	15	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	15	0%	
SK352	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	50	0	0	0	0	0	0	0	30	0%	
SK353	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	10	0	0	0	0	0	0	0	10	0%	
ST03	0	0	0	0	20	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	20	0%	
ST07	6	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	6	0%	
ST09	10	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	10	4%	
	41	0	0	236	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	276		
ST10	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	30	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	30	100%	
	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	30	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	30		
ST12	5	0	0	30	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	35	0%	
ST14	21	0	0	20	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	41	0%	
ST15	0	0	0	0	60	0	0	0	0	15	0	0	10	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	25	40%	
	32	0	0	75	60	0	0	0	0	20	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	138		
ST16	10	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	10	0%	
ST17	15	0	0	110	20	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	5	0	0	0	0	0	0	0	130	0%	
	26	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	26		
ST19	50	0	0	10	15	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	75	22%	
ST02	30	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	30	0%	
遺物外	10	0	0	0	0	0	80	0	0	55	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	125	5%	
	224	0	26	1127	694	0	80	0	0	81	0	27	57	0	130	148	42	29	0	36	2671								
計	3021	1344	2187	37976	31034	2828	0	796	2205	2730	408	0	325	70	0	130	1260	465	0	0	182	89247							
	9380	1514	2778	84271	45180	2920	66	930	2285	2730	644	10	390	249	1061	150	2300	1844	522	191	10	276	159238						
遺失率	54%	100%	79%	45%	69%	95%	0%	85%	97%	100%	62%	0%	83%	28%	0%	100%	59%	20%	0%	0%	0%	67%	56%						

(単位：g、2行の遺構の上段：陶化遺物重量、下段：出土遺物総重量、1行の遺構：出土遺物重量のみで陶化遺物なし)

第4節 科学分析

今回、科学分析を実施した項目は、以下の通りである。

- | | | |
|--------------------------|-----|---------------------|
| ①馬骨の ¹⁴ C年代測定 | 古代か | 実年代推定、データ蓄積 |
| ②坩形鍛冶滓状遺物の成分分析 | 古代 | 坩形鍛冶滓かどうかの確認、鉄原料の把握 |

1 科学分析の目的

今回、馬骨の出土した2号溝は、寛永通宝の出土があり、馬骨も古代のものにしては劣化が少なかった。ただし、古代の集落域の中にあり、遺物は同時代の土師器・須恵器がほとんどであった。このため、馬骨及び2号溝の年代を確認するために、2号溝出土の馬骨の¹⁴C年代を行った。

35号住居跡出土の坩形鍛冶滓状遺物は、形状は坩形鍛冶滓であるが、出土した同住居跡や周辺の住居跡に鍛冶炉はないこと、通常の坩形鍛冶滓の様な顕著な被熱の痕が見られないことにより、鍛冶滓かどうか確認が必要があると思われた。また、坩形鍛冶滓である場合、どの程度の冶金技術を持っていたのか、使用した鉄の原料は何かなどを知り、この鍛冶滓が残された背景を考えることも必要となる。このため、この坩形鍛冶滓状遺物の成分分析を行った。

2 分析方法及び手法

(1) 放射性炭素年代測定 (AMS測定)

試料は、2号溝出土の馬の右尺骨・橈骨 (第75図3) である。株式会社加速器分析研究所に依頼して、年代測定を行った。その報告書によると、

- 1) 年代の算出には Libby の半減期5568年を使用し、
- 2) B P年代値 (1950年から何年前か) を算出した。
- 3) 誤差は、複数回 (通常は4回) の測定値について χ^2 検定を行い、通常は測定値の統計誤差から求めた値、測定値が1つの母集団と見なせない場合は標準誤差を用いた。
- 4) 同位体比の基準値からのずれを千分偏差で (‰; パーミル) で表すと、¹⁴Cのずれは、

$$\delta^{14}\text{C} = \{({}^{14}\text{A}_S - {}^{14}\text{A}_R) / {}^{14}\text{A}_R\} \times 1000$$

$${}^{14}\text{A}_S: \text{試料炭素の}^{14}\text{C濃度: } ({}^{14}\text{C}/{}^{12}\text{C})_S \text{ または } ({}^{14}\text{C}/{}^{13}\text{C})_S$$

$${}^{14}\text{A}_R: \text{標準現代炭素の}^{14}\text{C濃度: } ({}^{14}\text{C}/{}^{12}\text{C})_R \text{ または } ({}^{14}\text{C}/{}^{13}\text{C})_R$$

¹³C濃度のずれは

$$\delta^{13}\text{C} = \{({}^{13}\text{A}_S - {}^{13}\text{A}_{\text{PDB}}) / {}^{13}\text{A}_{\text{PDB}}\} \times 1000$$

$${}^{13}\text{A}_S: \text{試料炭素の}^{13}\text{C濃度: } ({}^{13}\text{C}/{}^{12}\text{C})_S$$

$${}^{13}\text{A}_{\text{PDB}}: \text{標準試料 (白亜紀のパレムナイト (矽石) 類の化石) 炭素の}^{13}\text{C濃度: } ({}^{13}\text{C}/{}^{12}\text{C})_{\text{PDB}}$$

で、算出される。

試料炭素が $\delta^{13}\text{C} = -25.0$ (‰) としたときの¹⁴C濃度は

$${}^{14}\text{A}_N = {}^{14}\text{A}_S \times 10.975 / \{1 + \delta^{13}\text{C}/1000\}^2 \quad ({}^{14}\text{A}_S \text{ として } {}^{14}\text{C}/{}^{12}\text{C} \text{ を使用するとき})$$

$${}^{14}\text{A}_N = {}^{14}\text{A}_S \times 10.975 / \{1 + \delta^{13}\text{C}/1000\} \quad ({}^{14}\text{A}_S \text{ として } {}^{14}\text{C}/{}^{13}\text{C} \text{ を使用するとき})$$

¹⁴C濃度のずれは

$$\Delta^{14}\text{C} = \{({}^{14}\text{A}_S - {}^{14}\text{A}_N) / {}^{14}\text{A}_N\} \times 1000$$

または

$$pMC = \Delta^{14}C / 10 + 100$$

で求められ、国際的な取り決めによる、放射性炭素年代 (Conventional Radiocarbon Age) は

$$T = -8033 \times \ln \{ (\Delta^{14}C / 1000) + 1 \}$$

$$= -8033 \times \ln (pMC / 100)$$

(\ln : 自然対数)

と計算される。

この計算式により求められた各値は第60表の通りで、馬骨の年代は B P 100 ± 30 (1850 ± 30年) の幕末となる。

IAA Code No.	試 料	BP年代および誤差の四位律値
IAAA-61010	製鉄所敷地跡：野火町遺跡2号溝	Labr Age (yrBP) : 100 ± 30
	試料名：土子炭	δ ¹³ C (‰) = -17.6 ± 0.92
	試料名 (番号) : 2号溝層2	Δ ¹⁴ C (‰) = -12.8 ± 4.1
		pMC (%) = 98.72 ± 0.41
#1027	(参考) Δ ¹⁴ Cの補正値	δ ¹³ C (‰) = 2.1 ± 2.7
		+ΔC (‰) = 100.21 ± 0.37
		Age (yrBP) = -30 ± 30

第60表 2号溝出土馬骨の放射性炭素年代測定結果

(2) 埴形鍛冶滓状遺物の科学分析

試料は35号住居跡出土の埴形鍛冶滓状遺物 (第31図19) である。JFEテクノロジーサーチ株式会社 に依頼して、着磁力調査、MC (金属探知機) 反応調査、外観写真撮影、化学成分分析、顕微鏡組織観察、X線回折測定を行った。

その結果報告によると、重量は1246.5g、長さ137.9mm、幅123.2mm、厚さ82.6mmの重量感のあるもので、形状的には埴形滓であるが、外面を見る限り砂礫塊である。上面にも砂礫が多く見られることから、埴形滓とは考えにくい。比較的平らな上面側は湾曲した下面よりもやや強い着磁がある。外周部の赤紫色の部分は被熱して部分還元された砂鉄が黒錆化して固まったようにも見えるが、固まり方は弱い。

切断した断面は、砂に大きめの礫が混じって固まっており、全く溶けた痕はなく鉄滓ではない。粘土状の鉱物はない。赤紫色の部分は下面から広がっており、錆が浸透していったようである。

断面の顕微鏡観察では、やや乳白色気味の粒状シリカと、白く輝き微細な孔の多い砂鉄粒子と思われる粒子と褐色の粒子が見られる。E PMA微小領域分析を行っていないので断定はできないが、X線回折で同定された有色鉱物はヘマタイト (α -Fe₂O₃) だけなので、褐色の粒子はヘマタイトであると思われる。粒子の周囲が5~15μの膜に覆われていることが特徴的であるが、塩酸に溶解しないので、Fe₂O₃や錆化鉄ではない。この膜の同定にはE PMAなどの微小領域分析が必要であるが、今回は行わなかったため不明である。

X線回折では、造岩鉱物であるアノーサイト (灰長石: CaAl₂Si₂O₈) とシリカ (SiO₂) が強い回折強度を示し、次いでヘマタイトが弱い回折強度を示す。そのほかにドロマイト (CaMg(CO₃)₂) や霞石 (NaAlSi₃O₈) などが同定され、本試料が鉱物系のものであることを伺わせる。

化学成分分析結果は、TFeは24.4%、FeOが0.71%、Fe₂O₃が33.9%、SiO₂が40.3%、Al₂O₃が12.3%、TiO₂が0.95%、Vが0.021%などである (第61表)。SiO₂、Al₂O₃が高いのは砂混じりの試料のためで、これを除いてTFeを砂鉄並みの40~50%で換算すると、TiO₂は2%近くになり、砂鉄起源の鉄分であると考えられる。

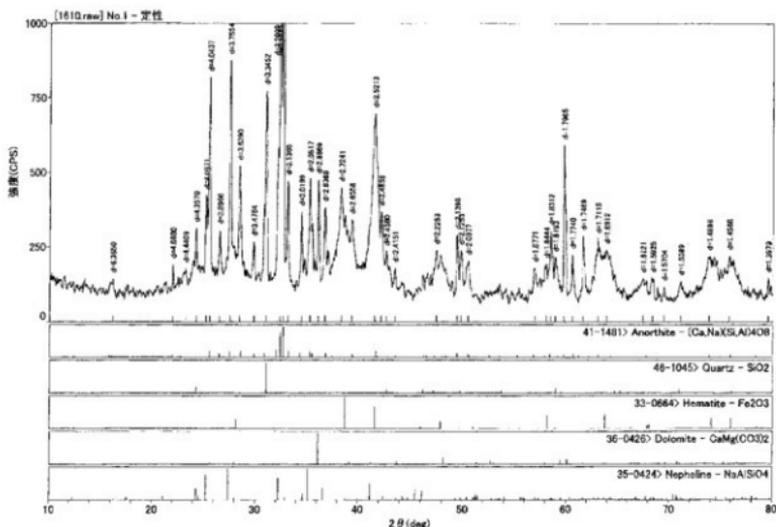
以上の分析結果から、本試料は、基本は砂礫塊であるが、砂鉄やヘマタイトが混合しており、被熱の履歴や、還元程度は不明だそうである。したがって、埴形鍛冶滓ではなく、性格は不明である。ただし、

かなりの比率の砂鉄を含み、貯留施設の中で固まってしまった砂鉄などの、何らかの鍛冶に関連する遺物と思われる。

試料No.	T.Fe	M.Fe	FeO	Fe ₂ O ₃	SiO ₂	Al ₂ O ₃	CaO	MgO	K ₂ O	Na ₂ O
1	24.4	0.14	0.71	33.9	40.3	12.30	3.92	1.86	0.52	0.31
TiO ₂	MnO	P ₂ O ₅	Ca	C.W.	C	V	Cu	TiO ₂ / T.Fe	MnO / TiO ₂	遺物成分
0.55	0.14	0.225	<0.001	2.03	0.28	0.021	0.007	0.029	0.147	61.28

FeO : Fe₂O₃ = 2.1 : 97.9 C.W. : 化合水 造滓成分 : SiO₂ + Al₂O₃ + CaO + MgO + Na₂O + K₂O

第61表 化学成分分析結果



第82図 X線回折結果

3 小 結

2号溝出土の馬骨の年代はBP100±30 (1850±30年)の幕末であった。これは、大多数を占める古代の土器が混入で、1点のみ出土の寛永通宝が同時代の共存遺物という皮肉な結果となった。ただし、劣化の少ない馬骨の外観と、古代の住居跡や溝を明確に切るという遺構の切り合い関係は満足させることとなり、年代に誤りはないものと思われる。幕末のこの時期にどうして馬骨の一部がこの溝の中に残されたかは、新たな疑問となるが、同時期の遺構がこれに平行する溝のみでは、それを解く手がかりはない。この時期に、付近で馬が飼育されていたらしいということが言えるのみである。

35号住居跡出土の塊形鍛冶滓状遺物は、砂礫塊に砂鉄やヘマタイトが混入したものと分かった。塊形鍛冶滓でないとは言え、高濃度の砂鉄やヘマタイトを含むことから鍛冶に関係する遺物と思われる。調査区内では鍛冶炉が検出されていないことから、将来東側調査区外の本住居跡未調査部分やその他の遺構の調査がなされる場合に注意が必要であろう。また、錆によって固まったのではないことから、どのような場所、どのような生因によるのかは、更なる分析が必要である。

第5節 小 結

今回の調査で検出された遺構は、古墳時代前期末～中期初頭・同後～終末期の竪穴住居跡36軒、大部分時期不明だが、古墳時代終末期のもの3棟を含む掘立柱建物跡13棟、奈良時代の溝1条、時期不明の溝8条、大部分時期不明の土坑260基等である。

縄文時代の土器・石器は、一定量が出土しているが、同時期の遺構が皆無で、2～5号溝を介しての調査区外からの流れ込みと思われる。

古墳時代前期末～中期初頭の竪穴住居跡は2軒で、上信越自動車道建設時の調査で検出されたものを加えても5軒だけである。小規模かつ短期間という当地方の同時代集落の特徴に合致するものである。この後100年以上の断絶がある。

古墳時代後～終末期には、今回検出された竪穴住居跡34軒と、上信越自動車道建設時検出の14軒を合わせて48軒と中規模な集落となる。切り合いや、出土遺物から少なくとも一部の掘立柱建物跡はその最末期に伴うか、その直後に建てられている。この集落は、南側の台地上の中原遺跡群の集落と同じ頃に始まりながら、奈良時代以後に続かずに7世紀末で終わってしまう。また、この頃1号溝が掘られ、8世紀後半まで存続する。この集落の存続期間の違いと、1号溝の性格については、第6章で考察する。

その後、幕末に何条かの溝が掘られるまで、人間活動の痕跡は残されていない。水の介が悪い台地上であったためであろうか。

今回の発掘調査により、本遺跡の北・南・西限が明らかとなった。今後、東側の発掘調査が進めば、鋤師屋遺跡群との関係も明らかとなろうが、遺構の分布密度からは、500m東北方の御代田町野火付遺跡までは繋がらず、調査範囲をそう大きく超えない範囲でまとまる遺跡のようである。

第5章 野火附城跡

第1節 遺跡の概要

野火附城跡は、小諸市御影新田に所在し、野火附遺跡の西方で同じ舌状台地の先端部に立地する。遺跡の東側は平坦であるが、北・南・西の3方は田切りの崖となって落ちる天然の要害となっている。比高差は15～21mを計る。調査地点は、佐久ジャンクションから中部横断自動車道へ入った料金所建設予定地付近にあたり、北緯36°17'57"、東経138°28'39"、日本(旧)測地系X=32,860、Y=-1,760に位置する。

『小諸市誌 歴史篇(二)』(小諸市誌編纂委員会1984)によると、このあたりは昔「狐原」と俗称され、「きつね」が砦や監視所などを守る人々を指す隠語であるところから分布調査が実施され、台地を南北に貫く堀とその内側の土塁が発見された。戦国時代の佐久郡の武将勢力範囲からは、平原城の支配下にあったと考えられる。近くには、松平康国が一揆鎮圧の拠点として築いた戦国時代末期の曾根城もあるが、野火附城跡の形態はそれよりも古いとされている。

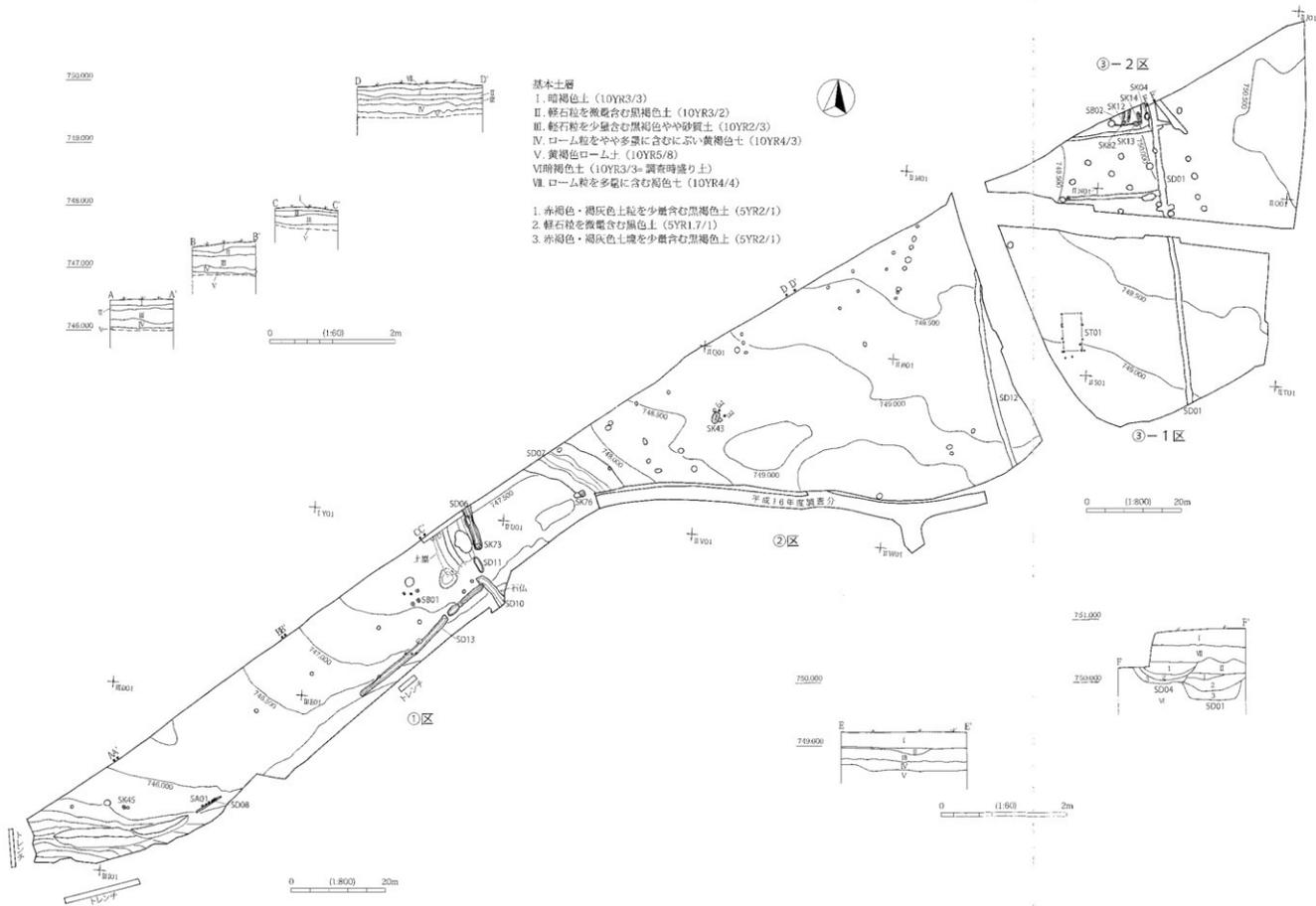
第2節 調査の概要

佐久ジャンクション建設に関連する野火附城跡の調査は、平成14・16年度の2ヶ年にわたって行われた。調査地は全長約320mと長大であるため、便宜的に調査地を3地区に分けた。①区は、西側の台地先端部分から土塁まで、②区は土塁から南北に走る市道まで、③区は市道以東である。また、③区は区内を東西に走る市道によって、南側の③-1区と北側の③-2区に区分けした。

平成14年度は、調査対象地の大部分である14,000㎡を調査した。①・②区は、中原・野火附遺跡や③区と異なり、山林となっていた。調査にあたっては、重機で伐根を行うと遺構を壊す恐れがあるため、切り株を残した状態で重機による表土剥ぎを行った。その後、浅間軽石層上面で精査を行い、遺構を検出した。切り株は、人力で周りの土を取り除き、検出面で1本1本の根を鋸で切断して除去した。一方、分布調査時に発見された土塁は地上に露出していたため、トレンチで断面を見ながら埋土と盛土を区分して、埋土を掘り下げた後断ち割り調査を行い、最後に解体完掘した。また、田切りへ落ちる崖面は急傾斜で重機が使用できないため、人力によるトレンチ調査とした。

平成16年度は、②区の市道部分500㎡の調査を行った。遺構の希薄な部分であるうえ、平成14年度調査地よりさらに南側の崖寄りの部分ということで削平も深く、遺構は検出されなかった。

今回の調査では、分布調査で確認された堀と土塁の跡を改めて確認するとともに、外側に新たにもう1本の堀を検出した。ただし、堀と土塁で囲まれた区域で、これらに付随する施設は検出されなかった。このほか、縄文時代後期の壑穴住居跡の柱穴や陥し穴、近世の墓坑が検出されたが、全体的には検出された遺構・遺物とも少なかった。



基本土層

- I. 暗褐色土 (10YR3/3)
- II. 軽石粒を微塵含む黒褐色土 (10YR3/2)
- III. 軽石粒を少量含む黒褐色や中砂質土 (10YR2/3)
- IV. 口=土粒を中々多量に含む赤、黄褐色土 (10YR4/3)
- V. 黄褐色口=土 (10YR5/8)
- VI. 暗褐色土 (10YR3/3=調査時盛り土)
- VII. 口=土粒を多量に含む褐色土 (10YR4/4)

1. 赤褐色・褐色土粒を少量含む黒褐色土 (5YR2/1)
2. 軽石粒を微塵含む黒色土 (5YR1.7/1)
3. 赤褐色・褐色土粒を少量含む黒褐色土 (5YR2/1)

第83図 野火附城跡遺構全体図

調査日誌抄

平成14年度

5月21日	調査開始	9月18日	②区遺構単点測量
7月1・2日	美南ガ丘小学校生徒が見学	10月4日	③区地形測量
7月5日	③区空撮	10月16日	②区空撮
7月24日	①区遺構単点測量	10月23日	②区遺構単点測量
7月31日	県遺跡調査指導委員会が視察	11月19日	SK76出土人骨の供養・火葬
8月21日	①区地形測量	12月3日	14年度調査終了
9月10日	①区空撮		

平成16年度

7月6日 調査一遺構の検出なし

第3節 遺構と遺物

1 概要

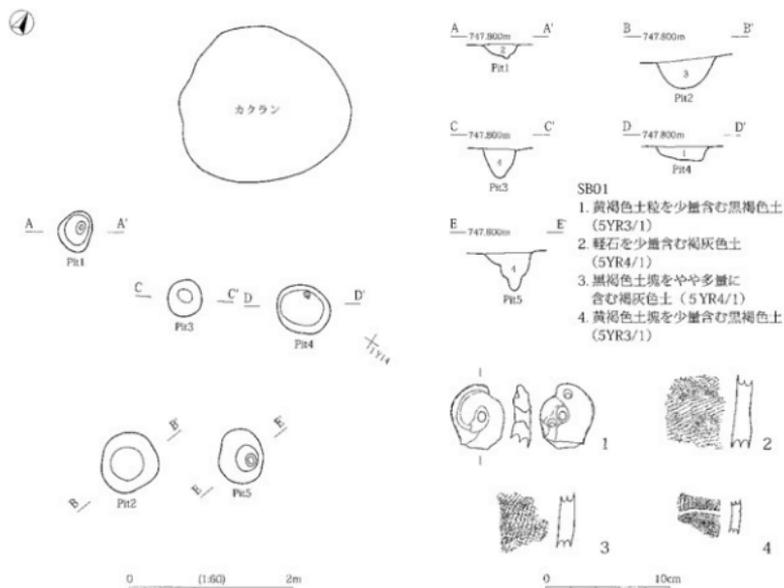
検出された遺構は、縄文時代後期のピット群（削平された堅穴住居跡）1軒、陥し穴1基、平安時代の堅穴状遺構1基、中世以降と見られる土塁と平行する溝1条や堀1条、柱穴列を伴う溝1条、平坦面2基、掘立柱建物跡1棟、近世以降の墓坑1基、石仏1基等である。その他に時期不明の溝跡11条・ピットが約80基ある。表土直下が浅間軽石流となり、検出面はすべてこの上面である。遺物の出土がなく時期不明の遺構が多いため、掲載は時代別とせず、番号順とした。

遺物はごくわずかであり、縄文時代後期の土器・石器、弥生土器、平安時代の土師器・須恵器・鉄滓、宋銭、近世陶磁器などで、中世の野火附城跡に伴うと思われるものは皆無である。

2 住居跡・堅穴状遺構

1号住居跡（第84図、PL34） 位置：①区の北東部、I Y 8・13区

形状：削平されピットのためのため不明。柱の並び具合からやや南北に長い楕円形の住居跡であったと思われる。



第84図 1号住居跡・出土遺物

規模：最も離れたピット1・5の外周間が3.9m、ピット2・4間で3.6mを計り、直径5～6mと推定される。主軸方位：不明 遺構の重複：なし

住居内施設：直径または長径45～75cmの円形または楕円形で、確認面からの深さ15～30cmのピット群である。当初は個々の土坑として調査したが、ピット内から縄文土器が出土することや、これらのピットがピット3を中心に半円形に並び、その北方のカクラン内にも同様のピットがあったとすると円形に並ぶことから、竪穴住居跡が削平されて、柱穴のみ残ったものと判断した。

遺物出土状況：渦巻き状の把手（1）と縄文の地文のみの胴部（2）がピット5から、縄文の地文のみの胴部（3）と平行な曲線の沈線区画の中の縄文を磨り消した胴部（4）がピット4から出土しているほか、両ピットから縄文土器数点が出土している。

時期：1・4から縄文時代後期初頭の称名寺式期の可能性が高い。

2号竪穴状遺構（第85図、PL34） 位置：③-2区北部、II I 11・12・16・17区

形状：方形または、長方形（推定） 規模：1辺6.2m、確認面からの深さは2～10cm 長軸方位：重複：12号土坑を切り、13・14・17・82号土坑に切られる。北部は調査区外である。堆積状況：4層のレンズ状堆積で、自然埋没と思われる。床面の南西隅には焼土が広く分布している。

遺構内施設：床は地山のまま。柱穴はない。南東隅に東壁に沿って幅60cm、長さ130cm、床面からの深さ10cmのピットまたは溝があり、東西の中央に120cm間隔で、幅40cm、床面からの深さ10cmの溝が2本、1.5m以上にわたって南北に平行に走っている。

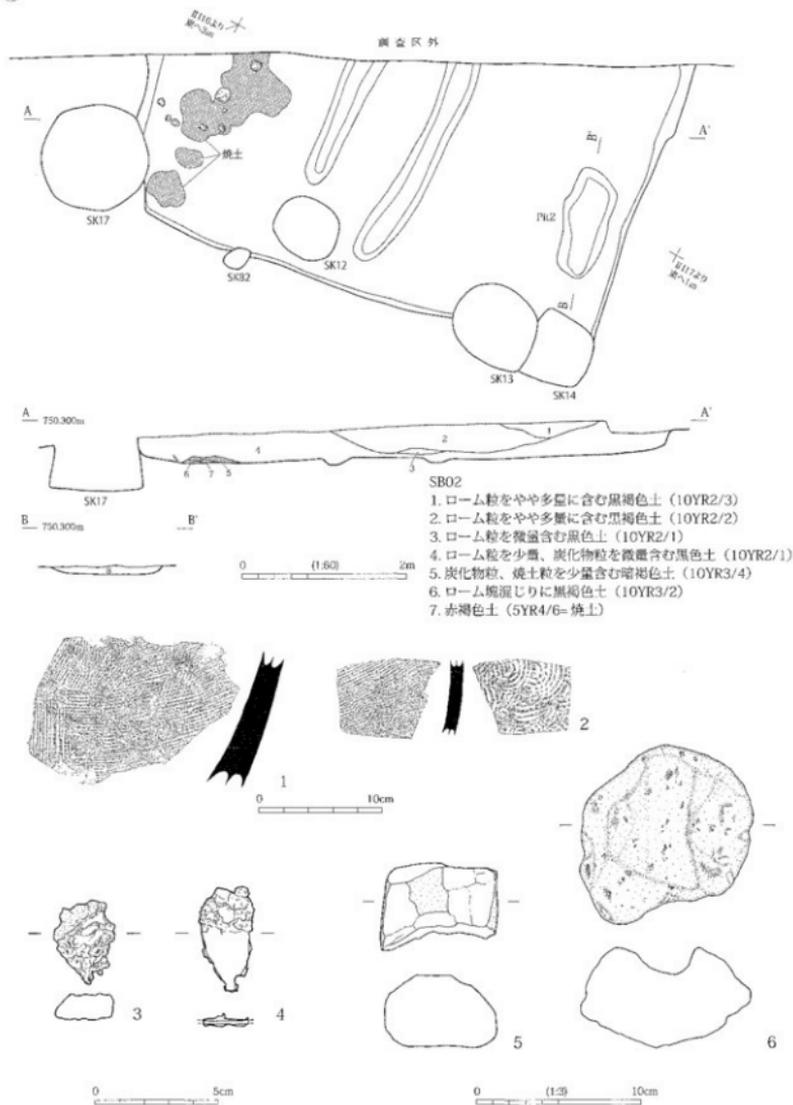
遺物：須恵器甕（1）は裏面をナデ消すが、瓶（2）は同心円の当て具痕を残す。3は鉄薄片、4は鉄片である。砥石（5）は川原石の片面を打ち欠いて整形し、裏面を砥石とし、裏面は浅い船底状の凹面となっている。砥石（6）は軽石で直径4.5cmの半管状に磨り減っている。

時期：詳細な時期は不明で、瓶に当て具痕が残るところから8世紀頃のものと思われる。

所見：中央を走る溝の性格は不明であるが、焼土、鉄滓、鉄片、砥石の出土や、40cm離れた4号土坑での塊形鍛冶滓の出土から、鍛冶工房であったと思われる。

番号	部位・位置	器種	口径	底径	器高	底面	体部外面	体部内面	底面内径	焼痕	色調	粉土	残存率	備考
1		須恵器甕	—	—	—	—	平行叩き	鏡ナデ	—	普通	銀灰色	1～3mmの粉粒が多数	1%	
2		須恵器甕	—	—	—	—	平行叩き	同心円当て具	—	良好	灰色	1～2mmの粉粒が多数	2%	

第62表 2号竪穴状遺構出土土器観察表



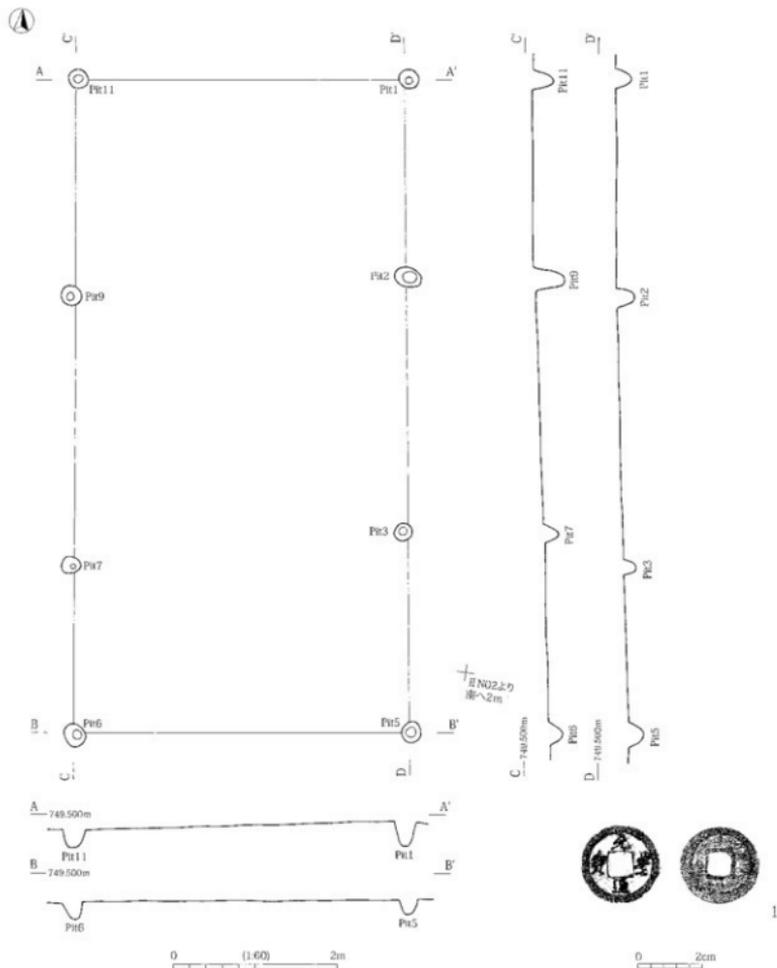
第85図 2号整穴状遺構・出土遺物

3 掘立柱建物跡

1号掘立柱建物跡（第86図） 位置：③-1区西部のⅡM20・25区

形状：桁行3間×梁間1間の側柱建物 規模：桁行8.0m、梁間4.2m、桁行の柱間は心々で2.4～3.1m、梁間の柱間は同4.0～4.2m 長軸方位：N10°W 遺構の重複：なし

柱穴：柱穴の掘方は、直径20cmの円形または長径30cmの楕円形と小さく、確認面からの深さ20～40cmである。周辺には同程度の大きさ・深さのピットがいくつか見られ、建て替えがあったかもしれない。埋土は



第86図 1号掘立柱建物跡・出土遺物

ほぼ単層で、柱痕はどのピットにも見られなかった。

遺物および出土状況：ピット1から元豊通宝（1、北宋銭、初鋳1078年）が出土している。

時期：出土銭貨は江戸時代初めまで流通しているため、それ以前と考えられ、中世の可能性が高い。

4 土塁跡

1号土塁跡（第87図、PL34） 位置：①区北東部のIT25、Y4・5・9・10区

形状：台地を横切って北北東-南南西にはほぼ直線的にのびる。断面形は平らな台形、並走する6号溝がこの土塁に伴うと考えられる。**規模：**調査区内で長さ9.5m、北側の調査区外に延びており、南端もカクランに壊されているため全長は不明である。基底部の幅7.1~7.5m、確認面からの高さは55~90cmであるが、上部の表土は流出していると思われる。**走行方位：**N31°W **遺構の重複：**南端をカクランに壊され、11号溝を避けていたのか、上に載っていたのか不明である。

構築状況：10数層に分かれ、浅間軽石流上面まで削平した後、黒色土、暗褐色土、軽石流堆積物が盛られている。6号溝の掘削土では土量不足のために、周囲を掘り下げること、土量と高さ確保したと見られる。**遺物：**図示した須恵器高台付坏（1）のほか、縄文土器、弥生土器片が盛り土内から出土している。いずれも小片で図示できなかった。

時期：遺物は混入品のみで、時期は不明である。

番号	層位・位置	砂体	口徑	高さ	形状	体形外周	体形内周	底面内周	形状	色調	出土	残存率	備考
1	土塁	須恵器坏	—	高さ径(7.5)	現高1.2	—	—	別図ナテ	奇造	緑灰色	1~2mの形状 不明	3%	

第63表 1号土塁盛土内出土土器観察表

5 溝跡・堀跡・柵列

13条の溝跡・堀跡を調査した。このうち、近・現代に比定される例を除き報告する。

6号溝跡（第87図、PL34） 位置：①区北東部のIT24・25、Y5区

形状：土塁の東側に平行して直線的に走る溝である。断面形は緩やかなV字形となり、底面中央部がさらに筋状に深くなる部分がある。底面南端のSK73は長径80cm、短径50cmの楕円形の部分が周囲の底面より約20cm下がっている。埋土は本溝最下層と同じ砂層であり、溝に伴う窪みと考えられる。また、調査区内中央やや北寄りで長さ120cm、幅50cmほど西側に張り出し部があり、この直下の底面の北寄りにも、長径100cm、短径35cmの楕円形で、周囲の底面より約20cm深い窪みが見られる。**規模：**幅1.5~1.8mで、確認面からの深さは40~60cm、調査区内で9.1mを計る。ただし、北側は調査区外へ延び、全長は不明である。**走行方位：**N21°W

遺構の重複：なし。**堆積状況：**埋土は数層に分かれるが、レンズ状の堆積で自然埋没と思われる。**遺物：**なし

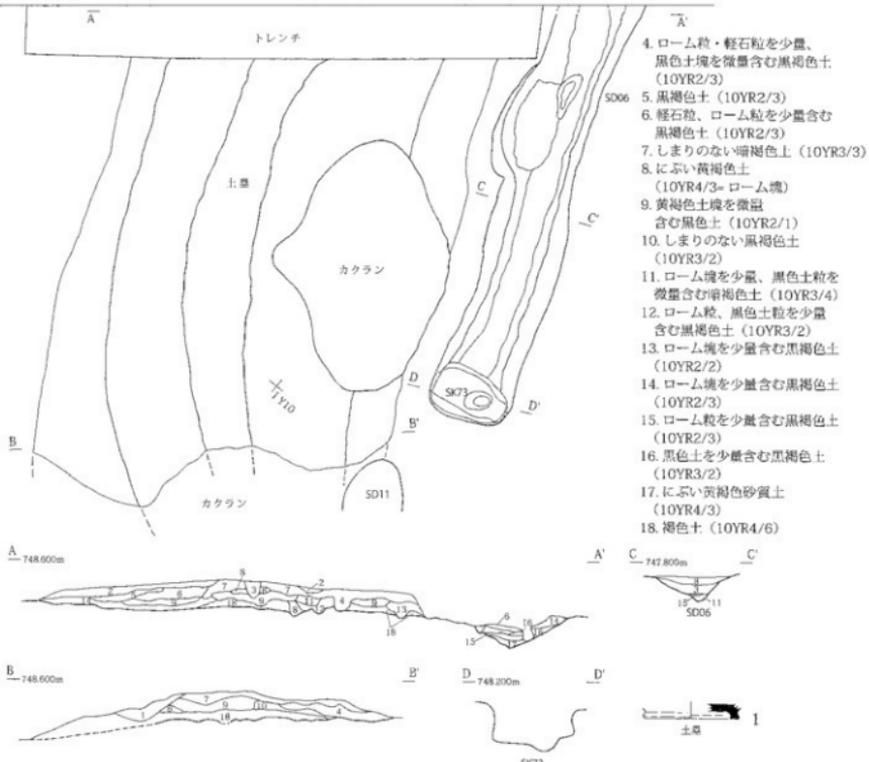
時期：不明

SD06・土塁

1. 褐色土 (10YR4/4)
2. 暗褐色やや砂質土 (10YR3/4)
3. 暗褐色土 (10YR3/4)
4. ローム粒・軽石粒を少量、黒色土塊を微量含む黒褐色土 (10YR2/3)
5. 黒褐色土 (10YR2/3)
6. 軽石粒、ローム粒を少量含む黒褐色土 (10YR2/3)
7. しまりのない暗褐色土 (10YR3/3)
8. にぶい黄褐色土 (10YR4/3=ローム塊)
9. 黄褐色土塊を微量含む黒色土 (10YR2/1)
10. しまりのない黒褐色土 (10YR3/2)
11. ローム塊を少量、黒色土粒を微量含む暗褐色土 (10YR3/4)
12. ローム粒、黒色土粒を少量含む黒褐色土 (10YR3/2)
13. ローム塊を少量含む黒褐色土 (10YR2/2)
14. ローム塊を少量含む黒褐色土 (10YR2/3)
15. ローム粒を少量含む黒褐色土 (10YR2/3)
16. 黒色土を少量含む黒褐色土 (10YR3/2)
17. にぶい黄褐色砂質土 (10YR4/3)
18. 褐色土 (10YR4/6)



調査区別



第87図 1号土塁跡、6号溝跡・出土遺物

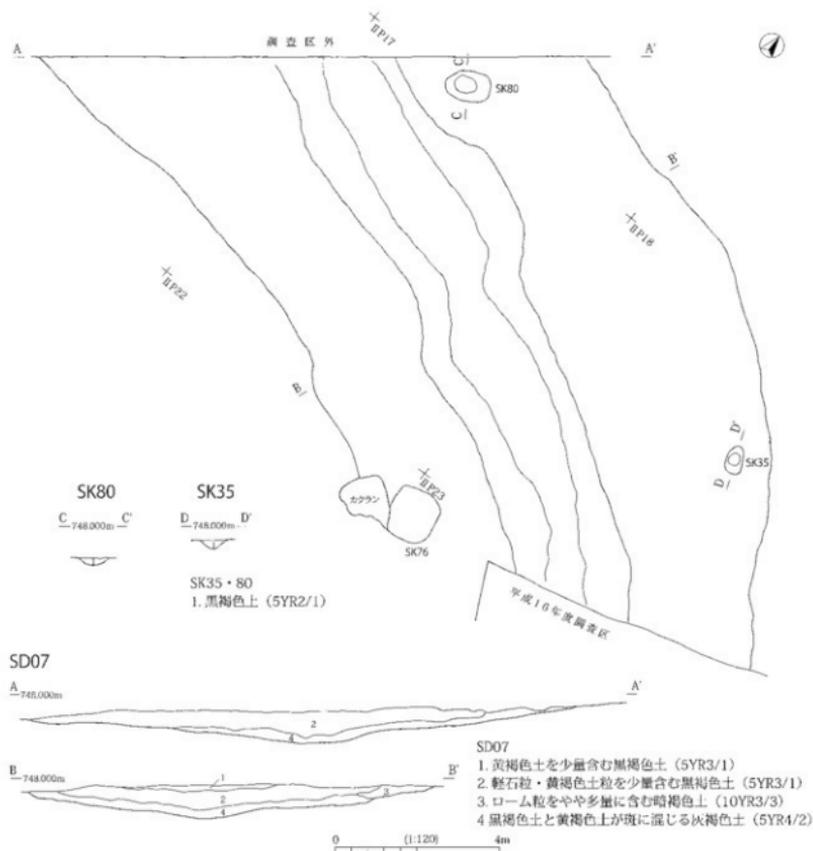
7号掘跡 (第88図、PL35) 位置: ②区南西部のⅡP16・17・18・22・23区

形状: 北西—南東東方向から南東方向に向きを変えながら弧状に走る。壁の傾斜は緩く、底面は浅い船底状を呈する。規模: 調査区内での長さは14.4m、確認面での幅は9.5~10.4m、確認面からの深さは75~85cmであるが、上部は削平された可能性が高い。走行方位: N69°W→N50°W

遺構の重複: 76号土坑とカクランに切られる。堀底面では35号土坑・80号土坑が確認されており、堀と同時に存在していた可能性がある。北東部と南西部は調査区外である。堆積状況: 埋土は数層に分かれるが、レンズ状の堆積で自然埋没と思われる。遺物: なし

時期: 不明

所見ほか: 幅10m前後あるため、溝ではなく堀とした。土塁・6号溝の外周に位置する。



第88図 7号堀跡、35・80号土坑

1号柵列跡・8号溝跡 (第89図、PL34) 位置：①区南西部のⅢD13・18区

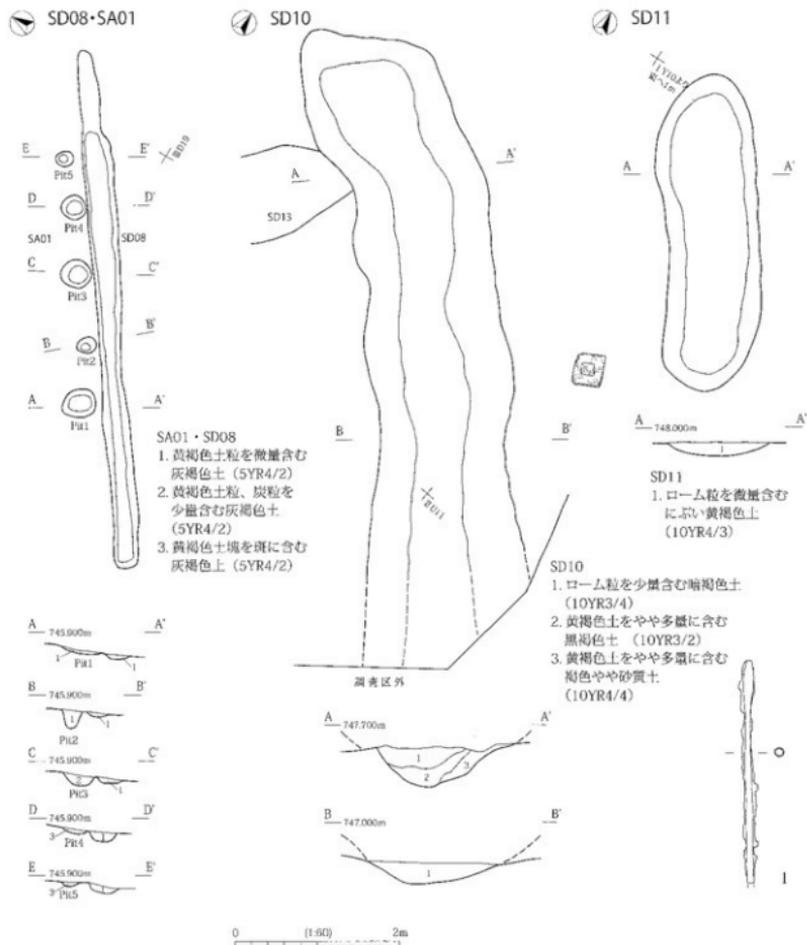
形状：台地の縁に沿って、北東—南西方向に並走する柵列と溝跡である。北東側延長線上にSD13がある。
規模：全長6.7m、幅25～30cm、確認面からの深さ1～7cmの8号溝の北側に平行して、直径25～40cmのはほぼ円形で確認面からの深さ3～20cmのピット5基が一直線に並ぶ1号柵列が走る。1号柵列の柱間は、心々で60～85cm間隔で、両端のピット1・5はともに確認面からの深さ3cmと浅い。これよりも両側に続いていたものが削平されて、やや窪地であったこの部分だけが削平されながらも、かろうじて残ったものと考えられる。8号溝も南西端は深さ5cmではっきりと切れるが、北東端は徐々に浅くなって消えており、本来は北東側に延びていたと思われる。 走行方位：N54°E 遺物：なし

時期：不明

所見:両者は一体のものと考えられ、板扉の根元を埋めた溝と、それを裏から支えた柱の穴の可能性がある。

10号溝跡(第89図)位置:①区北東部のI Y 10・15区、II U 6・11区

形状:平坦面の縁から斜面に向かって、北西-南東方向から僅かに南寄りに方向を変えながら弧状に走る溝である。立ち上がりは緩やかで、底面は丸い船底状である。規模:長さは6.6mであるが、南東側は調査区外のため全長は不明である。幅1.5~1.9m、確認面からの深さは30~40cm 走行方位:W47°N~W



第89図 1号柵列、8・10・11号溝跡・出土遺物

35° N

遺構の重複：13号溝を切る。南東部は調査区外である。**堆積状況**：埋土は単層または数層に分かれるが、レンズ状の堆積で自然埋没と思われる。**遺物**：針金状の用途不明鉄製品（1）と、須恵器細片、陶磁器細片、黒曜石剥片が出土しているが、本溝に伴うものかどうかは不明である。

時期：不明

所見：北東部の土塁・6号溝、11号溝と一連のものと思われる。

11号溝跡（第89図） 位置：①区北東部のI Y 5・10区

形状：1号土塁・8号溝と10号溝の間を北東—南西方向に直線的に走る溝である。掘り込みは浅く、底面は丸い船底状である。**規模**：全長3.8m、幅1.1～1.2m、確認面からの深さ10～20cm **走行方位**：N32°W

遺構の重複：なし **堆積状況**：埋土は単層である。**遺物**：なし

時期：不明

所見ほか：1号土塁・6号溝と11号溝の間の開口部に位置し、出入口施設か、何らかの遮断物があったと思われる。

13号溝跡（第90図、PL35） 位置：①区北東部のI Y 10・14・15・18・19・22・23区

形状：台地の縁に沿って、北東—南西方向に直線的に走る。途中で1ヶ所切れている。底面は船底状 **規模**：途切れた部分から北東側の長さが7.3m、切れている部分が0.4m、南西側が18.8mで、全長は26.5mである。幅は1.0～1.5mで、確認面からの深さは20～30cmである。**長軸方位**：N49°E

遺構の重複：10号溝に切られる。**堆積状況**：埋土はほぼ単層である。**遺物**：図示した打製石斧片（1）のほか、黒曜石剥片が出土している。

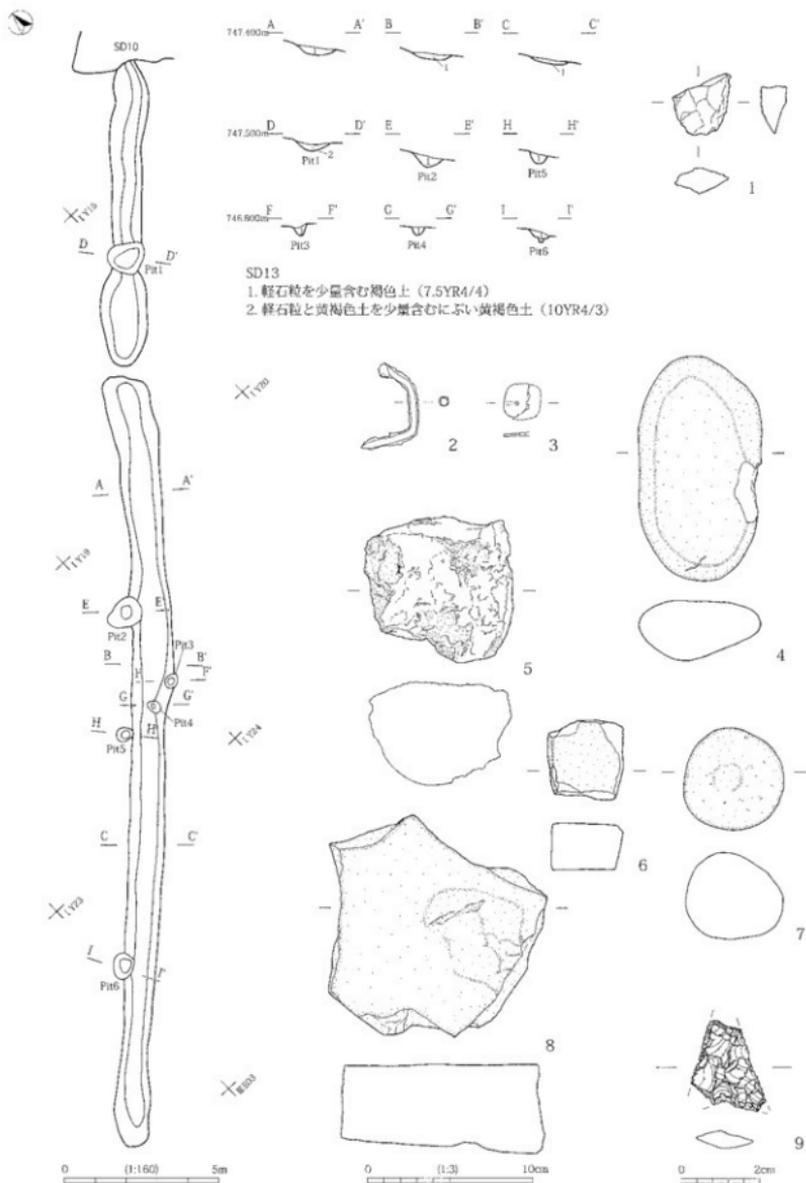
時期：遺物は混入品のみで、時期は不明

所見：この溝内や北西側に接して、直径45～120cm、確認面または溝底面からの深さ25～55cmの大小のピットが見られる。1号柵列ほど明確にピットが並ばないが、1号柵列・8号溝と同じ台地の縁であり、ピット群を伴うという共通点が認められる。1号柵列・8号溝と同じ板塼の跡と考えられる。

遺構外出土遺物（第90図、PL36）

近・現代の溝からの出土した遺物と、遺構外出土遺物を合わせて図示した。

鍛造の断面方形の釘（2）は1号溝出土である。ボタン状の石製品（3）は12号溝出土で、厚さ2mmと薄く過半が欠われているが、残った角の一方が丸く、他方が角張り気味の丸で、6mm間隔で径1.5mmの小孔2個があげられている。復元される形は丸鞘に似ており、その一種かもしれない。12号溝出土の礫石（4）は、表裏2面が使用され、裏面は反り気味になり、表面は白色の粒子が付着している。①区表土出土の鉄滓（5）は半円筒形で炉の流出溝のものと見られ、石製品（6）は4面が面取りされたものであるが用途不明、磨石（7）は安山岩の円礫の1面が平に磨り減り、石製品（8）は表裏が平に削られているが、用途不明である。黒曜石製の石鏃（9）は表探である。



第90図 13号溝跡、遺構外出土遺物

6 土坑

野火附城跡で検出・調査したSKは80基余になる。その多くは近現代のものと見られるため、除外した。また、建物跡の柱穴になる可能性があるものは第3項に既述した。ここでは、特異な形状のものと、図示しうる遺物が出土したもののみを取り上げることとし、その他は遺構全体図に図示した。縄文時代、平安時代、江戸時代のものがあるが、大部分は遺物の出土がなく時期不明である（第64表）。

4号土坑（第91図）位置：③-2区北部、ⅡI12・17区

遺構の重複関係：東部を4号溝に切られる。**構造**：直径1.2mの円形で、確認面からの深さは15cmである。壁は緩やかに立ち上がり、底面は平坦である。**堆積状況**：単層 **遺物**：埴形鍛冶津の縁辺部破片（1）が出土している。**時期**：不明 **所見**：西側40cmにある2号竪穴状遺構に伴う可能性がある。

12号土坑（第91図）位置：③-2区北部、ⅡI16区

遺構の重複関係：2号竪穴状遺構に切られるが、同竪穴状遺構の床面の溝が本土坑を避けているようにも見え、その内部施設であった可能性もある。**構造**：円形に近い楕円形で、長径4cm、短径35cm、確認面からの深さは50cmである。壁は急角度で立ち上がり、底は平らである。

堆積状況：埋土は上下2層に分かれ、その間に15～30cmの角礫敷点が入っていた。**遺物**：なし **時期**：不明

13・14号土坑（第91図）位置：③-2区北部、ⅡI16・17区

遺構の重複関係：13号土坑が14号土坑を切り、両者が2号竪穴状遺構を切る。**構造**：13号土坑は長径100cmの不整形円形で、確認面からの深さ15cm、14号土坑は1辺80cmの隅丸方形で、確認面からの深さ30cm。壁は緩やかに立ち上がり、底は丸い皿状である。**堆積状況**：埋土は上下2層に分かれ、14号土坑はその間に15～20cmの礫片2点が入っていた。レンズ状の堆積で自然堆積と思われる。

遺物出土：14号土坑から、2.2cmと厚底の器種不明の土師質土器底部片が出土している。**時期**：不明であるが、糸切り底から9世紀以降と思われる。

番号	形状・土器	器種	口径	底径	高さ	底面	底部外面	底部内面	表面内面	焼成	色澤	胎土	残存率	備考
1		形種不明土師質土器	—	—	径西3.4	右側縁部寄り	ナデ、一線割り	—	ナデ	普通	淡中褐色	1cm以下の砂粒少量	5%	

第64表 14号土坑出土土器観察表

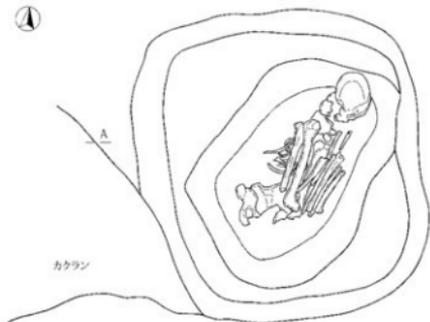
43号土坑（第91図、PL35）位置：②区西部、ⅡQ16区

遺構の重複関係：カクランに東部を壊される。**構造**：長径2.4m、短径1.5mの楕円形で、確認面からの深さは65cmである。壁は上半が緩やかで、下半が急な漏斗状を呈する。底面に直径15～20cmの円形で、深さ40～45cmの小穴3個が1直線に並ぶ。 **長軸方位**：N12°E **堆積状況**：埋土は3層に分かれ、壁際、下半、上半の順で埋まり、自然堆積と思われる。**遺物**：なし **時期**：不明 **所見ほか**：小穴中に造茂木を立てた陥し穴と思われる。

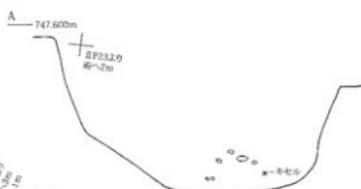
45号土坑（第91図）位置：①区南西部、ⅢD16区

遺構の重複関係：なし **構造**：長径80cm、短径70cmの円形に近い楕円形で、確認面からの深さは20cmである。壁は急角度で底面は平らで、底面中央から15cm下がる小ピットが伴う。**堆積状況**：上下2層に分かれ、自然堆積と思われる。**遺物出土状況**：図示した縄文土器深鉢口縁部のほか縄文土器1点が出土してい

SK76



カタラン



SK12



0 50cm



SK12

1. ローム粒をやや多量に含む黒褐色土 (10R2/3)
2. 軽石粒を少量含むにぶい黄褐色やや粘質土 (10YR4/3)

SK43



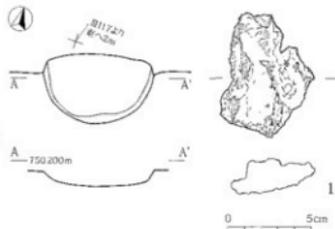
A 748.800m



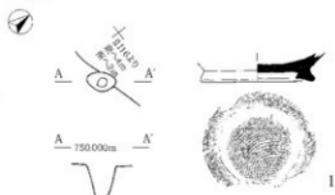
SK43

1. 軽石粒を微量含む黒色土 (5YR1.7/1)
2. 軽石粒・黄褐色塊を少量含む黒褐色土 (5YR3/1)
3. 軽石粒・黄褐色塊を少量含む灰褐色土 (5YR4/2)
4. 軽石粒・黄褐色塊を少量含む褐色土 (10YR4/4)
5. 軽石粒・黄褐色塊を少量含む暗赤褐色砂質土 (10YR3/4)
6. 赤褐色砂質土 (10YR4/6)
7. にぶい赤褐色砂質土 (10YR4/3)
8. 暗赤褐色土 (10YR3/4= 遊戎土痕?)

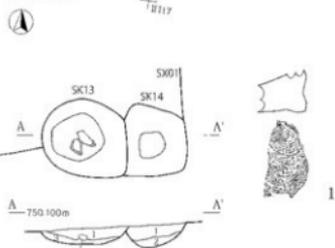
SK04



SK82



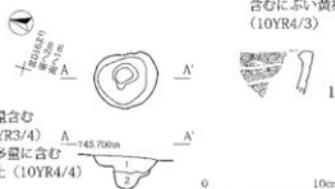
SK13・14



SK13・14

1. ローム粒を少量含む黒褐色土 (10YR2/2)
2. 黒色土塊を少量含む暗褐色粗砂 (10YR3/3)
3. ローム粒をやや多量に含むにぶい黄褐色土 (10YR4/3)

SK45



SK45

1. ローム粒を少量含む暗褐色土 (10YR3/4)
2. 軽石粒をやや多量に含む褐色やや砂質土 (10YR4/4)

第91図 4・12・13・14・43・45・76・82号土坑・出土遺物

る。時期：縄文時代後期初頭の称名寺式期のものと思われる。所見ほか：縄文土器の出土や、柱のめり込みのような跡ある点が1号住居跡のピットと類似し、1号住居跡と同様、床面や他のピットが削平された縄文時代後期の住居跡の可能性がある。

76号土坑（第91図、PL35）位置：②区南西部、Ⅱ P 22・23区

遺構の重複関係：7号溝を切り、カクランに南西隅の一部を切られる。構造：1.3m×1.15mの隅丸長方形で、確認面からの深さは60cmである。底部のうち、100cm×65cmの楕円形部分が周囲より10cm窪み、底面は丸いがこの窪み部分は平らで、壁は急角度で立ち上がる。長軸方位：N17°W 堆積状況：ほぼ黒褐色土のみの単層である。人骨および遺物出土状況：窪み部分に膝を抱いた人骨1体分が横位で頭を北東に向けた状態で埋葬されていた。この窪み部分に合った大きさの容器等に入れられていたものと思われる。頭骨と膝頭の間でキセルの吸い口1点が出土している。時期：喫煙が一般的になった江戸時代以降のものと思われる。所見ほか：墓標や、周囲に同様の墓坑がなく、単独の埋葬施設である。

82号土坑（第91図）位置：③-2区北部、Ⅱ I16区

遺構の重複関係：2号壑穴状遺構を切るが、2号壑穴状遺構の壁柱穴である可能性もある。構造：長径35cm、短径25cmの楕円形で、確認面からの深さは50cmである。堆積状況：不明 遺物：外側に「ハ」の字に大きく張り出した高台を持つ須恵器瓶類の底部片が出土している。時期：底面が糸切りのままとっており、9世紀頃のものと思われる。

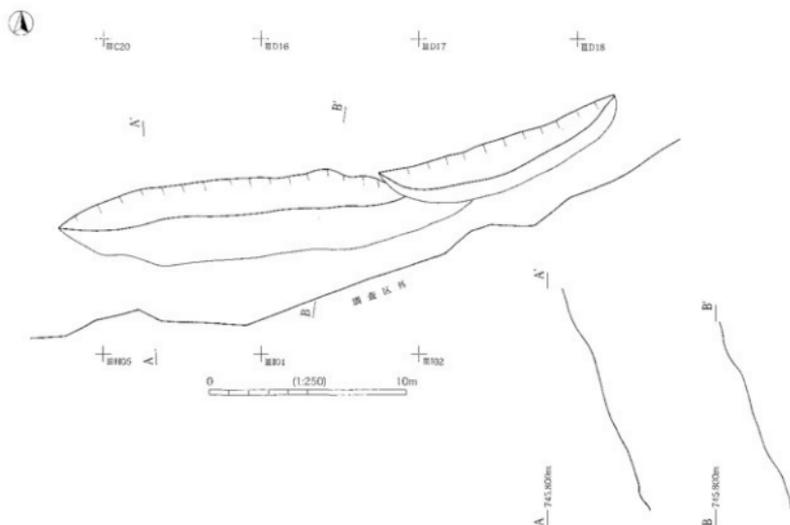
番号	形状・位置	器種	口径	直径	器高	底径	底部外形	底部内径	底部内径	底底	色別	胎土	残存率	備考
1		須恵器瓶	—	再口径 (9.2)	器高 2.3	右側軸糸切り部 高台残り付	同軸ナデ	同軸ナデ	同軸ナデ	良好	灰色	1cm以下の粉粒 少量	10%	

第65表 82号土坑出土土器観察表

7 その他の遺構

平坦面 (第92図) 位置：I区南西部のⅢC20・24・25、D16～18・21・22区

遺構の重複関係：なし 構造：舌状台地先端の斜面の最上部を削り出して、幅21.0mで奥行き2.5mと、幅12.5mで奥行き0.8mの三日月形の、傾斜の緩い平坦面を作り出している。遺物：なし 時期：不明

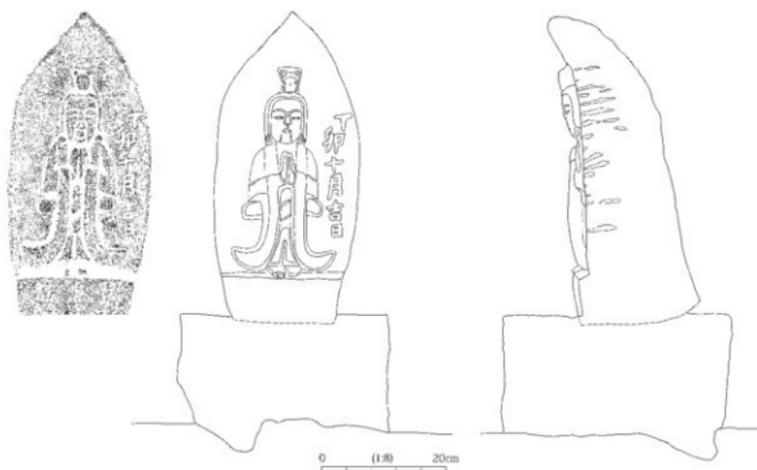


第92図 平坦面

石仏 (第93図、PL35・36) 位置：①区東部の斜面、ⅡU6区

単独で出土し、区画や施設は認められない。台座は34×39cmの長方形で高さ22cm、周囲と上面は粗く削られているが、底面は凹凸がある。上面には、上底14cm、下底17cm、高さ14cmの2角が直角の台形で、深さ1～2cmの窪みが付けられ、この部分に石仏を据えるようになっている。石仏は、幅23cm、高さ51cm、奥行20cmで宝珠形の光背の1面に高さ35cmの馬頭観音像が陽刻されている。観音像の右側には、「丁卯七月吉日」の6文字が陰刻されている。

時期：このような観音像は江戸時代後期に盛んに造られるが、この期間で「丁卯（ひのとう、ていほう）」の年は1747年、1807年と大政奉還のあった1867年があり、そのいずれかの年代のものであろう。



第93図 石仏

第4節 小 結

今回の調査では、本来、遺構が掘り込まれていた面が削平されたか、あるいは土砂流出により包含層が残っていなかった。そのため、各時代ともに遺構の残存状況が悪く、遺物もごく少量にとどまった。こうした中で検出された遺構には、縄文時代、奈良・平安時代、中世～近世のものが認められた。

縄文時代では、時期は確定できないが陥し穴が1基あり、集場となっていた時代があったと見られる。また、後期初頭の住居跡の残存と見られるピットがあり、小規模な居住地となっていた可能性がある。

奈良・平安時代では、竪穴状遺構1基が検出された。集落の中心部からは離れていたと見られ、鉄片・鉄滓・砥石などが出土していることから、生産に係わる住居か作業小屋であったと見られる。

中世～近世では、遺跡名となっている野火附城跡の考古学的な検証が課題であった。土塁や堀と板塀で囲まれた区域が存在したことは確認できたが、伴う遺物がまったくなく時期は不明と言わざるを得ない。ただし、土塁・堀に囲まれた区域から東側に離れた地点で、北宋銭が出土した掘立柱建物跡が1棟検出された。残念ながらこの建物と城跡との関連も不明である。いずれにせよ、土塁・溝の大半は北側の調査区域外に続いており、結論は、北側の調査を待たなくては出せないであろう。

第66表 野火附城跡出土土器重量表

出土遺物	縄文土器	弥生土器	土師器	陶器	布器	近現代陶磁器	現代瓦	瓦葺土器	不明・その他	計	同化率
S101	114	0	0	0	0	0	0	0	0	114	43%
	298	0	0	0	0	0	0	0	0	298	
S102	0	0	0	638	0	0	0	0	0	638	73%
	0	27	0	845	19	0	0	0	0	891	
S201	0	0	42	9	0	22	139	0	4	216	0%
S205	0	7	1	5	0	0	0	0	5	5	0%
SD10	0	0	0	7	0	3	0	0	0	5	0%
SD13	0	9	29	0	0	0	0	0	0	38	0%
SD14	0	0	0	22	0	0	0	0	0	22	0%
SK02	0	0	0	0	0	6	0	0	13	19	0%
SX01	0	0	0	0	0	34	0	22	0	56	0%
SX05	0	1	0	0	0	0	0	0	0	1	0%
SK06	0	0	0	0	0	2	0	0	0	2	0%
SK07	0	0	0	0	0	12	0	0	0	12	0%
SK11	0	0	0	0	0	0	0	0	101	101	100%
	0	0	0	0	0	0	0	0	101	101	
SK15	0	0	0	0	0	0	46	0	0	46	0%
SK17	0	0	0	0	0	8	34	0	0	42	0%
SK18	0	0	0	0	0	0	82	0	0	82	0%
SK20	0	0	0	0	0	2	0	0	0	2	0%
SK29	10	0	0	0	0	0	0	0	0	10	0%
SK34	0	21	0	0	0	0	0	0	0	21	0%
SK35	11	0	0	0	0	0	0	0	0	11	100%
	11	0	0	0	0	0	0	0	0	11	
SK44	0	7	0	0	0	0	0	0	7	0%	
SK56	0	18	0	0	0	0	0	0	0	18	0%
SK72	0	0	0	0	0	23	0	0	0	23	0%
SK76	0	0	0	21	0	0	0	0	0	21	0%
SK78	0	13	0	0	0	0	0	0	0	13	0%
SK79	0	14	0	0	0	0	0	0	0	14	0%
SK82	0	0	0	131	0	0	0	0	0	131	100%
	0	0	0	131	0	0	0	0	0	131	
土器	0	0	0	16	0	0	0	0	0	16	8%
	33	156	0	14	0	0	0	0	0	203	
遺物計	97	93	27	40	0	29	136	0	115	542	0%
瓦	125	0	0	803	0	0	0	0	101	1029	30%
	421	373	99	1069	19	142	457	22	233	2968	
同化率	30%	0%	0%	79%	0%	0%	0%	0%	<3%	36%	

(単位：g、2行の遺物の上段：同化遺物重量、下段：出土遺物総重量、1行の遺物：出土遺物重量のみで同化遺物なし)

第6章 総括

1 各遺跡における調査成果

佐久ジャンクション建設予定地は、中原遺跡群、野火附遺跡、野火附城跡の3遺跡にまたがっている。調査対象遺跡は、中原遺跡群が古墳時代後期から古代の大規模集落跡、野火附遺跡が古墳時代から奈良時代の集落跡、野火附城跡が中世城郭の推定地とバラエティに富んだ内容であった。また、中原・野火附の両遺跡は、上信越自動車道建設に伴う発掘調査がなされており、その時に得られた成果との比較検討も課題となった。

中原遺跡群は、上信越自動車道に中部横断自動車道がすり付く狭長な調査区であったため、検出できた竪穴住居跡が古墳時代後期から奈良時代までの10軒のみであった。そのため、上信越自動車道の調査で検出された大規模集落の追証、あるいは一部修正を加えることが主となった。遺物では、20cmを超える須恵器蓋を確認することができた。大小の器を使い分ける都の食器様式が、先ず地方官衙に入り、そこから周辺に波及したと考えられるため、中原遺跡群の近辺に官衙が存在したことを示唆するものである。

野火附遺跡では、古墳時代前期末～中期初頭と、同後～終末期の2時期の集落跡が確認された。前期末～中期初頭の集落跡は、今回の調査で2軒、上信越自動車道の調査分を加えても5軒と小規模・短期間の集落である。その中で、56号住居跡は、住居跡出土の例としては希少な石罫が見つかっており注目される。

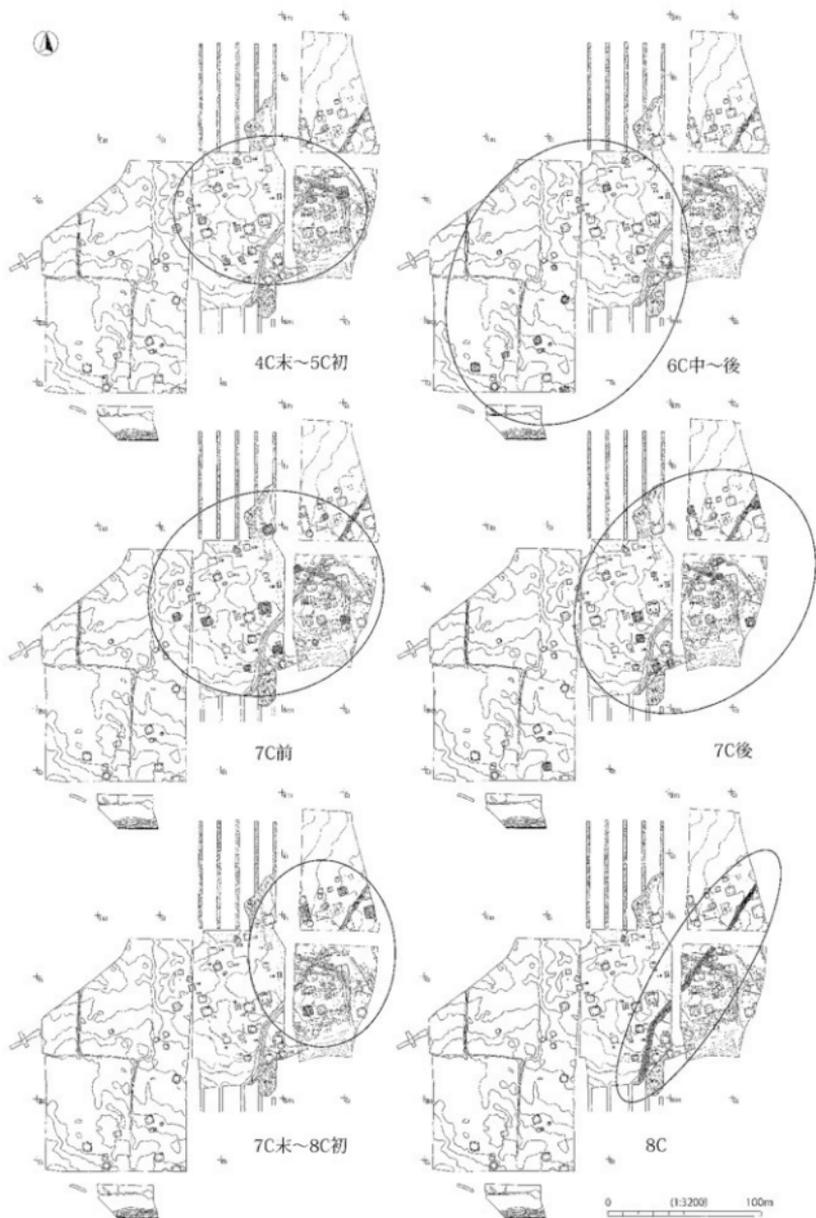
古墳時代後～終末期の集落跡は、北東から南西方向に延びる台地上に展開しており、時期が新しくなるにつれて標高の高い北東側に移動する傾向がとらえられた(第94図)。ただし、ジャンクション予定地より東側が未調査のため、さらに広範囲に集落が展開していたかは不明である。6世紀から7世紀の間は、約50年幅の区分でみると各時期10軒程度で推移する集落で、実際には多少少ない住居数で安定していたと思われる。しかし、8世紀に入ると調査区内から竪穴住居跡が姿を消す。こうした状況は、周辺集落の消長と大きく異なっており(第67表)、魔絶後に掘られた1号溝の性格が謎を握ると見られる。この点に関しては、次節で仮説を述べたい。

野火附城跡では、舌状台地の根元を区切る堀と溝・土塁、それより先の台地縁辺部を廻る板塀とみられる施設が明らかとなった。これらに囲まれた内部では土壌の流出、または削平が著しいことから施設が全く検出されず、遺物もほとんど出土せず、時期を確定するには至らなかった。そのため、考古資料による中世城郭という確証は、今後の調査に委ねられることとなった。

遺跡群	遺跡	6世紀	7世紀	8世紀	9世紀	10世紀	11世紀
中原遺跡群	野火附						
	野火附						
	十二						
	前田						
	跡跡						
野火附城跡	跡跡						
	跡跡						
野ノ原 A	跡跡						
	跡跡 A						
中原遺跡群							
野火附城跡							
野火附							

(年代線は各報告書によるため若干のずれがある)

第67表 野火附遺跡周辺集落遺跡の存続期間



第94図 野火附遺跡集落変遷図

2 野火附遺跡における集落の廃絶時期と溝について

(1) 集落の変遷と廃絶時期について

野火附遺跡では、4世紀末～5世紀初頭の集落が一旦断絶した後、6世紀中頃になって新たな集落が成立する。集落の成立期には、比較的小・中規模の堅穴住居跡が散在する傾向がうかがえる。その後7世紀代に入ると、調査区内の北東側に集落が移動してゆく。この時期には、堅穴住居規模の大小の格差が広がる他、最末期には大形の掘立柱建物や倉庫と見られる小規模な掘立柱建物が伴う。6世紀代に比べて、集落が発展をとげた過程をとらえることができる。

ところが、8世紀代に入ると一転して、集落を構成する堅穴住居が姿を消し、1号溝が掘削される。6～7世紀の集落が時代とともに南西から北東方向に移動する傾向からすると、隣接する北東側未調査区に集落が移動した可能性も残されている。しかし、それまでの移動が、集落域の大半を重ねながらの変遷であったのに対し、8世紀初頭以降は、少なくとも調査区内では堅穴住居跡の片鱗すらなくなってしまう。このことから、遺跡内でのさらなる移動は考えにくいであろう。

完全に集落が廃絶したと仮定すると、古墳時代後期にはじまり平安時代初めまで継続する周辺集落の消長と大きく異なり、例外的な事例といえる(第67表)。特に、野火附遺跡と複数の埋没谷を挟んで北西側に展開する鋤師屋遺跡群中の各集落は、奈良時代かその直前に始まり平安時代に継続しており、あたかも野火附遺跡の住民が鋤師屋遺跡群の方へ移動したかのようである。

野火附遺跡の集落が廃絶、あるいは計画的に移転させられたとすると、その要因について謎を握るのが1号溝と考えられる。この溝は集落の廃絶直後(8世紀代)に、それまでの集落域の中央付近を貫く形で掘削されるからである。

(2) 1号溝について

1号溝は、確認面で幅2.0～4.4m、深さ0.55～1mを測る。確認できた延長は上信越自動車道調査分を加え150mで、さらに南～北東に延びる(第11図)。この間に掘り残しの土橋や、底面に橋桁などの痕跡はない。この溝は42・50・55号住居跡、14号掘立柱建物跡を切っており、江戸時代の溝に切られる。出土遺物で図示できるものは少ないが、8世紀代とみられる(第73・74図)。住居跡の出土土器と比べてやや後出で、堅穴住居とは同時存在していないと考えられる。

この溝は、野火附の台地上を北東から南西に向かう。調査区内では標高の高い尾根筋に平行に掘られた後、上信越自動車道調査区内で緩やかに屈曲する。屈曲せずに直線のまま進んだ場合、野火付古墳(小諸市教委1982)近くを通過することになる。屈曲が緩やかで方格の区画を意識したとは考えられないことから、古墳を避けた可能性もあろう。また、6・7世紀代の集落跡の中央を直線的に抜ける経路にもかかわらず、堅穴住居跡や掘立柱建物跡を避けるような位置取りとなっている。特に、最末期の堅穴住居跡や掘立柱建物跡と切り合わないばかりか、その間を抜けるような位置にある。

溝底面には流水による凹部が数多く残されており、埋土中にも粗い砂層の堆積が複数認められる。ただし、1/100の勾配では、常時流水があったとは考えにくい。浸食されやすい浅間軽石層の浸食が底の一部に留まっていることから、大雨などの一時的な流水がたびたび起こっていたことが考えられる。

では、集落廃絶後に掘削された溝の必要性は何であったのだろうか。

(3) 8世紀代の開発に伴う可能性

1号溝の特徴から考えられる点をあげておこう。まず、上信越自動車道内で緩く屈曲することや、全長150m以上という規模から、野火附の台地上を(方格)区画することを意図していたとは考えにくい。北

東から南西に向かう経路は、北東側から標高の低い南西側の深い谷に水を流すのに適しており、常時給水でないとすれば、排水のために掘削された可能性が想定の一つにあげられよう。

溝の基点となる北東側は、明確な田切り地形が形成されておらず、埋没谷は複雑な形状を示している。航空写真による表面観察だけのため時期を限定することはできないが、このことは、洪水のたびに流路変更が起きていた可能性を示している。溝の掘削時期が8世紀代とすると、野火附遺跡北東方の鍔師屋遺跡群や周辺に展開する遺跡が発展する時期にあたる。遺跡間を網目状に走る浅谷の開発も進めていたと考えられ、そのためには、上記の水を制御することが必要条件である。出水を制御することによって、遺跡に登録されていない鍔師屋遺跡群と野火附遺跡間の広大な土地を活用する道が開けた可能性もあろう。ただし、野火附遺跡の北東側低地の排水が主目的であったとすれば、低地内で処理をせずに台地を横断するような大規模な土木作業が必要だったのか、検討の余地がある。一方、野火附の台地上を溝す水とすれば、掘削深度が深すぎ、枝線や給水施設が認められない。

周辺では、佐久市・芝宮遺跡群で、7世紀後半以後の自然流路や、9世紀後半以降の田切り谷の成長が確認されるなど、当時の地形や水利が現在とは大きく異なっていたことも考えられる。今後、8世紀代に掘削された溝に関して、総合的に検討する必要がある。

いずれにせよ、8世紀代に野火附遺跡を含む地域が大きな変貌をとげたことは確かである。

(4) 牧の可能性について

次に、近隣の台地上で大規模集落が展開する中、集落が移転して広い遺構空白域となった野火附遺跡の台地上やその周辺は、どのように利用されていたのだろうか。一つの可能性を上げておこう。

野火附遺跡と同じ台地上で北東方600mに位置する御代田町の野火付遺跡や、同700mの佐久市・御代田町の前田遺跡では埋葬馬が発見されている。野火付遺跡 D-16～20号土坑墓では、5体の馬が死後切断されることなく埋葬され、奈良時代末～平安時代初めの須恵器坏が伴っている（御代田町教育委員会1985）。『養老院牧令』官馬牛死条や官私馬牛致死条やその注釈書からは、馬が死んだ場合は皮と脳を取ることや、駅馬、伝馬として使用中、本司以外で死んだときには現地ですべて皮と肉を売って代金を本司に納めることが規定されている（松井章1987）。馬は解体されていないため、使用中に死亡した馬を運搬して埋葬したとは考えにくい。また、5頭もの馬が同じ場所に埋葬されていることから、飼養中に死んだ可能性が高いだろう。その場合、野火付遺跡のそばに飼養施設があったことが想定される。

また、南方700～1,400mの芝宮遺跡群、下曾根遺跡、聖原遺跡、栗毛坂遺跡で、牛馬の所有を示すための焼印や焼印状の鉄製品が出土している（佐久市教育委員会 2001、2002～5、長野県埋蔵文化財センター 1991、1999）。いずれも9世紀代の例であるが、その前段階から、これらの遺跡の近隣に馬の飼養施設が存在していたとしてもおかしくないであろう。

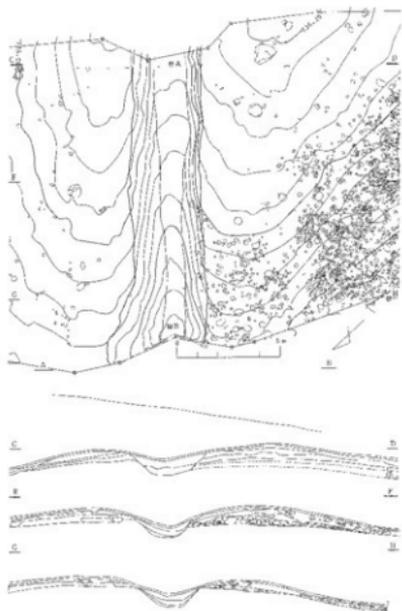
このように、野火附遺跡周辺では、奈良・平安時代に馬の飼養に関連する資料が多く見つかっている。駅・郡衙などの官衙施設に常備された馬でないとすると、牧の存在が浮上してくる。中原遺跡群や鍔師屋遺跡群など、隣接する台地上は、いずれも大規模な集落遺跡で占拠されている。これに対し、野火附遺跡の集落は7世紀末～8世紀初めに廃絶して台地上が空白域となることから、牧の候補地としてあげておきたい（註）。

ここで再度、1号溝の形状と規模について、「望月牧」と比較しておこう。「望月牧」は野火附遺跡と同じ佐久郡内に推定地があり、大原地点で土壘を伴う堀の発掘調査が行われている（北御牧村2000）。検出された堀の断面形は逆台形で、1号溝と比べて底部の平坦面が広がっている。溝部分のみの規模は幅3.4～4.0m、深さ0.9～1.1m（第95図）で、1号溝に近い。文献資料における望月牧の初出は、『延喜式』

の弘仁14(823)年で、1号溝よりも後出であり、土塁が伴っている点も異なる。ただし、元来、1号溝にも盛土(土塁)が伴っていたとすると、野馬除として十分機能すると推察される。

以上、野火附遺跡の集落が移転し、8世紀代には広大な台地上に溝以外の施設がないことから、可能性の一つとして牧の存在を想定した。今回の調査では牧である確実な証拠を捉えることができなかったが、浅間山麓の地域史を考える上で、重要な観点であり、集落移転と溝掘削という間接的な成果を示すことができた。当遺跡の周辺には、東山道の長倉駅や佐久郡街の存在が推定される遺跡、あるいは川原寺式の古瓦が出土する地点がある。これらとの関連や、文献資料等を踏まえ、浅間山麓における牧の存在について考えてゆきたい。

註『統日本紀』文武4(700)年3月丙寅条「令諸国定牧地放牛馬」との関連が考えられる。



第95図 野馬除跡大原地点堀及び土塁
(北御牧村教育委員会2000より)

引用・参考文献

- 一志茂樹 1950 『官牧考』『信濃』第2巻第4号
- 一志茂樹 1993 『古代東山道の研究』 創風書館出版センター
- 北御牧村教育委員会 2000 『望月牧野馬除跡大原地点 -緊急発掘調査報告書-』
- 小諸市教育委員会 1982 『野火付古墳』
- 佐久市教育委員会 2001 『上芝宮Ⅱ・Ⅲ・Ⅳ 下曾根Ⅱ・Ⅲ・Ⅳ・Ⅴ・Ⅵ・Ⅶ』
- 佐久市教育委員会 2002～5 『遊原 巻1～5分冊』
- 佐久市志編纂委員会 1984 『佐久市志 歴史編(一)』佐久市志刊行会
- 津野 仁 1987 『信濃文化波及の一例』『唐澤考古』7
- 長野県文化財保護協会 2005 『信濃の東山道』
- 長野県埋蔵文化財センター 1991 『木戸平A・吹付・東林・鶴ツネ・上中原・千草場・城の口・西林・東村ふた・西村ふた・大屋尻古墳群・丸山古墳群・丸山Ⅱ・丸山・北山寺・東大久保・西大盛・腰巻・栗毛坂・西赤原・中大久保・蓮尾坂』
- 長野県埋蔵文化財センター 1999 『栗毛坂・長土呂・野火附・前田・宮の反入・下前田・長野原・赤沼』
- 長野県埋蔵文化財センター 1999 『芝宮遺跡群 中原遺跡群』
- 長野県埋蔵文化財センター 2007 『長野県埋蔵文化財センター年報』24
- 中村順昭 1996 『郡街の所在と郷の編成』『史叢』第54・55号合併号
- 福田和憲 1970 『駅戸に関する二、三の考察』『信濃』第22巻第5号
- 松井 章 1987 『養老院教令の考古学的考察 -養老院馬牛の処理をめぐる-』『信濃』第39巻第4号
- 御代田町教育委員会 1985 『野火付遺跡』
- 山口英男 1986 『八・九世紀の牧について』『史学雑誌』第95編代1号
- 山中敏史 1994 『古代地方官衙遺跡の研究』 塙書房

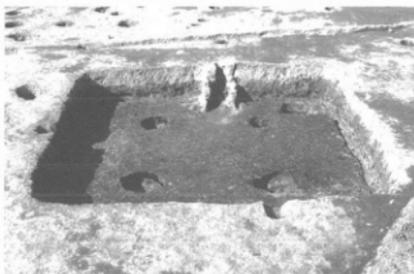
写真図版



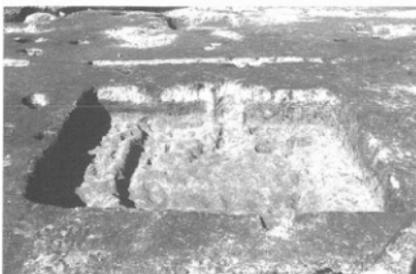
3区全景



左 調査前風景
右 401号住居跡発掘



左 402号住居跡発掘
右 403A号住居跡発掘



左 403B号住居跡発掘
右 405号住居跡発掘



左 406号住
居跡完掘
中央 406号
住居跡掘
方
右 407号住
居跡完掘



左 407号住
居跡土器
出土状況
右 408・409
・410号住
居跡完掘



左 408号住
居跡完掘
右 409号住
居跡完掘



左 9区北土
坑群
右 作業風景

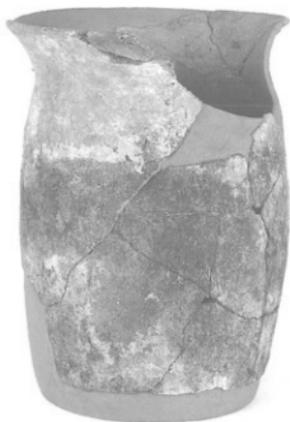
401号住居跡
出土遺物
左 1
右 2



左 3
右 5



左 6
右 7



402号住居跡
出土遺物
右 1



左 2
右 5

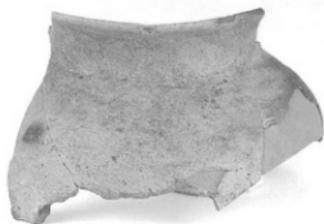




403号住居跡
左 1
右 2



左 3
右 4



左 5
右 8



左 10
右 11



403号住居跡
左 12
右 13



407号住居跡
左 3
408号住居跡
右 2



409号住居跡
左 1
15号土坑
右 3



左 5
右 6



15年度調査西
区全景



左 15年度調
査東区全
景

右 16年度調
査区全景

PL-7 野火附遺跡

左 22号住居

跡完掘

右 23号住居

跡完掘



左 24号住居

跡完掘

右 24号住居

跡遺物出土状況



左 25号住居

跡完掘

右 26号住居

跡完掘

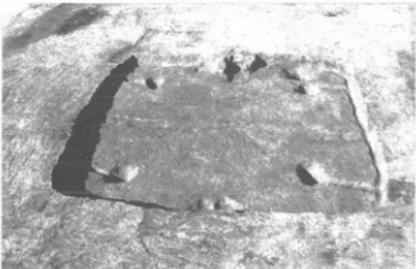


左 27号住居

跡完掘

右 28号住居

跡完掘

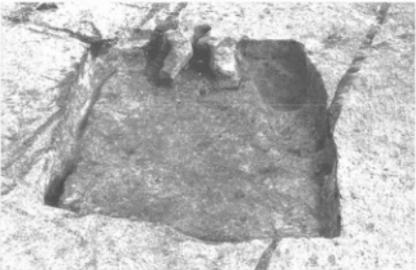


左 29号住居

跡完掘

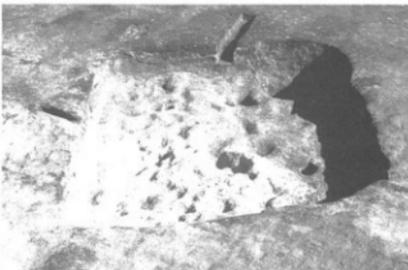
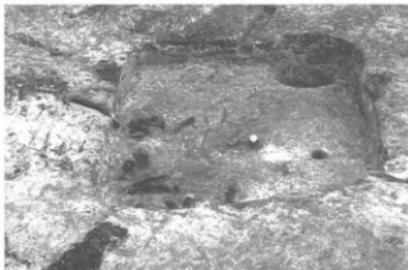
右 31号住居

跡遺物出土状況

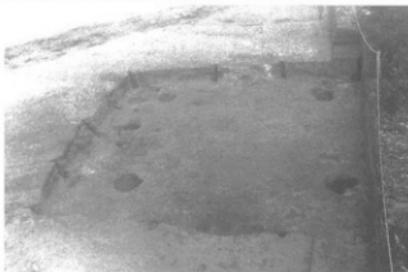




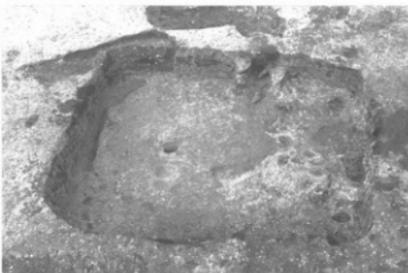
左 32号住居跡完掘
右 33号住居跡完掘



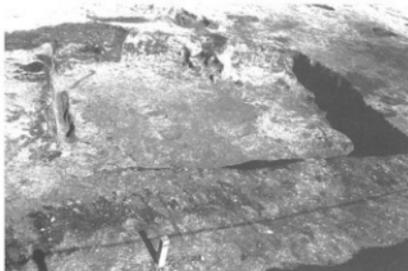
左 34号住居跡炭化材出土状況
右 34号住居跡掘り方



左 35号住居跡完掘
右 35号住居跡完掘

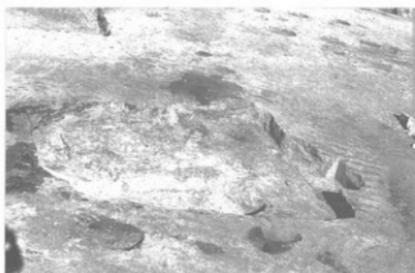


左 35号住居跡遺物出土状況
右 36号住居跡完掘

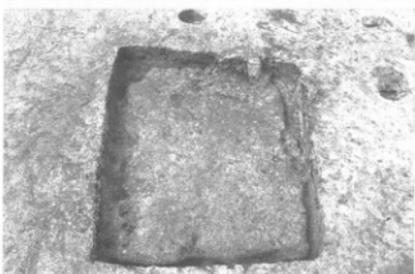


左 36号住居跡完掘
右 37号住居跡完掘

左 37号住居
跡遺物出
土状況
右 38号住居
跡完掘



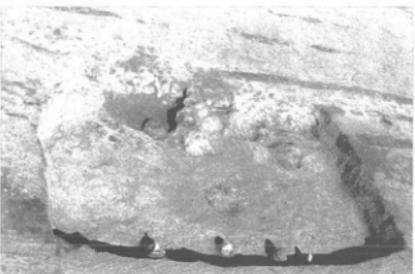
左 39号住居
跡完掘
右 39号住居
跡完掘



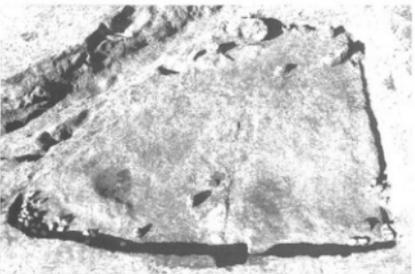
左 40号住居
跡完掘
右 40号住居
跡完掘

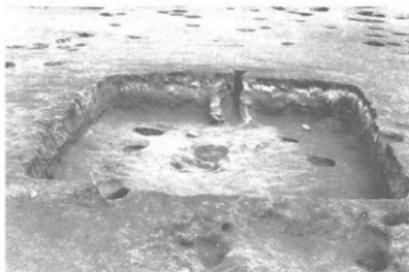


左 41号住居
跡完掘
右 41号住居
跡完掘



左 42号住居
跡遺物出
土状況
右 43号住居
跡完掘

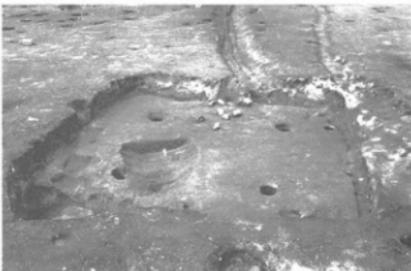
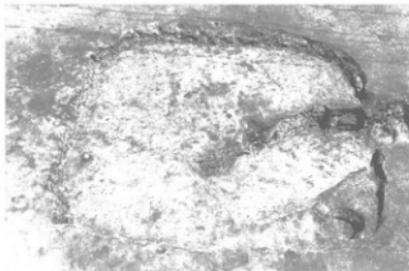




左 44号住居跡完掘
右 44号住居跡 Pit 1遺物出土状況



左 44号住居跡 Pit 5・6遺物出土状況
右 45号住居跡完掘



左 46号住居跡完掘
右 47号住居跡完掘



左 47号住居跡遺物出土状況
右 48号堅穴状遺構完掘

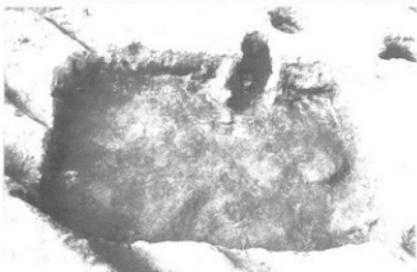


左 49号住居跡完掘
右 49号住居跡遺物出土状況

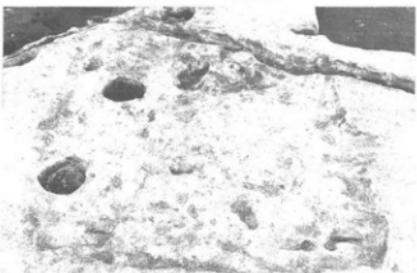
左 50号住居
跡完掘
右 51号住居
跡完掘



左 52号住居
跡完掘
右 53号住居
跡完掘



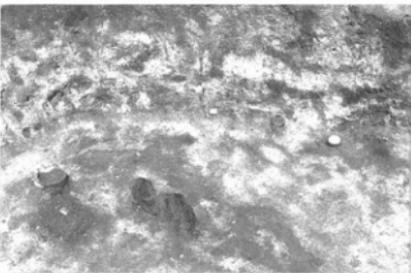
左 54号住居
跡完掘
右 55号住居
跡完掘

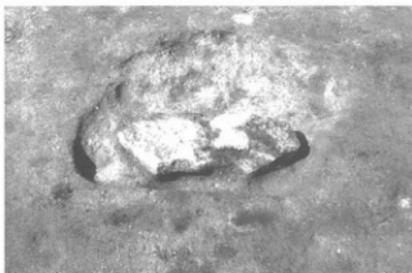


左 56号住居
跡完掘
右 56住居跡
遺物出土
状況



左 56住居跡
石銅出土
状況
右 56住居跡
石銅出土
状況





左 56号住居跡印
右 57号住居跡完掘



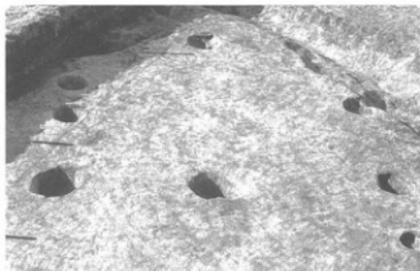
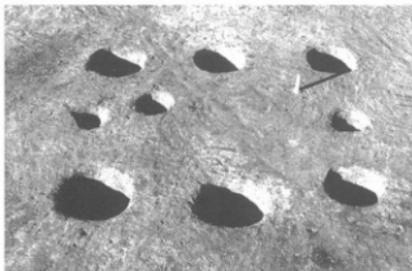
左 9掘立柱建物跡完掘
右 9掘立柱建物跡 Pit 6 断面



左 9掘立柱建物跡 Pit 7 断面
右 10掘立柱建物跡完掘

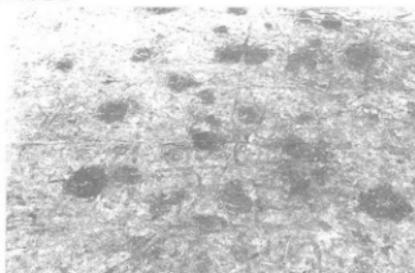


左 11掘立柱建物跡検出
右 11掘立柱建物跡完掘

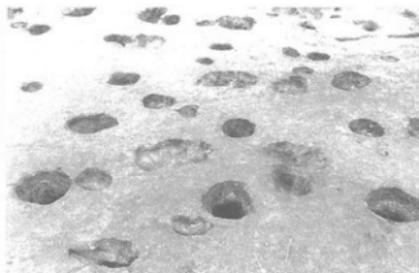


左 12掘立柱建物跡完掘
右 14掘立柱建物跡完掘

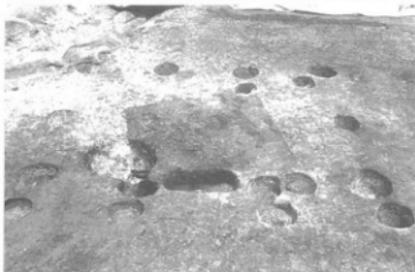
左 16掘立柱
建物跡検出



右 16掘立柱
建物跡完掘



左 17掘立柱
建物跡完掘



右 17掘立柱
建物跡
Pit 3 断面



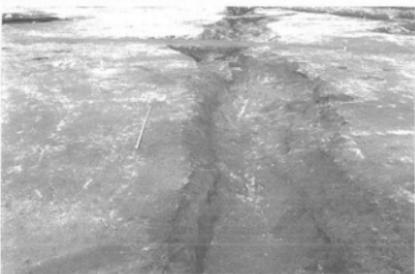
左 18掘立柱
建物跡完掘



右 19掘立柱
建物跡完掘



左 1号溝跡
完掘

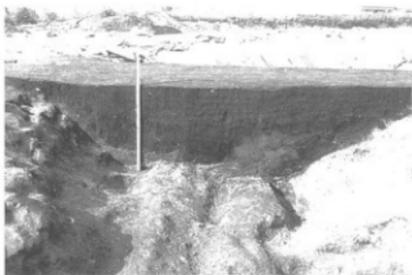


右 1号溝跡
完掘



左 1号溝跡
断面

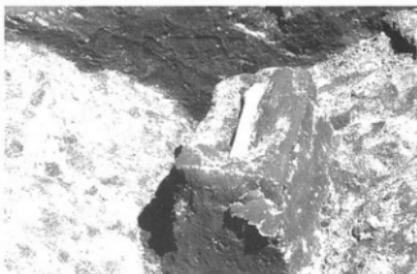




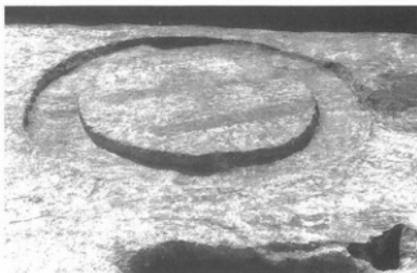
左 1号溝跡
断面
右 1号溝跡
・42住居
跡断面



左 2号溝跡
完掘
右 2号溝跡
馬骨2出
土状況



右 2号溝跡
馬骨3出
土状況



左 3・4・
5号溝跡
完掘
右 2号性格
不明遺構
完掘



左右 調査風景
研究会発
掘体験



22号住居跡
左 1
右 2



左 3
右 4



左 5
右 6



左 9
23号住居跡
右 1



左 2
右 3



24号住居跡



左 1
右 2



左 3
右 4



左 6
右 7

24号住居跡

左 11

右 15



左 16



右 17



25号住居跡

左 2

右 3



左 4

27号住居跡

右 1





27号住居跡
左 2
右 4



左 7
28号住居跡
右 2



29号住居跡
左 1
右 2



左 3
右 5



左 4

31号住居跡

左 1
右 2



左 3
右 4



33号住居跡



左 1
右 4



33号住居跡
左 5
右 6



左 7
右 9



左 10



右 11



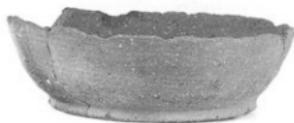
左 12



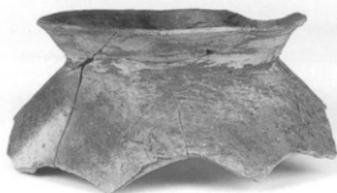
35号住居跡



左 1
右 2

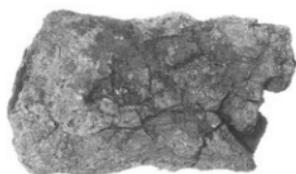


左 4
右 9



左 16





35号住居跡
左 17
右 21



左 22
37号住居跡
右 1



左 2
右 3



左 4
右 8



左 10
右 11

37号住居跡
左 13



38号住居跡
右 1



左 3



40号住居跡
右 3



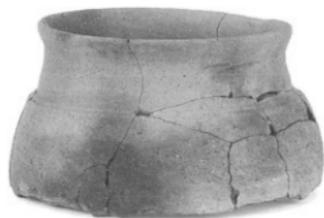
左 4
右 10



41号住居跡
左 1
右 3



42号住居跡
左 1
右 2





42号住居跡
左 3
右 4



43号住居跡
左 1
右 7



44号住居跡
左 2
右 3



左 4
右 5

44号住居跡
左 7
右 11



右 12



45号住居跡
左 2
右 4



左 5
右 6





45号住居跡
左 7

47号住居跡
右 1



左 3
右 4



左 8
右 5

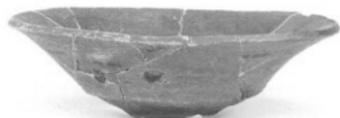


左 12

49号住居跡
右 1



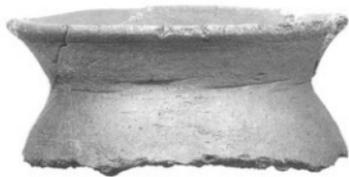
50号住居跡



左 1
右 2



左 3
右 4



左 5
右 6





50号住居跡
左 8
右 9



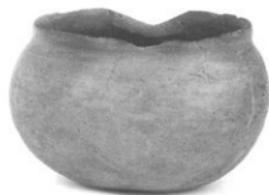
左 10
51号住居跡
右 1



左 2
右 3



52号住居跡
左 1



左 3
右 5

52号住居跡
左 4
右 6



右 7



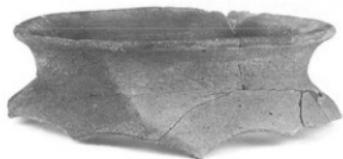
53号住居跡
左 1
右 4



左 3



55号住居跡
左 8
右 9





56号住居跡



左 1
右 2



左 3
右 5



左 6
右 7

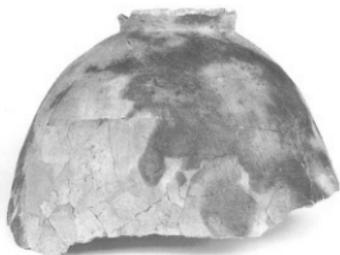
56号住居跡
左 8
右 11



左 12
右 15



左 16
右 17



左 19
右 20



左 21
右 22





56号住居跡
左 23
右 25



1号溝跡



左 1
右 2



左 4
右 5

1号溝跡
左 6



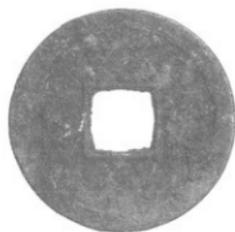
1号溝跡
右 8



左 11
右 10



左 12
2号溝跡
右 1



4号土坑
左 1



109号土坑
右 1

178号土坑
左 4

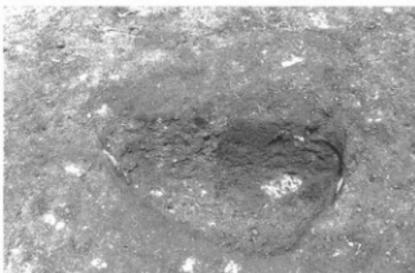
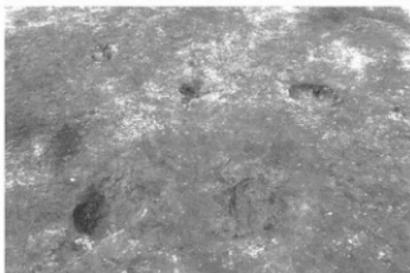


遺構外
右 2





①区全景



左 1号住居跡完掘
右 1号住居跡 Pit 1断面



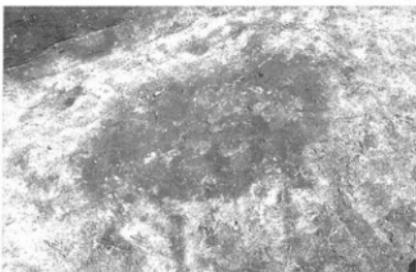
左 1号住居跡 Pit 5断面
右 2号堅穴状遺構



左 1号土堀・6号溝完掘
右 1号土堀断面



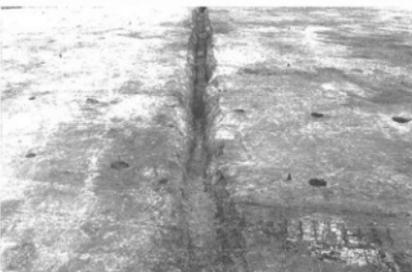
左 7号遺跡
断面
右 7号遺跡
完掘



左 7号堀内
80号土坑
右 1号溝列
・8号溝
跡完掘



左 13号溝跡
完掘
右 1号溝跡
完掘



左 76号土坑
人骨出土
状況
右 43号土坑
完掘



左 43号土坑
断ち割り
右 石仏復元





左 台照出土
状況
右 斜面部ト
レンチ



左 1・2区
全景
右 作業風景



左 右 作業風景
遺跡調査
指導委員
会



左 美南ガ丘
小学生
徒見学風
景
右 漆その他
出土遺物
5



左 漆その他
出土遺物
6
右 4号土坑
出土遺物
1

報告書抄録

ふりがな	じょうしんえつじどうしゃどうさくじゃんくしょんけんせつにともなう まいぞうぶんかざいはつくつちようさほうこくしょ
書名	上信越自動車道佐久ジャンクション建設に伴う埋蔵文化財発掘調査報告書
副書名	中原遺跡群・野火附遺跡・野火附城跡
巻次	小諸市内
シリーズ名 番号	長野県埋蔵文化財センター発掘調査報告書 89
編著者氏名	上田 真
編集発行機関	財団法人 長野県文化振興事業団 長野県埋蔵文化財センター
所在地	〒388-8007 長野県長野市篠ノ井布輪高田963-4 TEL: 026-293-5926
発行年月日	2009年(平成21年)3月13日

ふりがな	ふりがな	コード	北緯	東経	調査期間	調査面積	調査原因
所収遺跡名	所在地	市町村 遺跡番号	(日本測地系)	(日本測地系)			
中原遺跡群	長野県	236	36度17分51秒	138度28分54秒	2004. 8. 9 ~ 11. 30 2002. 10. 15 ~12. 12	2,400㎡	上信越自動車道佐久ジャンクション建設に伴う事前調査
野火附遺跡	小諸市 御影新田	202088	252 36度18分4秒	138度28分52秒	2003. 7. 24 ~ 12. 12 2004. 4. 22 ~ 10. 25	18,000㎡	
野火附城跡			237 36度17分57秒	138度28分39秒	2002. 5. 21 ~ 12. 3 2004. 7. 6	16,000㎡	

所収遺跡名	立地	種別	主な時期	主な遺構	主な遺物	特記事項
中原遺跡群	浅間山南麓の 濁川ほかの中	集落遺跡	古墳時代後期～ 奈良時代	住居跡10軒 土坑135基	土師器、須恵器、 石鏃	大規模集落の一部。
野火附遺跡	小河川に解折 された台地上	集落遺跡	古墳時代前期末 ～中期初頭	住居跡2軒	土師器、砥石、石 鏃	断絶期間を挟む 2時期の古墳時 代の集落があり、その断絶後に溝が掘られる。
			古墳時代後期～ 終末期	住居跡、掘立柱 建物跡2棟	土師器、須恵器、 砥石、刀子、鎌	
		生産遺跡	奈良時代	溝1条	土師器、須恵器、 灰釉陶器、刀子	
野火附城跡		集落遺跡	縄文時代後期 奈良時代	住居跡1軒 竪穴状遺構1基	縄文土器 須恵器、鉄滓	土塁、堀、溝、 板塀の外郭施設 検出。内部は削
		城館遺跡	中世?	土塁1基、堀1 条、溝5条、構列	なし	検出。内部は削

中原遺跡群は、古墳時代後期から平安時代初めまで続く大集落遺跡であるが、今回はその一部分の調査である。直系20cmを超える須恵器蓋の出土は、官衙遺跡の周辺であることを窺わせる。野火附遺跡は、古墳時代前期末～中期初頭と古墳時代後・終末期の2時期の集落跡で、その断絶後に幅2.0～4.4m、全長150m超の1号溝が奈良時代に掘られる。周囲の遺跡との関係等から、牧に関連する区画施設の可能性もある。野火附城跡は、舌状台地の根元を堀と溝・土塁で仕切り、台地縁辺部に板塀を廻らす外郭施設を検出した。内部施設は削平されて検出できず、遺物の出土もほとんどないことから詳細な時期は不明である。

長野県埋蔵文化財センター発掘調査報告書 89

上信越自動車道佐久ジャンクション
建設に伴う埋蔵文化財発掘調査報告書
— 小諸市内 —

中原遺跡・野火附遺跡・野火附城跡

発行 平成 21 年 (2009) 3 月 13 日
発行者 東日本高速道路株式会社
跡長野県文化振興事業団
長野県埋蔵文化財センター
〒 388-8007 長野市篠ノ井布施高田 963-4
TEL 026-293-5926
FAX 026-293-8157
E-mail maibun@grn.janis.or.jp
印刷 鬼灯書籍株式会社
〒 381-0012 長野市柳原 2133-5
TEL 026-244-0235

